山口県埋蔵文化財センター調査報告　第110集

馬場遺跡

2022

公益財団法人山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター

序

本書は、熊毛郡田布施町上田布施に所在する馬場遺跡の発掘調査の記録をまとめたものです。調査は、令和２年度に西田布施・友石地区における国営緊急農地再編整備事業に先立ち、農林水産省中国四国農政局南周防農地整備事業所及び田布施町教育委員会から発掘調査業務の委託を受けて、公益財団法人山口県ひとづくり財団が実施しました。

調査では、弥生時代から古墳時代を主体とする集落跡から多数の竪穴建物や土坑などが検出され、弥生土器や石器、古墳時代の土師器などが多量に出土しました。

とりわけ、県内最大級の規模をもつ円形竪穴建物をはじめ、多くの竪穴建物が検出されたことは、馬場遺跡が当時の田布施地域における中心的な集落の一つであったことを示しており、当時の暮らしや文化を知る上で、貴重な資料となるものです。

今後、この調査成果を、郷土史や文化財保護に対する理解、教育や文化の振興、学術研究等に広く活用していただきたいと思います。

最後になりましたが、新型コロナウイルスの感染拡大が一進一退を繰り返す中、発掘調査の実施並びに本報告書の作成にあたり、多くの御支援、御協力を賜りました関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

令和４年３月

公益財団法人　山口県ひとづくり財団
理　事　長　　浅　原　　司

例　言

1　本書は令和2（2020）年度に実施した馬場遺跡（山口県熊毛郡田布施町上田布施地内）の発掘調査報告書である。

2　調査は、公益財団法人山口県ひとづくり財団が、農林水産省中国四国農政局南周防農地整備事業所［令和2年度契約名：南周防農地整備事業　西田布施・友石団地埋蔵文化財発掘調査（その1）委託業務、令和3年度契約名：南周防農地整備事業　西田布施・友石団地埋蔵文化財発掘調査取りまとめ委託業務］と田布施町教育委員会［令和2年度契約名：馬場遺跡発掘調査委託業務、令和3年度契約名：馬場遺跡発掘調査取りまとめ委託業務］からの委託を受けて実施した。

3　調査組織は、次のとおりである。

調査主体　公益財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター

調査担当　次　　長　石井龍彦（令和2年度）
調査第二課主査　岡田裕之（令和2・3年度）
文化財専門員　井上広之（令和2年度）
調　査　員　岩﨑麻衣子（令和2・3年度）
調　査　員　塚本史晃（令和2年度）
調　査　員　山田圭子（令和3年度）

4　本書の第1・3図は、南周防農地整備事業所提供の地図を元に作成し、第2図は、国土地理院発行の5万分の1地形図「柳井」を複製使用した。

5　本書で使用した方位は国土座標（世界測地系）の北、標高は海抜高度（m）である。

6　本書で使用した土色の色調表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』Munsell 方式による。

7　図版中の遺構・遺物番号は、実測図の遺構・遺物番号と対応する。

8　出土遺物実測図で、断面黒塗は須恵器を示す。

9　本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

SA：柱列　SB：掘立柱建物　SD：溝　SI：竪穴建物　SK：土坑　SP：柱穴　SX：性格不明遺構

10　報告書作成の過程で、弥生土器・土師器については田畑直彦氏（山口大学埋蔵文化財資料館）に、石器・石製品の石材鑑定については赤﨑英里氏（山口県立山口博物館）に御教示いただいた。

11　資料の分析・鑑定に関して、放射性炭素年代測定（AMS 測定）と樹種同定を業者に委託し、その成果を第Ⅳ章に掲載した。

12　本書の作成・執筆は、岡田・岩﨑・石井・塚本が共同で行い、編集は岡田が行った。なお、執筆分担は次のとおりである。

Ⅰ　岡田　　Ⅱ　岩﨑　　Ⅲ 1 岡田　2 岡田・岩﨑・石井・塚本　3 岡田・岩﨑・石井
4 岡田・岩﨑　　Ⅳ　業者委託　　Ⅴ　1 岡田　2 岡田・岩﨑　3 塚本　4・5 岡田

本文目次

Ⅰ　調査の経緯と概要 …… 1
　1　調査に至る経緯 …… 1
　2　調査の経過と概要 …… 1

Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 4
　1　地理的環境 …… 4
　2　歴史的環境 …… 4

Ⅲ　調査の成果 …… 9
　1　遺跡の概要 …… 9
　（1）概要 …… 9
　（2）基本層序 …… 12
　2　弥生時代～古墳時代前半の遺構と遺物 …… 14
　（1）竪穴建物 …… 14
　（2）掘立柱建物・柱列 …… 64
　（3）土坑 …… 69
　（4）溝 …… 80
　3　古墳時代後半以降、時期不明の遺構と遺物 …… 85
　（1）掘立柱建物・柱列 …… 85
　（2）土坑・柱穴 …… 87
　（3）溝 …… 91
　4　柱穴・溝・東谷出土遺物と遺構外遺物 …… 94
　（1）柱穴出土遺物 …… 94
　（2）溝出土遺物 …… 99
　（3）東谷出土遺物 …… 99
　（4）遺構外遺物 …… 103

Ⅳ　自然科学分析 …… 122
　1　はじめに …… 122
　2　試料 …… 122
　3　分析方法 …… 122
　4　結果 …… 123
　5　考察 …… 126

Ⅴ　総　括 …… 132
　1　馬場遺跡出土の弥生土器・土師器について …… 132
　2　馬場遺跡出土石器の組成と石材について …… 136
　3　山口県内の弥生時代焼失竪穴建物について …… 139
　4　馬場遺跡の集落変遷について …… 145
　5　まとめ …… 147

挿図目次

第 1 図　馬場遺跡の調査範囲…… 1
第 2 図　遺跡の位置と周辺の主な遺跡…… 5
第 3 図　グリッド設定図…… 9
第 4 図　遺構配置図（1）…… 10
第 5 図　遺構配置図（2）…… 11
第 6 図　調査区土層図…… 13
第 7 図　SI 1 炭化材検出状況実測図…… 14
第 8 図　SI 1 実測図…… 15
第 9 図　SI 1 出土遺物実測図（1）…… 16
第 10 図　SI 1 出土遺物実測図（2）…… 17
第 11 図　SI 2 実測図…… 18
第 12 図　SI 2 内 SP 6・SK21 実測図…… 19
第 13 図　SI 2 出土遺物実測図…… 20
第 14 図　SI 3 及び出土遺物実測図…… 21
第 15 図　SI 5・6・12・20 配置図…… 23
第 16 図　SI 5 実測図…… 24
第 17 図　SI 6 実測図…… 25
第 18 図　SI 6 出土遺物実測図…… 26
第 19 図　SI12 炭・焼土検出状況実測図…… 27
第 20 図　SI12 実測図…… 28
第 21 図　SI20 実測図…… 29
第 22 図　SI12・20 出土遺物実測図…… 30
第 23 図　SI 8 実測図…… 32
第 24 図　SI 8 出土遺物実測図（1）…… 33
第 25 図　SI 8 出土遺物実測図（2）…… 34
第 26 図　SK17 及び出土遺物実測図…… 35
第 27 図　SI 9・23 配置図…… 36
第 28 図　SI 9 出土遺物実測図…… 36
第 29 図　SI 9 実測図…… 37
第 30 図　SI23 実測図…… 38
第 31 図　SI10・11 配置図…… 38
第 32 図　SI10 実測図…… 39
第 33 図　SI10 出土遺物実測図…… 40
第 34 図　SI11 実測図…… 41
第 35 図　SI11 出土遺物実測図（1）…… 42
第 36 図　SI11 出土遺物実測図（2）…… 43
第 37 図　SI13・21 実測図…… 45
第 38 図　SI13 出土遺物実測図（1）…… 46
第 39 図　SI13 出土遺物実測図（2）…… 47
第 40 図　SI13・21 出土遺物実測図…… 48
第 41 図　SI14 及び出土遺物実測図…… 49
第 42 図　SI15 実測図…… 51
第 43 図　SI15 出土遺物実測図…… 52
第 44 図　SI16 実測図…… 54
第 45 図　SI16 出土遺物実測図（1）…… 55
第 46 図　SI16 出土遺物実測図（2）…… 56
第 47 図　SI17・19 配置図…… 57
第 48 図　SI17 実測図…… 58
第 49 図　SI19 実測図…… 59
第 50 図　SI19 出土遺物実測図…… 60
第 51 図　SI18 実測図…… 61
第 52 図　SI18 出土遺物実測図…… 62
第 53 図　SX 2 及び出土遺物実測図…… 63
第 54 図　SI22 実測図…… 64
第 55 図　SB 1 及び出土遺物実測図…… 65
第 56 図　SB 2・3 実測図…… 66
第 57 図　SB 5 実測図・SA 3 及び出土遺物実測図 68
第 58 図　SK38 実測図…… 69
第 59 図　SK38 出土遺物実測図（1）…… 70
第 60 図　SK38 出土遺物実測図（2）…… 71
第 61 図　SK 1・7・18 実測図…… 72
第 62 図　SK28・29 実測図…… 74
第 63 図　SK25・30・34 実測図…… 75
第 64 図　SK31・35・37 実測図…… 76
第 65 図　SK41 実測図…… 77
第 66 図　土坑等出土遺物実測図（1）…… 79
第 67 図　土坑等出土遺物実測図（2）…… 80
第 68 図　SD 4・15 実測図…… 81
第 69 図　SD17・19・26 実測図…… 82
第 70 図　SD 5・18・22 ～ 25 実測図…… 84
第 71 図　SB 4 実測図…… 86
第 72 図　SA 1・2 実測図…… 86
第 73 図　SK10 及び出土遺物実測図…… 88
第 74 図　SK 2・11・23 実測図…… 89
第 75 図　SK24・26・27、SP690 実測図…… 90
第 76 図　SD12 ～ 14・16 実測図…… 92
第 77 図　SD20・21・27 実測図…… 93
第 78 図　柱穴出土遺物実測図（1）…… 95
第 79 図　柱穴出土遺物実測図（2）…… 96
第 80 図　柱穴出土遺物実測図（3）…… 97
第 81 図　柱穴出土遺物実測図（4）…… 98
第 82 図　溝出土遺物実測図…… 100

第 83 図　東谷出土遺物実測図（1）…… 101
第 84 図　東谷出土遺物実測図（2）・遺構外遺物（1）
…… 102
第 85 図　遺構外遺物（2）…… 104
第 86 図　遺構外遺物（3）…… 105
第 87 図　遺構外遺物（4）…… 106
第 88 図　暦年較正結果（1）…… 126
第 89 図　暦年較正結果（2）…… 127
第 90 図　暦年較正結果（3）…… 128
第 91 図　炭化材（1）…… 130
第 92 図　炭化材（2）…… 131
第 93 図　馬場遺跡出土弥生土器・土師器の変遷（1）
…… 133
第 94 図　馬場遺跡出土弥生土器・土師器の変遷（2）
…… 134
第 95 図　馬場遺跡出土石器の組成と石器別の石材割合
…… 137
第 96 図　馬場遺跡周辺の地質分布…… 138
第 97 図　山口県内の弥生時代焼失竪穴建物の分布
…… 140
第 98 図　山口県内の弥生時代焼失竪穴建物の例
…… 141
第 99 図　馬場遺跡における竪穴建物の変遷　145
第 100 図　馬場遺跡における各段階の遺構分布　146
第 101 図　田布施川下流域の主な弥生集落の消長　148

表目次

第 1 表　馬場遺跡出土土器観察一覧表（1）…… 108
第 2 表　馬場遺跡出土土器観察一覧表（2）…… 109
第 3 表　馬場遺跡出土土器観察一覧表（3）…… 110
第 4 表　馬場遺跡出土土器観察一覧表（4）…… 111
第 5 表　馬場遺跡出土土器観察一覧表（5）…… 112
第 6 表　馬場遺跡出土土器観察一覧表（6）…… 113
第 7 表　馬場遺跡出土土器観察一覧表（7）…… 114
第 8 表　馬場遺跡出土土器観察一覧表（8）…… 115
第 9 表　馬場遺跡出土土器観察一覧表（9）…… 116
第 10 表　馬場遺跡出土土器観察一覧表（10）…… 117
第 11 表　馬場遺跡出土土器観察一覧表（11）…… 118
第 12 表　馬場遺跡出土土製品観察一覧表…… 119
第 13 表　馬場遺跡出土石器・石製品等観察一覧表（1）…… 119
第 14 表　馬場遺跡出土石器・石製品等観察一覧表（2）…… 120
第 15 表　馬場遺跡出土石器・石製品等観察一覧表（3）…… 121
第 16 表　馬場遺跡出土鉄器・鉄製品観察一覧表…… 121
第 17 表　分析試料一覧・樹種同定結果…… 123
第 18 表　放射性炭素年代測定結果…… 125
第 19 表　馬場遺跡出土弥生土器・土師器の器種構成…… 135
第 20 表　馬場遺跡出土石器の種類と使用石材…… 136
第 21 表　山口県内の焼失竪穴建物一覧（1）…… 142
第 22 表　山口県内の焼失竪穴建物一覧（2）…… 143

写真図版目次

表紙　遺跡上空から上関方面を望む
図版　1－1　遺跡遠景（西から）
1－2　遺跡遠景（南から）
図版　2－1　遺跡遠景（東から）
2－2　遺跡遠景（北西から）
図版　3－1　遺跡全景（真上から、上が北西）
3－2　遺跡全景（南から）
図版　4－1　遺跡全景（南東から）
4－2　遺跡全景（北東から）
図版　5－1　遺跡全景（北から）
5－2　遺跡全景（西から）
図版　6－1　遺跡近景（中央付近、真上から）
6－2　遺跡近景（東付近、真上から）
図版　7－1　調査区北壁（A-A'）土層（南東から）
7－2　調査区南壁（B-B'）土層（北西から）
7－3　調査区南壁（C-C'）土層（北西から）
図版　8－1　SI 1 焼土検出状況（北東から）
8－2　SI 1 焼土検出状況（南西から）
8－3　SI 1 北側焼土検出状況（北東から）
8－4　SI 1 北側壁面被熱状況（南東から）
8－5　SI 1 焼土検出状況（ベルト除去後、北東から）
図版　9－1　SI 1 炭化材検出状況（北東から）
9－2　SI 1 土層断面（北東－南西方向、北西から）
9－3　SI 1 土層断面（北東－南西方向、南東から）
9－4　SI 1 土層断面（北西－南東方向、北東から）
9－5　SI 1 土層断面（北西－南東方向、南西から）
図版 10－1　SI 1 貼床検出状況（南東から）
10－2　SI 1 主柱穴 2 土層断面（南東から）
10－3　SI 1 主柱穴 4 土層断面（南東から）
10－4　SI 1 南東壁付近土器出土状況（北西から）
10－5　SI 1 北東壁溝内土器出土状況（南西から）
図版 11－1　SI 1 完掘状況（南東から）
11－2　SI 2 完掘状況（南東から）
図版 12－1　SI 2 土層（b-b'）断面（南西から）
12－2　SI 2 土層（b-b'）断面（北東から）
12－3　SI 2 内土器 15 出土状況（南西から）
12－4　SI 2 内土器群 A 出土状況（北東から）
12－5　SI 2 内土器 19 出土状況（東から）
12－6　SI 2 内 SP 6 土器出土状況（南から）
12－7　SK21 土層断面（南西から）
12－8　SK21 完掘状況（南西から）
図版 13－1　SI 3 完掘状況（南東から）
13－2　SI 3 完掘状況（北東から）
13－3　SI 3 土層（a-a'）断面（北西から）
13－4　SI 3 土層（b-b'）断面（北東から）
13－5　SI 3 内 SP 8 遺物出土状況（南から）
図版 14　SI 1 出土遺物
図版 15　SI 1 ・ 2 出土遺物
図版 16　SI 2 ・ 3 出土遺物
図版 17－1　SI 3・5・6・12・20 完掘状況（北東から）
17－2　SI 5・6・12・20 完掘状況（南から）
図版 18－1　SI 5 ・ 12 完掘状況（南から）
18－2　SI 5 土層断面（北東から）
18－3　SI 5 中央土坑土層断面（南西から）
18－4　SI 6 土器 1 出土状況（南から）
18－5　SI 6 中央土坑土層断面（西から）
図版 19－1　SI 5 完掘状況（南から）
19－2　SI 6 完掘状況（南から）
図版 20－1　SI 6 ・ 20 完掘状況（東から）
20－2　SI20・6 完掘状況（南から）
図版 21－1　SI12 木炭・焼土出土状況（南東から）
21－2　SI12 木炭・焼土出土状況（北東から）
図版 22－1　SI12 完掘状況（南東から）
22－2　SI12（a-a'）土層断面（南から）
22－3　SI12（c-c'）土層断面（北西から）
22－4　SI12 中央土坑土層断面（北西から）
22－5　SI20 中央土坑土層断面（南西から）
図版 23　SI 6 ・ 12 出土遺物
図版 24　SI12・20 出土遺物
図版 25－1　SI 8 完掘状況（南東から）
25－2　SI 8（a-a'）土層断面（南東から）
25－3　SI 8 土器 1 出土状況（南東から）
25－4　SI 8 中央土坑木炭出土状況（南から）
25－5　SK17 土器出土状況（南東から）
図版 26－1　SI 9 ・ 23 完掘状況（南東から）
26－2　SI 9 ・ 23 完掘状況（南西から）

図版 27　SI 8出土遺物（1）
図版 28　SI 8出土遺物（2）
図版 29　SK17・SI 9出土遺物
図版 30－1　SI10 完掘状況（北から）
30－2　SI10（a - a'）土層断面（南から）
30－3　SI10 中央土坑土層断面（西から）
30－4　SI10 中央土坑木炭出土状況（南から）
30－5　SI10 土器 83 出土状況（北から）
図版 31－1　SI11・10 完掘状況（南から）
31－2　SI11（a - a'）土層断面（北から）
31－3　SI11（b - b'）土層断面（東から）
31－4　SI11（b - b'）土層断面（西から）
31－5　SI11 土器 1 出土状況（北から）
図版 32　SI10・11 出土遺物
図版 33　SI11 出土遺物
図版 34－1　SI13・21 完掘状況（西から）
34－2　SI13・21 完掘状況（北西から）
図版 35－1　SI21 完掘状況（南東から）
35－2　SI13・21 土層断面（北西から）
35－3　SI13・21 土層断面（北東から）
35－4　SI21 完掘状況（南西から）
図版 36－1　SI14 完掘状況（南東から）
36－2　SI14（a - a'）土層断面（北西から）
36－3　SI14（b - b'）土層断面（北西から）
36－4　SI14 完掘状況（南西から）
図版 37　SI13 出土遺物（1）
図版 38　SI13 出土遺物（2）
図版 39　SI13・21・14 出土遺物
図版 40－1　SI15 完掘状況（西から）
40－2　SI15（a - a'）土層断面（南から）
40－3　SI15（b - b'）土層断面（西から）
40－4　SI15 焼土検出状況（南東から）
40－5　SI15 中央土坑土層断面（南から）
図版 41　SI15 出土遺物
図版 42－1　SI16 完掘状況（東から）
42－2　SI16（a - a'）土層断面（南から）
42－3　SI16（b - b'）土層断面（西から）
42－4　SI16 北東隅壁溝内土器出土状況（南東から）
42－5　SI16 中央土坑土器出土状況（北東から）
図版 43－1　SI17・19 完掘状況（南西から）
43－2　SI17 完掘状況（北西から）
図版 44－1　SI19・17 完掘状況（東から）
44－2　SI17 土層断面（北東から）
44－3　SI19 土層断面（東から）
44－4　SI19 中央土坑土層断面（西から）
44－5　SI19 中央土坑完掘状況（南東から）
図版 45　SI16 出土遺物
図版 46　SI16・19 出土遺物
図版 47－1　SI18 完掘状況（西から）
47－2　SI18 集石検出状況（南東から）
47－3　SI18 床面被熱痕検出状況(南東から)
47－4　SI18 中央土坑遺物出土状況(南西から)
47－5　SI18 完掘状況（南東から）
図版 48　SI18 出土遺物
図版 49－1　SX 2 遺物出土状況（南から）
49－2　SI22 完掘状況（北から）
図版 50－1　SB 1 完掘状況（真上から、上が北）
50－2　SB 2・SA 3 完掘状況(真上から、上が北)
50－3　SB 3 完掘状況(真上から、上が北西)
図版 51－1　SB 1－SP679 土器出土状況(西から)
51－2　SB 1－SP679 完掘状況（西から）
51－3　SB 1－SP1265 遺物出土状況(北東から)
51－4　SP93 土器出土状況（北東から）
51－5　SP129 土器出土状況（北西から）
51－6　SP191 土器出土状況（西から）
51－7　SP808 土器出土状況（南から）
51－8　SP1002 土器出土状況（東から）
図版 52　SX 2・SB 1・SA 3 出土遺物
図版 53－1　SK38 完掘状況(真上から、上が北東)
53－2　SK 7 完掘状況（東から）
53－3　SK29 土器出土状況（東から）
53－4　SK30 完掘状況（南東から）
53－5　SK34 土器出土状況（西から）
53－6　SK34 完掘状況（東から）
53－7　SK31 土層断面（東から）
53－8　SK31 遺物出土状況（南から）
図版 54－1　SK31 完掘状況（南東から）
54－2　SK35 南北土層断面（南東から）
54－3　SK37 土器出土状況（南西から）
54－4　SK37 土器出土状況（南から）

54－5　SD 4 完掘状況（真上から、上が南西）
54－6　SD15 完掘状況（真上から、上が北西）
図版 55－1　SD17・19 完掘状況（南東から）
55－2　SD26 完掘状況（北東から）
55－3　SD 5 遺物出土状況（北西から）
55－4　SD 5 遺物出土状況（北東から）
図版 56　SK38 出土遺物（1）
図版 57　SK38 出土遺物（2）
図版 58　土坑出土遺物（1）
図版 59　土坑出土遺物（2）
図版 60－1　SB 4 完掘状況（真上から、上が北東）
60－2　SA 1 完掘状況（真上から、上が北西）
60－3　SB 5・SA 2 完掘状況（真上から、上が北）
図版 61－1　SK10 須恵器出土状況（南から）
61－2　SK10 須恵器下部出土状況（南東から）
61－3　SK10 須恵器下部出土状況（南西から）
61－4　SK10 完掘状況（南西から）
61－5　SK10 完掘状況（東から）
図版 62－1　SK10 須恵器出土状況（北西から）
62－2　SK10 出土遺物
図版 63－1　SK 2 土層断面（南西から）
63－2　SK 2 木炭検出状況（北西から）
63－3　SK11 土層断面（西から）
63－4　SK27 土器出土状況（西から）
63－5　SP690 土器出土状況（北東から）
63－6　SD13 内 SP 土器出土状況（西から）
63－7　SD12・13 完掘状況（真上から、上が北）
図版 64－1　SD14・16 完掘状況（真上から、上が北）
64－2　SD20・21 完掘状況（真上から、上が北西）
64－3　SD27 完掘状況（真上から、上が北西）
図版 65　柱穴出土遺物（1）
図版 66　柱穴出土遺物（2）
図版 67　柱穴出土遺物（3）
図版 68　溝出土遺物
図版 69　東谷出土遺物（1）
図版 70　東谷出土遺物（2）
図版 71　遺構外遺物（1）
図版 72　遺構外遺物（2）
図版 73　遺構外遺物（3）
図版 74　遺構外遺物（4）
図版 75　遺構外遺物（5）

Ⅰ　調査の経緯と概要

1　調査に至る経緯（第１図）

農林水産省中国四国農政局は、農村の活性化や農業の競争力強化を図るため、柳井市、熊毛郡田布施町及び光市の一部で、南周防農地整備事業を進めている。それに先立ち、平成31（令和元）年度に田布施町教育委員会は、対象地である西田布施・友石団地における埋蔵文化財の有無を確認するため試掘調査を実施した。その結果を受けて、山口県教育委員会と事業主体である南周防農地整備事業所は遺跡の取扱いについて協議を行い、工事によって削平される2,802㎡の範囲について、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、令和２年度に南周防農地整備事業所及び田布施町教育委員会の委託を受けた公益財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センターが実施した。

2　調査の経過と概要

令和２年度は、現場準備として委託契約等事務や資料収集等を進め、５月27日に南周防農地整備事業所との初回業務打合せ、６月８日と６月12日に調査範囲の縄張りと確認、地元関係者への実施挨拶を行い、６月15日から重機による表土除去及び駐車場整地等を開始した。６月26日には仮設

第１図　馬場遺跡の調査範囲

重機による表土除去

作業風景①

作業風景②

トイレを設置し、7月10日に発掘作業員説明会を実施した。重機の稼動は7月17日に終了した。

7月21日に発掘作業員による発掘器材の搬入を行った後、7月29日から発掘作業員の稼動を本格化し、まず現場の環境整備に着手した。7月31日から、調査区西半分から東半分へ、粗清掃、精査の順で遺構検出作業を行い、9月8日から10月2日まで、調査区中央付近のD4・D5・E3・E4グリッドの遺物包含層及び堆積層等の掘削を行った。9月10日からは竪穴建物を優先して遺構の掘り込みを開始し、土坑や柱穴、溝等の掘り込みにも順次着手していった。この間、8月17日から8月18日にかけて国土座標設置を業務委託により実施し、8月24日から9月9日まで調査員による遺構配置略測図の作成を行った。

遺構検出作業や遺物包含層等掘削の進捗にともない、遺構数が当初の想定を大幅に超えること、調査区北側の一部は遺構面が2面あること、人力での掘削が困難な固く締まった土壌であること等が判明したため、9月23日から10月30日までの間と、11月24日から調査終了まで発掘作業員を増加して対応した。調査期間も大幅に延長する見込みとなったことから、報告書の作成と刊行を令和3年度の業務として実施できるよう、10月28日に南周防農地整備事業所と協議を行った。調査期間の延長に伴い、助本遺跡・森永遺跡の調査で契約した設備については、11月21日から水道仮設、11月25日から電気配線をいずれも3月4日まで、11月26日から3月5日まで仮設事務所等の賃借を延長したのに加え、調査が冬場に入ることから、発掘作業員の防寒対策として、11月24日から3月5日まで大型ストーブとテント横幕を借り上げた。

また、遺構数の増加により排土の量が増加し、排土置場が手狭となったこと、調査区内に除去でき

ていない堆積土があったことから、11月4日から11月10日までと、1月19日から1月27日までの2回にわたって、重機による排土置場整備等を業務委託した。

排土置場の整備（1回目）

発掘作業員を増員後、遺構の掘り込みと並行して、11月24日から12月4日まで、調査区南側のF4・F5・G3・G4・H3グリッドについて再度の遺構検出作業及び遺物包含層の掘削と、翌年の1月12日まで、D4・D5・E3・E4グリッドの再度の遺物包含層の掘削を行った。遺構掘り込みが一段落した2月22日から空中写真撮影準備及び清掃を行い、3月3日に空中写真撮影と空中写真測量（図化を除く）を実施した。

その後、東谷に設定したトレンチや残りの遺構の掘り込みを行いながら、撤収準備を行い、3月12日に器材を搬出し、発掘作業員の稼動を終了した。3月15日には仮設トイレの借上げを終了した。記録関係については、随時、担当職員による各遺構の実測図作成のほか、写真撮影等を実施し、3月18日にすべての現地作業を終了した。3月22日には、南周防農地整備事業所の立会いの下、現地引渡しを行った。なお、出土遺物は、随時、センターに持ち帰り、洗浄・接合・復元作業を行い、遺構図面や写真等の記録類も整理を進め、報告書作成のため基礎資料とした。

令和3年度は、4月6日付けの委託契約締結を受けて調査準備を開始し、4月27日に南周防農地整備事業所との初回業務打合せを行った。年度当初は、昨年度から引き続き、出土遺物の接合、復元等の整理作業のほか、遺構図面や遺構写真等の記録類の整理を進めた。また、空中写真測量データの図化、自然科学分析、鉄製品の保存処理の業務委託契約を行った。

整理作業は、昨年度からピックアップを進めてきた出土遺物について、出土地点、残存状態、特徴等にもとづき厳選し、図化するものを決定した。併せて、放射性炭素年代測定や樹種同定等の自然科学分析を行う木炭試料についても抽出した。4月13日から出土遺物の実測図の作成、現場で作成した遺構図面のデジタルトレース等を並行して進めた。出土遺物の実測を進めながら、6月11日から遺物図面のデジタルトレースも開始した。8月18日から、空中写真測量データの図化業務で完成した遺構図面を整理・割付し、報告書挿図を作成した。10月6日から10月12日まで遺物写真撮影を行い、それを用いて遺物写真図版を作成した。また、遺物図面の割付や遺構写真図版の作成も行った。

一方で、関連資料の収集を行いながら文章の執筆を進めていき、整理した挿図や写真図版のほか、業務委託した自然科学分析の成果品とともに編集した。令和4年2月4日に報告書原稿を入稿した後、校正作業を経て、本報告書を刊行するに至った。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　地理的環境

馬場遺跡は、熊毛郡田布施町上田布施に所在する。田布施町は山口県の南東部、熊毛半島の西側に位置し、町域の北側と西側で光市と接する。北側に神籠石を有する石城山（362m）があり、西側には呉麓山（293.8m）と千坊山（298.7m）が連なる。東側低地部には平生町と柳井市街地が広がり、南に目を向けると、平生湾及び瀬戸内海が広がっている。町域は山林とその山々から派生する丘陵、そして点在する独立丘陵、さらにその間を埋めるように広がる谷底平野から成り立つ。田布施川が町のほぼ中央を貫流し、いくつもの支流に分かれている。

馬場遺跡の所在する上田布施地区は、田布施町南西部にあり、町域の約４分の１を占める。地区の多くは小起伏山地と、そこから派生する丘陵に囲まれた山村である。『防長風土注進案』にも「村中総て山勝の所にて谷間深く」という記述があるように、平地が少ない。遺跡は、近隣の山地から派生した小丘陵の裾部に位置し、遺跡のすぐ南側を流れる田布施川支流の才賀川が、下田布施地区との境をなしている。

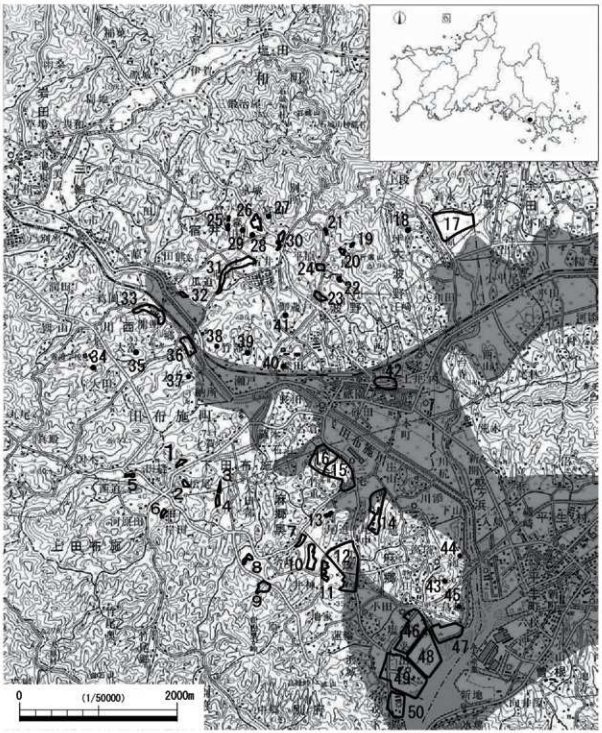
2　歴史的環境

縄文時代の遺跡は、熊毛半島沿岸部に多くみられるが、田布施町内でその存在はほとんど確認できていない。これは、かつて田布施川下流域と平生湾付近の標高 10 m以下の低地が、古柳井水道と呼ばれ、現在の田布施町中心部が海底であったことに起因する。このため、海水面が標高５m以下になる古墳時代後期頃まで、この一帯には集落等の痕跡が乏しい。とはいえ近年、田縫遺跡（５）で縄文時代の土坑が確認されたように、古柳井水道から離れた内陸部の地域が、町内の縄文時代の歴史解明の糸口になる可能性がある。

弥生時代に入ると、田布施町の低丘陵地や低地に、人々の生活の形跡がみえはじめる。弥生時代中期前半には、見用遺跡（７）で直径が推定 7.4m の円形竪穴建物が確認された。建物の南側床面からは、多量の炭化材が放射状に残された状態で検出され、焼失竪穴建物であったことが明らかになっている。遺物には須玖式土器など、北部九州との交流をうかがわせる資料も出土した。

弥生時代中期後半になると、県下有数の低地性集落跡である明地遺跡（17）では、県指定有形文化財となった、国内最大を誇る分銅形土製品が出土した。他にも、船の描かれた絵画土器、土錘、石錘等、海と関わる遺物がみられる。さらに、吉備、伊予、山陰等の様々な地域の土器も出土しており、広範囲にわたる地域との関わりがうかがわれる。ほぼ同時期に集落を展開していた開明遺跡（33）でも同様な出土品が認められている。いずれの遺跡も標高 13 ～ 21 mに立地しており、古柳井水道との関係を考えると、これらの集落は海の間近で、他地域との交易や交流を活発に行っていたことがわかる。

一方で、海から離れ、周辺地域との交流がほとんどうかがえない場所に営まれた集落もある。本遺跡の周辺では、平田遺跡（６）と三坪遺跡（８）が当てはまる。両遺跡からは、明地遺跡と開明遺跡に続いて、それぞれ町内３例目と４例目の分銅形土製品が出土した。他にも、標高 40 m程の



※網掛けは標高 10 m以下の範囲（古柳井水道）

1 馬場遺跡　2 助本遺跡　3 森永遺跡　4 東乗藤遺跡　5 田縫遺跡　6 平田遺跡　7 見用遺跡
8 三坪遺跡　9 奈良二ツ池遺跡　10 伊幸田遺跡　11 守古遺跡　12 助政遺跡　13 八頭遺跡　14 山崎原遺跡
15 三宅遺跡　16 神過原遺跡　17 明地遺跡　18 納蔵原古墳　19 堀川遺跡　20 平井遺跡　21 三反地遺跡
22 水奥遺跡　23 西河内遺跡　24 中屋 B 遺跡　25 森国遺跡　26 下小田遺跡（下小田古墳）　27 宮田古墳群
28 京城古墳群　29 友兼古墳群　30 中溝遺跡　31 上時貞遺跡　32 尾尻遺跡　33 間明遺跡　34 相ヶ迫古墳
35 木ノ井山古墳　36 石走山遺跡　37 国森古墳　38 後井古墳群　39 稲荷山古墳　40 深田古墳　41 御蔵戸古墳
42 波野市遺跡　43 高塔古墳群　44 上八海古墳群　45 下八海古墳群　46 麻郷塩田源治郎浜跡
47 麻郷塩田烏越浜跡　48 麻郷塩田御開作浜跡　49 麻郷塩田長田屋浜跡　50 麻郷塩田菊屋浜跡

第２図　遺跡の位置と周辺の主な遺跡

奥まった谷頭に位置する奈良二ツ池遺跡（9）では、周防型壺が一括出土したほか、炭化した梅等が出土した。中溝遺跡（30）では、弥生時代中期～後期の竪穴建物や貯蔵穴等の遺構が多数確認された。また、平井遺跡（20）や上時貞遺跡（31）では、出土遺物がほぼ在来系土器のみであり、閉鎖的な環境が容易に想像できる。さらに、山崎原遺跡（14）や神道原遺跡（16）等、町内各地には、この時期における人々の営みの痕跡が残されている。

弥生時代後期になると、地域をまとめる権力者の出現により、独立した高台に墳墓が築造されるようになった。石走山遺跡（36）では、方形台状墓にはじまる墳墓群が形成され、集落から独立した埋葬地をもつ古墳の先駆けといえる。同遺跡における墳墓の規模は、時代が下るにつれ縮小し、その形態は地域色の濃いものから、徐々に画一的なものへと移っていった。

田布施町は、かねてから 100 基以上の古墳が存在する、県内有数の古墳密集地として知られる。規模の大小を問わず、ほとんどが田布施川下流域に集中しているが、この一帯は当時、古柳井水道の沿岸部と推定されていることから、交通や交易の要衝であったこの地を押さえることが、権力者にとっていかに重要であったのかがわかる。数ある著名な古墳のうちの一つが、4 世紀前半築造の国森古墳（37）である。この古墳は、前方後円墳が定型化する以前に築かれた県内最古の方墳である。豊かな副葬品の大半は、鉄製の武器や工具が占めている。続く 5 世紀中頃の木ノ井山古墳（35）は、県内では珍しい粘土槨を主体部とし、円筒埴輪をもつ円墳である。このタイプの墳墓は畿内を中心に分布するため、ヤマト政権と近い勢力との繋がりがうかがえる。6 世紀に入って造営された納蔵原古墳（18）は、小型の前方後円墳で円筒埴輪をもち、この地域の首長墳としては初めて、横穴式石室を採用している。当時の前方後円墳は、熊毛半島沿岸部など町外に多く分布しており、納蔵原古墳はその西端にあたる。この古墳は田布施町周辺地域における最後の前方後円墳といわれており、被葬者は周防国造の系列と考えられている。

これ以降、田布施町の古墳は円墳が主体となり、小型化していく。6 世紀後半になると、田布施川下流域の両岸に相次いで古墳が出現する。川の左岸には稲荷山古墳（39）、深田古墳（40）、御蔵戸古墳（41）と並び、川から少し離れた丘陵上にも、宮田古墳群（27）、京城古墳群（28）、友兼古墳群（29）など群集墳が営まれる。その対岸には相ヶ迫古墳（34）があり、少し離れた河口付近の右岸には、高塔古墳群（43）、上八海古墳群（44）、下八海古墳群（45）がみられる。その中で例外的なのが、県内最大かつ中国地方有数の石室規模といわれる後井古墳群（38）である。とくに、1 号墳出土の耳環・勾玉といった副葬品や、築造時期、石室規模等からみて、被葬者は納蔵原古墳のそれに続く、周防国造の系譜をひく最後の首長ともいわれている。近年新たに確認された下小田古墳（26）は、同じく横穴式石室をもつ円墳で、刀装具・馬具・玉類等の良好な資料が出土しており、とりわけ刀装具には銀象嵌が施されるなど、県内初の貴重な出土品に恵まれた。規模は後井古墳より小さく、被葬者は古墳時代終末期の地域有力者と推定される。これ以降、目立って大規模な墳墓は築かれておらず、古墳築造は衰退していった。

古墳時代までの遺跡密集地として知られる田布施町には、古代以降を中心時期とする遺跡は多くない。しかし三宅遺跡（15）は、その名が朝廷直轄地の「屯倉（みやけ）」の管理にあたった氏に由来すると考えられ、その関連が注目されている。大化の改新後、屯倉が廃止されると、律令体制

下で周防国が成立し、田布施町域は熊毛郡に属した。『和名類聚抄』によると、熊毛郡には７つの「郷」が置かれ、平安時代前期頃の馬場遺跡周辺は「多仁郷」に属したと考えられる。８世紀以降に公印制度が始まり、官衙など公的施設や有力者による公印、私印の使用が地方にも広がった。その歴史を裏付けるように、尾尻遺跡（32）では、県内初出土の「三川私印」の印文のある銅製の私印がみつかった。他にも、緑釉陶器や青磁・白磁などの高級品が含まれ、また遺跡が居住に適さない大型建物を有することから、官衙関連施設など、通常の集落とは異なる特殊な性格をもつ場所であったと推定できる。

中世の田布施町は大内氏の勢力下に置かれ、平野部には「波野殿」と呼ばれた大内弘直の居館とされる波野市遺跡（42）があった。その周囲に町並が広がっていたかどうかは、今のところ判然としないが、館から少し離れて複数の遺跡がみられる。水奥遺跡（22）は、狭小な谷奥という不利な立地条件にあり、長期的で安定的な生活の場とはいいがたい。しかし、検出された一括廃棄土坑から、青磁・刀子等のほか、200 枚を超える膨大な土師器の皿や杯等が多数みつかっており、宴会や特別な儀式が行われた場所の可能性がある。同じく見用遺跡は平安時代末～鎌倉時代前半の遺跡であり、水奥遺跡と同規模の出土品をもっている。ただ、こちらは安定した平地で 15 棟の掘立柱建物が検出されており、継続的に集落が営まれていたと考えられる。さらに、先述の山崎原遺跡や神過原遺跡、そして三坪遺跡のように、遺跡の中心時期は弥生時代だが、中世の遺構や遺物が発見された遺跡も存在している。上記の遺跡以外にも、本遺跡近隣の助本遺跡（２）をはじめ、守吉遺跡（11）、西河内遺跡（23）等、町内各所で中世土器片が散見された遺跡は枚挙に暇がなく、室町時代に至るまで、人々の生活がこの地域に根ざしていたことがわかる。

大内氏滅亡後、毛利氏の支配下になり近世を迎えた田布施町は、慶安３（1650）年、上関宰判の管轄下に置かれた。当時奨励されていた政策として、防長三白（米・紙・塩）があるが、藩の奨励により植樹された、ハゼの木から採れる蝋生産が盛んであったことから、それを加えて防長四白ともいわれた。沿岸部は温暖な気候を生かして製塩業が盛んになり、麻郷塩田源治郎浜跡（46）をはじめ、その後も次々と塩田が開発されていったが、遺跡周辺の内陸部はほぼ農家であった。先述の『防長風土注進案』の記載のとおり、村中が山村で谷間が深く、「雑所の田畠が多い」ため、平地が少なく農業に苦心しており、田畑の畦にも雑穀を植え、本業の合間に養・小縄・編笠等の生産に精を出すなど、様々な工夫をして生計を維持していたようである。

明治 22（1889）年の町村制施行により、馬場遺跡のある上田布施地区は、波野・大波野・下田布施の３村と合併し田布施村になった。その後、大正 10（1921）年の町制施行を経て、昭和 30（1955）年に城南村・麻郷村・麻里府村と合併し、田布施町になってから今年で 67 年目になる。なお、著名な出身者として、元内閣総理大臣の岸信介と佐藤栄作がいる。

引用・参考文献

角川日本姓氏歴史人物大辞典編纂委員会 1991『角川日本姓氏歴史人物大辞典　35 山口県』 角川書店

田布施町教育委員会 1988『国森古墳』

田布施町教育委員会 1996『納蔵原古墳』

田布施町教育委員会 2016『上時貞遺跡』
田布施町教育委員会 2018『広報たぶせ』No.979・No.981・No.983
田布施町教育委員会 2019『広報たぶせ』No.995
田布施町史編纂委員会 1990『田布施町史』
平凡社編 1980『山口県の地名』日本歴史地名大系第 36 巻　平凡社
山口県教育財団・山口県教育委員会 1993『明地遺跡』
山口県教育財団・山口県教育委員会 1994『明地遺跡Ⅱ』
山口県教育委員会 1993『石走山遺跡』
山口県教育委員会 1994『木ノ井山古墳』
（財）山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター 2006『石走山遺跡Ⅱ』
（公財）山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター 2013『開明遺跡・尾尻遺跡』
（公財）山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター 2014『堀川遺跡・平井遺跡・三反地遺跡・水奥遺跡・西河内遺跡・中屋Ｂ遺跡』
（公財）山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター 2020『森国遺跡・下小田遺跡』
（公財）山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター 2021『助本遺跡・森永遺跡』
山口県文書館 1962『防長風土注進案』第五巻　上関宰判 上

Ⅲ　調査の成果

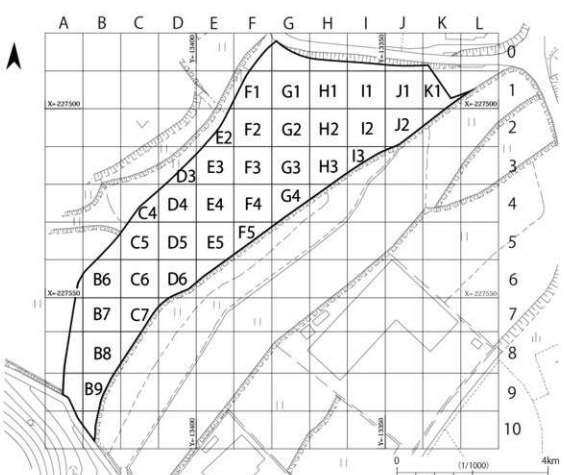
1　遺跡の概要

（1）概要（第３～５図、図版１～６）

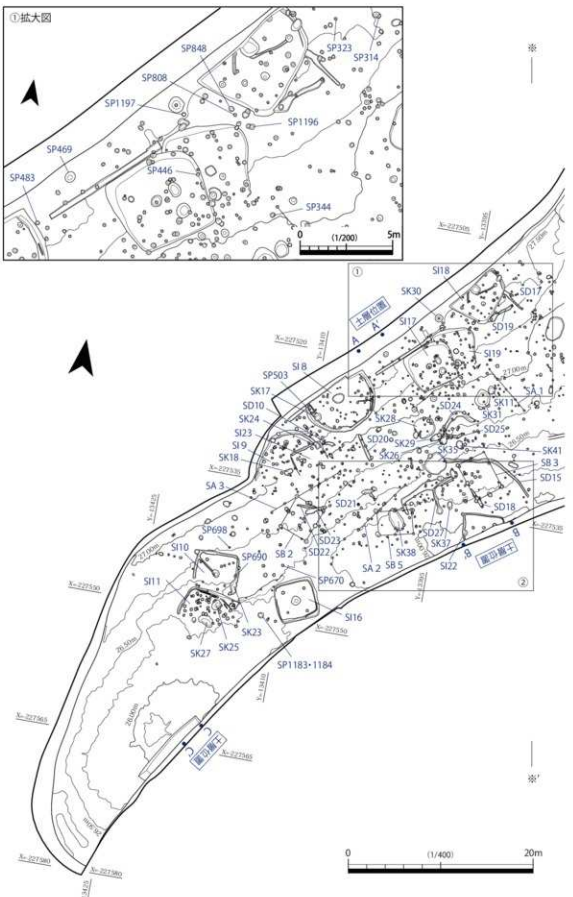
馬場遺跡は、北東－南西方向に延びる丘陵南東側の中央、裾部付近に位置する。調査区は、北西から南東へ緩やかに下る緩傾斜面にあり、調査区の北東と南西両端付近には谷が形成される。谷を挟んで、その外側は再び緩傾斜面となる。遺構面での標高は、調査区中央の北西端付近で 27.8 m、南東端付近で 26.0 mを測る。谷部での標高は、北東側の検出面で 25.0 ～ 27.0 m、南西側で 25.8 ～ 26.5 mを測る。

調査は、国土座標杭によって設定した 10 m四方の方眼のマス目を一つのグリッドとして、西から東に向かってアルファベットのＡ～Ｊ、北から南に向かって算数字の０～ 10 で表し、それらを組み合わせて、たとえば「Ｃ６グリッド」のように呼称することとした（第３図）。

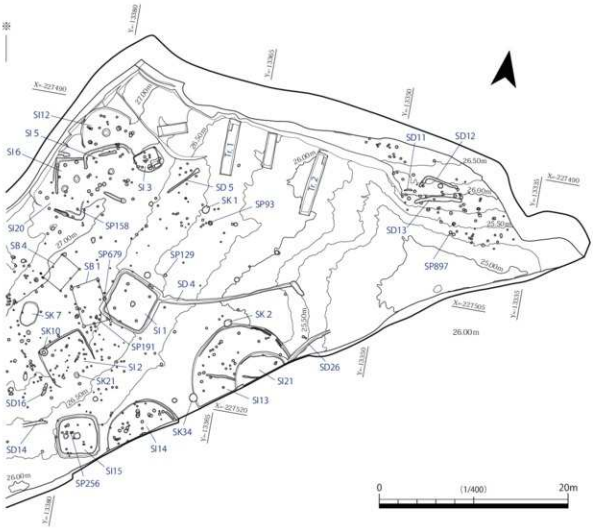
遺構は、北東と南西両側の谷に挟まれた緩傾斜面上と、北東側の谷より外側の調査区東隅付近に集中して分布しており、竪穴建物 21 棟（円形６棟、方形または隅丸方形 15 棟）、掘立柱建物５棟、柱列３箇所、土坑 35 基、溝 20 条、柱穴約 1,200 個等を検出した（第４・５図）。このうち溝４条



第３図　グリッド設定図


①拡大図
SP848
SP323
SP314
SP808
SP1197
SP1196
SP469
SP446
SP483
SP344
0
(1/200)
5m
※
①
SI18
SK30
SD17
土層位置
A
A'
SI17
SD19
SI19
SI8
SP503
SK17
SD10
SK24
SI23
SI9
SK18
SA 3
SK28
SD24
SK11
SK31
SA 1
SD25
SD20
SK29
SK26
SK35
SK41
SB 3
SD15
SD21
SD18
SP698
SD23
SD22
SD27
SK37
SK38
SI22
SI10
SP690
SB 2
SA 2
SB 5
SI11
SP670
SI16
SK23
SK25
SK27
SP1183・1184
②
B
B'
薬印廠王
薬印廠王
※'
0
(1/400)
20m

第４図　遺構配置図（１）


SI12
SI 5
SI6
SI 3
SD 5
SK 1
SP93
SD11
SD12
SD13
SP897
SI20
SB4
SP158
SB1
SP679
SP129
SD 4
SK 7
SK10
SI 1
SP191
SI 2
SK21
SK 2
SD26
SI21
SI13
SD16
SD14
SK34
SI14
SI15
SP256
SP1080
SK40
SP995
SK33
SP965
SK36
SP1211
SP987
SP1002
SP1267
SP1073
SP1149
SP1199
SP1174
②拡大図
0 (1/400) 20m
0 (1/200) 5m

第５図　遺構配置図（２）

については、竪穴建物や土坑と一体で排水溝としての機能をもつ。

また、調査区中央北半のＤ４・Ｄ５・Ｅ３・Ｅ４グリッドと、調査区中央南半のＦ４・Ｆ５・Ｇ３・Ｇ４・Ｈ３グリッドでは遺物包含層を確認した。遺物包含層からは、弥生土器や石器を主体として、須恵器、土師器、緑釉陶器、青磁、白磁、瓦質土器等、弥生時代から室町時代に至る遺物が多数出土しており、当遺跡で断続的に長期間にわたって土地利用が行われたことを示している。北東と南西両側の谷埋土からも多数の遺物が出土しており、とくに北東側の谷では弥生土器が主体を占めていた。以下、本報告書では、北東側の谷を「東谷」と呼称する。

遺構面は、基本的に１面だが、調査区中央北半のＤ４・Ｄ５・Ｅ３・Ｅ４グリッド付近では２面あり、竪穴建物や土坑及びその埋土上にも、遺構より新しい時期に比定される柱穴等の遺構を確認した。

（２）基本層序（第６図、図版７）

調査区内の層序は、調査区中央付近の北壁（Ａ－Ａ'）、調査区中央付近 SI22 部分の南壁（Ｂ－Ｂ'）、調査区南西谷部分の南壁（Ｃ－Ｃ'）の３箇所で確認した。

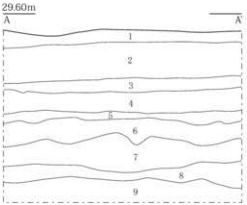
Ａ－Ａ'では、１層が表土、２・４・６・７層がにぶい黄褐色～褐灰色系の耕土及び旧耕土で、２層と４層の間が焼土層（３層）、４層と６層の間が盤土（５層）となっていた。焼土層や盤土が耕土の改修に伴うとすれば、過去に２回以上の農地再編が行われたと推測する。８層は、黒褐色シルト質埴壌土の堆積層で、10 ～ 20cm 程度の厚さの遺物包含層である。９層は褐色重植土で地山の再堆積層とみられ、９層上面は遺構面となる。壁面部分では判別できなかったが、先述のとおり、この付近の９層より下層でも遺構面が確認できることから、この層が地山と考える。

Ｂ－Ｂ'では、１層が表土、２層が耕土、３層が盤土で、４層と５層はそれぞれ黒褐色及び暗褐色のシルト質壌土で、いずれも旧耕土と考える。６～８層は暗褐色～黒褐色系のシルトで遺物包含層である。そのうち、７層と８層はほぼ同質で、８層の上に７層がレンズ状に堆積し、とくに７層で遺物を多く含む。７・８層とＡ－Ａ'の８層が対応すると考える。

Ｃ－Ｃ'では、１層が表土、２層が耕土、３・４層が灰黄褐色シルト質壌土でいずれも旧耕土と考える。５層が灰黄褐色、６・７層が褐灰色のいずれも粘性が高い重埴土で、グライ化し、東側が傾斜することから、谷を埋没させた堆積土と考える。８層は褐灰色砂質壌土で粗砂・細砂が多く混じる。９層は黒色砂壌土で大小の砂礫が多く混じる。８・９層はいずれも谷堆積によると考える。９層より下層は未確認である。

以上を整理すると、基本層序は、Ⅰ表土→Ⅱ耕土→Ⅲ盤土→Ⅳ遺物包含層→Ⅶ遺構面となる。Ⅲ層より下層は、南西谷部分でⅤ谷埋没土→Ⅵ谷堆積土となる。

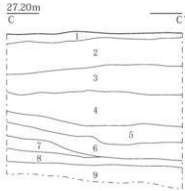
調査区北壁（A－A′）



土層凡例

1　表　土：褐色(10YR4/4)シルト質壌土　金雲母が少し混じる
2　耕　土①：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質壌土　径５mm以下の礫が少し混じる
3　焼　土(盤土か)：明赤褐色(5YR5/8)シルト質壌土　径５mm以下の礫が少し混じる
4　耕　土②：灰黄褐色(10YR5/2)シルト質壌土　径５mm以下の礫が少し、粗砂が多く混じる
5　盤　土：明褐色(7.5YR5/6)シルト質壌土　径５mm以下の礫が少し、粗砂が多く混じる
6　耕　土③：灰黄褐色(10YR5/2)～褐灰色(10YR4/1)軽壌土　径２～３cmの礫が少し、粗砂・細砂が多く混じる。Mn沈着
7　耕　土③：褐灰色(10YR5/1)軽壌土　径５cm以下の礫が少し混じる。Mnがまばらに混じる
8　遺物包含層：黒褐色(7.5YR3/2)シルト質壌壌土　細砂が少し混じる
9　遺構面：褐色(7.5YR4/4)重壌土

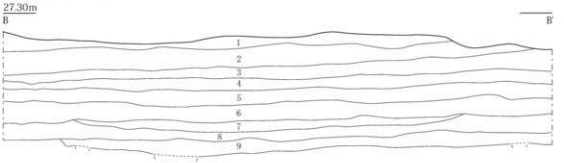
調査区南壁（C－C′）



土層凡例

1　表　土：にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質壌土　径５mm以下の礫が少し混じる
2　耕　土：にぶい褐色(7.5YR5/4)シルト質壌土　径５mm以下の礫が少し混じる
3　旧耕土：灰黄褐色(10YR6/2)シルト質壌土　径２～３mm以下の明赤褐色(5YR5/6)土ブロックが少し、径１cm以下の礫が少し混じる
4　旧耕土：灰黄褐色(10YR6/2)シルト質壌土　明赤褐色(5YR5/6)土ブロックが多く、径１cm以下の礫が少し混じる
5　灰黄褐色(10YR6/2)重壌土　明赤褐色(5YR5/6)土ブロックが少し、径１cm以下の礫が少し混じる
6　褐灰色(10YR5/1)重壌土　明赤褐色(5YR5/6)土ブロックが少し、径５mm以下の礫が少し混じる
7　褐灰色(10YR4/1)重壌土　明赤褐色(5YR5/6)土ブロックが少し混じる
8　谷堆積：褐灰色(10YR5/1)砂質壌土　明赤褐色(5YR5/6)土ブロックが少し、粗砂・細砂が多く混じる
9　谷堆積：黒色(10YR2/1)砂壌土　大小の砂礫が多く混じる

調査区南壁（B－B′）



土層凡例

1　表　土：灰黄褐色(10YR5/2)シルト質壌土　径５mm以下の礫、粗砂・細砂が多く混じる
2　耕　土：灰黄褐色(10YR5/2)シルト質壌土　径５mm以下の礫が少し、粗砂・細砂が多く混じる。橙色(7.5YR6/6)シルト質壌土ブロックが多く混じる
3　盤　土：橙色(7.5YR6/6)シルト質壌土　径５mm以下の礫が少し、粗砂・細砂が多く混じる
4　旧耕土：黒褐色(7.5YR3/2)シルト質壌壌土　径２mm以下の礫・粗砂が多く混じる。３層ブロックが多く混じる。５層とほぼ同質
5　旧耕土：暗褐色(7.5YR3/3)シルト質壌土　径１～２cmの礫が少し、径２mm以下の礫・粗砂が多く混じる。３層土のブロックが多く混じる。４層とほぼ同質
6　遺物包含層①：暗褐色(7.5YR3/3)シルト質壌土　径１cm以下の礫・粗砂・細砂が多く混じる。遺物を少し含む
7　遺物包含層②：黒褐色(7.5YR3/1)シルト質壌壌土　径１cm以下の礫・細砂が多く混じる。遺物を多く含む
8　遺物包含層②：暗褐色(7.5YR3/3)シルト質壌壌土　径１cm以下の礫・細砂が少し混じる。遺物を少し含む
9　SI22埋土：灰褐色(7.5YR4/2)シルト質壌土　地山ブロックが多く、径１cm以下の礫・細砂が少し混じる

第６図　調査区土層図

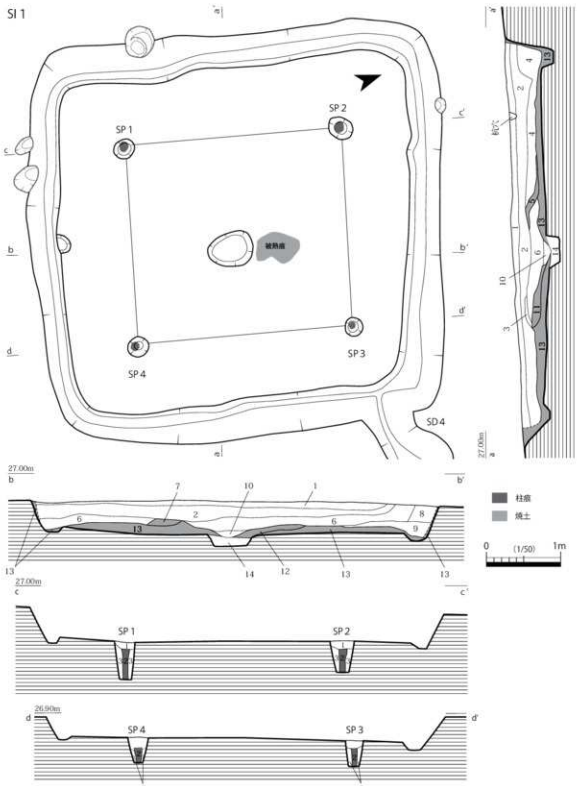
2　弥生時代～古墳時代前半の遺構と遺物

（1）竪穴建物

SI 1（第7～10図　図版8～11・14・15）

調査区北東側のG 2・3グリットに位置し、SI 2の北側に隣接する。平面形は隅丸方形の竪穴建物である。規模は、検出面での主軸の長さが、南北で5.50 m、東西で5.46 m、床面では南北で5.08 m、東西で4.92 mであり、床面積は24.99㎡となる。検出面での標高は26.50～26.88 m、検出面から床面までの深さは最深で0.48 mを測る。主軸方向は、N23° Eである。主柱穴は4個あり、直径が25～35cm、深さが35～50cmを測る。柱間間隔はSP 1から時計回りに、287cm、263cm、288cm、267cmである。柱穴埋土はいずれも、径10cm程度の柱痕埋土（2層）の周りを、粘性の強い橙色粘質土（3層）で固めていた。建物の中央には、長軸が61cm、短軸が46cm、深さが15cmを測る楕円形の土坑があり、その北側では被熱痕を確認した。建物の周囲には、幅が20～

第7図　SI 1 炭化材検出状況実測図



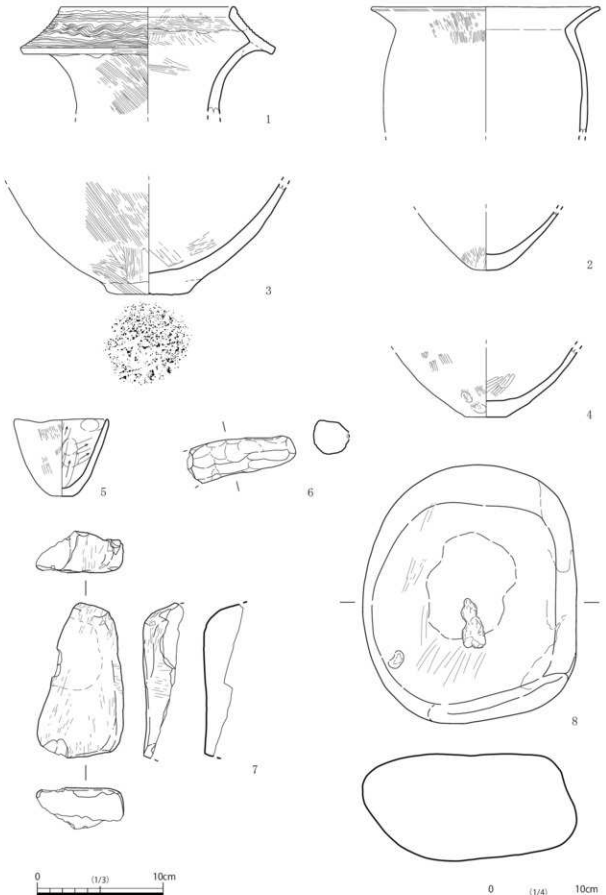
土層凡例（SI 1 埋土）

1 明褐色(7.5YR5/8)粘質土　0.2～0.5mm程度の礫が混じる…表土
2 明褐色(7.5YR5/6)粘質土　0.1～3cm程度の礫が多く混じる。土器片を含む
3 褐色(7.5YR4/4)粘質土　0.2～1cm程度の礫が多く混じる
4 赤褐色(5YR4/6)粘質土　0.2～3cm程度の礫が混じる
5 暗褐色(2.5YR3/6)粘質土　焼土、木炭を少し含む
6 赤褐色(5YR4/6)粘質土　0.2～3cm程度の礫が混じる
7 明赤褐色(2.5YR5/8)粘質土…焼土
8 褐色(7.5YR4/6)粘質土　3cm程度の礫が疎らに混じる
9 褐色(7.5YR4/4)粘質土　0.2～1cm程度の礫が混じる。土器片を含む
10 明赤褐色(5YR5/8)粘質土　0.2～1cm程度の礫が混じる。木炭・土器片を含む…焼土
11 明赤褐色(5YR5/8)粘質土　0.2～1cm程度の礫が混じる。木炭・土器片を含む
12 暗赤褐色(2.5YR3/6)粘質土…焼土
13 暗赤灰色(2.5YR3/1)粘質土　焼土・木炭を多く含む…製床か
14 灰灰色(7.5YR4/1)土　焼土・木炭を多く含む…中央土坑

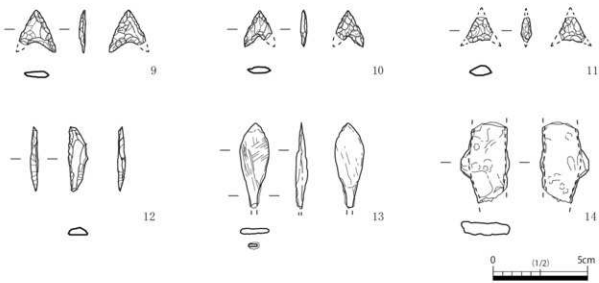
土層凡例（SP 埋土）

1 暗褐色(7.5YR3/4)粘質土　焼土・木炭が多く混じる
2 褐色(7.5YR4/4)粘質土　焼土・木炭が多く混じる…柱痕埋土
3 橙色(7.5YR6/6)粘質土　粘性強　灰褐色(7.5YR4/2)土との混和

第８図　SI 1 実測図



第９図　SI １出土遺物実測図（１）



第 10 図　SI 1 出土遺物実測図（2）

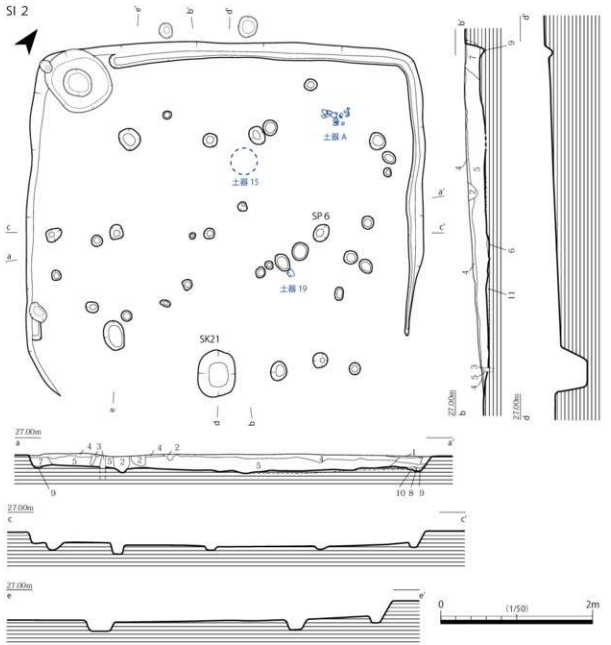
30cm、深さが 5 ～ 18cm の壁溝が廻り、北東隅では屋外へ延びる溝 SD 4 に接続する。SD 4 は排水の役割をもつ溝と考える。

建物の埋土上層の 1 ～ 4・6・8・9 層は、褐色～明褐色系の粘質土で、しまりが非常に強い。埋土下層では、建物全面で焼土と炭化材を検出しており、焼失竪穴建物と考える。焼土は、炭化材を覆うように中央の 5・7 層付近で厚く堆積しており、焼土下では、炭化材が放射状に分布し、壁面には炭化した壁材が付着していた。焼土と炭化材との関係から、建物の上屋構造は土葺き屋根と推定でき、焼失の際、屋根の土が建物の建築材を蒸し焼きする状況となり、屋根の下敷きとなった炭化材が良好な状態で残存したと考える。なお、炭化材の樹種同定の結果、建築材として一般に用いられるクリーシイ属であることがわかった。

また、建物の壁面は全体に熱を被るが、とくに北西隅付近で強く被熱することから、この付近が最も強く熱を受けたと考える。このことから、焼失時に南東側が風上方向（入口か）であったことに加え、この付近で日常的に火を使用していた可能性がある。

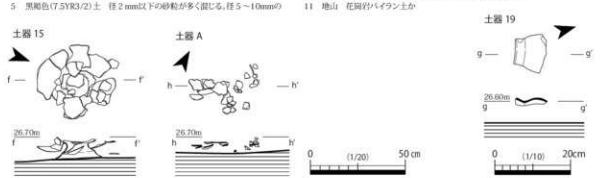
出土遺物は、埋土から弥生土器の壺（1）・壺または甕（3）・支脚（6）、砥石（7）、石鏃（9・10）、床面から弥生土器のミニチュア鉢（5）、台石（8）、石鏃（11）、剥片（12）、鉄鏃（13）、壁溝から弥生土器の甕（2）・壺または鉢（4）、不明鉄製品（14）がそれぞれ出土した。遺物は少なく、完形品は出土していないことから、建物焼失時に生活道具を屋外へ運び出した可能性がある。1 は複合口縁壺で、複合口縁部は強く内傾し、波状文と沈線を施し、長い頸部をもつと推定する。弥生時代後期中葉～後葉に比定する。2 の甕は、口縁部をくの字状に折り曲げ、肩部の張りが弱く、底部が凸レンズ状になる。3 は壺または甕で、底部が凸レンズ状で底面に植物圧痕を残す。2 と 3 は弥生時代後期後葉～終末期に比定する。6 は支脚の受け部である。7 は凝灰岩製で、3 面に擦痕を残し、両面中央は赤黒く変色する。8 は花崗岩製で、表面中央に敲打痕、その周辺及び側面に擦痕を残す。9 ～ 11 はいずれも凹基無茎式の石鏃で、9 は泥質片麻岩製と推定、10 は安山岩製、11 は姫島産黒曜石製である。13 は有茎柳葉形の鉄鏃である。

出土遺物から、遺構の時期は、弥生時代後期中葉～終末期と考える。なお、出土炭化材の放射性

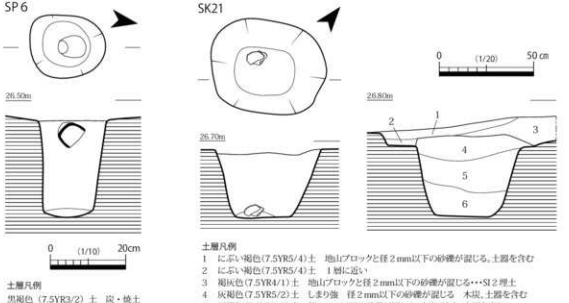


土層凡例

1 黄橙色(7.5YR7/8)土　径10mm以下の礫・砂粒が多く混じる。地山ブロックが混じる。土器片を含む
2 灰褐色(7.5YR6/2)粘質土　7層土の小ブロック,径３mm以下の砂粒が混じる。新しい時期の柱穴
3 褐灰色(7.5YR5/1)粘質土　7層土の小ブロックが混じる。土器片を含む。新しい時期の柱穴
4 暗褐色(7.5YR3/3)土　径10mm以下の礫が混じる。径２mm以下の砂粒が多く混じる。土器片含む
5 黒褐色(7.5YR3/2)土　径２mm以下の砂粒が多く混じる。径５～10mmの礫が混じる。遺物を多く含む
6 黒褐色(5YR3/1)土　径２mm以下の礫・砂粒が混じる
7 褐色土(7.5YR4/3)土　径５mm以下の礫・砂粒が多く混じる。遺物包含
8 暗褐色(7.5YR3/4)土　径10mm以下の礫・砂粒が多く混じる。遺物・炭化物(礫小)を含む
9 黒褐色(7.5YR3/2)土　径10mm以下の礫が混じる。径２mm以下の砂粒が多く混じる。土器の検細片を含む
10 褐色(7.5YR4/6)土　径１mm以下の礫・砂粒が多く混じる
11 地山　花崗岩バイラン土か



第 11 図　SI 2 実測図



第 12 図　SI 2内 SP 6・SK21 実測図

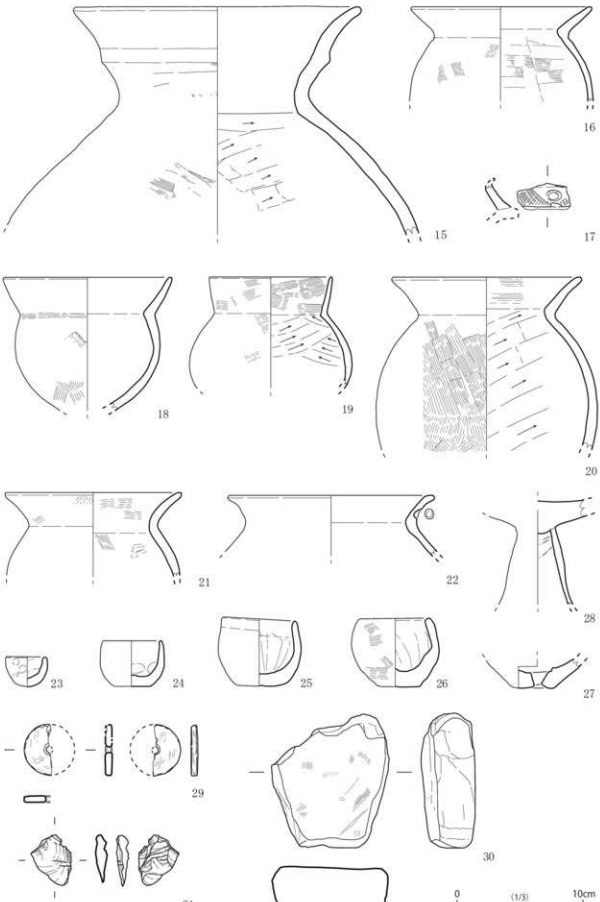
炭素年代測定（AMS 法）の結果、暦年較正年代（２δ）は AD128 ～ AD238 の年代値が示されており、遺物の年代と整合する。

SI 2（第 11 ～ 13 図　図版 11・12・15・16）

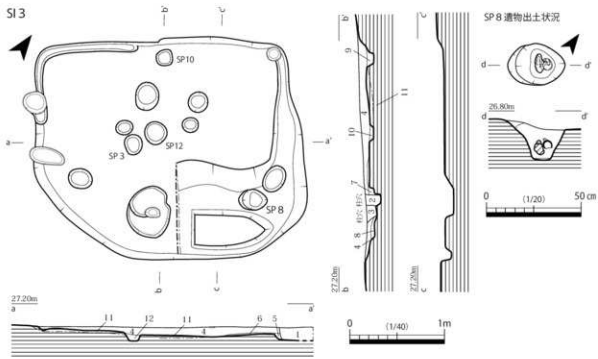
調査区中央東寄りの、F 3・G 3 グリッドに位置し、北側を SI 1 と隣接する。平面形は隅丸方形の竪穴建物である。南東側は後世の削平を受け残存しないが、規模は東西が 5.24m、南北が推定で 4.50m である。検出面での標高は 26.60 ～ 26.85m、検出面から床面までの深さが最深で 0.33m を測る。主軸方向は N38°W である。壁溝は北西側と、北東・南西両側の一部に残存しており、幅が 20cm、深さが 5 cm 前後を測る。主柱穴や中央土坑など、建物の要となる遺構は見当たらないが、南東部中央で土坑 SK21 を確認した。

埋土は、1 層の黄橙色土が後世の流入土、2・3 層の灰褐色系粘質土が後世の柱穴埋土で、それらを除き、建物埋土は 7 つの層から構成される。どれも 1 ～ 10mm 程度の礫・砂粒が多く混じり、比較的粗い埋土による堆積である。暗褐色土（4 層）と、遺物を多く含む黒褐色土（5・6 層）を主体とする。壁際に褐色土（7 層）と暗褐色土（8 層）が緩やかに堆積し、その上に 4・5 層が堆積する。堆積状況から、壁際付近が埋没した後、一定期間をおいて、主体となる 4・5 層が埋没したと考える。壁溝埋土は、土器細片を含む黒褐色土（9 層）と褐色土（10 層）からなる。

遺物は、埋土から弥生土器または土師器の壺（15・17 ～ 19）・甕（16・20 ～ 22）・ミニチュア鉢（23 ～ 26）・甑（27）・高杯（28）、石製紡錘車（29）、砥石（30）、剥片（31）が出土した。15 は口径が 22.5cm の大型二重口縁壺で、胴部下半～底部は欠損する。建物中央北西寄りで上下逆さの状態で出土しており、何らかの意図をもって据えられたとみられる。古墳時代前期後半～中期後半に比定する。17 は複合口縁壺の口縁部で、口縁端部が短く跳ね上がると推定する。竹管文と斜格子鋸歯文を施す。弥生時代後期中葉に比定する。18・19 は小型丸底壺で、いずれも胴部が球形に張る。18 は口縁が内湾気味に開き、19 は口縁が直立する。古墳時代初頭に比定する。16・20 ～ 22 は、

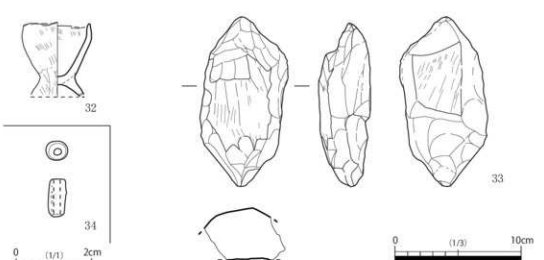


第 13 図　SI 2 出土遺物実測図



土層凡例

1 褐色(7.5YR4/4)土　砂礫が混じる…新しい時期の遺構
2 黒褐色(7.5YR3/2)土　炭粒、焼土粒が少し混じる…新しい時期の柱穴
3 暗褐色(7.5YR3/3)土　地山との混淆土。木炭と焼土ブロックが少し混じる…新しい時期の柱穴
4 黒褐色(7.5YR3/2)土　径1cm以下の地山ブロックと木炭が多く混じる
5 黒褐色(7.5YR3/3)土　粘性やや強
6 褐色(7.5YR4/3)土　粘性やや強　地山との混淆土。砂礫が多く混じる
7 暗褐色(7.5YR3/2)土　地山との混淆土。焼土ブロックが少し混じる
8 褐色(7.5YR4/4)土　地山との混淆土
9 暗褐色(7.5YR3/2)シルト質土　地山との混淆土。木炭が少し混じる…SP10埋土
10 黒褐色(7.5YR3/2)土　粘性やや強　木炭が少し混じる…SP12埋土
11 明褐色(7.5YR5/6)土　地山
12 黒褐色(7.5YR3/2)土…SP3埋土



第14図　SI 3及び出土遺物実測図

く字状に大きく外反する口縁をもつ甕で、22の口縁部には無貫通の穿孔が残る。20は、外面胴部と内面口縁部にハケ目、内面胴部にケズリ等、明瞭な調整痕を残す。古墳時代前期に比定する。23～26はいずれも手づくね成形のミニチュア鉢である。23のみわずかに丸底で、他は平底を呈する。27は甑の底部で、中央の穿孔は内面から施し、その隣に誤穿孔痕がみられる。28は高杯の脚部で、内部が中空である。29は角閃石安山岩製の紡錘車で、周南市四熊ヶ岳産と推定する。直径が4cm

程の小型品である。30は珪質片麻岩製の砥石である。表面のみに使用痕がみられる。31は姫島産黒曜石の剥片である。

建物の形状や出土遺物から、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期と考える。

SK21（第12図　図版12）

竪穴建物SI 2内の南東隅中央付近に位置する。平面形が楕円形に近く、断面形が逆台形状を呈する土坑である。検出面での標高は26.66 mである。規模は、長径が62cm、短径が49cm、深さが36cmを測る。主軸方向はN53° Eである。

埋土は3層からなり、砂礫混じりの灰褐色または黒褐色土を主体とする。4・5層で木炭、5層で焼土を含む。SI 2埋土の下及び床面から掘り込まれるため、SI 2に伴うか、SI 2以前に掘り込まれたと考える。

遺物は、床面から土師器片が出土したが、図化できなかった。遺構の時期は、SI 2との関係から弥生時代終末期～古墳時代初頭と考える。遺構の性格は、SI 2に伴うとすれば、中央土坑に類似する機能をもつ可能性がある。

SI 3（第14図　図版13・16）

調査区北東側のG 1グリットに位置し、SI 5の東側に隣接する。平面形は北西半分が方形で、南東半分が円形に近い竪穴建物である。規模は、長軸が3.82 m、短軸が2.35 m、検出面から床面までの深さが最深で0.10 mを測り、検出面での標高は26.92 ～ 27.02 mである。壁溝は北西隅付近で確認し、幅が8 ～ 10cm、深さが3 cmを測る。主柱穴は不明である。建物埋土はほぼ単層で、地山ブロックと木炭が多く混じる黒褐色土（4層）を主体とする。

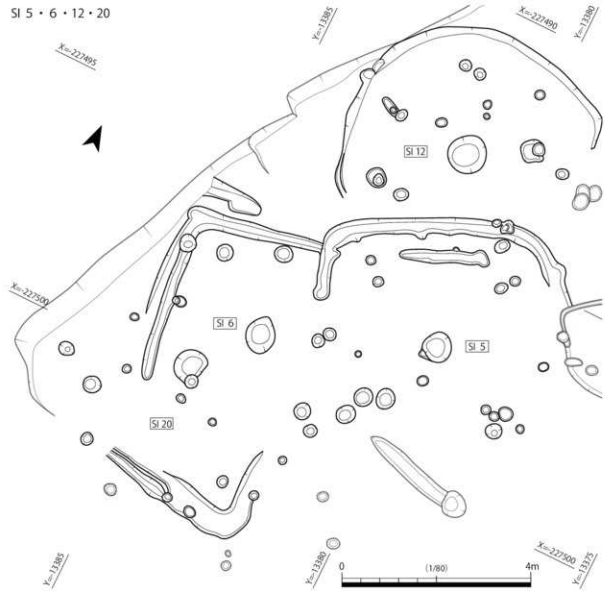
建物の南東側では、建物の北東壁沿いから溝状につながる不整形の掘り込みを確認した。建物の中央より南西側、または建物外の北東側に延びるかどうかは不明である。この溝の埋土（1層）は、砂礫混じりの褐色土で、建物埋土を壊すことから、別の遺構と考える。この遺構の南東部分での規模は、北東－南西方向が140cm、北西－南東方向が105cmで、深さは最深で14cmを測る。遺構の床面からは、柱穴SP 8を検出した。柱穴の規模は、長径が30cm、短径が22cmで、深さが17cmを測る。SI 3に伴う可能性が高い。

遺物は、SP 8の埋土から弥生土器のミニチュア鉢（32）と石斧未成品（33）、SI 3の埋土からガラス製管玉（34）が出土した。32は、半卵形の鉢に中空の脚が付く。33は凝灰岩製で、板状工具による使用痕がみられる。

遺構の時期は、周辺遺構との関係から弥生時代後期と考える。遺構の性格は不明であり、住居跡とは考えにくい。

SI 5・6・12・20（第15図　図版17）

調査区北側のF 1・2・G 1グリッドに位置する。北から南に向けて低くなる緩い傾斜面上に4棟の竪穴建物が重複した状態で検出した。検出面の標高が27.0 ～ 27.6mと、調査区の中で最も高い地点の一つである。SI20を除く建物の南～南東側は、建物同士の重複や、後世の削平などにより残存していない。建物の平面形は、SI12のみが円形で、他は隅丸方形と推定する。建物の形状や重複関係から、SI12が最も古く、SI20 → SI 6 → SI 5の順で築かれると考える。

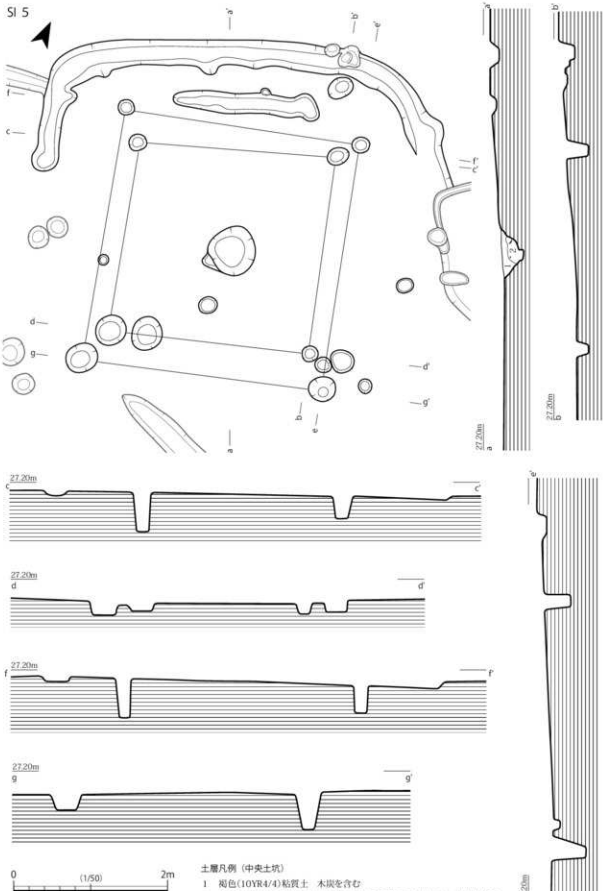


第 15 図　SI 5・6・12・20 配置図

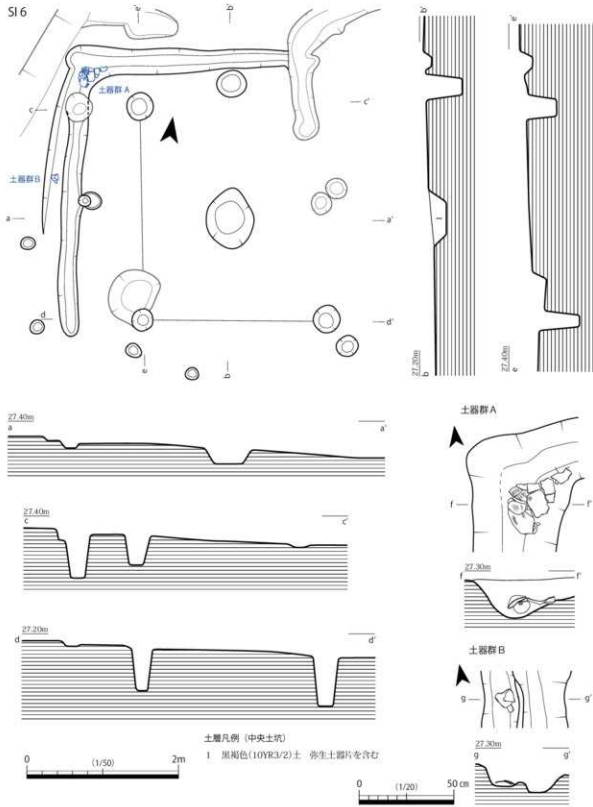
SI 5（第 16 図　図版 18・19）

主柱穴や壁溝の位置から 1 度の建て替えが認められる。壁溝をもとに建物の規模をみると、外側の 2 次建物は東西が 5.42m、南北が 4.60m 以上であり、内側の 1 次建物は、南北が 3.50 m以上である。検出面の標高は 27.02 ～ 27.14 mで、検出面から床面までの深さは最深で 0.24 mを測る。主軸方向は、1 次建物が N21°Wで、2 次建物が N17°Wである。1 次建物の壁溝は、幅が 30 ～ 38cm、深さが最深で 9 cm を測る。主柱穴は、1 次・2 次建物ともに 4 個あり、直径が 21 ～ 40cm、深さが 14 ～ 52cm を測る。柱間間隔は、1 次建物がほぼ 260cm の等間隔で、2 次建物が北西隅の柱穴から時計回りに 311cm、330cm、318cm、338cm を測る。中央土坑は、平面形が円形で、直径が 63cm、深さが 24cm を測る。埋土は 2 層からなり、1 層が木炭を含む褐色粘質土、2 層がにぶい黄褐色粘質土で橙色粘土ブロックが混じる。

出土遺物は、弥生土器の甕・鉢等の小片のみで図化できなかった。遺構の時期は、遺構の形状や周辺遺構との関係から、弥生時代後期後葉～終末期と考える。


SI 5
27.20m
土層凡例（中央土坑）
1　褐色(10YR4/4)粘質土　木炭を含む
2　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土　橙色(7.5YR6/8)粘土ブロックが混じる
0
(1/50)
2m

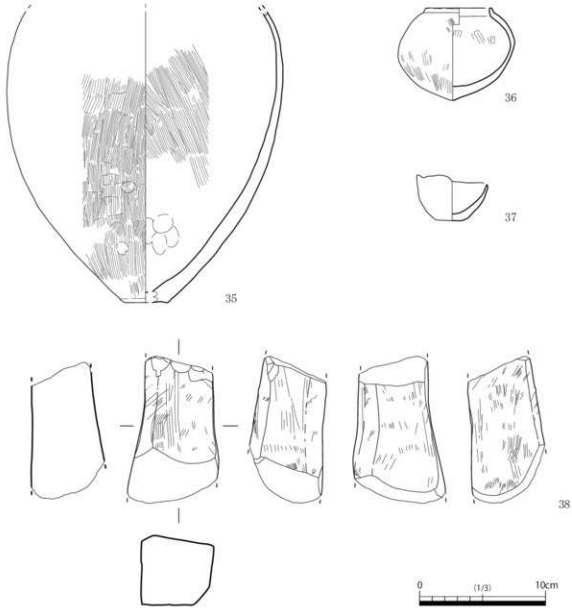
第 16 図　SI 5 実測図



第 17 図　SI 6 実測図

SI 6（第 17・18 図　図版 18 ～ 20・23）

建物の東側を SI 5 に壊され、南側を削平により失う。建物の北側と東側に残る壁溝の状況から、一辺の長さが東西で 3.30m 以上、南北で 3.86m 以上と推定する。主軸方向は N 6 °W である。検出面での標高は 27.15 ～ 27.26 m で、検出面から床面までの深さは最深で 0.23 m である。壁溝は、



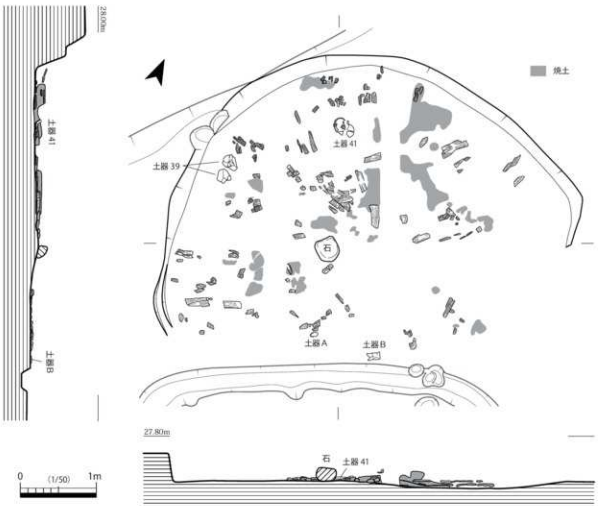
第 18 図　SI 6 出土遺物実測図

幅が 20 ～ 32cm、深さが最深で 17cm を測る。壁溝の西側の一部は二本に分かれており、作り替えの可能性もある。主柱穴は、北東隅を除く 3 個が確認できた。柱穴の直径は 27 ～ 36cm、深さが 39 ～ 64cm を測る。柱間間隔は、南北で 340cm、東西で 240cm を測る。中央土坑は、平面形が楕円形を呈し、長軸が 80cm、短軸が 63cm、深さが 23cm を測る。埋土は黒褐色土の単層で、弥生土器片を含む。

遺物は、いずれも壁溝から、弥生土器甕（35）・鉢（36）・ミニチュア鉢（37）、砥石（38）の 4 点が出土した。35 の甕は平底の径が小ぶりで、胴中位が最も張る。内外面ともにハケ目を施す。36 の鉢は、胴部が球状で、底部先端が突出し、口縁は短く内傾する。内面にミガキ、外面にハケ目を施す。38 は凝灰岩製で、両端は残存しない。4 面を丁寧に使用面として仕上げており、残存する面には擦痕がみられる。

遺構の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係から、弥生時代後期後葉～終末期と考える。

SI 12 炭・焼土検出状況



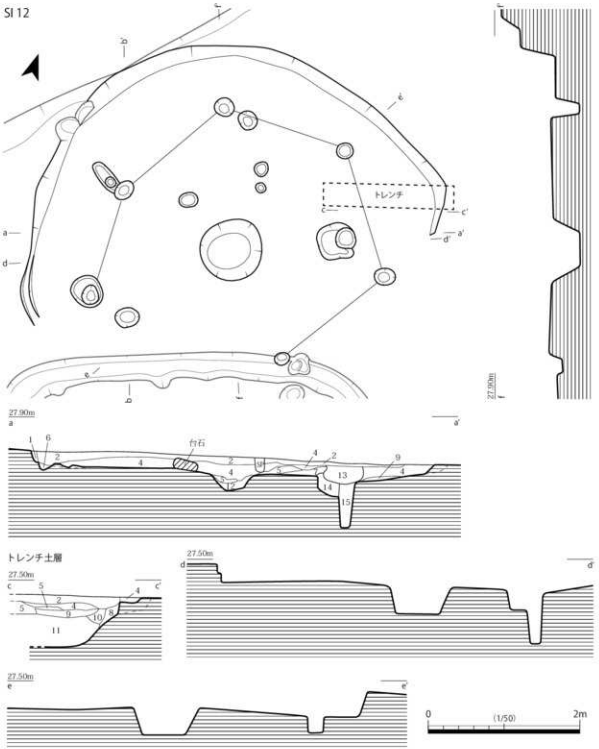
第 19 図　SI12 炭・焼土検出状況実測図

SI12（第 19・20・22 図　図版 21 ～ 24）

規模は直径が 5.30m を測る。検出面の標高は 27.16 ～ 27.60m で、検出面から床面までの深さは最深で 0.44 mである。主柱穴は 6 個あり、直径が 22 ～ 26cm、深さが 22 ～ 58cm となる。柱間間隔は、およそ 172cm と等間隔であることから、SI 5 に壊された南側に、もう 1 個の主柱穴が存在したと推定する。中央土坑は、平面形が円形を呈し、直径が 86cm、深さが 36cm を測る。

建物の埋土は、しまりの強い暗褐色～黒褐色粘質土を主体とし、下層になるほど礫に混じって、木炭や焼土を多く含む。建物全体の床面から 5 ～ 10cm 上で、炭化材と焼土を検出した。放射状に分布した炭化材の上を覆うように、焼土が厚く堆積する。樹種同定によると、炭化材はイネ科草本類であり、外壁や屋根等、家屋の建材としてよく用いられるとされ、たとえばススキなど、大型植物の可能性がある。このことから、SI12 も SI 1 と同様、焼失竪穴建物で、炭化材は焼失の際に崩れ落ちた、屋根の一部であると推定できる。

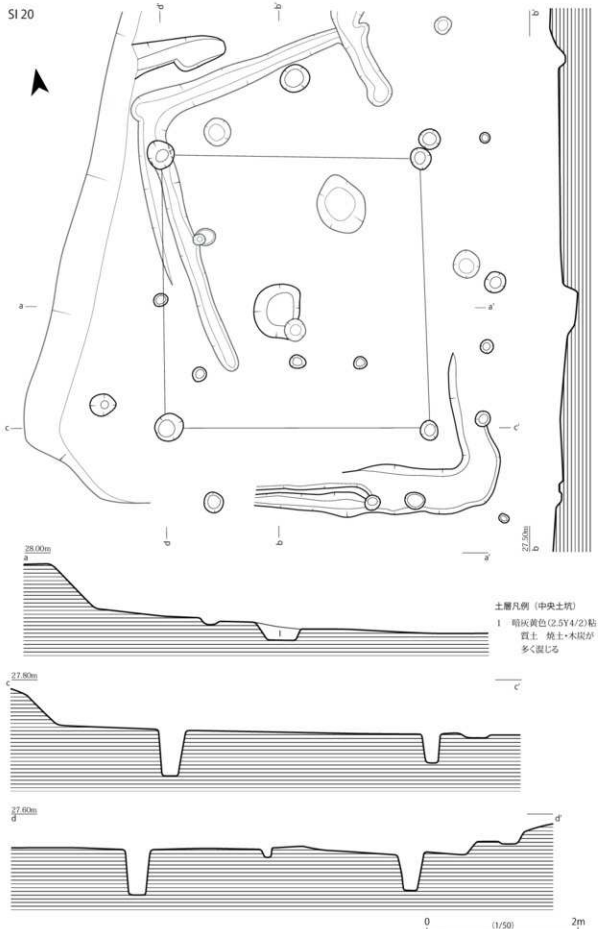
出土遺物は、39 と 41 が床面、その他が埋土からそれぞれ出土した。弥生土器の壺（39・41）・甕（40・42）・鉢（43）や、砥石（44）、台石（45）がある。39 は頸部の屈曲部に貼付突帯をもち、押圧文を施す。胴部中位が最も張り、内面をケズリで仕上げる。40 は口縁部が大きく外傾し、



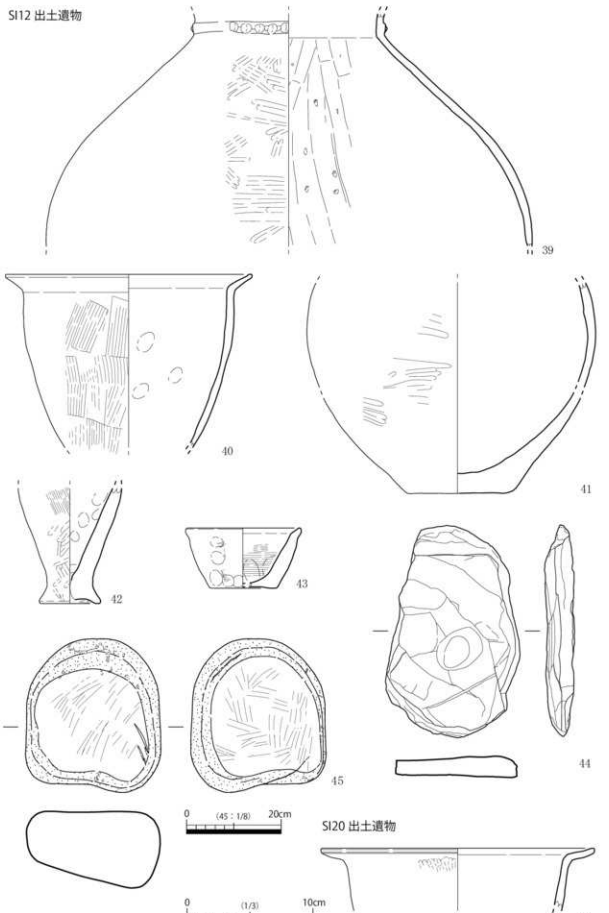
土層凡例

1 黒褐色(10YR3/2)粘質土　しまり強
2 暗褐色(10YR3/3)粘質土　しまり強　径2cm以下の礫が多く混じる
3 黒褐色(7.5YR3/2)粘質土　粘性強、しまり強　径1.5mmの礫が少し混じる
4 暗褐色(10YR3/4)粘質土　しまり強　径2mm以下の礫が多く混じる。木炭・焼土をまばらに含む
5 焼土・炭化材
6 黒褐色(10YR2/3)粘質土　粘性強、しまり強・・・斑講
7 暗褐色(10YR3/4)粘質土　4層と同質、4層より木炭の塊を多く含む
8 暗褐色(10YR3/4)粘質土　4層と同質、褐色(7.5YR4/6)の地山ブロックが混じる
9 暗褐色(7.5YR3/3)粘質土　しまり強　径1cm以下の礫がわずかに混じる・・・根成
10 暗褐色(7.5YR3/3)粘質土　しまりやや弱　9層とよく似る・・・SK埋土
11 暗褐色(7.5YR3/4)粘質土　明褐色(7.5YR5/8)ブロックが混じる。木炭を含む・・・SK埋土
12 褐色(10YR4/4)粘質土　粘性弱、しまり強　径5mm大の礫が多く混じる・・・中央土坑埋土
13 褐色土(7.5YR4/4)粘質土　しまり強　径2mm大の礫が多く混じる。木炭を少量含む・・・SK埋土
14 暗褐色(10YR3/3)粘質土　しまり強　径1mm以下の礫が混じる。木炭を含む・・・SK埋土
15 黒褐色(10YR2/3)粘質土　粘性強、しまり弱　径5mmの礫が混じる。木炭を含む・・・SP埋土

第20図　SI12実測図



第 21 図　SI20 実測図



第 22 図　SI12・20 出土遺物実測図

胴部外面に粗い柾目の原体によるハケ目がみられる。41の壺は平底で、胴部が球状を呈する。外面はミガキを施す。42の甕はやや上げ底で、長胴である。43の鉢は平底で、体部が外傾する。44は凝灰岩製で、表面のみ使用する。45は花崗岩製で、表面を研磨面とし擦痕があり、裏面には被熱痕がみられる。

遺構の時期は、出土遺物から弥生時代後期前葉と考えるが、炭化材の放射性炭素年代測定による暦年較正年代（2δ）の結果は、BC171～BC49とやや古く、齟齬がある。

SI20（第21・22図　図版20・22・24）

建物の西側約3分の1が調査区外で、中央から北東側にかけてSI 6と重複するほか、全体に削平を受ける。主柱穴と南東隅付近及び北側の壁溝から竪穴建物と認識した。検出面の標高は27.05～27.42 mで、主軸方向はN10° Eである。規模は、東西が4.50 m以上、南北が6.30 m以上で、壁溝は幅が40～60cm、深さが5 cm弱である。主柱穴は4個あり、直径が24～36cm、深さが41～60cmを測る。北西隅の主柱穴はSI 6の壁溝に壊される。中央土坑は、南東隅がSI 6の主柱穴によって壊される。平面形は楕円形を呈し、長軸が72cm、短軸が60cm、深さが19cmを測る。中央土坑の埋土は暗灰黄色粘質土で、木炭や焼土を多く含む。

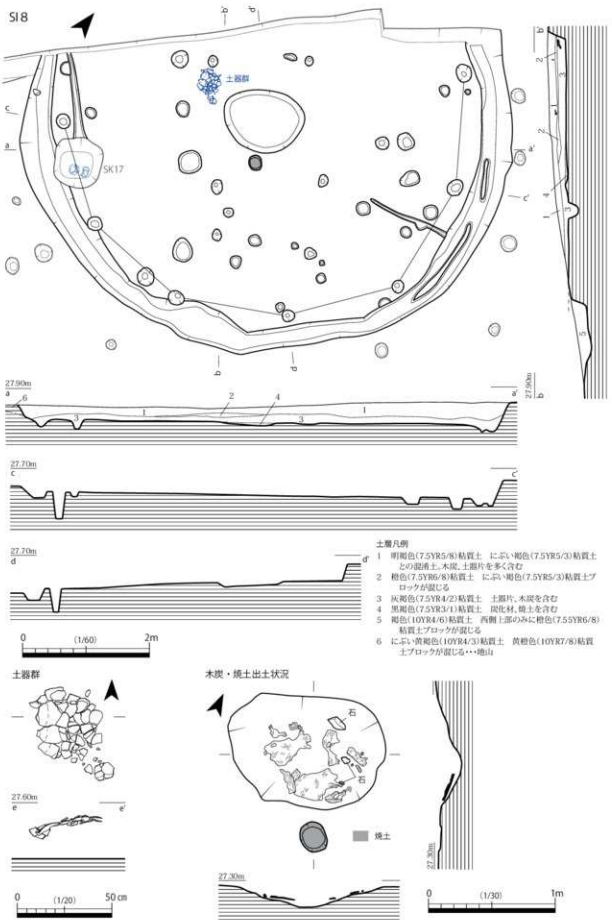
出土遺物は、弥生土器の甕（46）があり、口縁部が水平に近く、外側に折れる。遺構の時期は、出土遺物やSI 6との切り合い関係から、弥生時代後期後葉と考える。

SI 8（第23～25図　図版25・27・28）

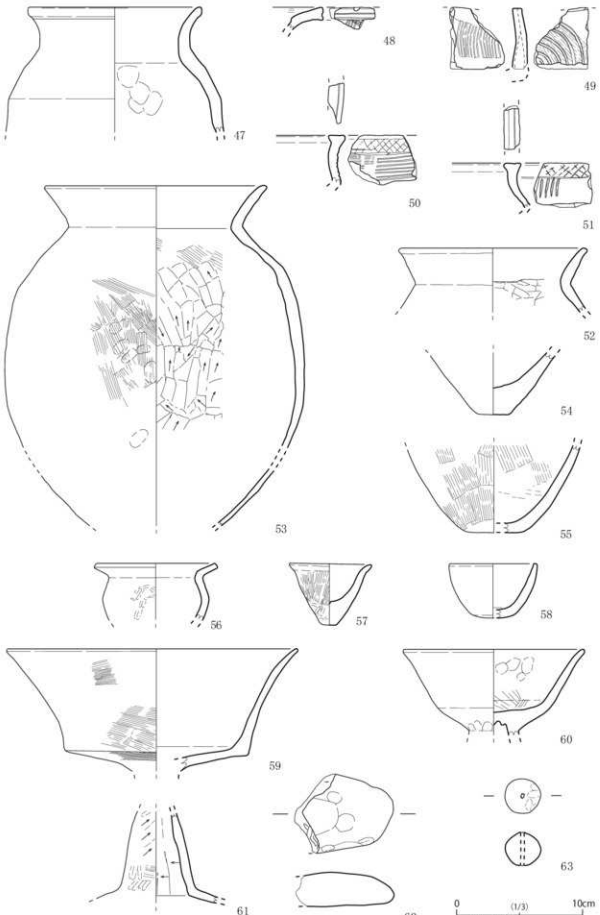
調査区中央北西壁沿いの、C 4・D 4グリッドに位置する。北西から南東に向かって低くなる緩やかな傾斜面上にある。検出面の標高は、27.1～27.7mである。建物の北西部分約3分の1は調査区外である。規模は、直径が7.74mで、検出面から床面までの深さは最深で0.35 mである。建物内の周囲を壁溝が廻る。壁溝の幅は20～60cm、深さが最深で10cmとなる。主柱穴は7個を確認した。主柱穴の直径は20～25cm、深さが17～65cmを測る。柱間間隔は180cmとほぼ等間隔である。中央土坑は平面形が楕円形で、長軸が130cm、短軸が100cmを測り、断面形は浅い皿状で、深さが最深で22cmを測る。

建物の埋土は4層からなり、1・3層で木炭と土器片、4層で木炭と焼土を含む。1層は明褐色粘質土、2層が橙色粘質土で、いずれもにぶい褐色粘質土のブロックが混じる。3層は灰褐色粘質土、4層は黒褐色粘質土である。主柱穴の埋土は黒褐色～暗褐色土を主体とし、焼土や木炭を含むものも点在する。中央土坑の埋土は黒褐色粘質土で、床面から炭化材を検出した。中央土坑から出土した炭化材の樹種同定の結果はマツ属複維管束亜属で、人家付近によく生息し、燃料材として多く使用される。中央土坑の南東側に隣接する柱穴は焼土を埋土としており、中央土坑と関係する可能性がある。

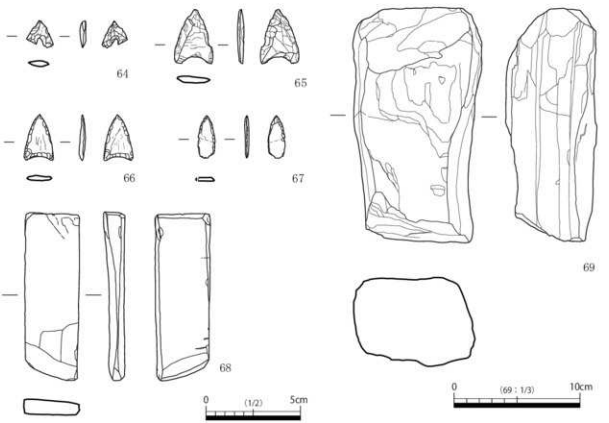
遺物はいずれも埋土から、弥生土器の壺（47・49～51）・器台か（48）・甕（52～55）・ミニチュア鉢（56～58）・高杯（59～61）・支脚（62）、土錘（63）、石鏃（64～67）、砥石（68・69）が出土した。47は口縁が緩く外反し、端部外面を面取りする。肩部の張りは弱い。48は器台の口縁部と考える。大きく開いて、面取りした端部に沈線を施す。口縁下には斜格子上の文様がみられる。49～51は複合口縁壺の口縁部で、直立またはやや内傾する。49は内外面に数条の半円を重


SI 8
土器群
SK17
27.90m
27.70m
27.60m
27.30m
0 (1/60) 2m
0 (1/20) 50cm
0 (1/30) 1m
土器群
木炭・焼土出土状況
焼土
石
土層凡例
1 明褐色(7.5YR5/8)粘質土 にぶい褐色(7.5YR5/3)粘質土との混淆土、木炭、土器片を多く含む
2 橙色(7.5YR6/8)粘質土 にぶい褐色(7.5YR5/3)粘質土ブロックが混じる
3 灰褐色(7.5YR4/2)粘質土 土器片、木炭を含む
4 黒褐色(7.5YR3/1)粘質土 炭化材、焼土を含む
5 褐色(10YR4/6)粘質土 西側上部のみに橙色(7.5YR6/8)粘質土ブロックが混じる
6 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土 黄橙色(10YR7/8)粘質土ブロックが混じる・・・地山

第 23 図　SI 8 実測図



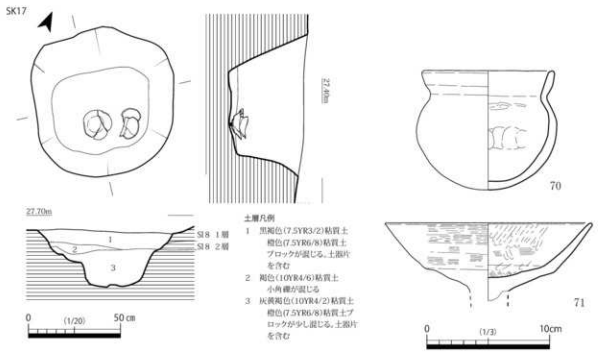
第 24 図　SI 8 出土遺物実測図（1）



第 25 図　SI 8出土遺物実測図（2）

ねた文様を入れる。50・51 はいずれも口縁端部の上面を面取りし、その上に擬凹線を入れる。外面には斜格子文の下に、ヨコまたはタテ方向に 5 ～ 8 条の凹線文を施す。同一個体の可能性がある。52・53 の甕は、口縁がく字状に屈曲し、胴部内面にケズリを施す。後期後半に比定する。54・55 は平底の甕である。54 は底径が 2.4cm と小さい。55 は内外面ともにハケ目を施す。56 は口縁がく字状に屈曲し、胴部は球形を呈する。外面に丁寧なミガキを施す。57 は厚手の底部から大きく開き、口縁部がわずかに外側に折れる。58 の底部はやや丸みを帯び、体部が内湾気味に立ち上がる。59・60 は高杯の杯部で、59 は底部と体部の境に明瞭な稜があり、口縁に向かって大きく外反する。60 は底部と体部の境が緩やかで、口縁は外傾する。内外面に丹塗り痕がみられる。59 は弥生終末～古墳前期、60 は古墳前期～中期前半に比定する。61 は高杯の脚部で、下方に向けてやや開き、端部付近で屈曲し、水平に近く広がる。内面は中空で、ヘラケズリで仕上げる。62 は支脚の翼状の受け部である。63 は球状の土錘で、最大径が 2.8cm、紐通し孔の径は 0.3cm である。ミガキで丁寧に仕上げている。64 ～ 66 は凹基無茎式の石鏃である。64 は石英製であり、他は泥質片麻岩製と推定する。64 の抉りは大きい。67 は円基無茎式の石鏃で、泥質片岩製である。68・69 の砥石のうち、68 はきめ細かく滑らかな表面をしており、別名「青砥石」と呼ばれる。凝灰岩製である。69 は重さ 2kg を超える大型品で、砂質片岩製である。表面及び両側面に使用痕が認められる。

遺構の時期は、遺構の形状や出土遺物から弥生時代後期後葉～終末期と考える。中央土坑から出土した炭化材の放射性炭素年代測定の結果、暦年較正年代（2δ）は 2 世紀前半～ 3 世紀半頃（AD129 ～ AD248）であり、遺物の年代と整合する。



第 26 図　SK17 及び出土遺物実測図

SK17（第 26 図　図版 25・29）

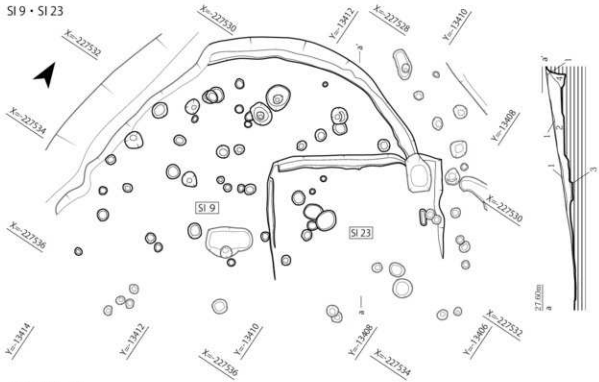
SI 8 内の北西壁付近に位置し、SI 8 の壁溝の一部を壊す。平面形は隅丸方形を呈し、長さが 80cm、幅が 75cm、深さが 40cm を測る。埋土は 3 層からなり、1 層は黒褐色粘質土、2 層は小礫が混じる褐色粘質土、3 層は灰黄褐色粘質土で、3 層が埋土の半分を占める。1 層と 3 層には橙色粘質土ブロックが混じり、土器片を含む。遺構南半の底面には、土師器の小型丸底壺（70）と高杯（71）が出土した。前者は縦断に真っ二つに割られた状態で、後者は脚部のない状態で、それぞれ置かれており、何らかの儀礼を行った可能性が高い。遺構の時期は、出土遺物から古墳時代中期前半に比定する。SI 8 の廃絶及び埋没後、埋土の上から掘り込まれた土坑と考える。

SI 9・23（第 27 図　図版 26）

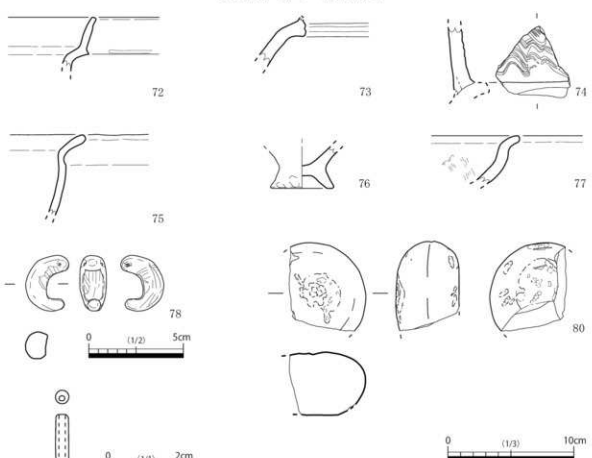
調査区中央北西壁沿いの C 4・5・D 4・5 グリッドに位置し、北東側に SI 8 が隣接する。検出面での標高は 26.95 ～ 27.60m である。SI 9 の平面形が円形、SI23 が方形の竪穴建物で、SI23 が SI 9 を壊すことから、SI 9 → SI23 の順で築かれたと推定する。どちらも建物の南西側が後世の削平を受けている。

SI 9（第 28・29 図　図版 26・29）

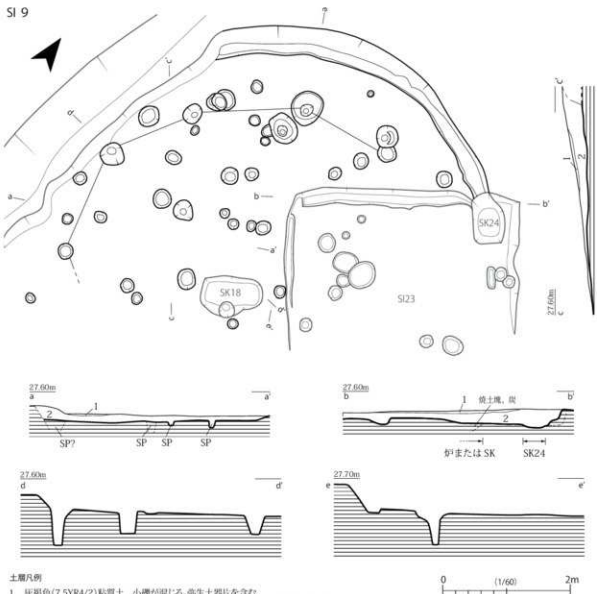
建物の西端は調査区外で、南東半分は SI23 や SK24 が重複するほか、後世の削平を受けるため、規模は明瞭ではない。最も残る箇所における残存長は 6.90 m であるが、北側壁面や主柱穴の配置等から、直径は 7.50 m程度になると推定する。検出面から床面までの深さは最深で 0.50 mを測る。SI 8 と同様、建物内側の壁面に沿って、幅が 25 ～ 50cm、深さが 5 ～ 10cm の壁溝が廻る。主柱穴は 5 個を確認でき、規模は直径が 25 ～ 50cm、深さが 16 ～ 59cm である。柱間間隔は 145cm または 175cm を測る。建物中央付近には土坑 SK18 が存在するが、SI 9 の中央土坑であったかど



第 27 図　SI 9・23 配置図



第 28 図　SI 9 出土遺物実測図

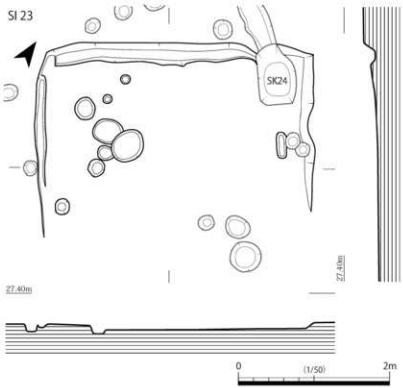


第 29 図　SI 9 実測図

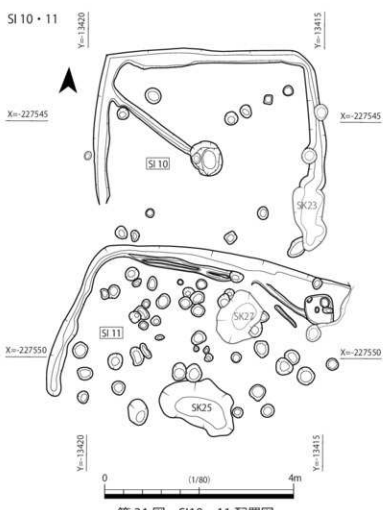
うかは不明である。

建物埋土は 2 層からなり、1 層が小礫混じりの灰褐色粘質土、主体となる 2 層は褐色粘質土に橙色粘質土ブロックが混じる。いずれも弥生土器片を含む。傾斜面に位置するため、1 層の大部分は流出したと考えられ、薄く堆積するのみである。主柱穴の埋土は、黒褐色土を主体とし、褐色の地山ブロックを混入するものが多い。なお、埋土掘削の当初、SX 1 として遺物を取り上げたが、複数の遺構の遺物を含むと想定されるため、SX 1 とラベルのあるものは「土坑等出土遺物」(79 頁) の中で報告する。

遺物は、いずれも埋土から、弥生土器の壺 (73・74)・甕 (72・75・76)・鉢 (77)、土製勾玉 (78)、管玉 (79)、凹石 (80) が出土した。72 は山陰系の複合口縁甕の口縁部で、口縁部がやや外傾気味に立ち上がる。古墳初頭に比定する。73 は口縁部がわずかに外側に屈曲し、端部に 2 条の擬凹線文をもつ。弥生後期前葉に比定する。74 は複合口縁壺の口縁部で、外面に櫛描きによる波状文を施す。弥生後期中葉に比定する。75 は口縁部が緩く外反する甕である。76 は上げ底で、端部に向けてハの字に開く。底部と体部の境は緩やかにくびれ、体部が開く。77 は口縁部がわずかに外



第 30 図　SI23 実測図



第 31 図　SI10・11 配置図

反する鉢である。76・77 は弥生後期前葉に比定する。78 の勾玉は三日月状を呈し、最大長が 2.9cm、最大幅が 1.1cm で、頭部に紐通し孔を穿つ。ナデにより丁寧に仕上げる。79 の管玉は長さが 1.50cm、直径が 0.35cm で、碧玉製である。両面穿孔である。80 の表面中央には敲打痕を多く残す。

遺構の時期は、出土遺物の年代にバラつきがあるが、遺構の形状や周辺遺構との関係からみて、弥生時代後期前葉～中葉と考える。

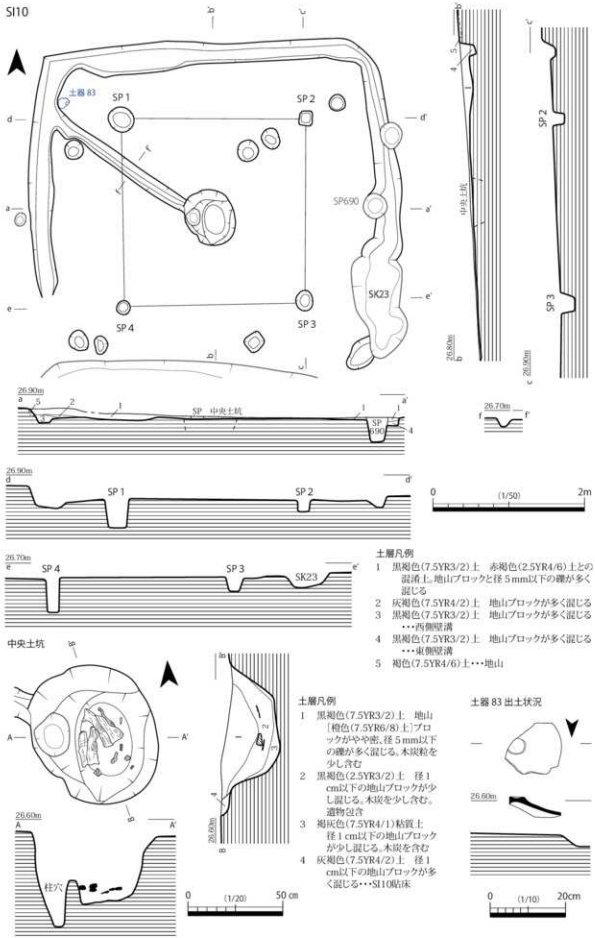
SI23（第 30 図　図版 26）

規模は東西が 3.70 m、南北が 2.60 m以上で、検出面から床面までの深さは最深で 0.20 mを測る。主軸方向は N34°Wである。壁溝は、建物の北側と西側に確認しており、幅が 15 ～ 30cm、深さが最深で 7 cmを測る。主柱穴は確認できない。建物の北隅を土坑 SK24 に壊される。

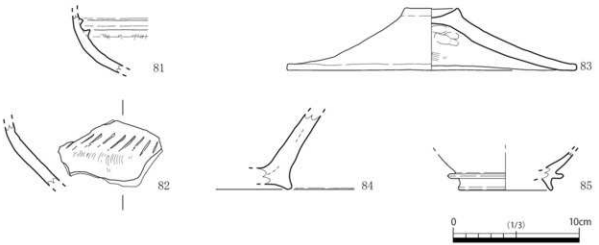
遺物は出土していないが、遺構の形状や SI 9 との関係からみて、古墳時代初頭と考える。

SI10・11（第 31 図　図版 31）

調査区南西側のＢ６・７・Ｃ６・７グリットに位置する、いずれも方形の竪穴建



第 32 図　SI10 実測図



第 33 図　SI10 出土遺物実測図

物である。南北方向に緩やかに傾斜する立地であり、検出面での標高は 26.42 ～ 26.73 mである。SI10 南側の壁溝を壊してSI11 が築かれていた。SI11 の東側と南側も後世の削平のため残存していなかった。両建物の重複関係から、SI10 → SI11 の先後関係を考える。

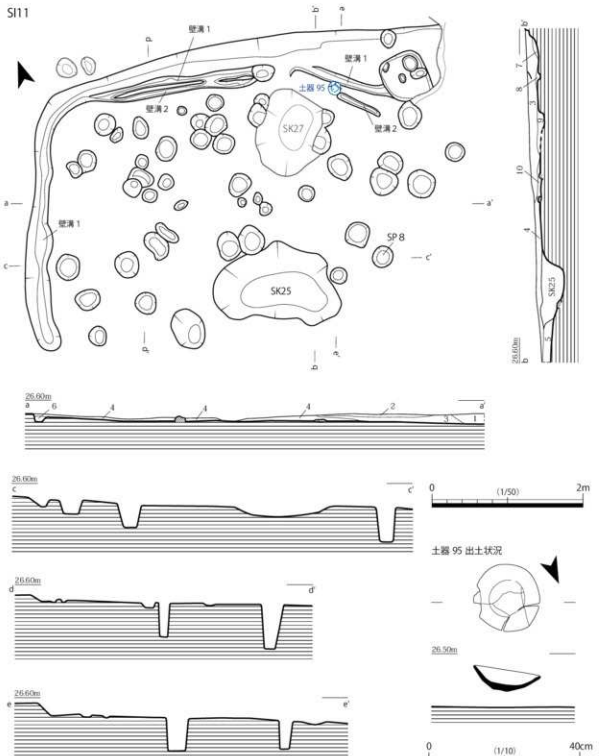
SI10（第 32・33 図　図版 30・32）

規模は、東西が 4.92 m、南北が 4.44 m以上で、検出面から床面までの深さは最深で 0.20 mを測る。主軸方向は南北方向である。壁溝は、北側と東西両側の３分の２程度を確認できた。壁溝の幅は７～ 42cm、深さは８～ 10cm を測る。主柱穴は４個あり、直径が 18 ～ 35cm、深さが 16cm ～ 47cm を測る。柱間間隔は、SP １から時計回りに 244cm、242cm、240cm、248cm を測る。中央土坑は平面形が南北に長い楕円形で、断面形が逆台形状を呈する。規模は、長軸が 74cm、短軸が 66cm、深さが最深で 32cm を測る。中央土坑から北西方向に延び、壁溝につながる溝を確認した。この溝の長さは 202cm、幅は 20cm、深さは 12cm を測る。

建物の埋土はほぼ単層で、地山ブロックが混じる黒褐色土と赤褐色土の混淆土を主体とする。壁溝埋土は地山ブロック混じりの黒褐色土である。中央土坑は３層からなり、１・２層は地山ブロック混じりの黒褐色土層で、２層では炭化材を良好な状態で確認した。３層は褐灰色粘質土である。中央土坑から出土した木炭の樹種同定及び年代測定試料の樹種は、いずれもサクラ属であり、遺跡周辺で採取でき、燃料材として使用されたと推定する。

遺物は、埋土から弥生土器の壺（81・82）・蓋（83）・甕（84）、土師器の椀（85）が出土した。85 は流れ込みによると考える。81 と 82 は、いずれも壺の胴部上位から頸部付近の破片で、前者は断面三角形の突帯を２条廻らせ、後者は刺突文を施す。83 は、甕とセットとなる蓋で、ハ字状に開き、天井部が凹む。84 は甕の底部で、外底面が凹レンズ状になる。81 ～ 84 はいずれも弥生中期後半に比定する。85 の土師器椀は、ハ字状に開く細い高台をもち、体部と高台の境に細い突帯が廻る。托の模倣品と考える。平安後期に比定する。

出土遺物は弥生時代中期後半と考えるが、中央土坑から出土した木炭の放射性炭素年代測定（AMS 法）の結果、暦年較正年代（２δ）は AD84 ～ AD222 の年代値を示した。遺構の形状からみても、



土層凡例

SI11 埋土

1 褐灰色(10YR5/1)土　大小礫が多く混じる…客土
2 褐灰色(7.5YR6/1)土　橙色(7.5YR6/6)土が多く、径5mm以下の礫が少し混じる
3 褐灰色(7.5YR5/1)土　橙色(7.5YR6/6)土との混浦土、径2cm以下の礫が多く混じる
4 褐灰色(7.5YR6/1)土　地山ブロックが多く混じる、径10cm大の礫が混じる
5 褐灰色(7.5YR4/1)土　砂礫が多く混じる、焼土を少し含む

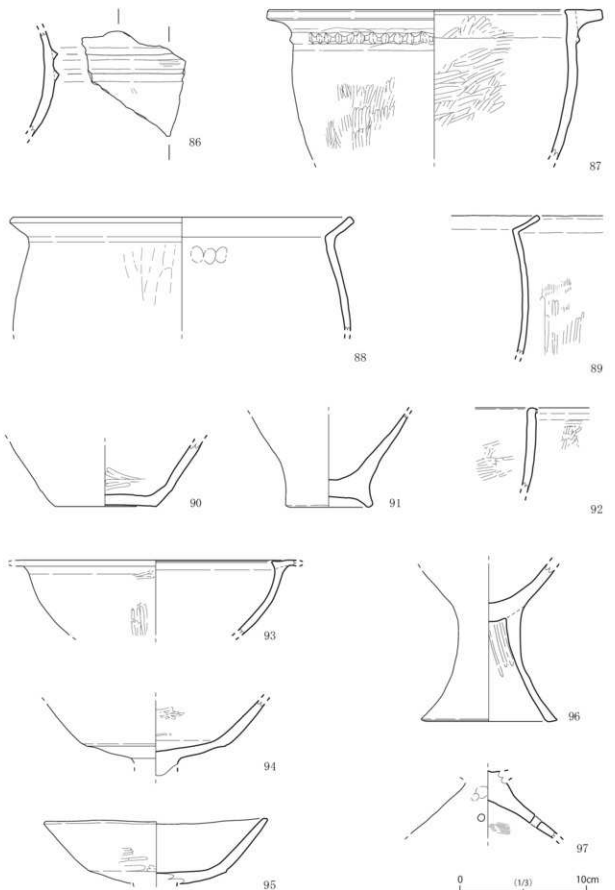
壁溝1 埋土

6 灰褐色(7.5YR4/2)土　砂礫が少し混じる、焼土を少し含む
7 灰褐色(7.5YR4/2)土　砂礫が少し混じる、焼土を少し含む

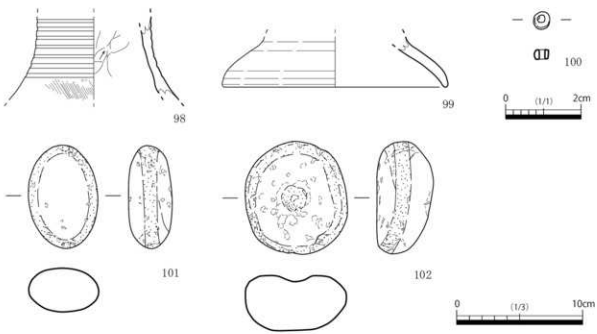
壁溝2 埋土

8 灰褐色(7.5YR4/2)土　地山[明黄褐色(10YR7/6)土]ブロックが多く混じる
9 黒褐色(7.5YR3/2)土　径5mm以下の礫が少し混じる、焼土を少し含む
10 褐灰色(7.5YR6/1)土　地山ブロックが多く混じる

第34図　SI11実測図



第 35 図　SI11 出土遺物実測図（1）



第 36 図　SI11 出土遺物実測図（2）

弥生時代後期の範疇で捉えるのが穏当と考える。

SI11（第 34 ～ 36 図　図版 31 ～ 33）

建物の東側と西側が残存しないが、規模は、一辺の長さが東西で 4.70 m以上、南北で 3.40 m以上、検出面から床面までの深さは最深で 0.18 mを測る。主軸方向は N21° E である。壁溝は、西側と北側で確認でき、西側での幅は 15 ～ 35cm、深さは 8 ～ 10cm を測る。北側は内外 2 条が確認でき、幅は外側で 8 ～ 14cm、内側で 8 ～ 10cm、深さはいずれも 5 cm 程度である。後世の多数の柱穴が建物内を掘り込むため、主柱穴は特定できない。中央土坑も不明であるが、土坑 SK25 が相当する可能性がある。建物の埋土は、北東側で 3 層、その他は 4 層を主体とし、3 層が褐灰色土と橙色土との混淆土、4 層が地山ブロック混じりの褐灰色土で、いずれも礫を多く含む。壁溝埋土は砂礫や地山ブロックが混じる灰褐色土である。SP 8 から出土した木炭の樹種同定及び年代測定試料の樹種は、それぞれクリ－シイ属と広葉樹で、いずれも遺跡周辺で採取でき、建築材等として使用されたと推定する。ただし、SP 8 が SI11 に伴う柱穴かどうかは判然としない。

遺物は、埋土から壺（86）・甕（89 ～ 91）・高杯（93 ～ 95）・高杯または台付椀（96・97）・器台（99）、ガラス製小玉（100）、叩石（101）・凹石（102）、SI11 南東部の客土から弥生土器甕（87・88）・鉢か（92）・器台（98）が出土した。86 の壺は胴部中央に断面三角形の突帯を 2 条廻らせる。甕は、肥厚する鋤先状口縁をもち、指頭押圧文をめぐらす北部九州系のもの（87）と、く字状口縁をもつもの（88・89）がある。前者を弥生中期後半、後者を弥生中期末～後期前葉に比定する。高杯は、杯部が内湾し鋤先状口縁をもつもの（93）と、底部から屈曲し、体部が外傾するもの（94・95）があり、高杯または台付椀の脚部では、筒状の脚部で下半がハ字状に開くもの（96）と、短脚のハ字状で円形透かし孔を入れるもの（97）がある。93 は弥生時代中期後半、94・95 は古墳中期前半、97 は弥生終末期に比定する。器台は、筒部に沈線を入れるもの（98）と、脚部が内湾するもの（99）がある。101 は石英斑岩製で、両端部に弱い敲打痕がある。102 は花崗岩製で、両面に敲打痕があり、

とくに表面中央に敲打による凹みがみられる。

出土遺物は年代的にバラつきがみられるが、床面付近から出土した高杯（94・95）等から、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代中期前半と考える。なお、SP 8から出土した木炭の放射性炭素年代測定（AMS 法）の結果、暦年較正年代（２δ）は AD230 ～ AD340 の年代値を示し、やや幅広いが、遺物の時期と大きな齟齬はない。

SI13・21（第 37 図　図版 34・35）

調査区北東側で南東壁際のＨ３・Ｉ３グリットに位置する。いずれも円形の竪穴建物で、北西側のおよそ半分を確認した。調査区の中でも、傾斜面の終わる比較的平坦な面に立地し、検出面での標高は 25.90 ～ 26.14 mである。両建物の北東端にある溝 SD26 は、SI21 に伴う溝で、SI13 を壊すことから、SI13 → SI21 の先後関係を考える。埋土の観察では、５層が SI13 から SI21 にかけて堆積することから、SI13 と SI21 の埋没時期はほぼ同時期と推定する。

SI13（第 37 ～ 40 図　図版 34・35・37 ～ 39）

規模は、直径が 11.16 m、検出面から床面までの深さは最深で 0.32 mである。壁溝は、北寄り３分の２程度を確認でき、幅は 14 ～ 24cm、深さは４cm を測る。北端付近で二つに分岐する箇所があり、建替えに伴うと考える

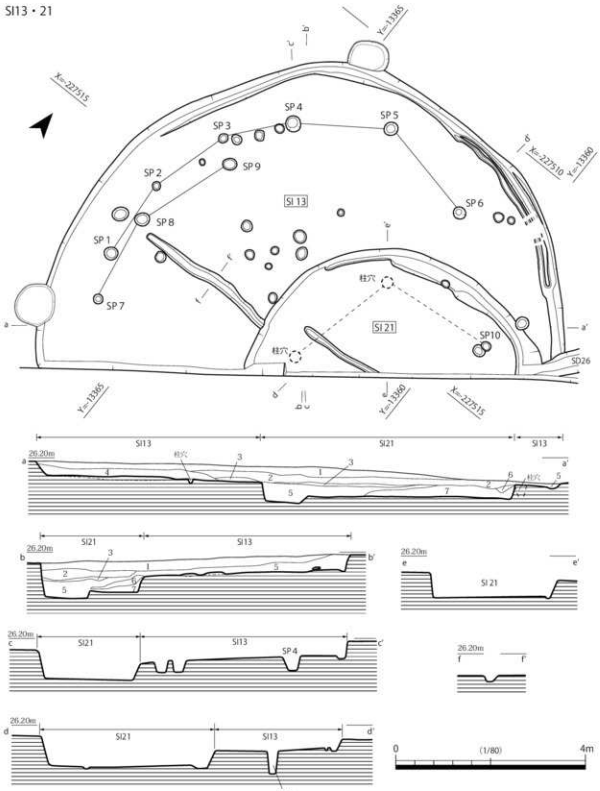
主柱穴の可能性があるのは、SP １～６と SP ７～９で、直径は前者が 18 ～ 34cm、後者が 20 ～ 28cm、深さは前者が 15cm ～ 48cm、後者が 18cm ～ 60cm を測る。柱間間隔は、SP １から SP ６までがそれぞれ順に 170cm、174cm、152cm、208cm、228cm で、SP ７から SP ９までが 194cm、220cm となる。建物の南側では、柱穴 SP ８付近から東西に延びて、SI21 に壊される溝を確認した。溝の残存長は 316cm、深さは 14cm である。

床面から出土した木炭の樹種同定資料及び年代測定資料の樹種は、それぞれアカガシ亜属とクリ－シイ属であり、いずれも遺跡周辺で採取でき、建築材等に使用されたと考える。

遺物は、埋土上層から弥生土器の壺（103・104）・甕（106）・鉢（109・110）・支脚（112）、土製紡錘車（115）、不明鉄製品（116）、石包丁（120）・扁平片刃石斧（121）・磨石（122）、埋土下層から弥生土器の甕または鉢（108）・甑（113）・石鏃（118）、埋土から弥生土器の壺または甕（105）・鉢（111）・高杯（114）・石製支脚（123）、遺構検出面から石匙か（119）、床面から石槍（117）・砥石（124）・台石（125）が出土した。

103 は複合口縁壺で、立ち上がりが内傾し、数条の沈線を入れる。弥生後期中葉に比定する。104 の壺は、口縁部が外側に折れ、頸部と胴部の境が緩やかで、頸部に数条の沈線とその下に刺突文を入れる。弥生中期末に比定する。107 の甕は、口縁が緩やかに外反し、長胴気味で、底部は中空である。106 と 110 の鉢は口縁が緩やかに外反し、胴部が扁球状のもので、後者は断面三角形の口唇部に擬凹線、頸部に刺突文を入れる。弥生中期末～後期前葉に比定する。112 は支脚の受け部片で、113 は甑の底部片である。115 は土器を転用した紡錘車である。118 は凹基無茎式で、安山岩製である。120 は両刃で、２か所に穿孔がある。泥質片岩製である。121 は凝灰岩製で、表面に加工痕がみられる。122 は珪質片麻岩製で、擦痕を残す。123 の上端には被熱による煤の吸着がみられ、下端は断面Ｖ字状に打ち欠きがある。土中の突き刺すための加工と推定する。124 は凝灰

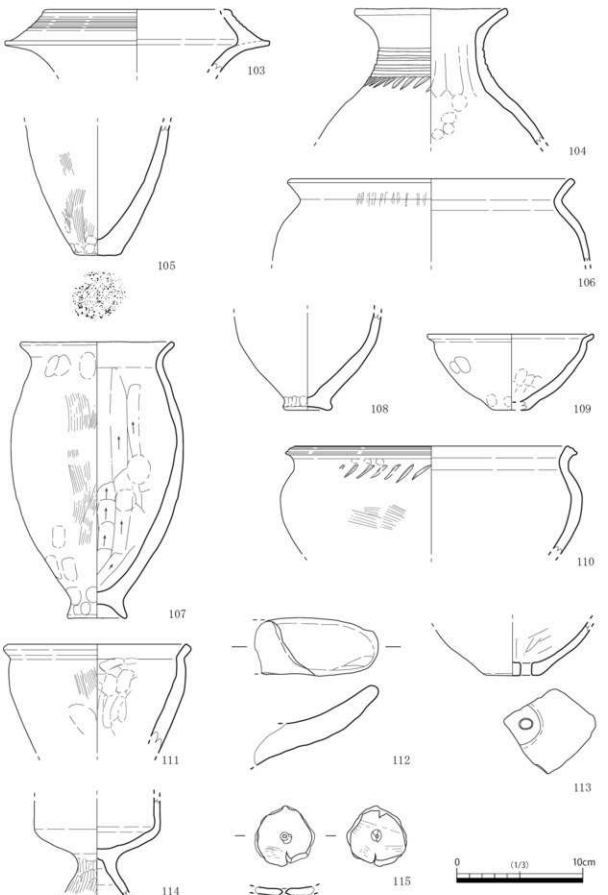
SI13・21



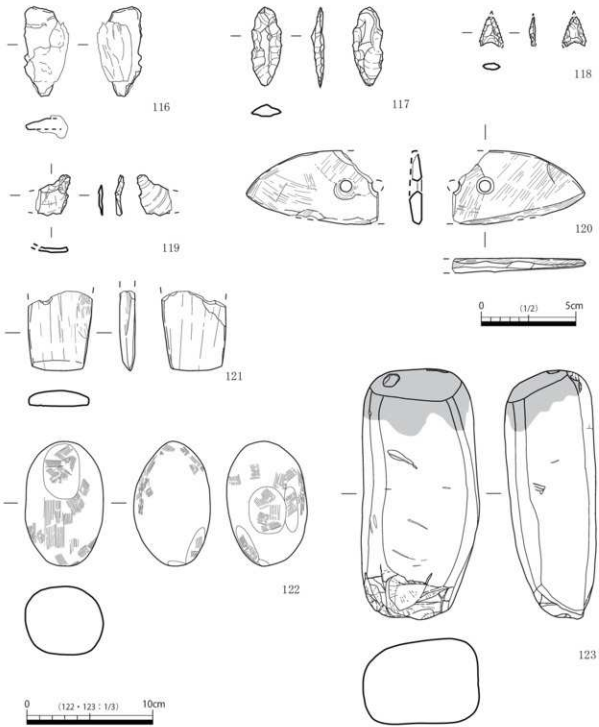
土層凡例

1　灰褐色(7.5YR4/2)粘質土　小礫が混じる。炭を含む。土器片を多く含む
2　褐灰色(7.5YR4/1)粘質土　小礫が混じる。炭を含む。土器片を少し含む
3　黒褐色(10YR3/1)粘質土　小礫が混じる。炭を多く含む。土器片を含む
4　明褐色(7.5YR5/6)粘質土　下位に黒褐色(10YR3/1)粘質土ブロックと小礫が混じる
5　にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質土　橙色(7.5YR6/8)粘土ブロックが混じる。炭と土器片を含む
6　褐灰色(10YR5/1)粘質土　橙色(7.5YR6/8)粘土ブロックが少し混じる。小礫が混じる。土器片を含む
7　明黄褐色(10YR6/8)粘質土　褐灰色(10YR5/1)粘質土との混淆土。炭、焼土塊、土器片を含む

第 37 図　SI13・21 実測図



第 38 図　SI13 出土遺物実測図（1）

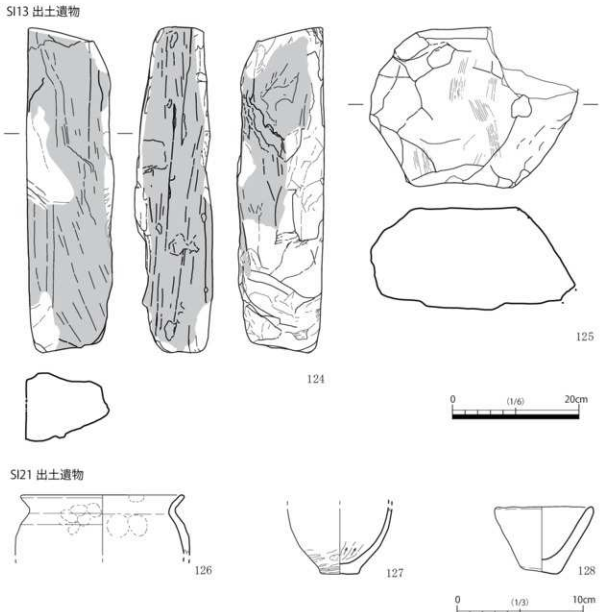


第 39 図　SI13 出土遺物実測図（2）

岩製の砥石で、最大長が 51.4cm の大型のものである。断面台形状を呈し、三つの面を研磨面として使用する。125 は片麻岩製で、両面に擦痕、表面に敲打による凹みがあり、両面を機能面とする。

出土遺物は、弥生時代中期末～後期中葉の年代幅におさまる。一方、床面から出土した木炭の放射性炭素年代測定（AMS 法）の結果、暦年較正年代（2 δ）は BC106 ～ AD26 であり、遺物よりも全体的にやや古い年代値を示す。埋土から出土した遺物の多くが流れ込みとすれば、遺構の時期は、年代測定結果のとおり、弥生時代中期末～後期前葉と考える。

SI21（第 37・40 図　図版 35・39）

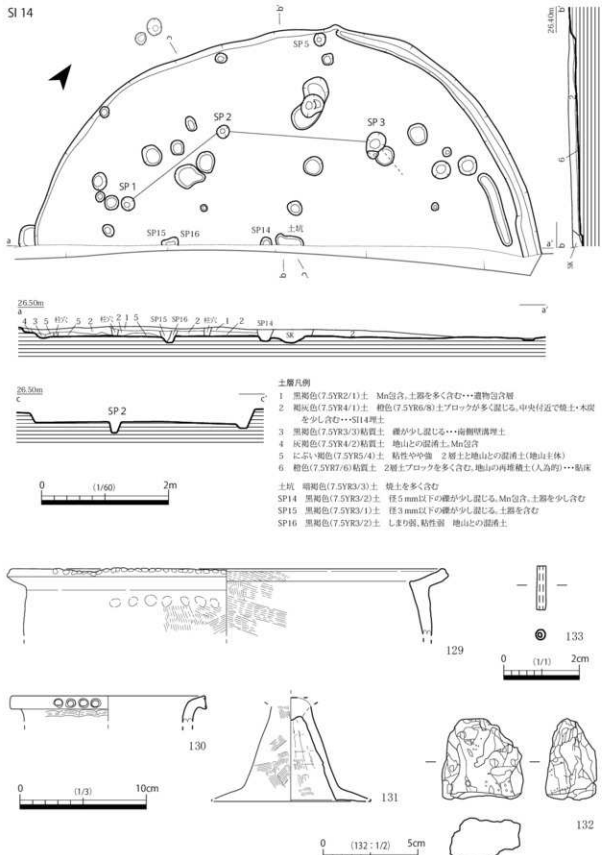


第 40 図　SI13・21 出土遺物実測図

規模は、直径が 6.28 m以上、検出面から床面までの深さは最深で 0.32 mを測る。壁溝は、北寄りの半分程度を確認でき、幅が 10 ～ 36cm、深さが 8 cm を測る。主柱穴は 3 個を確認した。そのうち SP10 の、直径は 28cm、深さが 25cm を測る。建物南側では、SI13 と同様、調査区外まで延びる東西方向の溝を確認した。溝の幅は 13 ～ 20cm、深さは 5 cm 程度である。床面から出土した木炭の樹種同定及び年代測定試料の樹種は、いずれもイネ科草本で、建物の外壁や屋根材、床材等に用いられた可能性がある。

遺物は、埋土から弥生土器の鉢（126・127）とミニチュア鉢（128）が出土した。126 は口縁が緩やかに外反し、肩部がやや張る。127 は上げ底気味で、胴部が球状になると推定する。外面にミガキを施す。128 は厚手の鉢で、平底の底部から胴部が外傾する。弥生後期中葉～後葉と考える。

出土遺物から、遺構の時期は弥生時代後期中葉～後葉と考える。なお、床面から出土した木炭の放射性炭素年代測定（AMS 法）の結果、暦年較正年代（２δ）は AD10 ～ AD127 であり、出土遺



第 41 図　SI14 及び出土遺物実測図

物の年代やSI13との先後関係に齟齬はない。

SI14（第41図　図版36・39）

調査区北東側で南東壁際のG4・H4グリットに位置し、SI15の東側に隣接する、平面形が円形の竪穴建物である。北西側のおよそ半分を確認した。調査区内でも比較的平坦な面に立地しており、検出面での標高は26.00～26.20mである。規模は、直径が推定8.00m、検出面から床面までの深さは0.15mを測る。壁溝は北側の一部と、南側でわずかに確認でき、北側の壁溝の幅が20cm程度、深さが3cm程度を測る。南東壁付近で、北側壁溝の内側に長さが12cmの溝を確認したが、これが壁溝とすれば、建物を建替えたと推定できる。主柱穴は、後世の複数の柱穴によって建物床面が壊されるため、判然としない。主柱穴の可能性があるSP1～3は、直径が20～30cmで、そのうちSP2の深さは18cmとなる。中央付近で土坑を確認したが、中央土坑に相当するかどうかは不明である。

建物埋土は2層に分かれ、上層（2層）が褐灰色土で、中央付近で焼土や木炭を少し含み、下層（5層）がにぶい褐色土で、2層と地山との混淆土である。壁溝埋土は、礫混じりの黒褐色粘質土で、主柱穴の埋土は、黒褐色土を主体とする。床面から出土した木炭の樹種同定の結果はクリーシイ属であり、遺跡周辺で採取でき、建築材等に使用されたと考える。

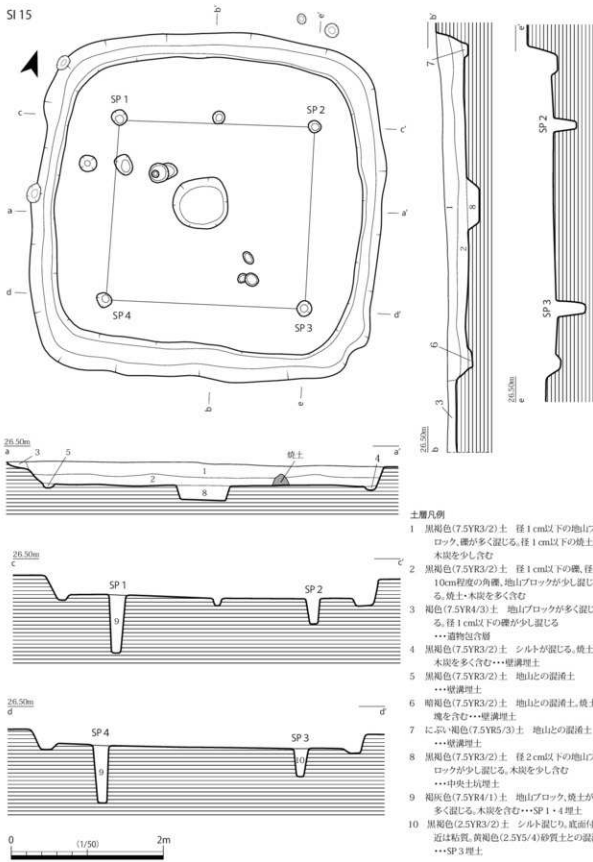
遺物は、埋土から弥生土器の甕（129）・壺（130）・高杯（131）、柱穴SP5から鉄滓（132）、土坑から管玉（133）が出土した。129は口縁部が鋤先状を呈する。130は口唇部に竹管文を施す。131はハ字状に開く脚部で、端部付近が水平に近く折れる。133は碧玉製の管玉で、両面穿孔と推定する。132の鉄滓は、後世の柱穴に伴うと考える。

遺構の時期は、遺構の形状や出土遺物から弥生時代中期後半と考える。なお、床面から出土した木炭の放射性炭素年代測定（AMS法）の結果、暦年較正年代（2δ）はBC174～BC47であり、遺物の年代と整合する。

SI15（第42・43図　図版40・41）

調査区中央南寄りのF4・G4グリットに位置し、SI14の西側に隣接する、平面形が隅丸方形の竪穴建物である。調査区内の比較的平坦な面に立地し、検出面での標高は26.23～26.40mである。規模は、検出面での主軸の長さが、南北で4.52m、東西で4.60m、床面では南北で3.78m、東西で4.05mであり、床面積は15.31㎡となる。検出面から床面までの深さは最深で0.34mを測る。主軸方向は、N17°Wである。壁溝は、幅が14～29cm、深さが5～8cmである。主柱穴は4個あり、直径が17～20cm、深さが32～74cmを測る。柱間間隔は、SP1から時計回りに255cm、239cm、264cm、236cmを測る。中央土坑は、平面形がほぼ円形で、直径が68～72cm、深さが20cmを測る。

建物の埋土は大きく2層に分かれ、いずれも黒褐色土に地山ブロックや礫が混じる。焼土や木炭は下層（2層）に多く、床面には一部に焼土塊が残る。建物の南東側は、遺物包含層（3層）を掘り込んで建物を築いており、地山面が北西側よりも10cm程度低い。壁溝埋土は、暗褐色～黒褐色の地山混淆土を主体とし、一部でシルトや焼土・木炭が混じる。主柱穴の埋土は、SP1・4が地山ブロックの混じる褐灰色土で、焼土・木炭を含み、SP3がシルト混じりの黒褐色土である。中央土



土層凡例

1　黒褐色(7.5YR3/2)土　径1cm以下の地山ブロック、礫が多く混じる、径1cm以下の焼土・木炭を少し含む

2　黒褐色(7.5YR3/2)土　径1cm以下の礫、径10cm程度の角礫、地山ブロックが少し混じる、焼土・木炭を多く含む

3　褐色(7.5YR4/3)土　地山ブロックが多く混じる、径1cm以下の礫が少し混じる
･･･遺物包含層

4　黒褐色(7.5YR3/2)土　シルトが混じる、焼土・木炭を多く含む･･･壁溝埋土

5　黒褐色(7.5YR3/2)土　地山との混淆土
･･･壁溝埋土

6　暗褐色(7.5YR3/2)土　地山との混淆土、焼土塊を含む･･･壁溝埋土

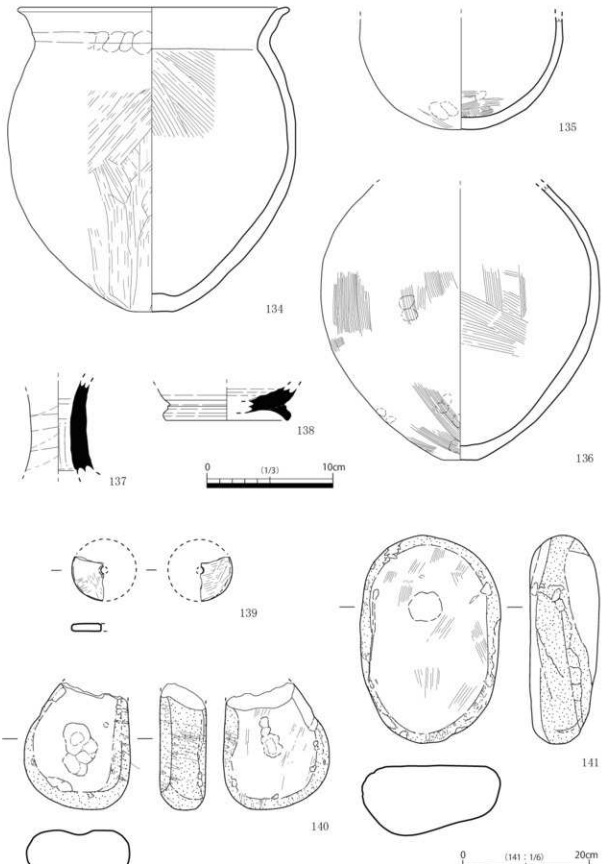
7　にぶい褐色(7.5YR5/3)土　地山との混淆土
･･･壁溝埋土

8　黒褐色(7.5YR3/2)土　径2cm以下の地山ブロックが少し混じる、木炭を少し含む
･･･中央土坑埋土

9　褐灰色(7.5YR4/1)土　地山ブロック、焼土が多く混じる、木炭を含む･･･SP 1・4 埋土

10　黒褐色(2.5YR3/2)土　シルト混じり、底面付近は粘質、黄褐色(2.5Y5/4)砂質土との混淆
･･･SP 3 埋土

第 42 図　SI15 実測図



第 43 図　SI15 出土遺物実測図

坑の埋土は地山ブロック混じりの黒褐色土で、木炭を少し含む。床面～埋土下層を中心に焼土塊や木炭が多く出土することから、焼失竪穴建物の可能性がある。なお、床面から出土した木炭の樹種同定試料及び年代測定試料は、それぞれシイ属とクリ－シイ属であり、いずれも遺跡周辺で採取でき、建築材等に使用されたと考える。

遺物は、埋土から土師器の甕（134・135）、埋土下層から石製紡錘車（139）と台石（140）、床面から弥生土器の甕（136）と台石（141）、埋土上層から須恵器の壺（137・138）が出土した。埋土上層の須恵器は後世の流れ込みと考える。134 の土師器甕は、口縁部が厚手で、端部を水平に折る。胴部は、内外面ともハケ目調整を施す。弥生終末期～古墳初頭に比定する。137 は長頸壺の頸部、138 は壺の底部で、後者はハ字状に開く厚手の高台をもつ。両者は同一個体の可能性がある。７世紀後半に比定する。139 は角閃石安山岩製で、周南市四熊ヶ岳産と推定する。両面に擦痕がみられる。140 は花崗岩製で、両面の中央付近に敲打痕と擦痕がみられる。141 は花崗岩製で、表面中央に敲打による凹み、表面全体に擦痕がみられる。

遺構の時期は、出土遺物から弥生時代終末～古墳時代初頭と考える。なお、床面から出土した木炭の放射性炭素年代測定（AMS 法）の結果、暦年較正年代（２δ）は AD27 ～ AD204 であり、遺物の年代よりも、全体的にやや古い値を示している。

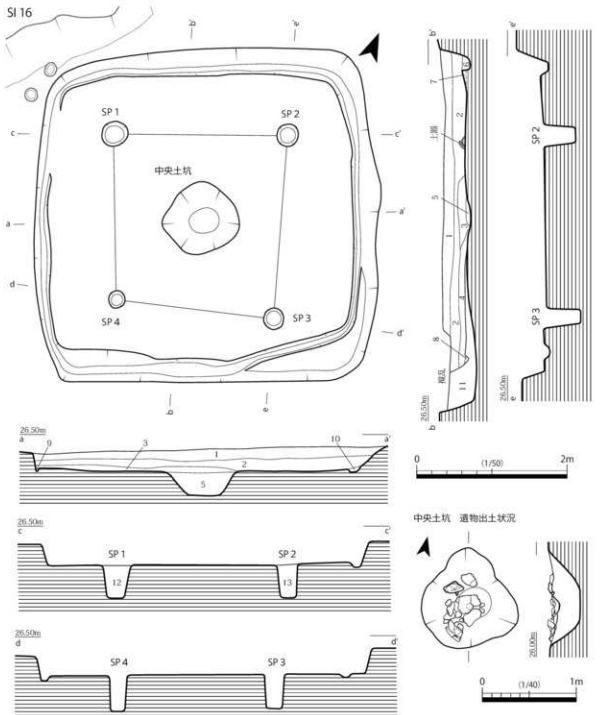
SI16（第 44 ～ 46 図　図版 42・45・46）

調査区南西側のＣ６・Ｄ６グリットに位置する。調査区内でも、南北方向の傾斜面が終わる平坦面上に立地しており、検出面での標高は 26.30 ～ 26.38 mである。平面形が隅丸方形の竪穴建物であるが、南東隅では検出面と床面との間にテラス面を設けることから、壁溝がやや内側に入り、床面の形状はやや不整形を呈する。規模は、検出面での主軸の長さが、南北で 4.42 m、東西で 4.50 m、床面では南北で 3.76 m、東西で 4.04 mであり、床面積は 15.19㎡となる。検出面から床面までの深さは最深で 0.50 mを測る。主軸方向は、N24°Wである。壁溝は、幅が４～ 22cm、深さが４～ 12cm である。主柱穴は４個あり、直径が 22 ～ 34cm、深さが 45 ～ 48cm を測る。柱間間隔は 232cm、245cm、212cm、220cm を測る。中央土坑は、平面形が不整円形で、直径が 92 ～ 106cm、深さが 34cm を測る。

建物の埋土は大きく４層に分かれ、１層が暗褐色土、２・３層が褐灰色土で、いずれも赤褐色土ブロックが混じる。４層は灰褐色土で焼土塊や木炭を含む。壁溝埋土は、褐灰色の地山混淆土を主体とする。主柱穴の埋土は、SP １が灰褐色、SP ２が黄灰色のいずれもシルト混じり土である。中央土坑の埋土は灰褐色土で、焼土ブロックや木炭を多く含む。中央土坑から出土した木炭の樹種同定試料及び年代測定試料は、それぞれマツ属複維管束亜属とサクラ属であり、前者は油分が多く、湿気に強いことから、燃料材として使用されたと考える。

遺物は、埋土から弥生土器のミニチュア壺（144）・甕（145）・鉢（148）と凹石（151）、埋土下層から弥生土器の高杯（147）、床面から弥生土器の壺（143）・鉢（149）と台石（152）が出土した。また、中央土坑の埋土上層からは弥生土器の甕（150）、埋土から弥生土器の壺（142）と砥石（153）、底面から弥生土器の高杯（146）が出土した。

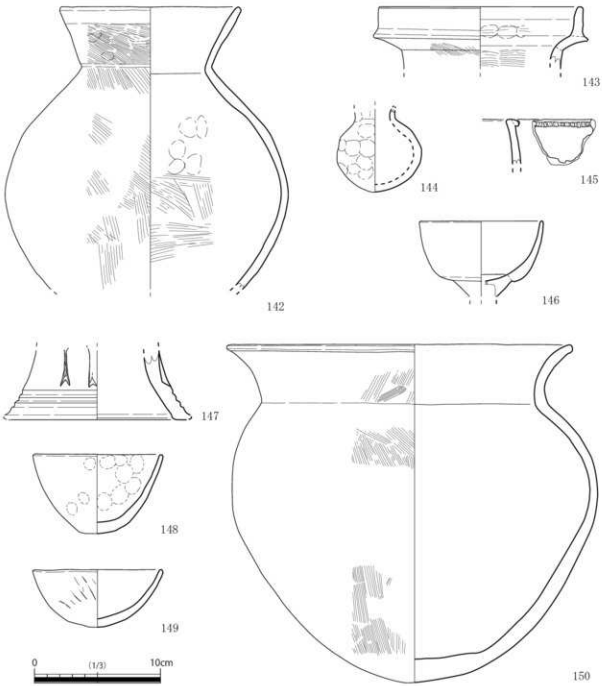
弥生土器の壺は、口縁がやや外傾する直口壺（142）と複合口縁壺（143）がある。142 は胴部



土層凡例

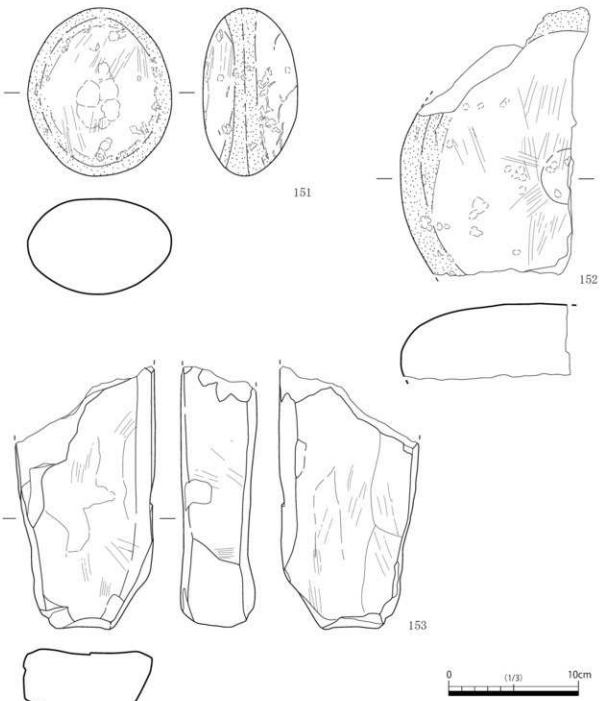
1　暗褐色(7.5YR3/3)土　径1cm以下の赤褐色(2.5YR4/8)土ブロックと地山ブロック,径2cm以下の礫が多く混じる
2　褐灰色(5YR4/1)土　径1～2cmの赤褐色(2.5YR4/8)土ブロック,径2cm以下の礫が多く混じる
3　褐灰色(7.5YR4/1)土　径1cm以下の赤褐色(2.5YR4/8)土ブロック,3cm以下の礫が多く混じる
4　灰褐色(7.5YR4/2)土　径5cm大の地山ブロック,径1cm以下の礫が少し混じる,焼土塊を密に含む,炭を含む
5　灰褐色(7.5YR4/2)土　明赤褐色(5YR5/6)土と焼土ブロックが多く混じる,炭を多く含む
6　褐灰色(5YR4/1)土　地山との混淆土･･･壁溝埋土
7　黄褐色(2.5YR5/4)シルト質土･･･地山
8　褐灰色(7.5YR4/1)土　地山との混淆土･･･壁溝埋土
9　褐灰色(7.5YR4/1)土　地山との混淆土･･･壁溝埋土
10　褐灰色(7.5YR5/1)土　赤褐色(2.5YR4/8)土との混淆土･･･壁溝埋土
11　黄褐色(7.5YR5/4)シルト質土　褐灰色(7.5YR4/1)土との混淆土。径1cm程度の赤褐色(2.5YR4/8)土ブロック,径2cm以下の礫が多く混じる･･･地山(再堆積土)
12　灰褐色(2.5Y3/2)シルト混じり土･･･SP1埋土
13　黄灰色(2.5Y5/1)シルト混じり土　径1cm以下の黄橙色(10YR8/8)土ブロックが多く混じる･･･SP2埋土

第44図　SI16実測図



第 45 図　SI16 出土遺物実測図（1）

内外面と頸部外面をハケ目調整し、弥生終末期～古墳初頭に比定する。143 は備後～安芸の系統で、複合口縁の接合部が突出し、口縁は直立する。弥生終末期～古墳初頭に比定する。甕は、口縁端部に刻み目突帯を入れるもの（145）と、頸部が大きく外反し、胴部が球状を呈するもの（150）がある。145 は弥生早期に比定でき、混入と考える。150 は弥生終末期～古墳初頭に比定する。高杯のうち、146 の杯部は平底から体部がほぼ直立する。147 の脚部は胎土が精良で、透かしは貫通しない。伊予系で、弥生終末期～古墳初頭に比定する。151 は複雲母花崗岩製で、両面中央に敲打痕とその周辺に擦痕を残す。152 は石英斑岩製で、表面中央に敲打痕、周辺に擦痕を残す。153 は珪質片麻岩製で、端面を除く四面を砥面として使用する。



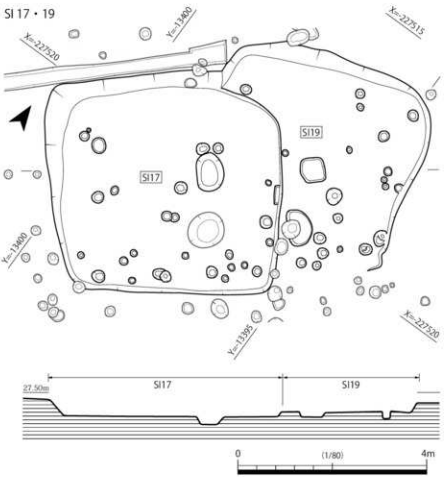
第 46 図　SI16 出土遺物実測図（２）

出土遺物の年代にはややバラつきがあるが、建物の廃棄時点を示す建物床面及び中央土坑内から出土した遺物から、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代初頭と考える。なお、中央土坑から出土した木炭の放射性炭素年代測定（AMS 法）の結果、暦年較正年代（２δ）は AD129 ～ AD310 の年代値を示しており、遺物の年代よりも幅広い。

SI17・19（第 47 図　図版 43・44）

調査区中央北部の緩斜面上、Ｃ３・４・Ｄ３・４グリットに位置する２棟の竪穴建物である。検出面での標高は 27.00 ～ 27.30 ｍである。いずれの建物も平面形が隅丸方形を呈する。SI17 が

SI19の南西部分約4分の1を壊すことから、SI19→SI17の先後関係を考える。いずれの建物も南東側が後世の削平を受けるため、SI17では北西側よりも南東側の方が壁高が低く、SI19では南東側の壁面が残存していない。



第47図　SI17・19配置図

SI17（第48図　図版43・44）

規模は、検出面における主軸の長さが、北西－南東方向で4.70m、北東－南西方向で4.92m、床面では北西－南東方向で4.27m、北東－南西方向で4.58mであり、床面積は19.56㎡となる。検出面から床面までの深さは、北西壁際の最深部で0.35mを測る。主軸方向は、N34°Wである。北東辺壁下に溝状のくぼみがあるが、小範囲しか確認できず、壁溝とは認められない。建物内部のに多数の柱穴を検出したが、主柱穴は特定できなかった。

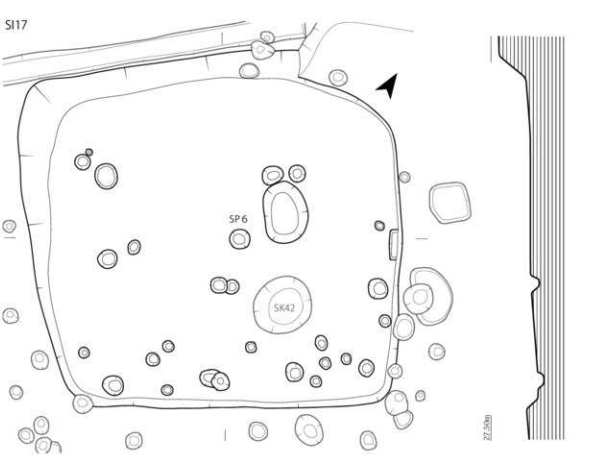
建物の埋土は明褐色粘質土の単一層で、上位には一帯を被覆していた暗褐色粘質土が若干入り込んでいた。埋土には木炭を含んでいた。なお、柱穴SP 6から出土した木炭の樹種同定試料及び年代測定試料の樹種は、いずれもクリ－シイ属であり、遺跡周辺で採取でき、建物の建築材等に使用されたと考える。

また、中央やや北寄りでは、平面形が長円形、断面形が皿状を呈する土坑を検出した。規模は、長径が81cm、短径が57cmで、検出面から底面までの深さは最深で17cmである。埋土には炭や焼土がほとんどみられなかった。その南東側のSK42は、SI17より古い時期の落とし穴と考える。

遺物は、埋土から少量の弥生土器片が出土したが、図化できなかった。遺構の時期は、遺構の形状やSI19との関係等から、弥生時代終末期～古墳時代初頭と考える。なお、建物に伴う柱穴かどうかは不明だが、SP 6から出土した木炭の放射性炭素年代測定（AMS法）の結果、暦年較正年代（2δ）はAD128～AD235であった。

SI19（第49・50図、図版43・44・46）

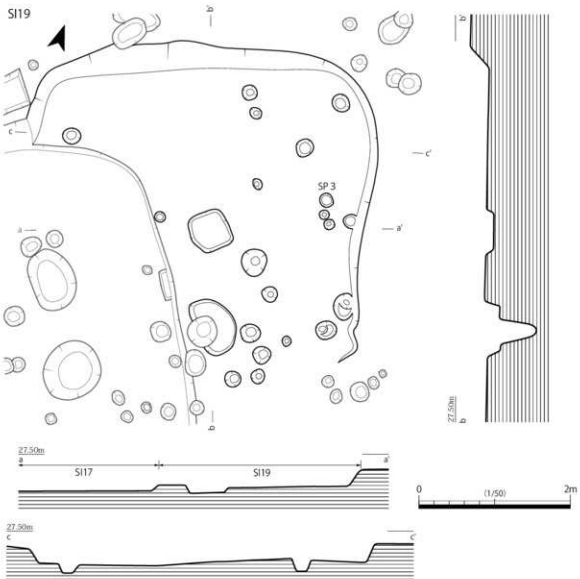
南西部の3分の1強をSI17に壊され、南辺の壁面も失われているため、詳細な規模は不明であ



第 48 図　SI17 実測図

るが、検出面での主軸の長さは、南北で約 4.10 m、東西で 2.72 m以上であり、検出面から床面までの深さは、北壁際の最深部で 0.28 mである。主軸方向は N20°Wである。壁溝は確認できなかった。建物内の床面から多数の柱穴を検出したが、主柱穴は特定できなかった。床面のほぼ中央では、平面形が方形、断面形が台形状を呈する土坑を確認した。規模は、主軸の長さが 52cm で、深さが 8 cm を測る。土坑の埋土下半の灰褐色粘質土には多量の焼土や木炭を含むことから、その性格は炉とみられる。

遺物は、埋土から弥生土器の壺（154）・甕（156）や鉄鏃（158）、埋土上層から弥生土器の壺（155）、SP 3から須恵器の杯身（157）が出土した。SP 3は後世の柱穴である。そのほか、西辺壁下や中央土坑の下部等からも弥生土器片が出土している。154 は複合口縁壺で、頸部から口縁が内湾しながら立ち上がり、端部付近で外側に折れる。複合口縁部の外面には、三角格子文を廻らせる。弥生終末期に比定する。155 は小型の壺で、胴部は球状を呈する。内外面を指オサエで調整する。156 の甕は口縁がやや外反し、胴部最大径は上位にある。底部はやや丸みをもつ。弥生終末期に比定する。157 の杯身は、受部径が復元で 13.2cm で、蓋受けの立ち上がりは短い。6 世紀末～7 世紀初頭に比定する。158 は圭頭鏃で、関部～茎部は残存しない。断面形は平造と推定する。



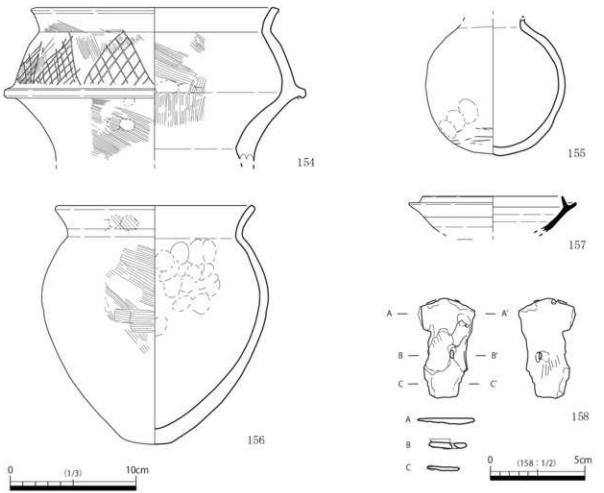
第 49 図　SI19 実測図

遺構の時期は、出土遺物から、弥生時代終末期と考える。

SI18（第 51・52 図、図版 47・48）

調査区中央北東壁際のＥ２・３グリットに位置する、平面形がやや不整の隅丸方形を呈する竪穴建物である。SI17・19 の北側にあり、北西側約２分の１は調査区外である。緩傾斜面に立地し、検出面での標高は 27.40 ～ 27.70 ｍである。規模は、検出面での主軸の長さが、南北で 5.85 ｍ、東西で 3.40 ｍ以上で、検出面から床面までの深さは、北辺壁付近の最深部で 0.36 ｍを測る。主軸方向は、N23° Ｅである。緩やかに湾曲する東辺壁に沿って壁溝を検出した。壁溝の幅は 15 ～ 25cm 程度で、深さが 10cm 程度である。建物東半分の床面では多数の柱穴を検出したが、主柱穴は特定できなかった。

中央土坑は北西壁際で検出し、一部が調査区外であった。平面形は不整な楕円形で、断面形は底面から壁面にかけて緩やかな半卵形を呈する。規模は、長径が 85cm 以上、短径が 94cm、深さが最深で 27cm を測る。埋土に多量の焼土や炭を含むことから、炉と考えられる。中央土坑の上部で

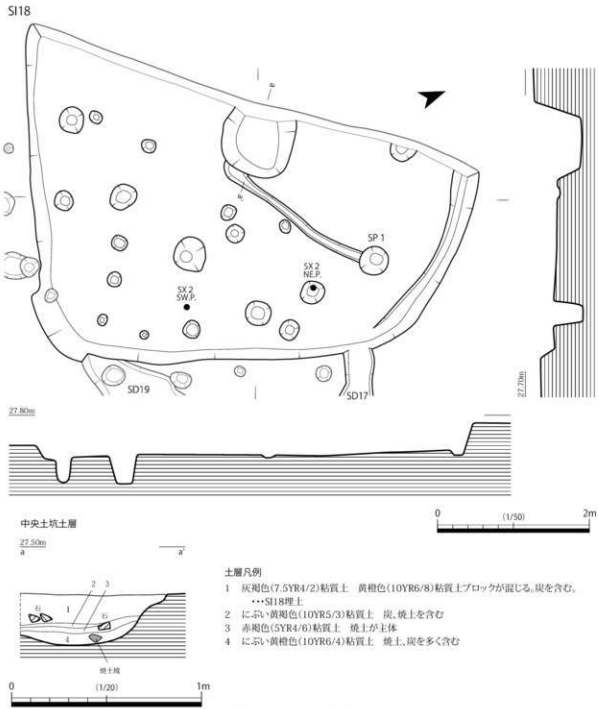


第 50 図　SI19 出土遺物実測図

は、壺の口縁部～頸部が倒置状態で出土した。中央土坑南東側では、北東部の柱穴 SP 1 にかけて延びる溝を検出した。溝の幅は 12 ～ 34cm、深さは 5 cm 程度である。中央土坑から南西部にかけての床面直上には、木炭や焼土が面的に広がっていた。一方、中央土坑北東部の床面直上には、大小の河原石や角礫が集積した状態で検出しており、礫間には多数の弥生土器片が含まれていた。これらは、建物の廃絶直後に一括廃棄されたものと考えられる。なお、中央土坑出土の年代測定試料の樹種はクリーシイ属及びマツ属複維管束亜属、床面出土の樹種同定試料はクリーシイ属であった。クリーシイ属は建物の建築材として、マツ属複維管束亜属は炉の燃料材として使用されたと考える。

建物の北東隅付近では、建物外の南東方向に延びる溝 SD17 を検出した。SI18 と埋土が同一の褐色粘質土であることから排水溝と考える。この溝は 2 m余り延び、緩斜面上で消滅する。建物の南東隅付近にある溝 SD19 も、埋土が SI18 と近似するが、ほぼ等高線に沿って北東に延び、北東端の底面のレベルがやや高いことから排水溝とは考えにくい。SI18 との関連や先後関係は不明である。

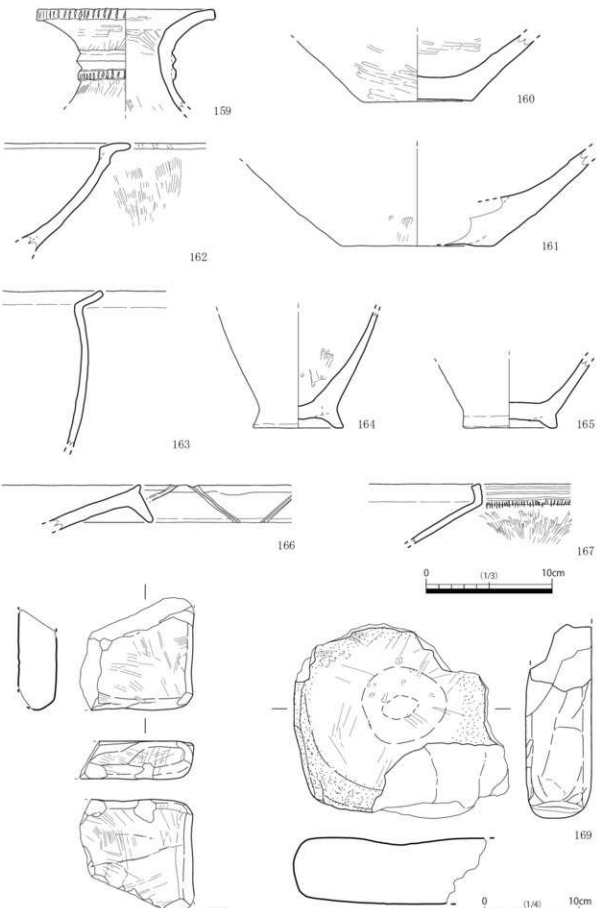
遺物は、中央土坑から弥生土器の壺（159）、埋土から弥生土器の壺（160・161）・甕（164・165）・器台（166）・高杯（162・167）と砥石（168）・台石（169）、柱穴 SP 1 から弥生土器の甕（163）が出土した。159 は口縁が大きく外反する壺で、頸部に二段の突帯が付く。突帯の上段は断面三角形、下段は断面方形を呈する。口縁端部と突帯の下段に刻み目を廻らす。安芸系で中期前半に比定する。160 と 161 の壺は、平底の中央がわずかに上がる。162 の高杯は、口縁が水平に折れる。北部九



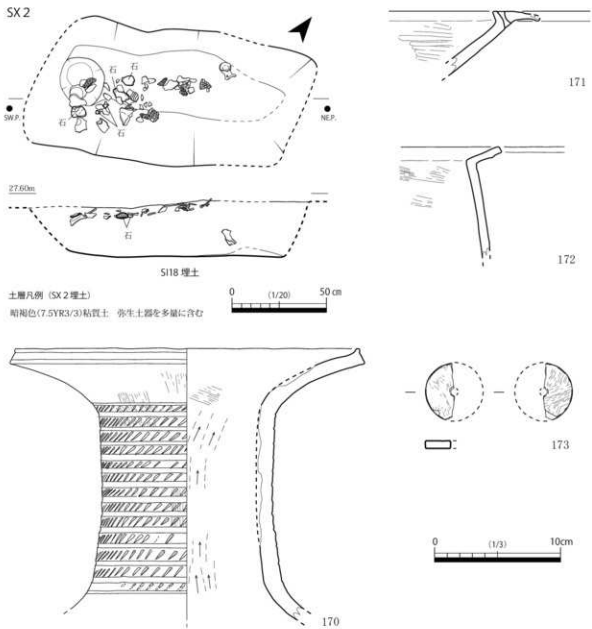
第 51 図　SI18 実測図

州系で弥生中期前半である。163 は甕の口縁～胴部でく字状口縁をもつ。弥生中期後葉に比定する。164・165 は胴部～底部で外底面が上げ底になる。弥生後期前葉に比定する。166 は垂下口縁をもつ器台で、外面にヘラ描きの山形文を入れる。柳井田式で、弥生中期後葉である。167 の高杯は口縁が直立に折れ、口縁部に３条の沈線文、屈曲部に刻み目を入れ、他をミガキ調整する。弥生後期前葉に比定する。168 は珪質片麻岩製で、両面を砥面として使用する。169 は安山岩製の台石で、表面中央に敲打による凹み、その周辺に擦痕がみられる。

遺構の時期は、主に中央土坑出土の壺の年代をとり弥生時代中期前半と考える。なお、中央土坑から出土した木炭の放射性炭素年代測定（AMS 法）の結果、暦年較正年代（２δ）は BC355 ～



第 52 図　SI18 出土遺物実測図



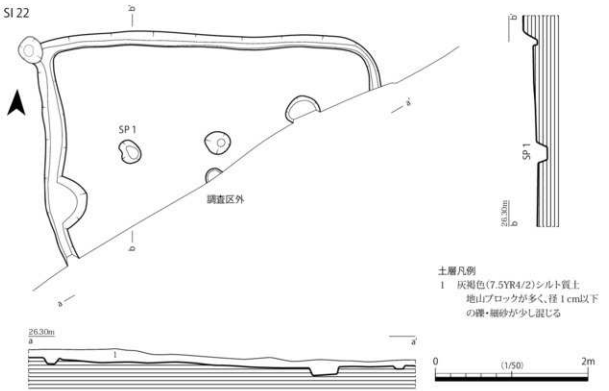
第 53 図　SX 2 及び出土遺物実測図

BC111 であり、遺物の年代と大きな齟齬はない。

SX 2（第 53 図　図版 49・52）

SI18 内のやや東寄りの埋土上位で検出した。平面形は不整長方形を呈する。埋土は暗褐色粘質土の単一層である。SI18 埋土との識別が困難な部分があり、トレンチ掘削時に東西の壁面を欠失した。規模は、長さが推定で 1.48 m、幅が 0.73 m、深さが最深で 0.29 m である。主軸方向は N54° E である。出土した弥生土器の大部分は、埋土上位でまとまって検出しており、中に拳大の礫もいくつか含まれていた。

遺物は、170 ～ 172 はいずれも弥生土器である。170 は長頸壺で、直立する頸部から口縁が大きく開く形状である。口縁端部は面取りし、上方にわずかにつまみ上げる。頸部には 14 本の沈線を入れ、各沈線の間に斜線文を廻らす。吉備系で、弥生後期前葉に比定する。171 は鋤先状口縁を



第 54 図　SI22 実測図

もつ高杯である。北部九州系で、弥生中期後葉に比定する。172 は甕で、逆Ｌ字状の口縁をもつ。中期後半に比定する。173 は角閃石安山岩製の紡錘車で、周南市四熊ヶ岳産と推定する。両面に擦痕がみられる。

出土遺物から、遺構の時期は弥生時代中期後葉～後期前葉と考える。SI18 が廃絶した後、埋土の上から掘り込んで、土器や礫等を廃棄したと考える。

SI22（第 54 図　図版 49）

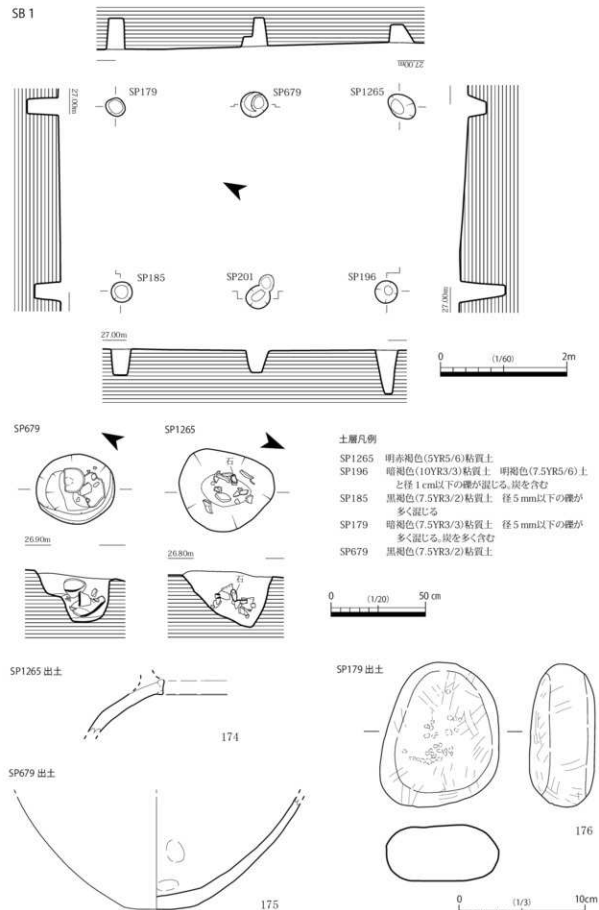
調査区中央の南東壁際、Ｅ５・Ｆ５グリッドに位置する。全体の半分程度を確認したのみだが、平面形が方形の竪穴建物と考える。規模は、東西の長さが 4.46 m、検出面からの深さが 0.38 mを測る。検出面での標高は 26.20 m付近である。主軸方向は、南北方向である。壁溝は、幅が６～30cm、深さが３～４cm である。柱穴 SP １は主柱穴の可能性があり、直径が 30cm、深さが 14cm を測る。建物の埋土は単層で、灰褐色シルト質土に地山ブロックが多く混じる。

時期を決定できる遺物は出土していないが、遺構の形状や周辺遺構との関係から、遺構の時期は古墳時代初頭～前期頃と考える。

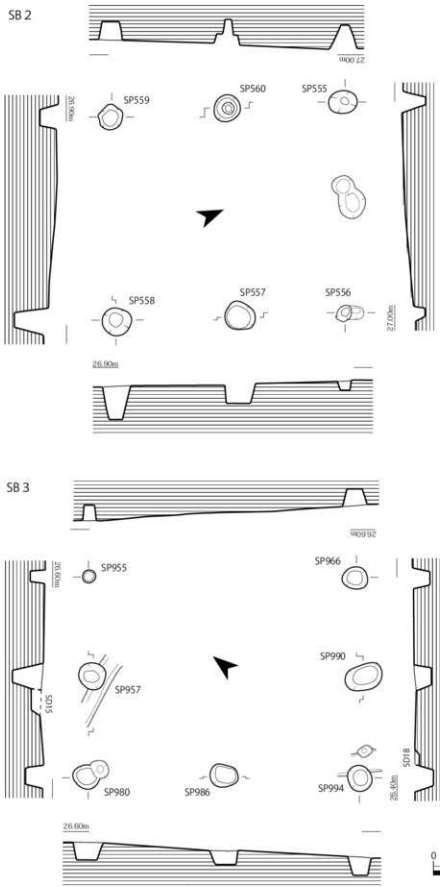
（2）掘立柱建物・柱列

SB １（第 55 図　図版 50 ～ 52）

調査区北東側のＦ２・３・Ｇ２・３グリッドに位置する、梁行が１間、桁行が２間の建物で、検出面での標高は 26.82 ～ 26.86 mである。規模は、梁行が北側で 2.95 m、南側で 2.90 m、桁行が東側で 4.50 m、西側で 4.25 mを測り、床面積は 13.27㎡となる。桁行の柱間間隔は、東側が SP179 から SP1265 に向けて 2.30 m、2.20 mで、西側が SP196 から SP185 に向けて 2.10 m、2.15



第 55 図　SB 1 及び出土遺物実測図



第56図　SB 2・3実測図

mを測る。主軸方向はN28°Wである。構成柱穴の直径は30～45cm、深さは29～70cmでバラつきがある。埋土は、ほとんどの柱穴が暗褐色～黒褐色系の粘質土を主体とするが、SP1265は明赤褐色粘質土であり、SP185は木炭を含む。構成柱穴SP679とSP1265は竪穴建物SI 1の壁面の一部を壊す。

出土遺物は、構成柱穴SP1265から弥生土器の複合口縁壺の頸部(174)、SP679から壺底部(175)、SP179から凹石（176）が出土した。176は花崗岩製で、表面中央に敲打痕、その周辺に擦痕を残す。

遺構の時期は、出土土器や、SI 1との関係から弥生時代終末期と考える。

SB 2（第56図　図版50）

調査区南西側の緩斜面上、C 5・D 5・6グリッドに位置する、梁行が1間、桁行が2間の建物で、検出面での標高は26.50～26.90 mである。規模は、梁行が北側で3.35 m、南側で3.25 m、桁行が東側で3.65 m、西側で3.70 mを測り、床面積は12.13㎡となる。桁行の柱間間隔は、南東側がSP556からSP558に向けて1.70 m、1.95 mで、北側がSP559からSP555に向けて1.85 m、1.85 mを測る。主軸方向はN21°Eである。構成柱穴の直径は24～49cm、深さは15～55cmでバラつきがある。埋土は、褐色土混じりの黒褐色粘質土を主体とし、SP556で焼土、SP558で木炭を含む。SP556では柱痕を確認した。

遺物は、柱穴SP556から弥生土器の小片が出土したが図化できなかった。周辺遺構との関係から、遺構の時期は弥生時代と考えるが、詳細は不明である。

SB 3（第56図　図版50）

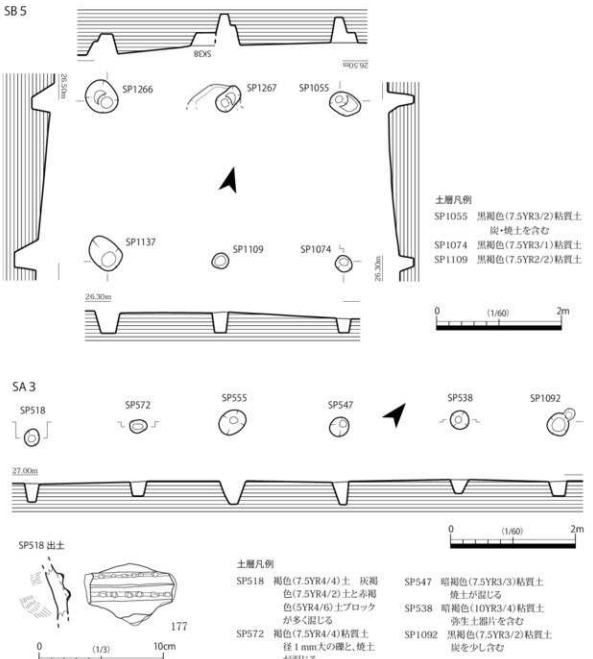
調査区中央南寄りの緩斜面上、E 4・5・F 4・5グリッドに位置する、梁行が2間、桁行が2間の建物で、検出面での標高は26.15～26.50 mである。桁行の北東柱筋では中央柱穴が確認できなかった。規模は、梁行は両柱筋とも3.20 m、桁行は南西側で4.30 m、北東側で4.25 mを測り、床面積は15.28㎡となる。柱間間隔は、SP966からSP955まで時計回りに1.60 m、1.60 m、2.15 m、2.15 m、1.60 m、1.60 mを測る。主軸方向はN38°Wである。構成柱穴の直径は20～45cm、深さは25～48cmでバラつきがある。埋土は、いずれも地山ブロックや礫混じりの黒褐色粘質土を主体とし、SP990・994・986は木炭を含む。構成柱穴SP994は溝SD18を、SP957は溝SD15をそれぞれ壊す。

遺物は、ほとんどの構成柱穴から弥生土器の小片が出土したが、いずれも図化できなかった。周辺遺構との関係から、遺構の時期は、弥生時代終末期と考える。

SB 5（第57図　図版60）

調査区中央南寄りのD 5・E 5グリッドに位置する、梁行が1間、桁行が2間の建物で、検出面での標高は26.03～26.23 mである。規模は、梁行が東側で2.60 m、西側で2.55 m、桁行が南側で3.80 m、北側で3.75 mを測り、床面積は9.72㎡となる。桁行の柱間間隔は、南側がSP1074からSP1137に向けて2.00 m、1.80 m、北側がSP1266からSP1055に向けて1.90 m、1.85 mを測る。主軸方向はN 76°Eである。構成柱穴の直径は0.25～0.50 m、深さは0.21～0.50 mである。SP1267は土坑SK38を壊す。埋土は、黒褐色粘質土を主体とし、SP1055は木炭・焼土を含む。

遺物はSP1267から弥生土器の高杯の脚部（249）が出土した。出土遺物から、遺構の時期は弥



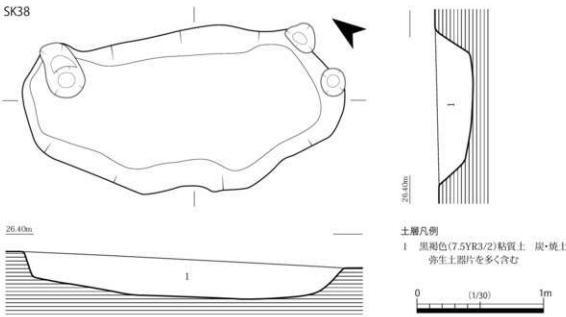
第 57 図　SB 5 実測図・SA 3 及び出土遺物実測図

生時代後期後葉～終末期と考える。

SA 3（第 57 図　図版 50・52）

調査区南西側のＣ５・Ｄ５グリッドに位置する、６個の柱穴からなる柱列である。主軸方向はN47°Ｅで、検出面での標高は 26.90 ｍである。全長は 8.50 ｍで、柱間間隔は SP1092 から SP518 に向かって 1.60 ｍ、1.85 ｍ、1.75 ｍ、1.55 ｍ、1.75 ｍである。構成柱穴の直径は 22 ～ 45cm、深さは 21 ～ 40cm を測る。埋土は褐色～暗褐色の粘質土を主体とし、SP572・547 で焼土、SP1092 で木炭を含む。SP555 は、掘立柱建物SB 2 の構成柱穴と共通するが、先後関係は不明である。

遺物は、構成柱穴 SP518 から弥生土器壺の胴部片（177）が出土した。肩部付近で、２条の貼付



第 58 図　SK38 実測図

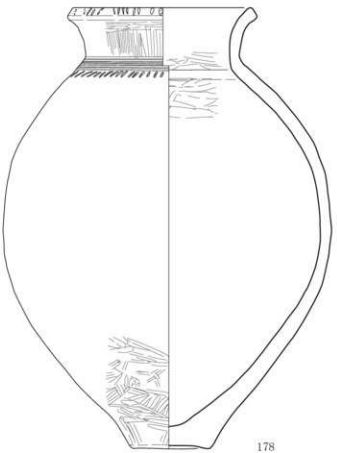
凸帯に刺突文を施す。出土土器から、遺構の時期は、弥生時代中期と考える。

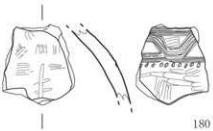
（3）土坑

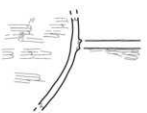
SK38（第 58 ～ 60 図　図版 53・56・57）

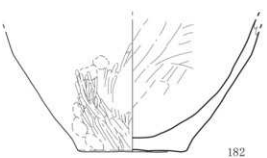
調査区中央南西側のＥ 5 グリッドに位置する。平面形は不整楕円形で、検出面での標高は 26.13 ～ 26.27 ｍである。規模は、長軸が 2.56 ｍ、短軸 1.34 ｍ、深さが 0.38 ｍを測る。主軸方向は N35° W である。北側の一部を掘立柱建物 SB 5 の構成柱穴によって、南東側の一部を柱穴によって壊される。埋土は黒褐色粘質土の単層で、木炭や焼土を多く含む。埋土に多量の土器が廃棄された状態で出土した。

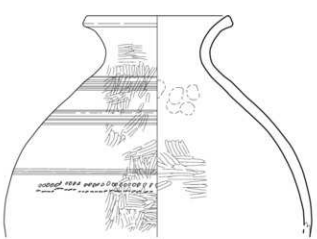
遺物は、床面から弥生土器の甕（188）が、埋土から弥生土器の壺（178 ～ 184・190）・甕（185 ～ 187・189）、台石（191）、砥石（192）が出土した。178・179 は頸部が緩く外反し、口縁端部を面取りするもので、胴部は中位が最も張るタイプの壺であり、180 も同タイプの壺の胴部と推定する。178 は口縁端部と胴部上位に、179 は胴部中位に刺突文を施し、いずれも沈線文を入れ、ミガキ仕上げを施す。前者は内外面の一部に丹塗り痕を残す。180 は外面に平行沈線と山形もしくは波状沈線文を施す。いずれも安芸系で中期前半に比定する。181 は胴部最大径付近の破片で、中央が凹む断面台形状の突帯を貼り付ける。182 ～ 184・190 は壺底部で、182・183 はほぼ平底で、184 は凸レンズ状になる。190 は上げ底気味で、広い平底である。182 ～ 184 は中期前半、190 は前期後半に比定する。185 ～ 189 は甕の口縁部～胴部片である。185 は口縁部が短く外側に折れ、端部を面取りし、186・187 の口縁部はく字状に折れる。187 は胴部上位に刺突文をもつ。189 は口縁端部に刻み目を施し、断面台形状の突帯を貼り付ける。いずれも胴部の張りは弱い。185 ～ 188 は弥生前期後半～中期前葉、189 は前期後半に比定する。191 は花崗岩製で、表面中央に敲打による凹みがあり、その周辺に擦痕を残す。192 は珪質片麻岩製の砥石で、両面とも使用するが、

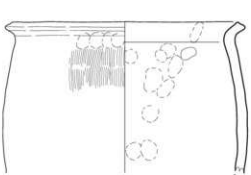




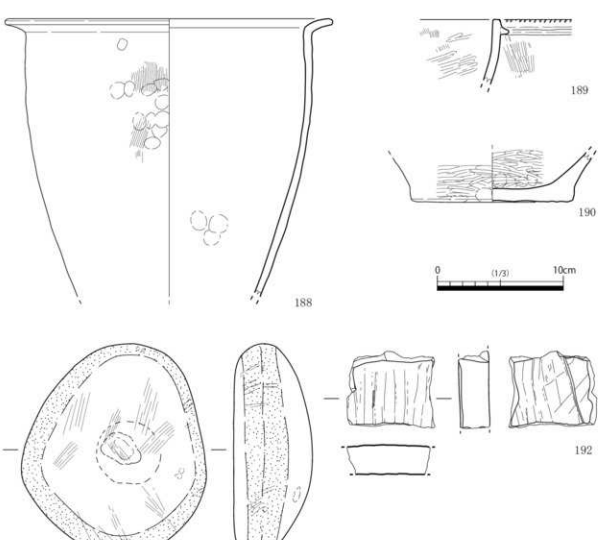








第 59 図　SK38 出土遺物実測図（1）



第 60 図　SK38 出土遺物実測図（2）

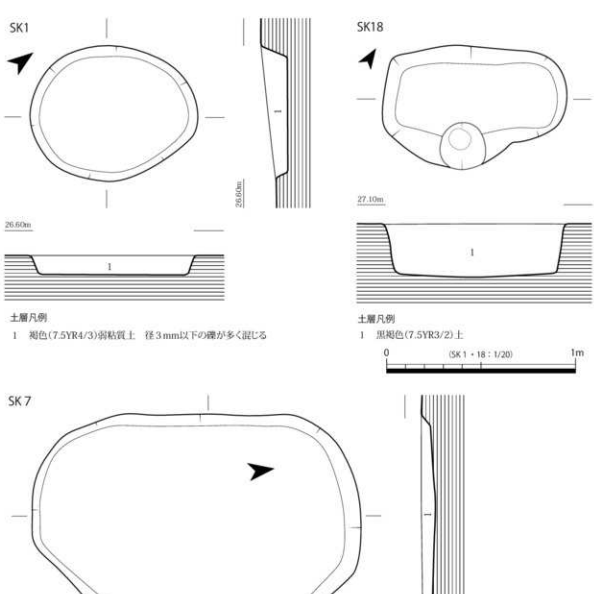
表面の方が滑らかで、裏面は凹凸が著しい。

遺構の時期は、出土遺物から弥生時代前期後半～中期前半と考える。遺構の性格は、出土遺物に完形品がないことや、出土状態からみて、廃棄土坑と考える。

SK 1（第 61・66・67 図　図版 58・59）

調査区北東側の H 1 グリッドに位置する、平面形が楕円形、断面形が逆台形状を呈する土坑である。検出面での標高は 26.47 m である。規模は、長径が 89cm、短径が 72cm、深さが最深で 14cm を測る。主軸方向は N37° E である。埋土は、褐色の弱粘質土で礫が多く混じる。

遺物は出土していないが、遺構の時期は、周辺遺構との関係から弥生時代と考える。遺構の性格は不明である。



第61図　SK 1・7・18実測図

SK 7（第61・66・67図　図版53・58・59）

調査区中央東側のＦ３グリッドに位置する。南東側に約2.5 m離れて竪穴建物SI 2がある。平面形は楕円形で、規模は長軸が262cm、短軸が175cm、深さが16cmを測る。主軸方向はＮ７°Ｅである。検出面での標高は26.84～26.92 mである。埋土はやや粘性のある暗褐色土の単層である。遺物は、埋土から弥生土器の甕（195・203・204・206）が出土した。遺構の時期は、出土遺物から弥生時代前期後半と考える。

SK18（第 61・67 図　図版 59）

調査区西側のＣ５グリッドに位置し、竪穴建物 SI ９の南東側にある。平面形は隅丸方形で、南東部分がややふくらみ、柱穴によって壊される。断面形は箱状で、底面は平坦になる。検出面での標高は 27.00 ｍである。規模は長軸が 98cm、短軸が 65cm、深さが 32cm を測る。主軸方向はＮ 57 °Ｅである。埋土は、径２cm 以下の礫が混じる黒褐色土の単層である。

埋土上層から、弥生土器の丸底の鉢（210）が出土した。遺構の時期は、出土遺物から弥生時代終末期～古墳時代初頭と考える。遺構の位置からみて、SI ９の中央土坑の可能性も考えたが、出土遺物の時期や、埋土に木炭や焼土が含まれない点からみて、SI ９とは無関係の遺構であり、その性格は不明である。

SK28（第 62・66・67 図　図版 58・59）

調査区中央のＥ４グリッドに位置する。平面形は不整な隅丸方形、断面形は逆台形状及び皿状を呈する土坑である。検出面での標高は 26.86 ～ 26.97 ｍである。規模は、長さが 214cm、深さが最深で 29cm を測る。主軸方向はＮ 26°Ｗである。埋土は後世の複数の柱穴に壊されるが、３・４層の２つの層を主体とする。３層は暗褐色、４層は明褐色のいずれも礫混じりの粘質土を主体とする。遺構の南東側で土坑 SK29 及び溝 SD24 と隣接する

遺物は、埋土から弥生土器の甕（196・199）・鉢（205）等が出土した。遺構の時期は、出土遺物から弥生時代後期前葉～中葉と考える。遺構の性格は不明である。

SK29（第 62・67 図　図版 53・59）

調査区中央のＥ４グリッドに位置する。平面形は不整楕円形、断面形が皿状を呈する。検出面での標高は 26.80 ｍである。規模は、長径が 136cm、短径が 74cm、深さが９cm を測る。主軸方向はＮ 53°Ｅである。埋土は、礫混じりの暗褐色粘質土の単層である。遺構の北東部分をはじめ一部を後世の柱穴によって壊される。また、遺構の北東側では溝 SD24 を壊し、東側では土坑 SK26 と隣接する。

遺物は、とくに北東側の埋土から弥生土器の壺（209）・器台（214）をはじめとする土器が多く出土した。遺構の時期は、出土遺物から弥生時代後期と考える。遺構の性格は不明である。

SK25（第 63・66 図　図版 58）

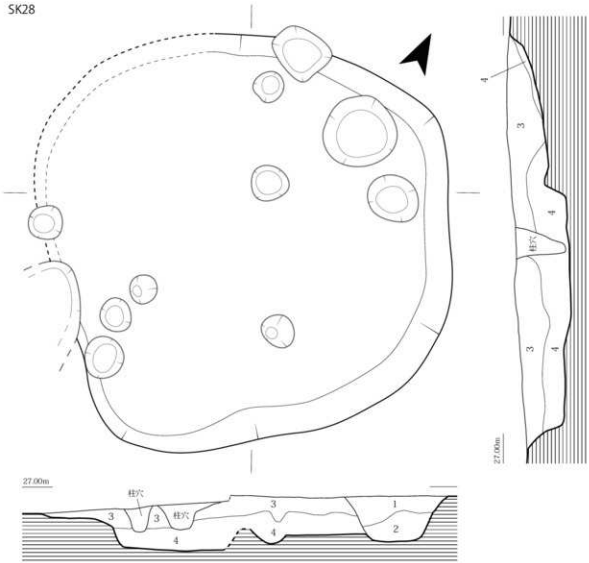
調査区南西側のＣ６グリッドに位置する、平面形が不整形、断面形が縦横断面とも逆台形状を呈する土坑である。検出面での標高は 26.25 ～ 26.29 ｍである。規模は、最大長が 172cm、最大幅が 102cm、深さが最深で 29cm を測る。主軸方向は N65°Ｗである。埋土は、上層の１～３層は砂礫混じりの褐灰色または灰褐色土を主体とし、下層の４～９層は灰褐色またはにぶい黄褐色砂を主体とする。竪穴建物 SI11 中央付近の埋土下の床面から掘り込んであり、SI11 の中央土坑に当たる可能性があるが、SI11 との関係は不明である。

遺物は、埋土から弥生土器の甕（197）が出土した。遺構の時期は、出土遺物から弥生時代後期後葉～終末期と考える。

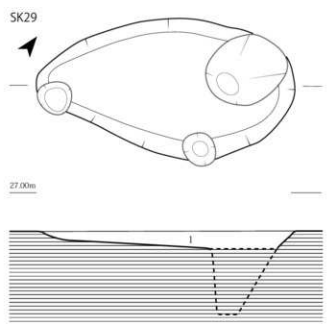
SK30（第 63 図　図版 53）

調査区中央北西壁際のＥ３グリッドに位置する、平面形がほぼ円形、断面形が逆台形状を呈する

SK28



SK29



土層凡例

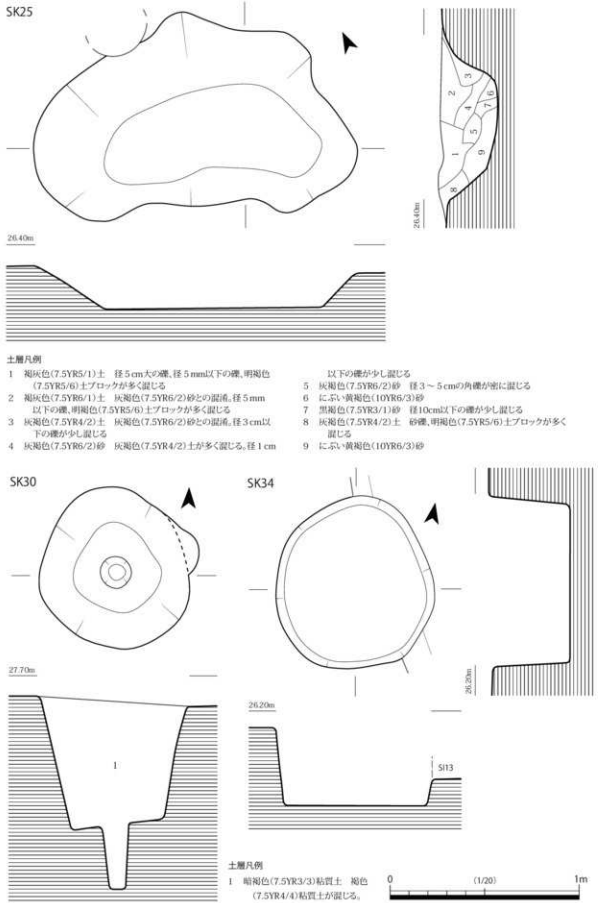
1　褐色(10YR4/4)粘質土　小礫が混じる。弥生土器片を含む
2　灰褐色(7.5YR4/2)粘質土　明褐色(7.5YR5/8)粘質土ブロックが混じる
3　暗褐色(7.5YR3/4)粘質土　礫が多く混じる。弥生土器を多く含む
4　明褐色(7.5YR5/6)粘質土　礫が少し混じる。弥生土器を少し含む
柱穴埋土　灰褐色(7.5YR4/2)粘質土　弥生土器・木炭を含む

土層凡例

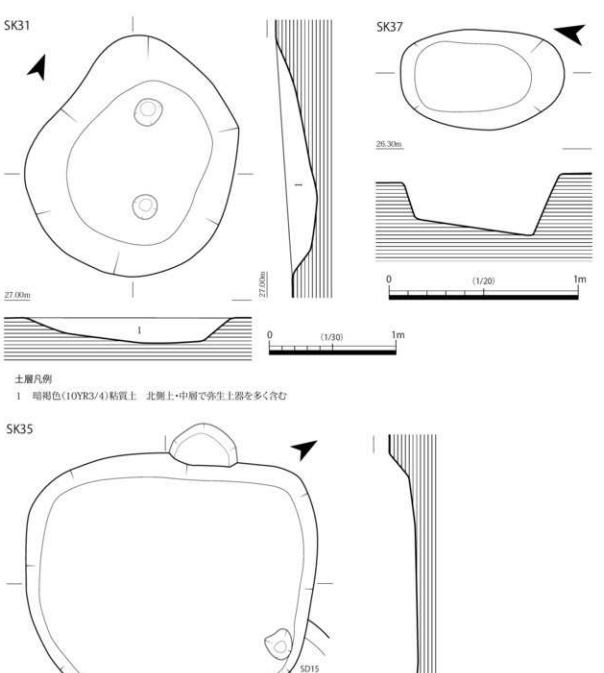
1　暗褐色(10YR3/3)粘質土　灰褐色(7.5YR4/2)土と径5mm以下の礫が少し混じる

0　(1/20)　1m

第 62 図　SK28・29 実測図



第 63 図　SK25・30・34 実測図



第 64 図　SK31・35・37 実測図

土坑である。検出面での標高は 27.54 ～ 27.60 mである。規模は、直径が 79 ～ 87cm、深さが最深で 70cm を測る。底面中央には中央ピットがあり、その規模は、直径が 16cm、深さが 35cm を測る。埋土は、暗褐色粘質土を主体とし、木炭を少し含む。

木炭を除く遺物は出土していないが、遺構の形状や周辺遺構との関係から、遺構の時期及び性格

は縄文～弥生時代の落とし穴と考える。

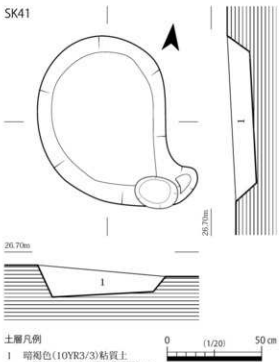
SK31（第 64・66 図　図版 53・54・58）

調査区中央付近のＥ４グリッドに位置する、平面形が不整楕円形、断面形が皿状を呈する土坑である。検出面での標高は 26.90 ～ 26.96 ｍである。規模は、長径が 192cm、短径が 165cm、深さが最深で 24cm を測る。主軸方向は N23°Ｗである。埋土は、暗褐色粘質土を主体とする。北東側に土坑 SK11 が隣接する。

北側埋土上層から弥生土器の壺（193）をはじめ、土器が多く出土した。出土遺物から、遺構の時期は弥生時代前期後半と考える。遺構の性格は不明である。

SK34（第 63・66・67 図　図版 53・58・59）

調査区北東側の南東壁際、Ｈ３グリッドに位置する、平面形がほぼ円形、断面形が箱形状を呈する土坑である。検出面での標高は 26.12 ｍである。規模は、直径が 84 ～ 91cm、深さが 43cm を測る。遺構の東側は竪穴建物 SI13 の壁面を壊すことから、SI13 よりも新しいと考える。



第 65 図　SK41 実測図

遺物は、埋土下層から弥生土器の壺（201・208）が出土した。出土遺物と SI13 との関係から、遺構の時期は、弥生時代後期と考える。遺構の性格は不明である。

SK35（第 64・66・67 図　図版 54・58・59）

調査区中央付近のＥ４・５グリッドに位置する、平面形が不整な隅丸長方形、断面形が逆台形状を呈する土坑である。検出面での標高は 26.48 ～ 26.58 ｍである。規模は、長軸が 228cm、短軸が 206cm、深さが最深で 20cm を測る。主軸方向は N30°Ｅである。遺構の東隅には、遺構外に延びる溝 SD15 が取り付き、排水の機能をもつと考える。

遺物は、埋土から弥生土器の甕（198）・器台（212・213）等が出土した。出土遺物から、遺構の時期は弥生時代後期後葉～終末期と考える。遺構の性格は、排水施設や器台を伴うことから、何らかの祭祀に使用された可能性がある。

SK37（第 64・67 図　図版 54・59）

調査区中央南側のＥ５グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸が 86cm、短軸が 53cm、深さが最深で 33cm を測る。主軸方向はＮ 12°Ｗである。検出面での標高は 26.13 ～ 26.17 ｍである。遺構の南東側約 1.2 ｍの地点に竪穴建物 SI22 がある。

出土遺物は弥生土器の鉢（207）等がある。遺構の時期は、出土遺物から弥生時代中期後半と考える。遺構の性格は不明である。

SK41（第 65 ～ 67 図　図版 58・59）

調査区中央部のＥ４グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈するが、南東隅が東側に張り出し

ており、勾玉形状である。規模は長軸が 101cm、短軸が 71cm、深さは西側の最深部で 17cm、他は 10cm 程度である。主軸方向はＮ６°Ｗで、埋土は礫が多く混じる暗褐色粘質土を主体とする。

出土遺物は、弥生土器の壺（202）と石包丁（216）がある。遺構の時期は、出土遺物から弥生時代中期と考える。遺構の性格は不明である。

土坑等出土遺物（第 66・67 図　図版 58・59）

193 ～ 214 はいずれも弥生土器、215 は土製紡錘車、216 は石包丁である。

193 は SK31 出土の壺で、頸部から口縁部にかけて大きく外反し、胴部は球状で、上げ底になる。頸部下位に数条の沈線文、胴部上位には上下２～３条ずつの沈線に挟まれた部分に羽状文を施す。全体にミガキを施す。弥生前期後半に比定する。

194・200・211・215 は SX １出土で SI ９の遺物を含む。194 が壺の口縁部で、垂下口縁の外面に波状文を施す。200 は甕底部で、底面が凸レンズ状の上げ底で、胴部は細長い。211 は鉢または高杯の口縁部で、内湾気味に立ち上がる杯部の口縁端部が肥厚する。194・211 は弥生中期後半、200 は弥生後期前葉～中葉に比定する。215 は弥生土器の転用品で、外面にハケ目を残す。外面から穿孔する。

195・203・204・206 は SK ７出土である。195・206 は甕の口縁部で、口縁が直立し、端部を面取り、内傾させる。外面には 195 が断面三角形状、206 が断面台形状の突帯を廻らす。東九州系で弥生前期後半に比定する。203・204 は甕の底部で平底である。

196・199・205 は SK28 出土である。196 は甕で、く字状の口縁をもち、胴部上位に刺突文を廻らす。199 は甕の底部で、外底面は凸レンズ状になる。205 は鉢で、く字状口縁をもち、胴部上位がやや張る。いずれも弥生後期前葉～中葉に比定する。

197 は SK25 出土の甕の口縁部～胴部片で、口縁は大きく外反する。全体に薄手で、内面はヘラケズリで調整する。弥生後期後葉～終末期に比定する。

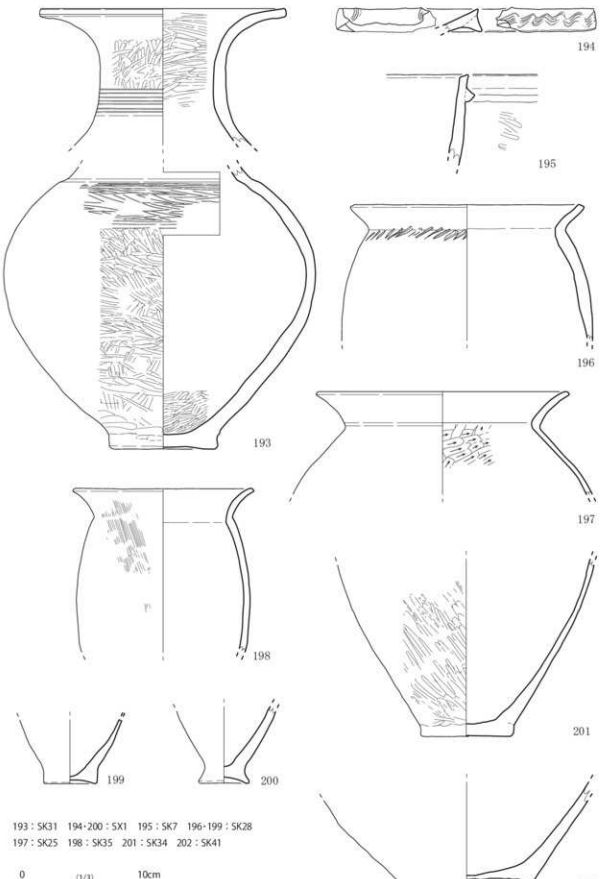
198・212・213 は SK35 出土である。198 は長胴の甕で、大きく外反する口縁をもつ。212 と 213 は器台の口縁部で、いずれも外面に斜線文を施し、その上に勾玉形の飾りを貼り付ける。弥生後期後葉～終末期に比定する。

201・208 は SK34 出土で、いずれも壺の胴部～底部である。201 は平底でやや上げ底気味になる。208 は底面中央がわずかに凹レンズ状になり、胴部上位に最大径がある。いずれもミガキ調整を施す。弥生後期に比定する。

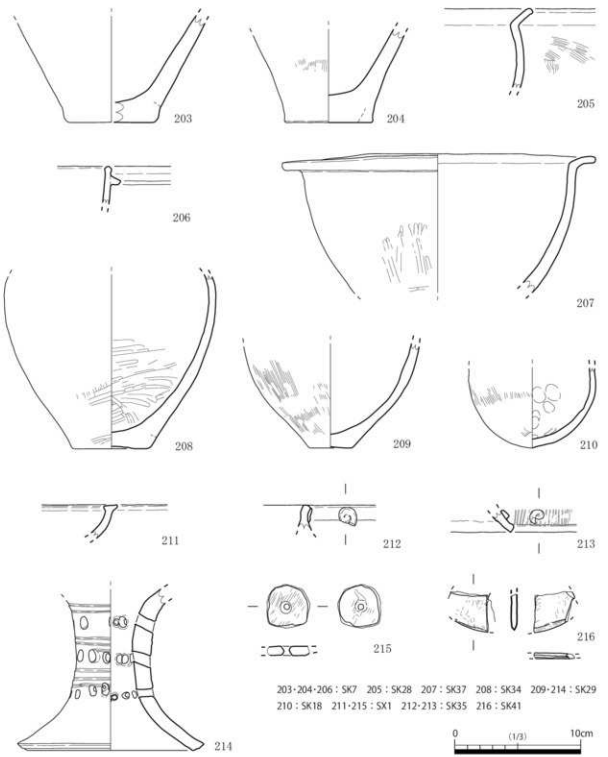
202・216 は SK41 出土である。202 は壺の底部で、外底面の剥離が著しい。弥生中期に比定する。216 は泥質片岩製で、両刃である。穿孔部分は残存しない。

207 は SK37 出土の鉢で、胴部が内湾気味に開き、口縁部は緩やかに逆Ｌ字状に折れる。弥生中期後半に比定する。

209・214 は SK29 出土である。209 は壺または鉢の底部で、平底の底部から、胴部が内湾気味に立ち上がる。214 は器台の脚部である。直立する筒部から端部がハ字状に開く。筒部に２～３条単位の沈線を３段入れ、その下側に、円形の穿孔を複数個ずつ少なくとも３段に廻らす。弥生後期に比定する。



第 66 図　土坑等出土遺物実測図（1）



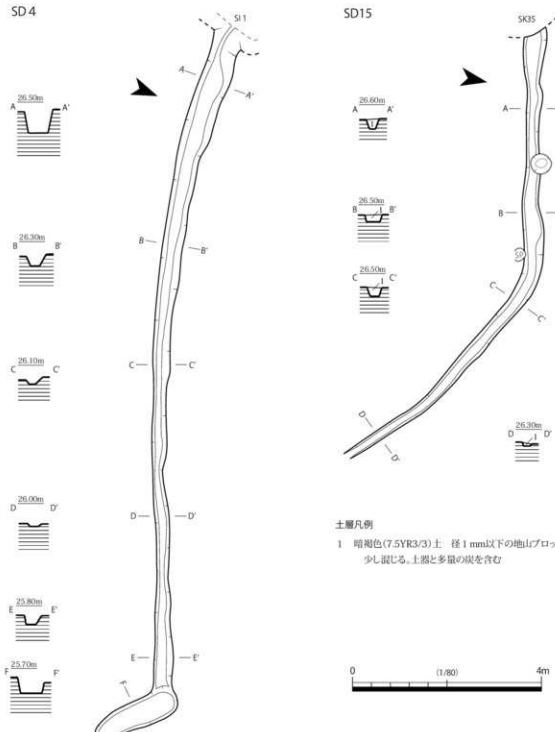
第 67 図　土坑等出土遺物実測図（2）

210 は SK18 の埋土上層から出土した鉢の底部である。丸底で全体に球形を呈する。弥生終末期～古墳初頭に比定する。

（4）溝

SD 4（第 68・82 図　図版 54・68）

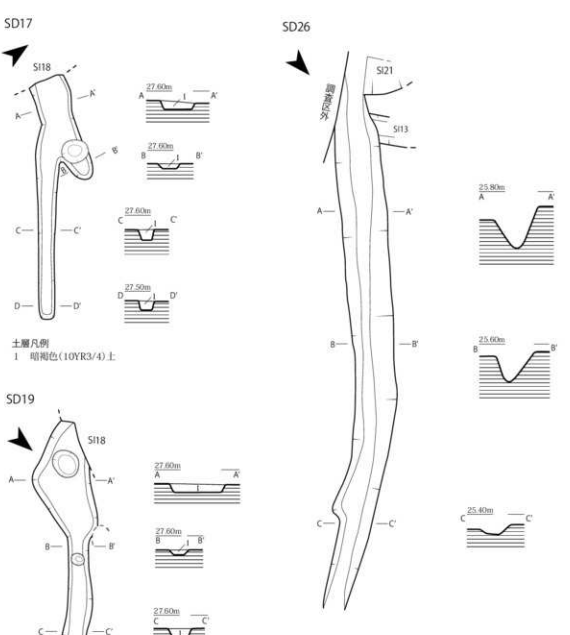
調査区北東側のＧ２・Ｈ２・Ｉ２グリッドに位置する。竪穴建物 SI 1 の北東隅に付属する溝で、



第 68 図　SD 4・15 実測図

N 73° E 方向に延び、東端で南東方向に屈曲して逆 L 字状を呈する。SI 1 との取り付け部から溝の東端までの長さは 14.00 m、幅が 0.20 ～ 0.64 mで、深さは SI 1 付近で最も深く 0.52 m、最も浅い箇所で 0.08 mを測る。屈曲部からの南東側の長さは 1.92 m、最大幅が 0.60 m、深さが 0.36 mである。溝の床面の標高は、SI 1 付近で 25.92 m、東端付近で 25.28 mであり、地形に沿って緩やかに傾斜する。SI 1 の排水を目的とした溝と考える。

出土遺物は、弥生土器の壺（264）・甕（263・266）・鉢（268）・支脚（269）がある。遺構の時期は、



第 69 図　SD17・19・26 実測図

出土遺物や SI 1 との関係から弥生時代後期中葉～終末期と考える。

SD15（第 68・82 図　図版 54・68）

調査区中央南寄りの E 4・F 4・5 グリッドに位置する。土坑 SK35 の東側に付属する溝で、N 78° E 方向に延び、半分程の地点で N 120° E 方向に大きく曲がりく字状を呈する。SK35 との取り付け部から屈曲部までの長さは 5.28 m、屈曲部から南東側の終点までの長さは 5.40 m で、幅は 0.18 ～ 0.50 m、検出面からの深さは最深部で 0.20 m、終点付近で 0.08 m を測る。溝の床面の標

高は、SK35 付近で 26.10 m、南東側の終点付近で 25.94 mであり、地形に沿って緩やかに傾斜する。SK35 底面の標高が 26.38 mとやや高いことを踏まえると、排水を目的とした溝と考える。

出土遺物は、弥生土器の器台(261)と土師器の鍋(271)がある。土師器の鍋は後世の混入と考える。遺構の時期は、出土遺物から弥生時代終末期と考える。

SD17（第 69 図　図版 55）

調査区中央北寄りのＥ３グリッドに位置する。竪穴建物 SI18 の東側に付属する溝で、N145°W 方向に延び、途中で東側に分岐する。SI18 との取り付け部から溝の南東端までの長さは 2.54 m、幅が 0.18 ～ 0.40 mで、深さは 0.08 ～ 0.12 mを測る。分岐部から東端までの長さは 0.30 m、最大幅が 0.26 m、深さが 0.05 mである。床面の標高は、SI18 付近で 27.40 m、南東端付近で 27.30 mであり、地形に沿って緩やかに傾斜する。埋土は、暗褐色土の単層である。SI18 東隅底面の標高が 27.31 mで SD17 の床面より高いが、SD17 が SI18 の壁面上部を壊すことから、SI18 の排水を目的とした溝と考える。

出土遺物はないが、SI18 との関係から、弥生時代中期前半と考える。

SD19（第 69 図　図版 55）

調査区中央北寄りのＥ３グリッドに位置する。竪穴建物 SI18 の南東側に接する溝で、Ｎ 50° Ｅ方向に延びる。SI18 との接点から溝の北東端までの長さは 3.20 m、幅が 0.22 ～ 0.62 mで、深さは 0.05 ～ 0.10 mを測る。溝の床面の標高は、SI18 付近で 27.35 m、北東端付近で 27.40 mであり、ほぼ平坦である。埋土は、暗褐色土の単層である。SI18 との先後関係等は不明である。

遺物は出土していないが、周辺遺構との関係から、遺構の時期は弥生時代後期と考える。遺構の底面が平坦で、北東側がわずかに高いため、排水の用途は考えにくく、性格は不明である。

SD26（第 69 図　図版 55）

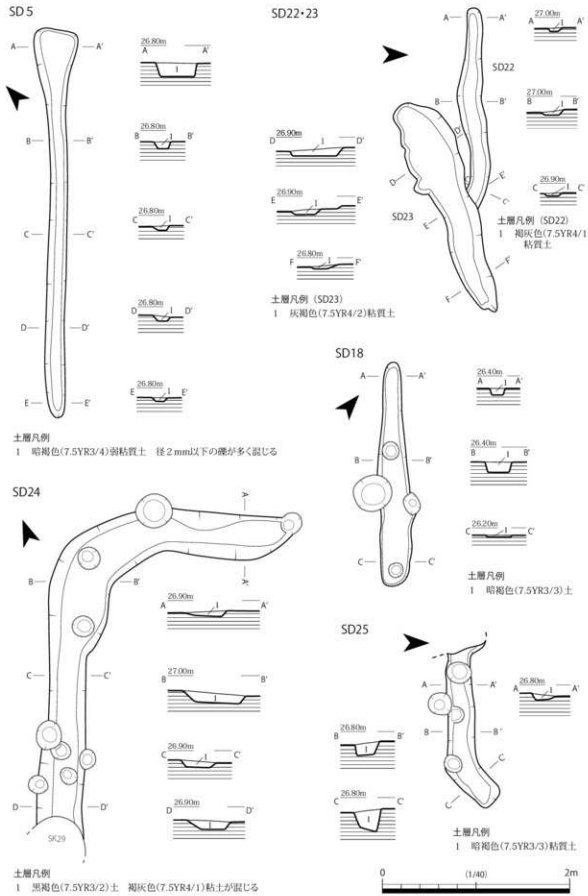
調査区北東側南東壁沿いのＩ３グリッドに位置する。竪穴建物 SI21 の北東隅に付属する溝で、竪穴建物 SI13 の北東隅を壊す。およそ N40° E 方向に延び、途中でわずかに東側に湾曲する。SI21 との取り付け部から溝の北東端までの長さは 5.48 m、幅が 0.24 ～ 0.50 mである。溝の断面形は大半がＶ字状を呈し、深さは 0.10 ～ 0.40 mで SI21 に近い方が深い。床面の標高は、SI21 付近で 25.20 m、北東端付近で 25.18 mであり、ほぼ水平に近い。SI21 北東隅付近の底面の標高が 25.35 mとやや高いことから、SI21 の排水を目的とした溝と考える。

遺物は出土していないが、SI21 との関係から、弥生時代後期中葉～後葉と考える。

SD 5（第 70・82 図　図版 55・68）

調査区北側のＧ１グリッドに位置する、N42° E 方向の溝である。平面形は、北東端付近でやや開いて幅広になる形状を呈する。規模は、長さが 4.16m、幅が 0.20 ～ 0.47m、深さが 0.04 ～ 0.15m を測る。埋土は暗褐色粘質土で、径２mm 以下の礫が多く混じる。床面の標高は、南西端で 26.66 m、北東端で 26.46 mと北東側に向かって緩やかに傾斜しており、最終的には北東谷に合流すると推定する。出土遺物には弥生土器の壺（262）と支脚（270）がある。遺構の時期は、出土遺物から弥生時代後期中葉～後葉と考える。

SD18（第 70・82 図　図版 68）



第 70 図　SD 5・18・22 ～ 25 実測図

調査区中央南寄りのＥ５グリッドに位置する、Ｎ 42°Ｗ方向の溝である。規模は長さが 2.40 m、幅が 0.18 ～ 0.35 mで、深さは 0.06 ～ 0.23 mを測る。床面の標高は、北西端付近で 26.20 m、南東端付近で 26.10 mであり、地形に沿って緩やかに傾斜する。埋土は、暗褐色粘質土の単層である。掘立柱建物 SB ３の構成柱穴や後世の柱穴によって部分的に壊される。

遺物は、埋土から石鏃（273）が出土した。時期を決定できる遺物は出土していないが、周辺遺構との関係から、遺構の時期は弥生時代後期と考える。排水用の溝と考える。

SD22（第 70 図）

調査区西側のＤ５グリッドに位置する。わずかに蛇行するが、ほぼ東西方向に延びる溝で、東端を溝 SD23 によって壊される。規模は、残存長が 2.14 m、幅が 0.16 ～ 0.25 m、深さが最深部で 0.06 mを測る。埋土は、褐灰色粘質土の単層である。床面の標高は西端が 26.86 m、東端が 26.76 mで、SD23 側に向けて低く傾斜する。時期決定に至る遺物は出土していないが、SD23 との関係から、弥生時代後期の遺構と考える。排水用の溝と考える。

SD23（第 70・82 図　図版 68）

調査区西側のＤ５グリッドに位置し、SD22 を壊している。Ｎ 65°Ｅ方向の溝で、規模は、長さが 2.42m、幅が 0.32 ～ 0.60m、深さは 0.10m 以下である。埋土は灰褐色粘質土である。床面の標高は、南西側で 26.70 m、北東側で 26.67 mとほぼ水平である。遺構の南西側から、弥生土器の壺の底部（265）が出土した。遺構の時期は、出土遺物から弥生時代後期と考える。SD22 との関係及び遺構の性格については不明である。

SD24（第 70 図）

調査区中央付近のＥ４グリッドに位置する。Ｎ 21°Ｅ方向から、途中でＮ 132°Ｅ方向に曲がる平面形がＬ字状の溝である。南西端を土坑 SK29 に壊され、複数の柱穴にも壊される。規模は、南西端から屈曲部までの残存長が 3.10 m、屈曲部から南東端までの長さが 2.28 mを測る。幅が 0.39 ～ 0.64 mで、深さは 0.05 ～ 0.10 mを測る。床面の標高は、南西端付近で 26.67 m、南東端付近で 26.73 mとほぼ水平であり、排水の機能をもつとは考えにくい。埋土は単層で、黒褐色土に褐灰色粘土が混じる。出土遺物はないが、SK29 との関係から、遺構の時期は弥生時代後期と考える。

SD25（第 70・82 図　図版 68）

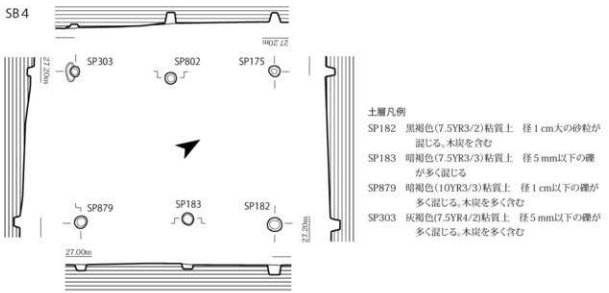
調査区中央付近のＥ４グリッドに位置する。ほぼ東西方向の溝で、東端付近で北東側に折れる。西端は土坑 SK26 に壊され、複数の柱穴にも壊される。規模は、長さが 1.68 m、幅が 0.16 ～ 0.32 mを測り、深さは 0.05 ～ 0.23 mで東側の方が深い。床面の標高は、西端付近で 26.64 m、東端付近で 26.44 mで、東側に向かって低くなる。埋土は、暗褐色粘質土の単層である。

遺物は、埋土から弥生土器の鉢（267）が出土した。遺構の時期は、出土遺物から弥生時代後期前葉で、排水用の溝と考える。

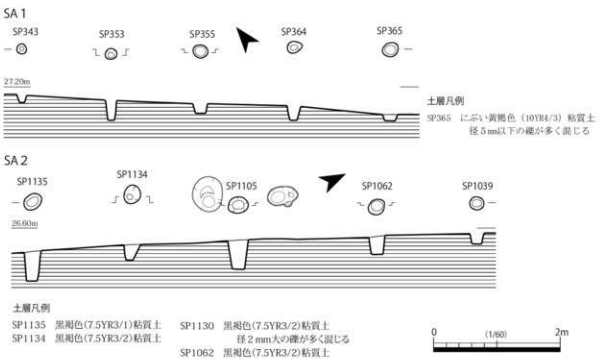
３　古墳時代後半以降、時期不明の遺構と遺物

（１）掘立柱建物・柱列

SB ４（第 71 図　図版 60）



第71図 SB 4実測図



第72図 SA 1・2実測図

調査区北東側のF 2・3グリッドに位置する、梁行が1間、桁行が2間の建物で、検出面での標高は26.90 ～ 27.10 mである。規模は、梁行が両柱筋とも 2.40 m、桁行は南東側で 3.05 m、北西側で 3.10 mを測り、床面積は 7.38㎡となる。桁行の柱間間隔は、南東側が SP182 から SP879 に向けて 1.40 m、1.65 m、北西側が SP303 から SP175 に向けて 1.50 m、1.60 mを測る。主軸方向はN 30° E である。構成柱穴の直径は 0.30 ～ 0.40 m、深さは 0.05 ～ 0.18 mである。埋土は、SP182・183・879 が黒褐色～暗褐色粘質土、SP303 が灰褐色粘質土をそれぞれ主体とする。SP182・879・303 は木炭を含む。木炭を除く遺物は出土せず、遺構の時期は不明である。

SA 1（第 72 図　図版 60）

調査区中央付近のＥ３・４・Ｆ４グリッドに位置する、５個の柱穴からなる柱列である。主軸方向はＮ 49°Ｗである。検出面での標高は、北西端で 27.10 m、南東端で 26.75 mであり、北西－南東方向に緩やかに傾斜する。全長は 5.85 mで、柱間間隔は SP343 から SP365 に向けて 1.40 m、1.40 m、1.50 m、1.55 mを測る。構成柱穴の直径は 0.15 ～ 0.25 m、深さは 0.10 ～ 0.30 mを測る。SP365 の埋土は、にぶい黄褐色粘質土を主体とする。遺物は出土せず、遺構の時期は不明である。

SA 2（第 72 図　図版 60）

調査区中央南寄りのＤ５・Ｅ５グリッドに位置する、５個の柱穴からなる柱列である。主軸方向はＮ 28°Ｅである。検出面での標高は、北東端で 26.55 m、南西端で 26.20 mであり、北東－南西方向に緩やかに傾斜する。全長は 7.05 mで、柱間間隔は SP1039 から SP1135 に向けて 1.60 m、2.20 m、1.70 m、1.55 mを測る。構成柱穴の直径は 0.20 ～ 0.30 m、深さは 0.16 ～ 0.47 mを測る。埋土は、黒褐色粘質土を主体とする。遺物は出土せず、遺構の時期は不明である。

（2）土坑・柱穴

SK10（第 73 図　図版 61・62）

調査区中央東側のＦ３グリッドに位置し、竪穴建物 SI ２の北西隅壁を壊す。平面形が楕円形、断面形が逆台形状の土坑で、規模は長径が 80cm、短径が 70cm、検出面からの深さが 30cm を測る。主軸方向はＮ 58°Ｅである。埋土は、しまりの強い黒褐色粘質土を主体とする。にぶい赤褐色粘土や木炭が混じるが、SI ２を掘り込んでいるため、建物埋土の可能性がある。土坑の中央では、須恵器甕の胴部が、胴部上位を南側に向けて、斜めに置かれた状態で出土した。甕は頸部～口縁部を欠損するが、遺構上面が後世の削平を受けるため、意図的に破壊されたものか、削平により欠損したのかは判然としない。胴部は割れているが、ほぼ完形に復元でき、内部に埋土が入り込んでいることから、土圧により壊れたと推定する。

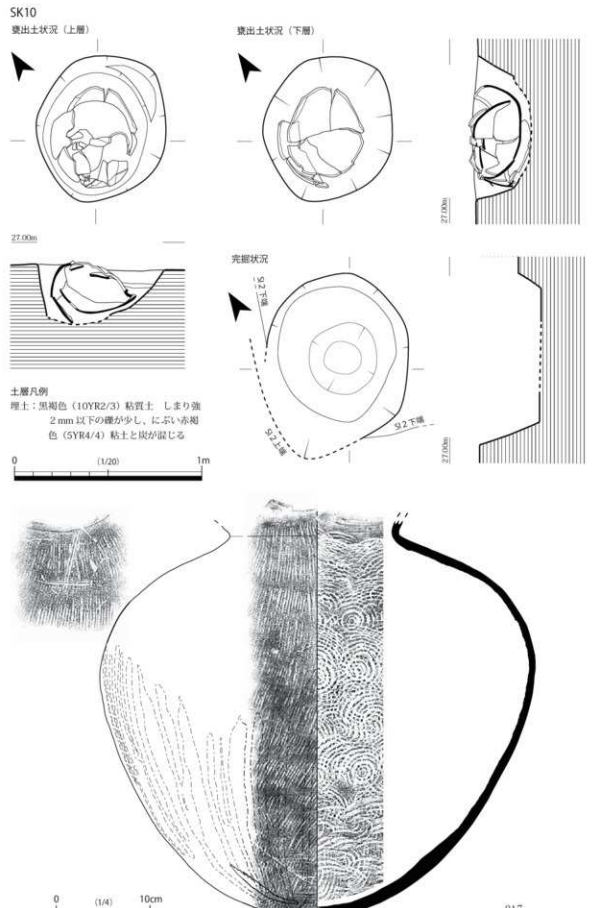
須恵器の甕（217）は、残存高が 42.4cm、最大径が 46.5cm を測る。胴部中位に最大径があり、全体に球形状を呈する。肩部外面に「×」字状のヘラ記号がある。胴部外面は平行タタキ、内面は同心円文当て具痕を残す。６世紀後半～７世紀前半に比定する。遺構の時期は、出土遺物から古墳時代後期と考える。

SK 2（第 74 図　図版 63）

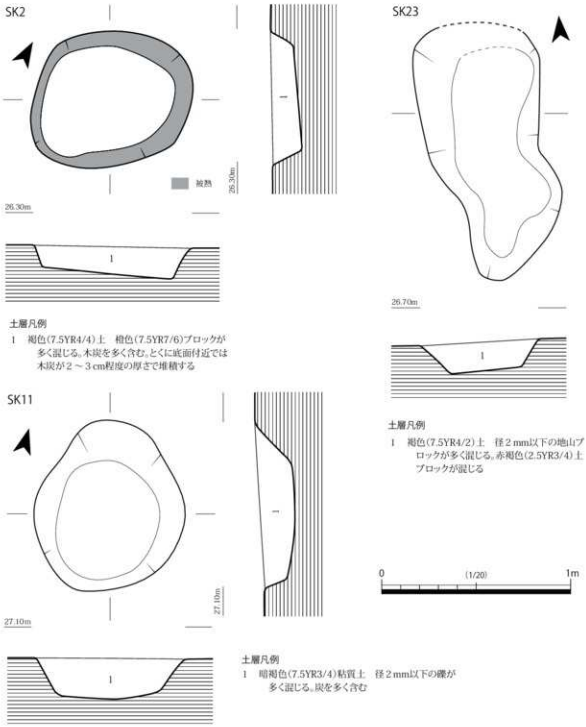
調査区北東側のＨ３グリッドに位置する、平面形が隅丸長方形に近く、断面形が逆台形状を呈する土坑である。検出面での標高は 26.13 mである。規模は、長軸が 84cm、短軸が 72cm、深さが最深で 15cm を測る。主軸方向はＮ 61°Ｅである。遺構の壁面は被熱する。埋土は、褐色土が主体で、焼土ブロックや木炭が多く混じり、とくに底面付近に木炭が多く堆積する。竪穴建物 SI13 の北側壁面の一部を壊す。

底面付近で出土した木炭の放射性炭素年代測定（AMS 法）の結果、暦年較正年代（２δ）は AD667 ～ AD774 の年代値を示した。その結果から、遺構の時期は７世紀後半～８世紀後半で、遺構の性格は木炭焼成坑と考える。

SK11（第 74 図　図版 63）



第 73 図　SK10 及び出土遺物実測図

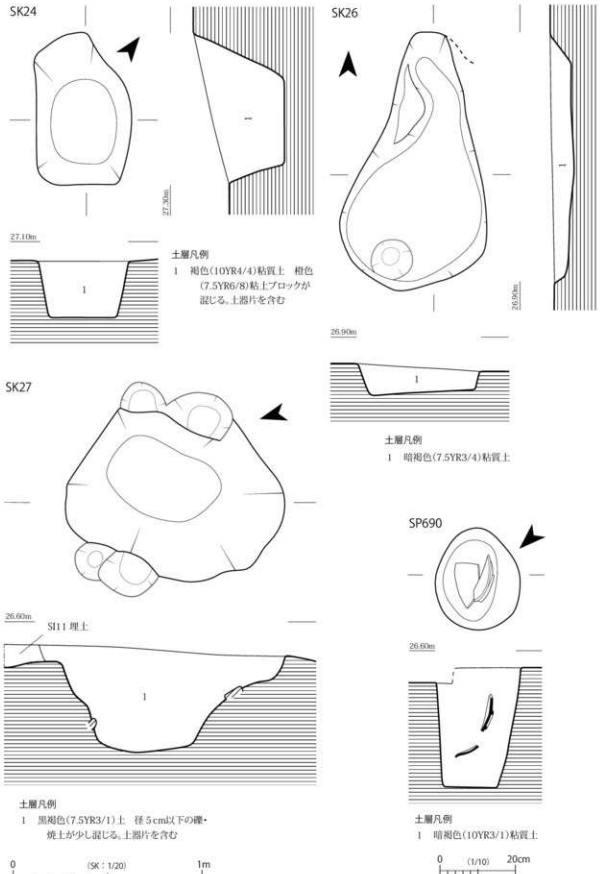


第 74 図　SK 2・11・23 実測図

調査区中央付近のＥ 4 グリッドに位置する、平面形が楕円形に近く、断面形が逆台形状を呈する土坑である。検出面での標高は 26.94 ｍである。規模は、長径が 90cm、短径が 80cm、深さが最深で 26cm を測る。主軸方向はＮ 16°Ｗである。埋土は、礫混じりの暗褐色粘質土を主体とし、木炭を多く含む。南西側に土坑 SK31 が隣接する。木炭を除く遺物は出土せず、遺構の時期、性格とも不明である。

SK23（第 74 図）

調査区南西側のＣ 6 グリッドに位置する、平面形が不整形、横断面形が逆台形状を呈する土坑



第 75 図　SK24・26・27、SP690 実測図

である。検出面での標高は 26.50 ～ 26.54 mである。規模は、最大長が推定で 135cm、最大幅が 67cm、深さが最深で 15cm を測る。主軸方向はＮ５°Ｅである。埋土は、褐色土を主体とし、地山や赤褐色土のブロックが混じる。竪穴建物 SI10 南東側の壁溝を壊すことから、遺構の時期は SI10 より新しいが、詳細は不明である。遺構の性格も不明である。

SK24（第 75 図）

調査区中央北寄りのＤ４・５グリッドに位置する土坑である。平面形は北西部分が不整な長方形で、断面形は縦断面が逆台形状、横断面が箱形状を呈する。検出面での標高は 27.00 ～ 27.18 m と北西－南東方向に傾斜し、底面の標高は 26.70 mと平坦である。規模は、長軸が 80cm、短軸が 50cm、深さが最深で 49cm を測る。主軸方向はＮ 36°Ｗである。埋土は、褐色粘質土を主体とし、橙色粘土ブロックが混じる。SI23 の北隅を壊すことから、遺構の時期は SI23 より新しいが、時期を決定できる遺物は出土しておらず、詳細は不明である。遺構の性格も不明である。

SK26（第 75 図）

調査区中央付近のＥ４グリッドに位置し、SD25 を壊す。平面形は不整形で、北側が細いひょうたん形を呈する土坑で、断面形は逆台形状を呈する。規模は長軸が 137cm、短軸が 78cm、深さが 14.5cm を測る。主軸方向は南北である。埋土は暗褐色粘質土の単層である。遺物は、埋土から弥生土器小片と安山岩の剥片が出土した。遺構の時期・性格については不明である。

SK27（第 75 図　図版 63）

調査区南西側のＣ７グリッドに位置する、平面形が不整楕円形、断面形が半卵形状を呈する土坑である。検出面での標高は 26.42 ～ 26.48 mである。規模は、長径が 116cm、短径が 90cm 程度、深さが最深で 56cm を測る。主軸方向はＮ 17°Ｅである。埋土は、黒褐色土を主体とし、礫や焼土が少し混じる。竪穴建物 SI11 の埋土を掘り込むことから、遺構の時期は SI11 より新しいが、時期を決定できる遺物は出土せず、詳細は不明である。遺構の性格も不明である。

SP690（第 75・80 図　図版 63・67）

調査区南西側のＣ６グリッドに位置する柱穴である。検出面での標高は 26.15 mである。規模は、長径が 26cm、短径が 22cm、深さが 32cm を測る。竪穴建物 SI10 東側の壁溝を壊す。埋土から土師器椀（254）が出土しており、遺構の時期は 12 世紀前半～中頃と考える。他の関係する柱穴は確認していない。

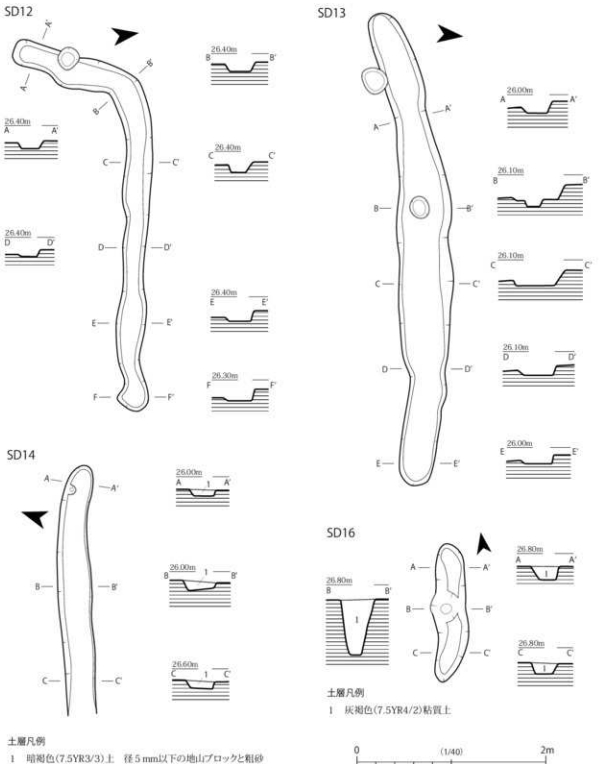
（３）溝

SD12（第 76 図　図版 63）

調査区北東隅のＪ１グリッドに位置する。すぐ南側にほぼ平行して溝 SD13 がある。全体にほぼ東北方向に延びるが、西側の一部がＮ 155°Ｗ方向に折れる。規模は、南西端から屈曲部までの長さが 1.30m、屈曲部から東端までの長さが 3.42 mで、幅が 0.18 ～ 0.34m、深さが 0.07 ～ 0.12m を測る。床面の標高は、南西端付近で 26.16 m、東端付近で 26.09 mとほぼ等高線に沿っており、排水の機能をもつとは考えにくい。遺物は、土器小片が出土したのみで、詳細な時期は不明である。

SD13（第 76・82 図　図版 63・68）

調査区北東隅のＪ１グリッドに位置する。すぐ北側にはほぼ平行して溝 SD12 がある。ほぼ東西

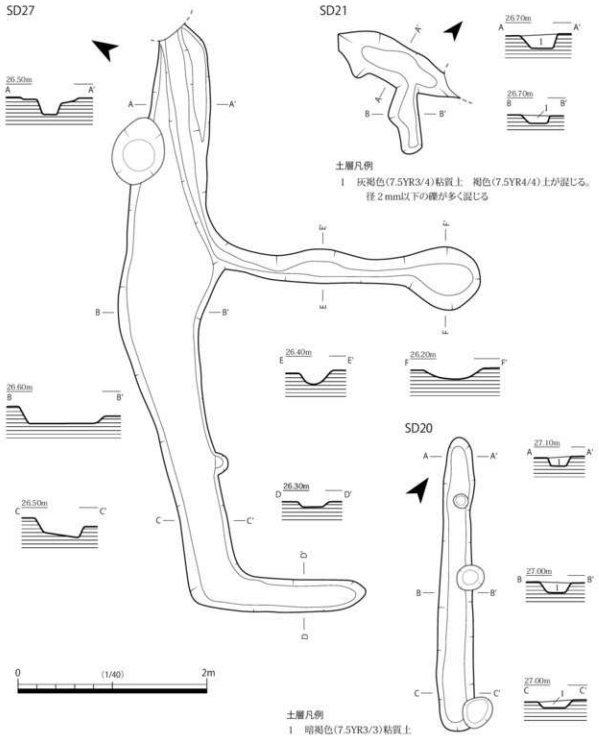


第 76 図　SD12 ～ 14・16 実測図

方向の溝で、規模は、長さが約 5.00m、幅が 0.34 ～ 0.58m、深さが 0.09 ～ 0.16m を測る。床面の標高は 25.82 m程度とほぼ水平で、ほぼ等高線に沿っており、排水の機能をもつとは考えにくい。

遺構内の柱穴からは、土師器の柱状高台杯（272）が出土した。後世の柱穴に伴う遺物の可能性が高く、遺構の時期を決定する根拠にはできなかった。

SD14（第 76 図　図版 64）



第77図 SD20・21・27実測図

調査区中央南側のF 4グリッドに位置し、ほぼ東西方向に延びる。残存長が2.65 m、幅が0.28～0.36 m、深さが0.07～0.11 mを測る。床面の標高は25.80 mとほぼ水平で、等高線に沿っており、排水の機能をもつとは考えにくい。埋土は単層で、径5 mm以下の地山ブロックと粗砂が混じる。遺物は土器小片が少量出土したのみで、詳細な時期は不明である。

SD16（第76図 図版64）

調査区中央南側のF 4グリッドに位置する、ほぼ南北方向の溝である。すぐ北東側には竪穴建物SI2がある。遺構中央部は後世の柱穴に壊される。規模は、長さが1.46m、幅が0.40m、深さが0.14m

で、埋土は灰褐色粘質土の単層である。底面の標高は 26.52 mで水平であり、排水の機能をもつとは考えにくい。遺物は出土せず、遺構の時期は不明である。

SD20（第 77 図　図版 64）

調査区中央西側のＤ４・５グリッドに位置する、Ｎ 35°Ｗ方向の溝である。後世の柱穴によって一部を壊される。規模は、長さが 3.10 m、幅が 0.28 ～ 0.40m、深さが 0.10 m弱である。床面の標高は北西端付近が 26.91 m、南東端付近が 26.85 mで、南東側がやや低い。埋土は暗褐色粘質土の単層である。遺物は出土せず、遺構の時期は不明である。排水のための溝と考える。

SD21（第 77 図　図版 64）

調査区中央西寄りのＤ５グリッドに位置する。ほぼ東西に延びる溝で、やや東寄りで南東方向に分岐し、平面形はＴ字状を呈する。東側は SP1190 に壊される。規模は、東西方向で残存長が 1.45m、分岐部分から南東端の長さが 0.75 m、幅が 0.22 ～ 0.42 m、深さが 0.09 ～ 0.18 mを測る。床面の標高は 26.43 mとほぼ水平で、排水の機能は考えにくい。埋土は灰褐色粘質土の単層である。遺物は土器の小片のみで、遺構の時期は不明である。

SD27（第 77 図　図版 64）

調査区中央南寄りのＥ５グリッドに位置する。Ｎ 55°Ｅ方向の溝で、南西端付近で南東側に向かってほぼ直角に曲がり、中央付近では南東側に向かって分岐する。主溝の北東部分では、主溝を掘り込んだ溝が中央の分岐溝に続いており、別の溝の可能性がある。主溝の北東端及び溝の一部は後世の遺構によって壊される。規模は、主溝の残存長が 6.18 m、幅が 0.50 ～ 1.00 mで、南西端の屈曲部の長さが 1.32 m、幅が 0.34 mである。主溝から南西屈曲部にかけての深さは 0.07 ～ 0.17 m、床面の標高は 26.12 ～ 26.26 mで南西及び南東側が低い。中央の分岐溝の長さは 2.82 m、幅が 0.24 ～ 0.68 mである。主溝の北東部分から中央分岐溝にかけての深さは 0.10 ～ 0.15 m、床面の標高が 25.98 ～ 26.18 mを測り南東側が低い。遺物は出土せず、遺構の時期は不明である。排水溝の可能性がある。

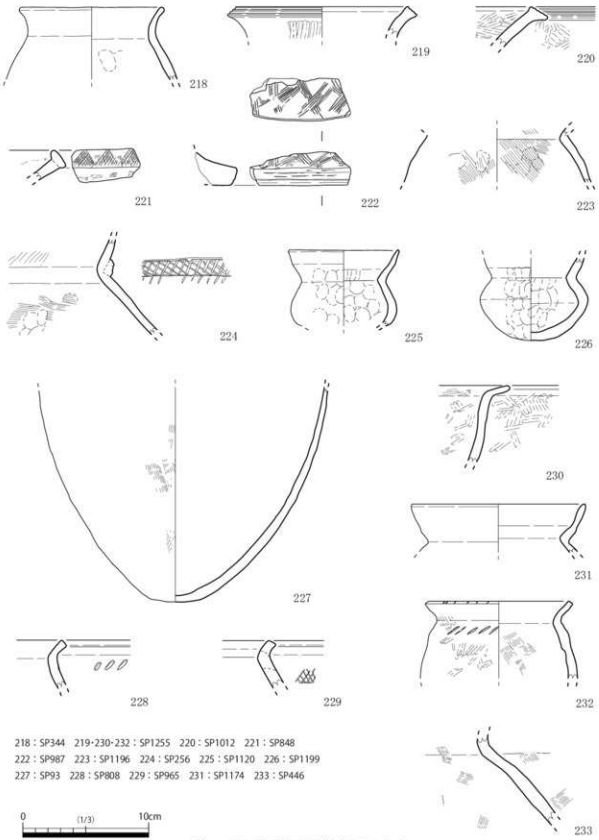
4　柱穴・溝・東谷出土遺物と遺構外遺物

（1）柱穴出土遺物（第 78 ～ 81 図　図版 65 ～ 67）

218 ～ 250 は弥生土器または古式土師器である。218 は SP344 出土の壺で、頸部が緩やかに外湾し、胴部最大径は口径より大きく、肩部は張らない。弥生後期前葉に比定する。

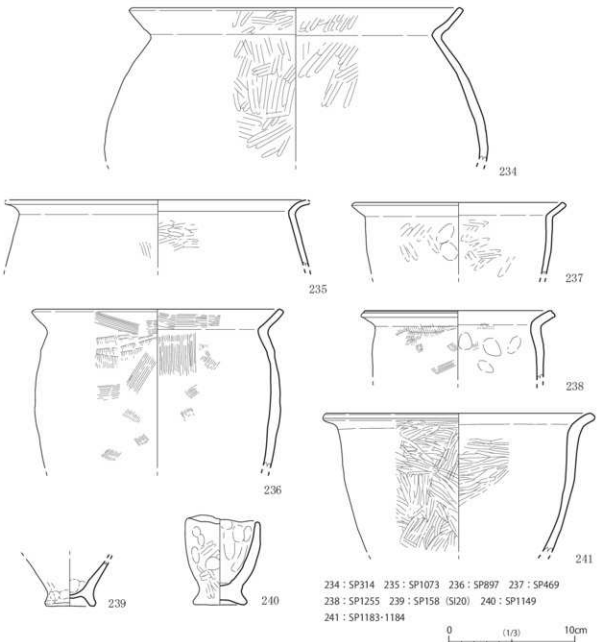
219・230・232・238 は SP1255 出土である。219 は断面三角形の口縁をもつ壺で、端部外面に擬凹線を入れる。230 は鉢で、口縁がく字状に折れ、上部は水平に近い。232・238 は甕で、232 は口縁がく字状でわずかに跳ね上げる。肩部は張らず、胴部上位に斜行刺突文を入れる。238 は口縁部がく字状に折れ、口唇部に１条の擬凹線を入れる。いずれも弥生中期末～後期前葉に比定する。

220 は SP1012 出土の壺で、垂下口縁の退化形態である。弥生中期末～後期前葉に比定する。221 は SP848 出土の壺で、口縁端部に内傾する拡張部を付けて複合口縁状にし、外面に三角文と斜格子文の組み合わせ文様を櫛描きする。弥生後期前葉に比定する。北部九州系の可能性がある。222 は SP987 出土の複合口縁壺の口縁部片である。外面に櫛描きの集線文を鋸歯状に施す。弥生後期中葉～後葉に比定する。223 は SP1196 出土の甕の胴部片である。224 は SP256 出土の甕の



第 78 図　柱穴出土遺物実測図（1）

頸部～胴部片である。頸部と胴部との境に突帯を貼り付け、櫛描きの斜格子文を施す。弥生終末期に比定する。225 は SP1120、226 は SP1199 からそれぞれ出土した小型丸底壺である。いずれも頸部と胴部の屈曲が緩やかで、頸部が内湾気味に開き、胴部中央に最大径をもつ。内外面とも最終

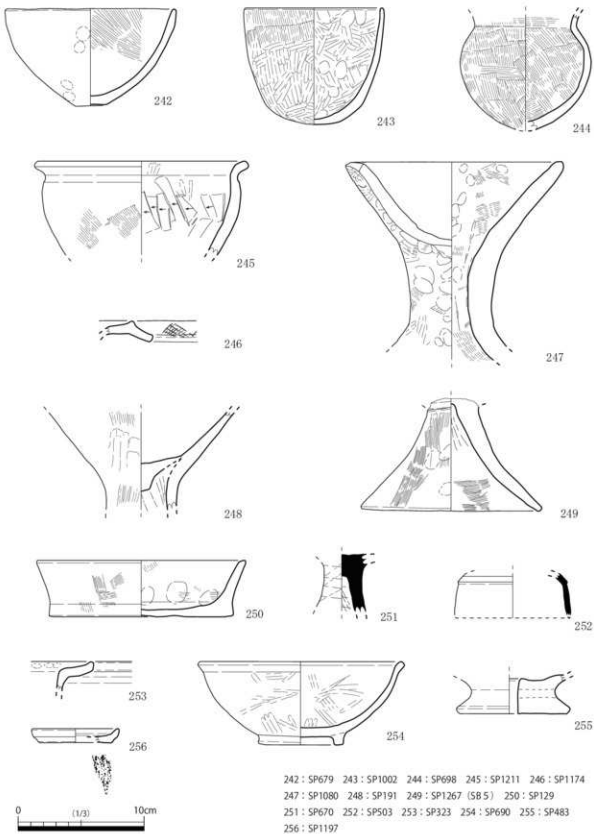


第 79 図　柱穴出土遺物実測図（2）

調整を指オサエで行う。古墳初頭～前期に比定する。227 は SP93 出土の甕の胴部～底部片で、丸底を呈する。古墳前期か。228 は SP808、229 は SP965 からそれぞれ出土した、く字状に短く屈曲する口縁をもつ鉢で、屈曲部下には前者が斜行刺突文と、後者が三角文と斜格子文の組み合わせによる文様を施す。弥生後期中葉～前葉に比定する。

231・246 は SP1174 出土である。231 は複合口縁甕で、複合口縁部は明瞭な段をもたず、緩やかに外傾する。古墳前期～中期に比定する。246 は壺口縁部で、垂下口縁の外面に三角文と斜格子文の組み合わせ文様を櫛描きする。弥生中期後葉～末に比定する。233 は SP446 出土の甕胴部片である。

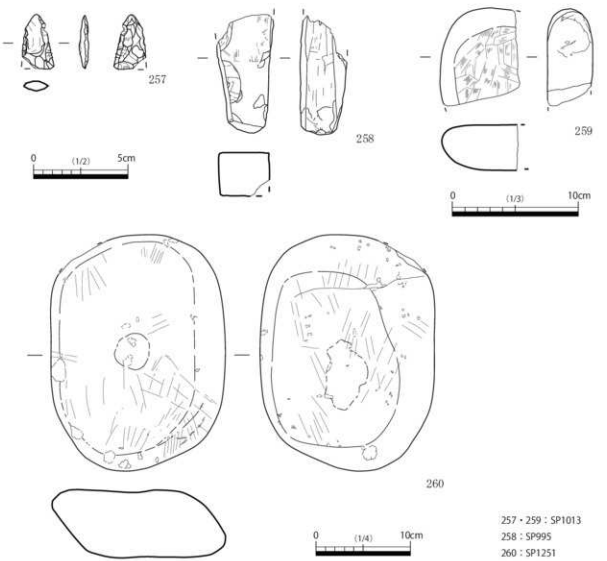
234 ～ 237 はいずれも甕の口縁部～胴部上半である。234 は SP314 出土で、跳ね上げ気味の口縁をもつ。口径より胴部最大径が広い。内外面とも最終調整でミガキを行う。235 は SP1073 出土で、口縁がく字状に緩やかに外反し、口径より胴部最大径が広い。236 は SP897、237 は SP469 出土で、



第 80 図　柱穴出土遺物実測図（3）

いずれも跳ね上げ気味の口縁をもち、肩部が張らない。234 は弥生中期末～後期前葉、235 ～ 237 は弥生後期前葉～中葉に比定する。

239 は SP158 出土の甕または鉢の底部で、断面台形状になる。弥生後期前葉～中葉に比定する。



第 81 図　柱穴出土遺物実測図（4）

240 は SP1149 出土のミニチュア台付鉢で、杯部が半卵形で、底部が凹レンズ状になる。241 は SP1183・1184 出土の鉢で、緩やかに外反するく字状の口縁部をもつ。内外面ともに最終調整でミガキを行う。242 は SP679 出土の鉢で、平底の狭い底部から体部が内湾気味に開く。弥生後期中葉～後葉に比定する。243 は SP1002 出土の鉢で、丸底の底部から体部が直立気味に立ち上がる。外面口縁部を除き、最終調整はミガキを行う。弥生後期後葉～終末期に比定する。244 は SP698 出土の小型丸底壺である。頸部はあまり開かない。胴部内外面にハケ目を施す。古墳初頭～前期に比定する。245 は SP1211 出土の鉢で、如意状の短い口縁部をもち、肩部は張らない。弥生後期前葉～中葉に比定する。246 は SP1174 出土の壺口縁部で、垂下口縁の外面に三角文と斜格子文の組み合わせ文様を櫛描きする。弥生中期後葉～末に比定する。247 は SP1080 出土の支脚で、逆ハ字状に開く受部の中央に繰り込みを入れる。弥生後期中葉～後葉に比定する。248 は SP191 出土の高杯である。杯部が逆ハ字状に開く。杯底部は粘土を充填して埋める。弥生後期前葉に比定する。249 は SP1267 出土の高杯の脚部である。短脚でハ字状に開く。外面はタテ方向、内面はヨコ方向のハケ目をそれぞれ施す。弥生後期後葉～終末期に比定する。250 は SP129 出土の杯状容器である。

薄手で平底状の底部をもち、体部との境はやや肥厚する。体部は、底部から外面が屈曲、内面が湾曲しながら立ち上がり、外傾する。内外面ともハケ目調整を施す。

251 は SP670 出土の須恵器高杯の脚部で、6 世紀後半～7 世紀前半に比定する。252 は SP503 出土の須恵器杯蓋で、天井部と体部の境に段をもつ。6 世紀後半に比定する。253 は SP323 出土の土師質土器の鍋で、口縁部水平に近く折れ、跳ね上げ状になる。13 世紀後半～ 14 世紀後半に比定する。254 は SP690 出土の土師器椀で、体部が内湾気味に開き、口縁が外反する。断面方形で厚手の高台をもつ。12 世紀前半～中頃に比定する。255 は SP483 出土の土師器の柱状高台杯である。底部中央には穿孔を行う。12 世紀後半に比定する。256 は SP1197 出土の土師器皿で、底部回転糸切りを行う。14 世紀後半～末に比定する。

257・259 は SP1013 出土である。257 は泥質片麻岩製の石鏃で、平基無茎式である。259 は花崗岩製の磨石である。258 は SP995 出土の砥石で、断面四角形の四面を砥面として使用する。凝灰岩製である。260 は SP1251 出土の台石で、表面中央に敲打による凹み、その周辺は擦痕を残し、砥面としても使用する。花崗岩製である。

（2）溝出土遺物（第 82 図　図版 68）

261・271 は SD15 出土である。261 が弥生土器の器台の口縁部で、大きく開いて端部は水平につくる。口唇部に櫛描きの×字文を廻らせる。弥生終末期に比定する。271 は土師器の鍋である。体部が直線的に立ち上がり、口縁部で屈曲して外傾する。12 世紀後半～ 13 世紀代に比定でき、流れ込みと考える。

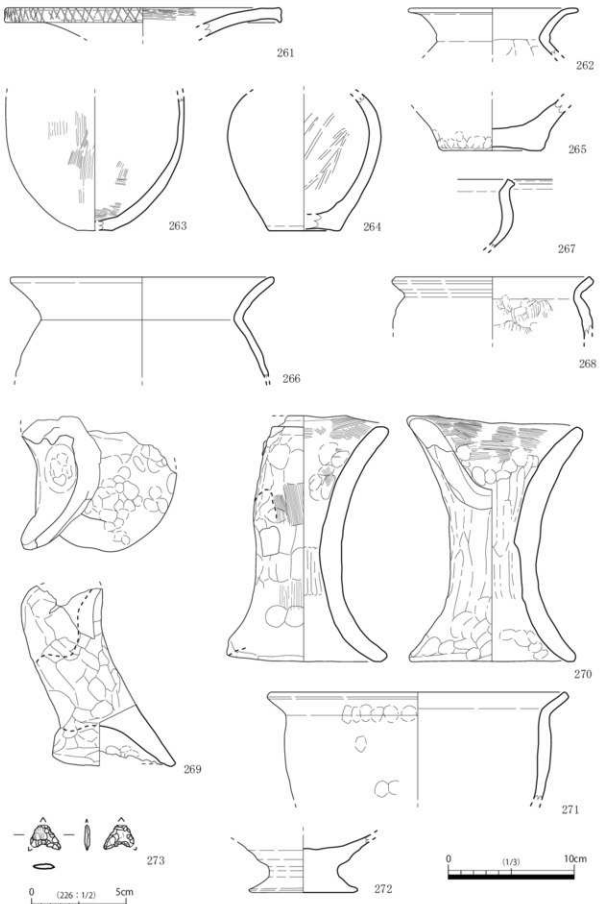
262・270 は SD 5 出土である。262 は弥生土器の壺の口縁～頸部で、頸部が開き、口縁付近は水平に折る。弥生後期中葉～後葉に比定する。270 は支脚で、受部が逆八字状、脚端部が八字状に開き、受部に繰り込みを入れる。内面は受部付近がヨコ方向のハケ目調整で、脚端部付近は指オサエする。弥生後期中葉～後葉に比定する。

263・264・266・268・269 は SD 4 出土である。263 と 266 は甕で、263 が丸底の胴部、266 は口縁が大きく外反する。264 は平底の壺で、胴部上位に最大径があり、丸みをもつ。268 は厚手の鉢で、く字状に屈曲する口縁をもつ。269 は支脚で、全体的に内傾する形状である。上側に開く舌状の受部が三方に取り付くと推定する。脚部内面は凹レンズ状に中空となる。山陰系である。264 は時期不明、268 は弥生後期中葉で、他はいずれも弥生後期後葉～古墳初頭に比定する。

265 は SD23 出土の壺の底部で、広い底部外面が凹レンズ状にわずかに上がる。弥生後期前葉～中葉に比定する。267 は SD25 出土の鉢で、体部が直立気味に立ち上がり、口縁が外側に短く折れる。弥生後期前葉に比定する。272 は SD13 内の SP 1 出土で、土師器の柱状高台杯である。12 世紀後半に比定する。273 は SD18 出土の安山岩製の石鏃で、凹基無茎式である。

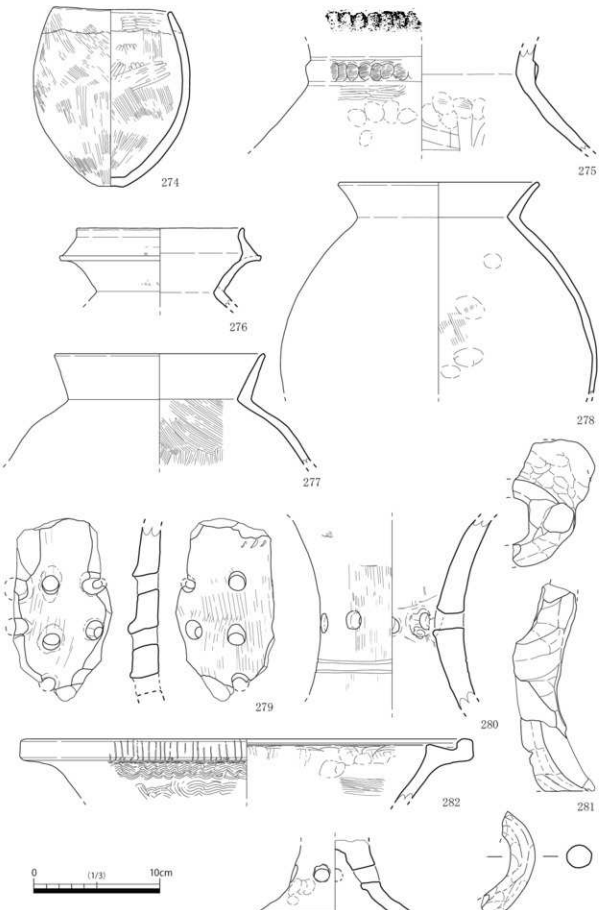
（3）東谷出土遺物（第 83・84 図　図版 69・70）

274 ～ 284 は弥生土器または古式土師器である。274 は鉢で、狭い平底から長卵形の体部がわずかに内湾しながら立ち上がる。内外面ともハケ目後ミガキを施す。弥生後期後葉～終末期に比定する。275・276 は壺で、275 は頸部に扁平な貼付突帯があり、突帯は指オサエを刺突文状に行う。276 は複合口縁壺で、ラッパ状に開く頸部の上面に内傾し端部をわずかに直立させる複合口縁を付

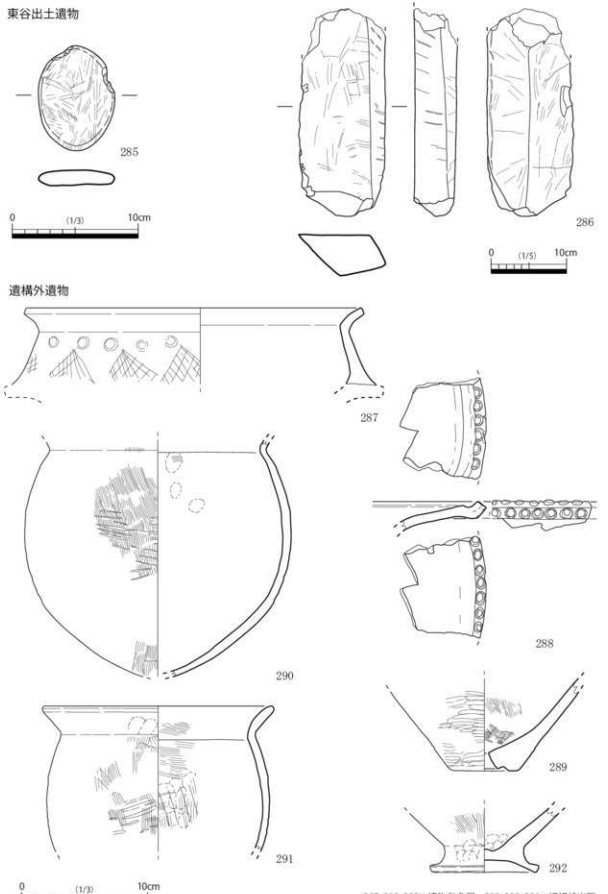


261・271：SD15　262・270：SD5　263・264・266・268・269：SD4
265：SD23　267：SD25　272：SD13－SP1　273：SD18

第 82 図　溝出土遺物実測図



第 83 図　東谷出土遺物実測図（1）



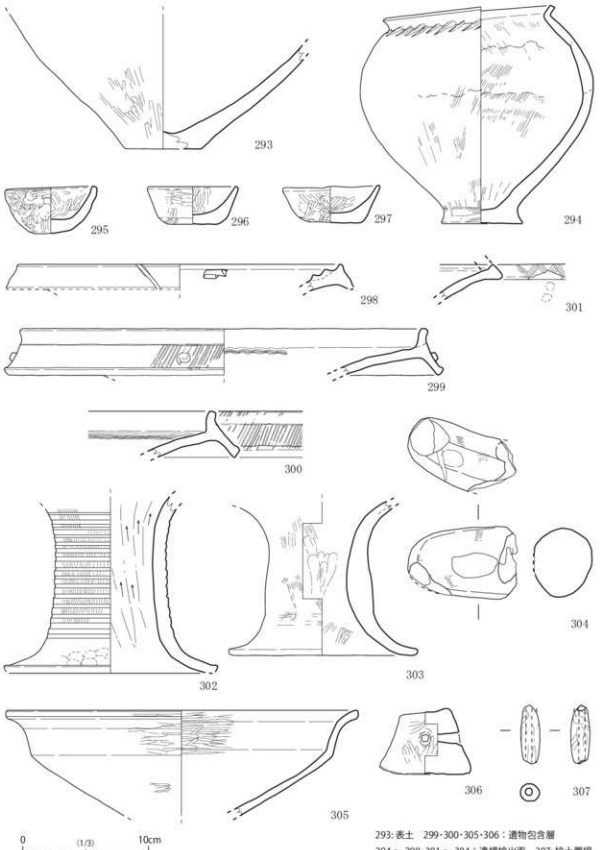
第 84 図　東谷出土遺物実測図（2）・遺構外遺物（1）

ける。275は弥生終末期、276は弥生後期前葉～中葉に比定する。277・278は甕で、いずれもく字状の口縁をもち、口径より胴部最大径が大きい。278の口縁は強く外反する。いずれも弥生後期前葉～中葉に比定する。279・280は器台である。いずれも筒形で、筒部に穿孔するものである。279は直立気味で多くの穿孔を入れ、280は両端に向けて開き、横一列に複数の穿孔を入れる。いずれも弥生後期～終末期に比定する。281は支脚で、体部は筒形を半裁した形状で、脚端部に向けてやや開く。受部は上からみて、体部を基点として半円状になり、基部は直立状に延びると推定する。弥生後期中葉～後葉に比定する。282は内折口縁をもつ壺である。口縁部が外反し、端部は直立する。内面の突帯は口縁端部の高さに近い。端部外面に櫛描きによるタテ方向の直線文、頸部に波状文を施す。弥生中期初頭に比定する。283は短脚の高杯で、厚手の脚部の中央に穿孔する。弥生後期中葉～後葉に比定する。284は把手である。壺等に取り付くものと推定する。弥生後期に比定する。285は石製紡錘車の未成品である。周南市四熊ヶ岳産の角閃石安山岩製と推定する。286は凝灰岩製の砥石である。四面のうち、自然面を除く3面を砥面として使用する。

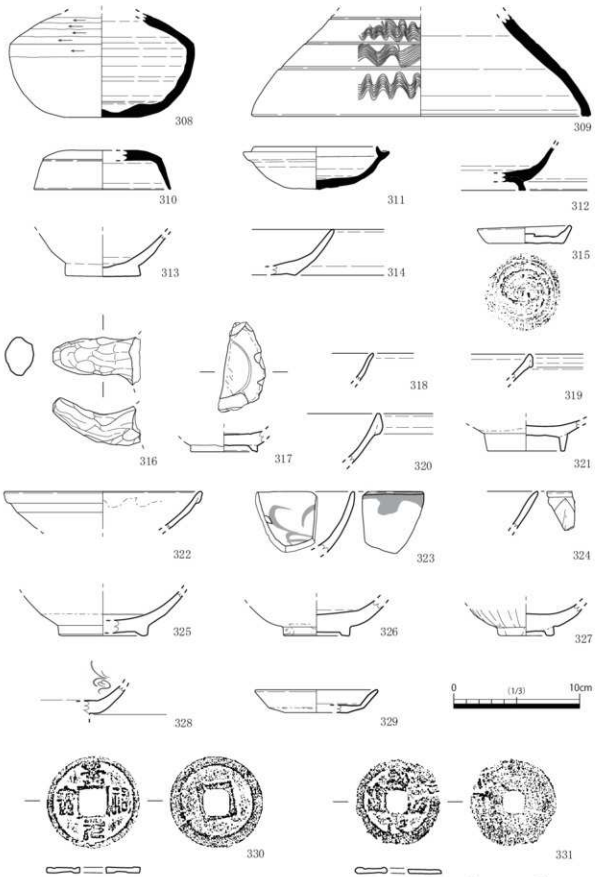
（4）遺構外遺物（第84～87図　図版71～75）

287・289・292・299・300・305・306は遺物包含層、288・290・291・294～298・301～304は遺構検出面、293は表土でそれぞれ出土した弥生土器または土師器である。287は複合口縁壺で、内傾する複合口縁の端部が外側に折れる。外面に竹管文と、櫛描きによる三角文と斜格子文の組み合わせ文様を描く。弥生後期後葉に比定する。288は壺の口縁部で、口縁端部の上面と外面に竹管文を廻らせる。弥生中期初頭に比定する。289は壺の底部で、平底の底外面がやや凹み、底面中央に穿孔がある。弥生後期前葉～中期に比定する。290・291は甕で、290は丸底で、外面はタタキ後ハケ目調整を行う。弥生終末期～古墳初頭に比定する。291は口縁がく字状で、肩部は張らない。後期前葉～中葉に比定する。292は丸底気味の甕で、高台状の細いハ字状に開く短脚が付く。古墳前期に比定する。293は壺底部で、平底から体部が大きく開く。内外面ともミガキを施す。後期前葉～中葉に比定する。294は鉢で、高い上げ底をもつ。口縁は外側に短く折れ、胴部との境にかけて斜交刺突文を施す。弥生後期前葉に比定する。295～297はいずれも平底のミニチュア鉢で、厚手の底部から緩やかに外湾する。内外面ともミガキ調整を行う。弥生後期中葉に比定する。298は垂下口縁をもつ壺で、口縁部は断面三角形に近く、垂下の程度が弱い。外面に櫛描文、内面に粘土貼付文を付ける。弥生中期後半に比定する。301は複合口縁壺で、三角集線文を鋸歯状に廻らす。弥生後期に比定する。299・300・302・303は器台である。299・300は、細長い垂下と上方への突出をもつ。いずれも垂下部の外面に櫛描きによる斜線文、上面には波状文を施す。299は斜線文の上に勾玉を貼り付ける。いずれも弥生終末期に比定する。302・303は、いずれも筒状の体部から、受部と脚部の両側に開く形状をもつ。302は体部に沈線文を施し、303は体部を厚手につくる。弥生後期中葉～終末期に比定する。304は支脚の受部片である。弥生後期中葉～後葉に比定する。305は有段高杯の杯部で、屈折部から口縁が大きく外反する。内外面ともヨコ方向のミガキを施す。弥生後期後葉～終末期に比定する。306は鳥嘴状支脚で、体部中央に水平方向の穿孔がある。弥生後期中葉～後葉に比定する。307は排土置場採集の土錘である。

308・310・311は遺構検出面出土、309は表採、312は北壁出土の須恵器である。308は壺の


293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
0
(1/3)
10cm
293: 表土　299・300・305・306：遺物包含層
294 ～ 298・301 ～ 304：遺構検出面　307: 排土置場

第 85 図　遺構外遺物（2）



308·310·311·313·316·318·319·321·323·324～326·328・329・331：遺構検出面　309: 表採
312·314·315：北壁　317·320·322·327：排土置場　330：遺物包含層

第 86 図　遺構外遺物（3）

332～341･345･347･350～354：遺構検出面　342：表採
343･344：表土除去　346･349･355：排土置場　348：北壁

第 87 図　遺構外遺物（4）

胴部である。胴部はやや肩が張る。309は器台の脚部である。内湾気味に開き、外面は沈線による文様帯にそれぞれ波状文を施す。310は杯蓋である。天井部は水平で、肩部の段から口縁部にかけて直立気味になる。311は杯身で、口径が9.7㎝で、立ち上がりは短い。312は杯身で、やや細長い高台をもつ。308・310・311は6世紀末～7世紀前半、309は6世紀代、312は8世紀代にそれぞれ比定する。

313・316は遺構検出面、314・315は北壁でそれぞれ出土した土師器である。313は上げ底の杯で、底面をヘラ切りする。15世紀後半頃に比定する。314は平底の杯で、体部が外湾する。14世紀代に比定する。315は小皿で、口縁は短く外傾する。底部回転ヘラ切りである。14世紀後半に比定する。316は把手である。断面扁球状で、先端が上方に湾曲する。

317は排土置場採集、318・356は遺構検出面出土の緑釉陶器である。317・318は椀である。317が底部片で、狭い輪高台を貼り付ける。318は口縁部片である。いずれも胎土は灰～灰白色で、防長産である。9世紀後半～10世紀初頭に比定する。356は耳皿と考える。小片のため、図化はしていない（図版73参照）。

319・321は遺構検出面出土、320・322は排土置場採集のいずれも白磁椀である。319・320・322は口縁～体部片で玉縁口縁をもち、321は底部片で高い貼付高台をもつ。いずれも11世紀後半～12世紀前半に比定する。

323～326・328・329は遺構検出面出土、327は排土置場採集のいずれも青磁椀である。323・324は口縁～体部片で、323の内面には草花片彫文、324の外面には鎬蓮弁文を施す。325～328は底部片である。326の底外面は無釉で、327の外面に鎬蓮弁文、328の内面に劃花文を施す。329は青磁皿で、体部は外傾する。底部ヘラケズリを行う。323・328・329は12世紀中頃～後半、324・327は13世紀前半に比定する。

330は遺物包含層出土の「景祐元宝」（初鋳1034年）、331が遺構検出面出土の「□□（紹聖ヵ）元宝」である。いずれも方孔で、330の一辺が0.7㎝、331が0.5㎝を測る。

332～341・345・347・350～354が遺構検出面出土、342が表採、343・344が表土除去中採集、346・349・355が排土置場採集、348が北壁出土の石器である。

332～344は打製石鏃で、333～337・342が凹基無茎式、他は平基無茎式である。332・333は姫島産黒曜石製、334・335・339～343は安山岩製、336・338・344は泥質片岩製であり、337は泥質片麻岩製と推定する。332は未成品である。

345は石槍と考える。安山岩製で押圧剝離痕を残す。346は石錐と考える。泥質片岩製である。347は姫島産黒曜石製の石錐である。348・349は磨製石斧と考える。348は縦方向の擦痕を残す。泥質ホルンフェルス製と推定する。349は珪質片麻岩製である。350はスクレイパーの形状で、両面に調整がみられる。泥質片岩製で、尖頭器の転用の可能性がある。351は泥質片岩製の石包丁で、片刃である。352は泥質片岩製の紡錘車で、平面が隅丸方形、断面が凸レンズ状を呈する。穿孔は中央付近と、やや外れて未貫通の孔がある。353は叩石で、片側端面に敲打痕、表面には擦痕が残る。花崗岩製である。354は磨石である。表面中央に敲打痕が集中し、その周辺に擦痕が残る。355は姫島産黒曜石の石核で、転礫の可能性がある。

第１表　馬場遺跡出土土器観察一覧表（１）

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	口径（復元）	法量（cm）器高（残存）	底径（復元）	最大径（復元）	胎土	焼成	色調　（内）（外）	主な調整　（内）（外）	備考
1	9	14	SI1 北西部	弥生土器	壺	(13.8)	[8.5]	–	–	やや密	良	橙色（7.5YR6/6） 橙色（7.5YR6/6）	口縁部ナデ。他はハケ目 口縁部平行線文、波状文。ナデ。他はハケ目	
2	9	14	SI1 東部埋溝	弥生土器	甕	(18.0)	口胴［9.9］ 胴底［4.6］	1.8	–	やや粗	良	橙色（5YR6/6） 橙色（5YR6/6）	ハケ目 ハケ目	摩滅が著しい
3	9	14	SI1 北東部2層	弥生土器	壺か甕	–	[8.8]	6.3	–	粗	不良	にぶい黄橙色（10YR7/2） 灰褐色（7.5YR5/2）	ハケ目か。底部ナデ後ハケ目 ハケ目	底部に植物圧痕か
4	9	14	SI1 南東部埋溝	弥生土器	鉢か壺	–	[5.5]	3.2		やや粗	やや良	褐灰色（7.5YR4/1） 橙色（5YR6/6）	ミガキ。底部ナデ ハケ目後ミガキ。指オサエ	
5	9	14	SI1	弥生土器	ミニチュア鉢	(7.3)	6.1	1.6	–	粗	やや良	にぶい橙色（7.5YR6/4） 浅黄橙色（7.5YR8/4）	指オサエ、ナデ ハケ目	手づくね成形
6	9	14	SI1	弥生土器	支脚	[8.7]	2.8	2.8	–	やや粗	良	赤色（10R5/6） 橙色（5YR6/6）	ナデ ナデ	手づくね成形
15	13	15	SI2 中央北	土師器	壺	22.5	[17.9]	–	–	やや密	やや良	にぶい橙色（7.5YR6/4） 橙色（5YR6/6）	ケズリ後ナデ 口～胴部ケズリ後ナデ。胴部ハケ目後ナデ	二重口縁壺
16	13	15	SI2 北西部	弥生土器	甕	(17.4)	[6.6]	–	–	やや密	良	灰黄褐色（10YR5/2） 灰黄褐色（10YR5/2）	ナデ、指オサエ、ハケ目 ナデ、指オサエ、ハケ目	内外面とも摩滅が著しい
17	13	15	SI2 南東部	弥生土器	壺か	–	[2.1]	–	–	やや密	やや良	にぶい黄橙色（10YR7/3） にぶい橙色（7.5YR7/4）	ヨコナデ ナデ後、竹管文（径1.2cm）、斜格子刺突文	複合口縁壺
18	13	15	SI2 南東部	土師器	壺	(13.3)	[10.6]	–	–	やや密	やや良	にぶい橙色（7.5YR7/4） にぶい橙色（7.5YR6/4）	口頸部ヨコナデ。胴部ナデ後ハケ目か 口頸部ヨコナデ。胴部ナデ後ハケ目	内外面とも摩滅が著しい
19	13	15	SI2 南東部5層	土師器	壺	(9.8)	[8.9]	–	(14.0)	やや密	やや良	にぶい橙色（7.5YR6/4） にぶい橙色（7.5YR7/3）	口頸部ヨコナデ後ハケ目。胴部ナデ後上方向のヘラケズリ 口頸部ヨコナデ後ハケ目か。胴部ナデ後ハケ目か	外面剥離する
20	13	15	SI2 北西部	土師器	甕	(15.1)	[13.7]	–	–	やや密	良	褐灰色（5YR4/1） 褐灰色（5YR4/1）	指オサエ、ナデ後斜め上方向のナデ ナデ後、上方向のハケ目	
21	13	15	SI2 南東部床面	弥生土器	甕	(14.0)	[6.7]	–	–	やや密	良	にぶい橙色（7.5YR7/4） にぶい橙色（7.5YR6/4）	ヨコナデ、ハケ目、ミガキ ヨコナデ、ハケ目	
22	13	15	SI2 南東部5層	弥生土器	甕	(16.4)	[4.9]	–	–	やや密	やや良	橙色（5YR6/6） 橙色（5YR6/6）	ヨコナデ、指オサエ、ナデか ヨコナデ、指オサエ、ナデか	口縁部に無貫通孔一か所。内外面とも摩滅が著しい
23	13	16	SI2 北東部	弥生土器	ミニチュア鉢	3.3	2.4	–	–	やや密	良	明赤褐色（5YR5/6） 灰褐色（7.5YR6/3）	指オサエ、ナデ 指オサエ、ナデ	手づくね成形
24	13	16	SI2 南東部	弥生土器	ミニチュア鉢	(5.7)	3.65	2.9	–	密	やや良	橙色（5YR7/6） 橙色（5YR7/6）	指オサエ、ナデ 指オサエ、ナデ	手づくね成形
25	13	16	SI2 南東部5層	弥生土器	ミニチュア鉢	5.7	5.3	4.0	–	密	やや良	にぶい橙色（7.5YR7/3） 橙色（5YR6/6）	ヨコナデ、上方向のナデ 指オサエ、ナデか	内外面とも剥離する
26	13	16	SI2－SP6	弥生土器	ミニチュア鉢	5.6	5.4	3.4	7.0	密	良	にぶい橙色（7.5YR6/4） にぶい橙色（7.5YR6/4）	指オサエ、ナデ 指オサエ、ナデ	
27	13	16	SI2 北東部	弥生土器	鉢	–	[2.3]	2.8	–	密	やや良	にぶい赤褐色（5YR6/4） 明赤褐色（5YR5/6）	指オサエ、ナデ 指オサエ、ナデ	底部中央に穿孔、その周囲に訳穿孔痕
28	13	16	SI2 北東部4層	弥生土器	高杯		[7.5]	–	–	密	やや良	橙色（7.5YR7/6） にぶい橙色（7.5YR6/4）	ナデ 指オサエ、ナデ	内外面とも摩滅が著しい
32	14	16	SI3－SP8	弥生土器	ミニチュア鉢	5.1	[5.8]	[4.2]	–	やや密	良	橙色（5YR6/6） 橙色（5YR6/6）	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	
35	18	23	SI6 周溝	弥生土器	甕	–	[23.1]	(3.2)	21.9	やや密	良	浅黄橙色（7.5YR8/4）～灰黄褐色（10YR4/2） 浅黄橙色（7.5YR8/4）	胴部ハケ目。底部付近ハケ目後ナデ 胴部ハケ目後一部指オサエ。底部ナデ	外面に黒斑、煤分類が吸着
36	18	23	SI6 周溝	弥生土器	鉢	(5.1)	7.3	–	–	やや粗	やや良	にぶい橙色（7.5YR7/4） 浅黄橙色（7.5YR8/4）	ミガキ、ナデ ハケ目後ナデ	
37	18	23	SI6 周溝	弥生土器	ミニチュア鉢	5.5	3.6	1.9	–	やや粗	良	橙色（5YR6/6） 橙色（5YR6/6）	ナデ ナデ	
39	22	23	SI12 床面	弥生土器	壺	–	[18.3]	–	–	やや粗	やや良	灰褐色（7.5YR4/2） にぶい赤褐色（2.5YR4/4）	頸部ヨコナデ。胴部上方向の強いナデ 指オサエ、ナデ後ミガキ	外面頸部に連続状突帯

第２表　馬場遺跡出土土器観察一覧表（２）

No.	掲図	図版	出土場所	種別	器種	法量（cm） 口径（復元）	器高（残存）	底径（復元）	最大径（復元）	胎土	焼成	色調　（内）（外）	主な調整　（内）（外）	備考
40	22	24	SI12 南東部	弥生土器	甕	(19.6)	[13.7]	–	–	密	不良	にぶい橙色（7.5YR7/4） にぶい黄橙色（10YR7/3）	指オサエ、ナデか 指オサエ	内面摩滅が著しい
41	22	24	SI12 床面	弥生土器	壺		[16.7]	8.4	–	粗	やや良	にぶい黄橙色（10YR7/3） 橙色（7.5YR6/6）	ケズリかほぼ摩滅 ミガキ	
42	22	24	SI12 南東部	弥生土器	甕		[9.2]	(4.8)	–	やや密	やや良	褐灰色（10YR4/1） にぶい橙色（7.5YR6/4）	指オサエ、ナデか 胴部指オサエ、ナデ、ハケ目、ミガキ、底部ナデ、ハケ目	内面摩滅が著しい
43	22	24	SI12 東北部	弥生土器	鉢	(9.2)	4.8	(5.2)	–	やや密	やや良	にぶい橙色（7.5YR7/4） にぶい橙色（7.5YR6/4）	指オサエ、ナデ、ハケ目 体部指オサエ、ナデ、ハケ目、底部指オサエ、ナデ	
46	22	24	SI20 北壁	弥生土器	甕	(21.6)	[5.0]	–	–	やや粗	良	黒褐色（7.5YR3/1） にぶい橙色（5YR6/4）	不明瞭 一部ハケ目か	内外面とも摩滅が著しい
47	24	27	SI8 北西部	弥生土器	壺	(13.4)	[10.0]	–	–	やや密	良	橙色（5YR7/6） 浅黄橙色（7.5YR8/4）	胴部上半指オサエ 不明瞭	内外面とも摩滅が著しい
48	24	27	SI8 南東部	弥生土器	器台か	–	[1.8]	–	–	密	良	橙色（5YR6/6） にぶい赤褐色（5YR5/4）	ハケ目後丁寧なナデ 口縁部沈線１条、頭部交差する４条一単位のハケ目	
49	24	27	SI8 北東部	弥生土器か	壺か	–	[4.9]	–	–	やや密	やや良	にぶい橙色（7.5YR7/3） にぶい橙色（7.5YR7/3）	ナデ後７条一単位の太いハケ目 ナデ後細いハケ目、その後ヘラ状工具による波状文	
50	24	27	SI8 北東部	弥生土器	壺	–	[3.9]	–	–	やや密	やや良	にぶい橙色（5YR6/4） 灰褐色（5YR6/2）	ヨコナデ ナデ後斜格子文、８本の凹線	
51	24	27	SI8 南東部	弥生土器	壺	–	[3.5]	–	–	やや密	やや良	にぶい赤褐色（5YR5/4） 褐灰色（5YR5/1）	ヨコナデ ナデ後斜格子文、ヘラ状工具による沈線（５条）	50 と同一個体か
52	24	27	SI8 北西部	弥生土器	甕	(14.4)	[5.1]	–	–	やや密	良	にぶい橙色（7.5YR7/4）～灰褐色（7.5YR5/2） にぶい橙色（7.5YR7/4）	口縁部ヨコナデ、胴部ケズリ 口縁部ヨコナデ	内面口縁部と頸部に接合痕あり。外面胴部摩滅
53	24	27	SI8 中央北	弥生土器	甕	(17.4)	[27.0]	–	23.7	やや密	良	橙色（5YR6/6） 橙色（5YR7/6）	口縁部ナデ、胴部頭部付近ハケ目、強い指オサエ、肩はケズリ 口縁部ミガキか、胴部ハケ目、指オサエ	体部中位に黒斑
54	24	27	SI8 南東部	弥生土器	甕	–	[4.9]	2.4	–	やや密	やや良	灰白色（7.5YR8/2）～褐灰色（7.5YR4/1） 明赤褐色（2.5YR5/6）～にぶい橙色（5YR6/4）	指オサエ、丁寧なナデ 指オサエ、ナデ	
55	24	27	SI8 北西部	弥生土器	甕	–	[6.9]	(4.8)	–	やや密	良	にぶい橙色（5YR6/4）～褐灰色（5YR6/1） 橙色（5YR6/6）～にぶい黄橙色（10YR7/3）	指オサエ、ナデ、ハケ目 指オサエ、ハケ目、ナデ	
56	24	27	SI8 北東部	弥生土器	ミニチュア鉢	(9.8)	[4.5]	–	–	密	良	にぶい橙色（7.5YR6/4） にぶい橙色（7.5YR6/4）	丁寧なヨコナデ 丁寧なヨコナデ後ミガキ	
57	24	27	SI8 南西部	弥生土器	ミニチュア鉢	(6.4)	4.8	1.0	–	密	良	にぶい橙色（5YR6/4） にぶい橙色（5YR6/4）～黒色（5YR1.7/1）	指オサエ、丁寧なナデ 指オサエ、ナデ、ハケ目、ミガキ	一部は 4cm の黒斑
58	24	27	SI8 南東部	弥生土器	ミニチュア鉢	(6.9)	4.3	–	–	密	良	灰褐色（7.5YR5/2） 橙色（5YR6/6）	ミガキか 不明瞭	外面摩滅・剥離が著しい
59	24	27	SI8 北東部	土師器	高杯	(22.9)	[9.7]	–	–	やや密	良	灰褐色（7.5YR5/2） にぶい橙色（7.5YR7/4）～橙色（5YR6/6）	摩滅 ハケ目	内外面とも摩滅が著しい
60	24	27	SI8 東西セクション	土師器	高杯	(14.3)	[6.8]	–	–	やや密	良	橙色（5YR7/6） 橙色（5YR7/8）	口縁部ヨコナデ後ミガキか、一部指オサエ、底部ハケ目か、ナデ後ミガキか 口縁部ヨコナデ後ミガキか、底部ナデ、一部指オサエ	内外面とも丹塗り痕（摩滅により不明瞭）
61	24	28	SI8 北東部周溝	土師器	高杯	–	[7.8]	–	–	密	良	橙色（5YR6/6） 橙色（5YR6/6）	反時計回りのヘラケズリ 斜め上方向のヘラナデ、ナデ後ハケ目、ミガキ	
62	24	28	SI8 北東部	弥生土器	支脚	[7.8]	6.2	2.7	–	密	やや良	橙色（5YR6/6） 橙色（5YR6/6）	上面指オサエ、ナデ 下面指オサエ、ナデ	
70	26	29	SK17	土師器	壺	10.6	9.7	–	11.4	やや密	良	にぶい橙色（7.5YR7/4） 浅黄橙色（7.5YR8/4）	胴部上半ナデ、指オサエ、一部ボカ上具痕 口縁部ヨコナデ	内外面とも摩滅が著しい
71	26	29	SK17	土師器	高杯	16.8	[6.3]	–	–	やや密	良	橙色（5YR7/6） 橙色（7.5YR7/6）	ヨコナデ後ハケ目、ミガキ 上部ヨコナデ後ハケ目、下部円周に沿った強いナデ	

第３表　馬場遺跡出土土器観察一覧表（３）

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量（cm）口径（復元）	器高（残存）	底径（復元）	最大径（復元）	胎土	焼成	色調　（内）（外）	主な調整　（内）（外）	備考
72	29	29	SI9 南東部	弥生土器	甕	－	[4.3]	－	－	やや密	良	にぶい橙色（7.5YR7/4） にぶい橙色（7.5YR7/4）	不明瞭 ミガキか	山陰系か
73	29	29	SI9 南東部埋土	弥生土器	壺	－	[3.9]	－	－	密	良	黒色（10YR2/1） 橙色（7.5YR7/6）	不明瞭 口縁部２条の疑凹線文。他はナデ	
74	29	29	SI9 南東部	弥生土器	壺	－	[5.4]	－	－	やや密	やや良	褐灰色（7.5YR6/1） にぶい橙色（7.5YR6/4）	不明瞭 櫛描き波状文	
75	29	29	SI9 北西部埋土	弥生土器	甕	－	[6.4]	－	－	やや粗	良	橙色（5YR6/6） にぶい橙色（5YR6/4）	不明瞭 一部ハケ目	内外面とも摩滅が著しい
76	29	29	SI9 南東部	弥生土器	甕	－	[3.3]	（4.8）	－	密	良	にぶい黄橙色（10YR7/3） 橙色（5YR6/6）	底部ナデ ナデ	
77	29	29	SI9 南西部埋土	弥生土器	鉢	－	[3.8]	－	－	密	良	にぶい橙色（5YR7/4） にぶい橙色（5YR7/4）	口縁部ハケ目後ヨコナデ。胴部ハケ目後ナデ 口縁部ハケ目後ヨコナデ	
81	33	32	SI10 北東部	弥生土器	壺	－	[4.7]	－	－	やや密	良	橙色（5YR6/6） 橙色（5YR6/6）	不明瞭 ハケ目	頸・胴部の境目に断面三角形の貼付突帯２条
82	33	32	SI10 北西部	弥生土器	壺	－	[5.0]	－	－	密	良	橙色（7.5YR7/6） 褐灰色（10YR6/1）	不明瞭 ハケ目、押圧文	
83	33	32	SI10 北西部	弥生土器	鉢蓋	（4.2）	4.9	（22.9）	－	やや密	やや良	浅黄橙色（7.5YR8/3） にぶい黄橙色（10YR7/4）	ナデ、指オサエ、ハケ目 ハケ目	
84	33	32	SI10 北東部	弥生土器	甕	－	[5.8]	－	－	やや密	やや良	黒色（7.5YR2/1） にぶい赤褐色（5YR5/4）	ナデ ハケ目後ナデ	
85	33	32	SI10 北東部埋土	土師器	椀	－	[3.0]	（7.2）	－	密	良	にぶい黄橙色（10YR7/2） 橙色（7.5YR7/6）	不明瞭 托・高台部ナデ	
86	35	32	SI11 北東部	弥生土器	壺	－	[8.3]	－	－	密	良	にぶい黄橙色（10YR7/3） にぶい黄橙色（10YR7/4）	不明瞭 ハケ目、断面三角形の貼付突帯２条	内外面とも摩滅が著しい
87	35	32	SI11 南～東部客土	弥生土器	甕	（21.0）	[11.9]	－	（26.6）	密	良	橙色（5YR6/6） にぶい橙色（5YR7/4）～褐灰色（5YR5/1）	ミガキ ヨコナデ、ナデ、ミガキ	内外面とも剥離・摩滅が著しい
88	35	32	SI11 南～東部客土	弥生土器	甕	（26.6）	[9.0]	－	－	密	良	にぶい橙色（7.5YR6/4） にぶい褐色（7.5YR5/3）	口縁部ヨコナデ。胴部の一部指オサエ 口縁部ヨコナデ。胴部ハケ目か	内外面とも摩滅が著しい
89	35	32	SI11 北東部	弥生土器	甕	－	[11.1]	－	－	やや密	やや良	にぶい橙色（7.5YR6/4） 褐灰色（7.5YR4/1）	不明瞭 口縁部ナデ。胴部上半横方向ハケ目、下半タテ方向ハケ目後ミガキ	
90	35	32	SI11 北東部	弥生土器	甕	－	[5.1]	8.1	－	密	やや良	黒色（10YR2/1） 橙色（7.5YR6/6）	ハケ目、ミガキか 底部ナデ	内外面とも剥離・摩滅が著しい
91	35	32	SI11 南東部	弥生土器	甕	－	[7.4]	6.3	－	やや密	やや良	黒色（10YR2/1） 橙色（5YR6/6）	ハケ目か ハケ目か	内外面とも摩滅が著しい
92	35	32	SI11 南～東部客土	弥生土器	鉢か	－	[6.7]	－	－	密	良	灰褐色（7.5YR6/2） 灰褐色（7.5YR5/2）	ミガキ 口縁部付近ヨコナデ後ミガキ。他はミガキか	内外面の剥落が著しく、調整不明瞭
93	35	32	SI11 北東部	弥生土器	高杯	（20.6）	[6.0]	－	－	やや密	良	にぶい橙色（7.5YR7/4） 灰褐色（7.5YR5/2）	ミガキか ミガキ	内外面とも剥離・摩滅が著しい
94	35	33	SI11 南西部	弥生土器	高杯	－	[6.3]	（11.0）	－	やや密	良	にぶい赤褐色（5YR5/4） 明赤褐色（5YR5/6）	ミガキ 不明瞭	内外面とも剥離・摩滅が著しい
95	35	33	SI11 北東部	弥生土器	高杯	17.3	[5.1]	杯 10.8	－	やや粗	良	にぶい橙色（7.5YR7/4） 橙色（5YR6/6）	不明瞭 ハケ目後ミガキか	
96	35	33	SI11 南東部	弥生土器	高杯か台付椀	－	[12.5]	10.2	－	やや密	良	にぶい橙色（7.5YR6/4） にぶい褐色（7.5YR5/4）	脚部しぼり痕 不明瞭	内外面摩滅
97	35	33	SI11 南東部	弥生土器	高杯か台付椀	－	[5.3]	－	－	やや粗	良	橙色（5YR6/6） 橙色（7.5YR6/6）	ハケ目後ミガキか 不明瞭	穿孔１か所。内外面とも摩滅が著しい
98	36	33	SI11 南～東部客土	弥生土器	器台	－	[6.7]	－	－	密	良	浅黄橙色（7.5YR8/4） 橙色（7.5YR6/6）	ケズリ ほぼ摩滅、一部ハケ目	

第４表　馬場遺跡出土土器観察一覧表（４）

No.	掲図	図版	出土場所	種別	器種	法量（cm） 口径（復元）	器高（残存）	底径（復元）	最大径（復元）	胎土	焼成	色調　（内）（外）	主な調整　（内）（外）	備考
99	36	33	SI1１ 南東部	弥生土器	器台か	—	[4.0]	(17.6)	—	密	良	にぶい橙色（7.5YR7/3） にぶい橙色（7.5YR6/4）	不明瞭	内外面とも摩滅が著しい
103	38	33	SI1３ 北東部上層	弥生土器	壺	(14.6)	[5.0]	—	—	密	良	橙色（5YR7/6） 橙色（7.5YR6/6）	不明瞭	内外面とも摩滅が著しい
104	38	33	SI1３ 北西部上層	弥生土器	壺	(12.0)	[10.8]	—	—	密	良	橙色（7.5YR6/6） 明赤褐色（5YR5/6）	頸部タテ方向の強いナデ。胴部ナデ。指オサエ ミガキか	内面口縁部と外面が摩滅する
105	38	33	SI1３ 北部	弥生土器	甕か壺	—	[10.3]	3.6	—	やや密	良	にぶい橙色（5YR6/4） 褐灰色（5YR4/1）	不明瞭 胴部ハケ目、指オサエ。底部ハケ目状の圧痕	
106	38	33	SI1３ 北西部上層	弥生土器	甕	(22.3)	[6.6]	—	—	密	良	浅黄橙色（7.5YR8/6） 橙色（5YR6/6）	不明瞭 頸部櫛描き文か	
107	38	33	SI1３ 北部	弥生土器	甕	(11.8)	21.9	4.5	(13.6)	やや密	良	にぶい橙色（7.5YR7/3）～黒色（7.5YR2/1） にぶい橙色（7.5YR6/4）～褐灰色（7.5YR4/1）	胴部タズリ、一部指オサエ 口縁部ヨコナデ。指オサエ。 胴部ハケ目後ナデ。指オサエ	
108	38	33	SI1３ 北東部下層	弥生土器	鉢か鉢	—	[7.7]	(3.5)	—	密	良	橙色（5YR6/6） 明赤褐色（5YR5/6）	底部付近ナデ 底部ナデ。指オサエ	外面丹塗りあり
109	38	33	SI1３ 北西部上層	弥生土器	鉢	(13.1)	8.1	3.0	—	密	良	橙色（5YR6/6） 橙色（7.5YR6/8）	一部指オサエ 一部指オサエ	内外面やや摩滅。外面丹塗りか
110	38	33	SI1３ 北西部上層	弥生土器	鉢	(21.6)	[8.6]	—	(24.0)	密	良	橙色（7.5YR7/6） 橙色（5YR7/6）	不明瞭 口縁部２条の沈線文。頸部櫛描き文。胴部ハケ目	
111	38	33	SI1３ 北西部	弥生土器	鉢	(14.2)	[8.6]	—	—	密	良	褐灰色（7.5YR4/1） にぶい橙色（7.5YR6/4）	口縁部ヨコナデ。胴部強いナデ。指オサエ 口縁部ヨコナデ。胴部ハケ目。一部指オサエ	外面摩滅する
112	38	33	SI1３ 北東部上層	弥生土器	支脚	—	[6.3]	—	—	やや粗	良	にぶい褐色（7.5YR5/3）～黒色（7.5YR2/1） 灰褐色（7.5YR5/2）	上面ナデ 下面ナデ	
113	38	34	SI1３ 南東部５層	土師器	甑	—	[4.2]	(4.2)	—	やや密	良	橙色（7.5YR7/6） 橙色（5YR6/6）、底：黒色（5YR2/1）	ケズリか 底部ナデ	内外面とも摩滅が著しい
114	38	34	SI1３ 北部	土師器	高杯	—	[7.8]	—	(10.0)	密	良	橙色（5YR6/6） 橙色（5YR6/6）	脚部ヨコナデ 脚部ミガキ	杯部の内外面とも摩滅する
126	40	39	SI21	弥生土器	鉢	(13.0)	[4.9]	—	(13.8)	やや粗	良	橙色（7.5YR7/6） にぶい橙色（7.5YR6/4）	一部指オサエ 一部指オサエ	内外面とも摩滅が著しい
127	40	39	SI21 北東部	弥生土器	鉢	—	[5.3]	2.9	—	やや密	良	にぶい橙色（7.5YR7/4） にぶい橙色（7.5YR7/4）～黒色（7.5YR2/1）	ケズリか 胴部下半タタキか。底部ナデ。指オサエ	
128	40	39	SI21	弥生土器	ミニチュア鉢	7.7	5.3	2.5	—	やや密	良	橙色（5YR6/6） 橙色（5YR7/6）	ナデか ナデか	
129	41	39	SI14 南北ベルト	弥生土器	甕	(34.2)	[5.3]	—	—	密	やや良	にぶい橙色（7.5YR7/4） にぶい橙色（7.5YR7/4）	口縁端部ツマミ。ヨコナデ後ハケ目。他は指オサエ、ナデ、ハケ目 口縁部ヨコナデ。頸部連続する指オサエ。他は指オサエ、ナデ、ハケ目	
130	41	39	SI14 北西部上層	弥生土器	壺	(15.6)	[2.1]	—	—	やや密	良	橙色（5YR6/6） 橙色（5YR6/6）	ナデ後ミガキか 口縁端部ナデ後竹管文。頸部ナデ後連続する弧状のハケ目	
131	41	39	SI14－SP15 北西部サブトレ	弥生土器	高杯	—	[8.2]	—	—	やや密	良	明褐色（7.5YR5/6） 褐色（7.5YR4/4）	指オサエ、ヨコナデ、ハケ目、ナデ 指オサエ、ナデ、ハケ目	
134	43	41	SI15 中央南壁り	土師器	甕	(21.2)	24.2	—	22.8	やや粗	良	にぶい黄橙色（10YR7/4）～褐灰色（7.5YR4/1） 橙色（5YR6/6）～灰褐色（7.5YR5/2）	口縁部ヨコナデか胴部上半ハケ目、下半ヘラケズリか 口縁部ヨコナデ。指オサエ。胴部ハケ目	
135	43	41	SI15 中央北壁り	土師器	甕	—	[9.0]	—	—	密	良	橙色（5YR7/6） にぶい橙色（5YR7/3）～橙色（5YR7/6）	底部ハケ目、指オサエ 底部ハケ目、指オサエ	内外面とも摩滅
136	43	41	SI15 北西部床面	弥生土器	甕	—	[21.8]	2.8	(22.1)	密	良	にぶい橙色（7.5YR7/4） 浅黄橙色（7.5YR8/4）	ナデ、ハケ目 ハケ目、指オサエ	内外面とも摩滅。外面に煤吸着
137	43	41	SI15 北西部上層	須恵器	長頸壺	—	[7.8]	—	—	密	良	灰色（5Y6/1） 灰色（5Y6/1）	ヨコナデ、回転ヘラケズリ、しぼり痕 ヨコナデ、しぼり痕	外面と内面上位に点々と自然釉が掛る
138	43	41	SI15 南西部上層	須恵器	壺	—	[2.6]	(9.6)	—	密	良	灰白色（10YR7/1） 灰白色（10YR7/1）～褐灰色（10YR6/1）	ヨコナデ 体部回転ヘラケズリ、高台～底部ヨコナデ、ナデ	底部内面に自然釉

第５表　馬場遺跡出土土器観察一覧表（５）

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量（cm）口径（復元）	器高（残存）	底径（復元）	最大径（復元）	胎土	焼成	色調　（内）（外）	主な調整　（内）（外）	備考
142	45	45	SI16 中央土坑	弥生土器	壺	14.0	[22.4]	－	(22.4)	密	良	にぶい橙色（7.5YR7/4） にぶい黄橙色（10YR7/3）	胴部下半ヘラ目後一部ナデ。他はナデ、指オサエ 口縁部付近ヨコナデ。他はハケ目	
143	45	45	SI16 床面	弥生土器	壺	16.0	[4.9]	－	－	やや密	良	橙色（7.5YR7/6） 橙色（7.5YR7/6）	ヨコナデ、ハケ目。指オサエ ヨコナデ、ハケ目	内外面摩滅
144	45	45	SI16 北西隅	弥生土器	ミニチュア壺	－	[6.6]	－	6.8	やや密	良	橙色（5YR6/6） 橙色（5YR6/6）	ナデ、指オサエ ナデ、指オサエ、ミガキか（摩滅により不明瞭）	
145	45	45	SI16 北東部	弥生土器	甕	－	[3.6]	－	－	密	良	にぶい橙色（7.5YR6/4） にぶい橙色（7.5YR7/4）	ナデ、一部指オサエ 刺突文	外面摩滅
146	45	45	SI16 中央土坑床面付近	弥生土器	高杯	9.6	[6.0]	－	－	密	良	明褐灰色（7.5YR7/2） 浅黄橙色（7.5YR8/3）～明褐灰色（7.5YR7/2）	ヨコナデまたはナデ ヨコナデまたはナデ	内外面とも摩滅が著しい
147	45	45	SI16 北東部下層	弥生土器	高杯	－	[5.5]	(14.1)	－	密	良	灰黄褐色（10YR5/2） にぶい黄橙色（10YR6/3）	ヨコナデ後ナデ ハケ目かヨコナデ	透かしは貫通しない。内外面とも摩滅
148	45	45	SI16 南東部	弥生土器	鉢	10.1	6.3	－	－	密	－	灰褐色（7.5YR6/2） にぶい橙色（7.5YR7/3）	ナデ、指オサエ 指オサエ	内外面（特に外面）摩滅
149	45	45	SI16 床面	弥生土器	鉢	10.1	4.6	－	－	やや密	良	浅黄橙色（7.5YR8/3） にぶい橙色（7.5YR7/4）	不明瞭 体部上半ケズリか	内外面とも摩滅が著しい
150	45	45	SI16 中央土坑	弥生土器	甕	27.0	26.8	－	29.0	やや密	良	褐灰色（10YR4/1） にぶい黄橙色（10YR7/4）	口縁部ヨコナデ。胴部ナデ、指オサエ 口縁部ヨコナデ。胴部ハケ目。底部ナデ	外面摩滅が著しい
154	50	46	SI19 北東部	弥生土器	壺	(18.7)	[12.2]	－	頭[24.0]	密	良	浅黄橙色（7.5YR8/3～8/6） 浅黄橙色（7.5YR8/4）	ヨコナデ、ハケ目後ナデ。指オサエ ハケ目後ヨコナデ、ナデ。三角集線文	
155	50	46	SI19 北東部上層	弥生土器	壺	－	[10.8]	－	11.1	やや粗	良	にぶい橙色（7.5YR6/4） にぶい橙色（7.5YR6/4）	指オサエ 指オサエ、一部タタキか	内外面とも摩滅が著しい
156	50	46	SI19 南東部	弥生土器	甕	(15.4)	19.0	－	(18.0)	やや粗	良	褐灰色（7.5YR4/1） 橙色（5YR6/6）～黒褐色（5YR3/1）	口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。指オサエ 口縁部ヨコナデ、ハケ目後ナデ。指オサエ。胴部ハケ目	
157	50	46	SI19 － SP3	須恵器	杯身	(11.0)	[2.9]	－	(13.2)	密	良	灰白色（7.5YR8/1） 灰白色（10YR7/1）	ヨコナデ、不定方向ナデ ヨコナデ、回転ヘラケズリ	
159	52	49	SI18 中央土坑	弥生土器	壺	13.7	[8.1]	－	－	やや密	良	にぶい橙色（7.5YR6/4） 赤褐色（5YR4/6）	口縁部ハケ目後ミガキ。頸部ハケ目後ナデ 口縁部刺み目、ハケ目後ミガキ。頸部ハケ目	外面に赤色顔料。頸部に断面三角形の貼付突帯と刻み目貼付突帯
160	52	49	SI18 南東部	弥生土器	壺	－	[5.3]	8.6	－	やや粗	やや良	褐灰色（10YR4/1） にぶい橙色（7.5YR6/4）	胴部ミガキ。底部ハケ目後ナデ 胴部ハケ目後ミガキ。底部ハケ目後ナデ	
161	52	49	SI18 南東部	弥生土器	壺	－	[7.7]	(12.0)	－	やや粗	良	橙色（5YR6/6） にぶい橙色（7.5YR6/4）	ハケ目か ハケ目後ミガキか	
162	52	49	SI18 南東部	弥生土器	高杯	－	[8.6]	－	－	やや粗	良	橙色（5YR6/6） 橙色（7.5YR6/6）	ハケ目か 口縁部ナデ、刻み目。胴部ハケ目	
163	52	49	SI18 － SP1	弥生土器	甕	－	[12.4]	－	－	やや密	やや良	にぶい橙色（7.5YR7/4） 灰褐色（7.5YR5/2）	ハケ目か ミガキか	内外面とも摩滅
164	52	49	SI18 南東部	弥生土器	甕	－	[9.2]	(7.0)	－	密	良	にぶい黄橙色（10YR6/3） にぶい褐色（7.5YR5/4）	ハケ目後ミガキか ハケ目後ミガキか底部ナデ	内外面とも摩滅
165	52	49	SI18 トレンチ	弥生土器	甕	－	[5.5]	7.3	－	やや密	良	にぶい褐色（7.5YR5/3） 橙色（5YR6/6）	底部ナデ。他は摩滅 底部ナデ。他は摩滅	
166	52	49	SI18 北東部	弥生土器	脚台	－	[3.55]	－	－	密	やや良	にぶい橙色（5YR6/4） にぶい橙色（7.5YR6/4）	摩滅 口縁部ヘラ描き山形文	
167	52	49	SI18 北部壁面	弥生土器	高杯	－	[4.7]	－	－	やや密	やや良	にぶい褐色（7.5YR6/3） にぶい褐色（7.5YR5/3）	ハケ目かほぼ摩滅 口縁部付近３条の沈線文と刻み目。他はミガキ	
170	53	52	SX 2	弥生土器	壺	(27.3)	[21.5]	－	－	やや密	良良	橙色（7.5YR7/6） 橙色（5YR6/6）	ハケ目、ケズリか 口縁部ナデ後沈線２条。胴部ハケ目後、平行線文 14 条と斜行刺突文	内外面とも摩滅・剥離
171	53	52	SX 2	弥生土器	高杯	－	[5.1]	－	－	やや粗	良	にぶい橙色（7.5YR7/4） にぶい黄橙色（10YR7/4）	ハケ目後ミガキ ハケ目か	鋭先状の口縁部に穿孔

第６表　馬場遺跡出土土器観察一覧表（６）

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量（cm） 口径（復元）	器高（残存）	底径（復元）	最大径（復元）	胎土	焼成	色調　（内）（外）	主な調整　（内）（外）	備考
172	53	52	SX 2	弥生土器	甕	－	[8.8]	－	－	やや密	やや良	橙色（5YR6/6） にぶい橙色（5YR7/4）	口縁部ヅマミナデ。他はハケ目 口縁部ヅマミナデ	
174	55	52	SP1265	弥生土器	壺	－	[4.1]	－	－	やや密	良	橙色（5YR7/6） 橙色（5YR7/6）	摩滅	複合口縁壺
175	55	52	SP679	弥生土器	壺	－	[8.9]	3.2	－	やや密	やや良	にぶい黄橙色（10YR7/2） にぶい橙色（7.5YR7/4）～褐灰色（7.5YR5/1）	指オサエ、ナデ、ミガキか 指オサエ、ナデ、ハケ目か	摩滅が著しい
177	57	52	SP518	弥生土器	壺	－	[5.0]	－	－	やや密	良	黒褐色（5YR3/1） にぶい橙色（5YR6/4）	指オサエ、ナデ、ハケ目 ヨコナデ、刺突文	
178	59	56	SK38	弥生土器	壺	(14.1)	35.0	6.0	26.1	やや密	良	橙色（5YR6/6） 灰褐色（7.5YR6/2～4/2）	口～胴部上半ミガキ 頸部ハケ目後ミガキ。胴部ミガキ。他はナデ	内外面の一部に丹塗りを残す
179	59	56	SK38	弥生土器	壺	(11.3)	[17.6]	－	(24.3)	密	良	にぶい黄橙色（10YR7/2）～褐灰色（10YR5/1） にぶい褐色（7.5YR6/2）	口～胴部上半ナデ、指オサエ。胴部下半ミガキ ミガキ、カキ目。刺突文	外面に煤文
180	59	56	SK38 西半	弥生土器	壺	－	[5.9]	－	－	密	良	にぶい橙色（7.5YR6/4） 褐灰色（7.5YR4/1）	ナデ、ハケ目後ミガキ ミガキ、平行沈線文、波状文。刺突文	
181	59	56	SK38 西半	弥生土器	壺	－	[7.3]	－	－	やや粗	やや良	橙色（5YR6/6） 灰褐色（7.5YR6/2）	ハケ目後ミガキ ハケ目、ミガキか	外面摩滅が著しい。貼付双頭突帯
182	59	56	SK38	弥生土器	壺	－	[10.5]	8.2	－	やや密	良	褐灰色（7.5YR4/1） 浅黄橙色（10YR8/3）	ケズリ後ミガキか ミガキ後一部指オサエ	内外面摩滅
183	59	56	SK38	弥生土器	壺	－	[5.1]	(6.5)	－	やや粗	やや良	黒褐色（7.5YR3/1） にぶい橙色（5YR6/4）	不明瞭 ハケ目後ミガキ。底部ハケ目、ナデ	
184	59	56	SK38 西半	弥生土器	壺	－	[7.5]	(7.0)	－	やや粗	良	にぶい橙色（7.5YR6/4） にぶい黄橙色（10YR7/3）	底部ナデ 胴部ハケ目か。底部ナデ	内外面摩滅
185	59	56	SK38	弥生土器	甕	(17.8)	[12.0]	－	(19.4)	やや密	良	にぶい橙色（5YR6/4） にぶい赤褐色（5YR5/3）～灰褐色（5YR4/1）	口縁部ナデ、指オサエ。胴部ハケ目後ナデ、指オサエ 口縁部ヨコナデ、指オサエ。胴部ハケ目	内外面摩滅
186	59	57	SK38 西半	弥生土器	甕	－	[7.7]	－	－	やや粗	不良	灰褐色（7.5YR4/2） 褐灰色（7.5YR6/1）	不明瞭 ハケ目後ミガキ	
187	59	57	SK38	弥生土器	甕	－	[6.5]	－	－	密	良	橙色（5YR6/6） 灰褐色（5YR4/2）	ミガキ、ハケ目か 口縁部ハケ目後ミガキ。胴部に刺突文	
188	60	57	SK38 床面	弥生土器	甕	(25.4)	[22.1]	－	－	やや密	良	橙色（5YR6/6） にぶい橙色（7.5YR6/4）～灰褐色（7.5YR5/2）	ナデか底部指オサエ 口縁部ヨコナデ。胴部ハケ目	
189	60	57	SK38 西半	弥生土器	甕	－	[5.1]	－	－	密	やや良	橙色（5YR6/6）～黒褐色（7.5YR3/1） にぶい橙色（7.5YR6/4）	ハケ目後ミガキ 口縁端部に刻み目。他はハケ目	断面三角形の貼付突帯
190	60	57	SK38 西半	弥生土器	壺	－	[3.9]	(12.6)	－	やや密	良	褐灰色（7.5YR4/1） 灰褐色（7.5YR5/2）	ミガキ、指オサエ。底部ミガキ、指オサエ。底部の一部ケズリ	
193	66	58	SK31	弥生土器	壺	(19.1)	口頸［10.9］ 胴底［22.4］	8.0	(24.8)	密	良	明赤褐色（5YR5/8） 橙色（5YR7/6）～にぶい赤褐色（5YR5/4）	体部上半ケズリ後ミガキ。他はミガキ 胴部ミガキ。底部ナデ	内外面に丹塗り。黒斑あり
194	66	58	SX1 北東部	弥生土器	壺	－	[1.8]	－	－	やや密	良	橙色（7.5YR7/6） にぶい橙色（7.5YR7/4）	ハケ目、ミガキか櫛描き文 ナデ、櫛描き波状文	
195	66	58	SK7 南西部	弥生土器	甕	－	[7.2]	－	－	やや粗	良	にぶい橙色（7.5YR6/4） 橙色（7.5YR6/6）	器面剥離。不明瞭 口縁部ナデ、断面三角形の貼付突帯。胴部ミガキ	
196	66	58	SK28 南西部	弥生土器	甕	(17.8)	[10.8]	－	－	密	良	にぶい橙色（7.5YR7/4） 橙色（5YR7/6）	ハケ目か 口縁部ナデ、肩部に斜行刺突文	
197	66	58	SK25	弥生土器	甕	(19.8)	[8.2]	－	－	密	良	にぶい黄橙色（10YR7/3）～灰黄褐色（10YR5/2） にぶい黄橙色（10YR6/3）	胴部ケズリ 不明瞭	外面に煤吸着
198	66	58	SK35 南東部	弥生土器	甕	(12.0)	[13.0]	－	－	やや密	不良	にぶい橙色（7.5YR7/4） 黒褐色（7.5YR3/2）	不明瞭 ハケ目	
199	66	58	SK28 南東部	弥生土器	甕	－	[5.1]	4.0	－	やや密	良	にぶい橙色（7.5YR6/4） にぶい橙色（7.5YR7/3）	底部ナデ 不明瞭	内外面摩滅
200	66	58	SX1 北西部	弥生土器	甕	－	[6.1]	3.8	－	密	やや良	橙色（5YR6/6） 橙色（5YR7/6）	底部ナデか 底部ナデか	内外面摩滅

第７表　馬場遺跡出土土器観察一覧表（７）

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量（cm）口径（復元）	器高（残存）	底径（復元）	最大径（復元）	胎土	焼成	色調　（内）（外）	主な調整　（内）（外）	備考
201	66	58	SK34 下層	弥生土器	壺	－	[14.1]	7.1	－	やや粗	良	にぶい褐色 (7.5YR6/3) 灰褐色 (7.5YR5/2)	ナデか ミガキ	
202	66	58	SK41	弥生土器	壺	－	[8.3]	10.2	－	やや粗	やや良	にぶい黄橙色 (10YR7/3) 橙色 (5YR6/6)	ハケ目後ナデか ハケ目後ナデか	内外面摩滅、底部は二重底で、貼付け部分が剥離
203	67	59	SK7 南西部	弥生土器	甕	－	[8.4]	(6.8)	－	やや粗	やや良	にぶい赤褐色 (5YR4/3) にぶい赤褐色 (5YR5/4)	底部ナデ 胴部の一部ハケ目	内外面とも摩滅が著しい
204	67	59	SK7 北東部	弥生土器	甕	－	[7.4]	(6.8)	－	やや密	良	にぶい黄橙色 (10YR7/3) 明赤褐色 (2.5YR5/6)	不明瞭 ハケ目か底部ハケ目後ナデ	
205	67	59	SK28 南東部	弥生土器	鉢	－	[6.3]	－	－	やや密	良	にぶい赤褐色 (5YR5/4) にぶい橙色 (7.5YR6/4)	不明瞭 口縁部ハケ目後ナデ、胴部ハケ目	
206	67	59	SK7 南西部	弥生土器	甕	－	[3.0]	－	－	粗	やや良	にぶい褐色 (7.5YR6/3) にぶい赤褐色 (5YR5/3)	不明瞭 口縁下に貼付突帯	内外面摩滅
207	67	59	SK37	弥生土器	鉢	24.8	[11.1]	－	－	やや密	やや良	にぶい橙色 (7.5YR7/4) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	ミガキ後ハケ目 ミガキ後ハケ目	
208	67	59	SK34 下層	弥生土器	壺	－	[13.8]	6.1	－	やや粗	やや良	橙色 (5YR6/6) にぶい橙色 (7.5YR6/4)	ミガキ、底部ナデ ハケ目後ミガキ	
209	67	59	SK29	弥生土器	壺		[8.3]	3.4	－	やや密	やや良	明赤褐色 (5YR5/6) にぶい赤褐色 (5YR5/4)	ハケ目後ミガキか ハケ目、底部ナデ	
210	67	59	SK18 上層	弥生土器	鉢	－	[6.3]	－	－	やや密	良	橙色 (5YR6/6) 橙色 (7.5YR6/6)	指オサエ、ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	
211	67	59	SX1 北東部	弥生土器	鉢か高杯	－	[2.6]	－	－	やや密	良	にぶい橙色 (7.5YR6/4) にぶい橙色 (7.5YR6/4)	ミガキか 不明瞭	
212	67	59	SK35 南東部	弥生土器	器台	－	[2.0]	－	－	やや粗	やや良	にぶい黄橙色 (10YR7/2) にぶい橙色 (7.5YR7/3)	不明瞭 直線文	直線文上に勾玉形貼付け装飾
213	67	59	SK35 南東部	弥生土器	器台	－	[1.7]	－	－	やや密	やや良	にぶい橙色 (7.5YR7/4) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	ミガキか 櫛描き斜線文	外面に勾玉形貼付け装飾
214	67	59	SK29	弥生土器	器台	－	[12.8]	(13.2)	－	やや粗	やや良	にぶい黄橙色 (10YR7/3) にぶい黄橙色 (10YR7/4)	ナデ 底部ナデ	3 条の沈線、3 段の透かし穴（3 個確認 / 中段のみ）
217	73	62	SK10	須恵器	甕	－	[42.4]	－	46.5	密	良	灰色 (N6/　) 灰色 (N6/　) ～ (N5/　)	頸部回転ナデ、胴部同心円当て具痕後ナデ 頸部回転ナデ、胴底部平行タタキ後ナデ	外面自然釉、頸胴部境目に十文字ヘラ記号
218	78	65	SP344	弥生土器	壺	(11.2)	[5.7]	－	－	やや密	良	にぶい橙色 (7.5YR6/4) 橙色 (7.5YR6/6)	一部指オサエ 不明瞭	内外面摩滅
219	78	65	SP1255	弥生土器	壺	(13.6)	[2.5]	－	－	密	良	橙色 (7.5YR7/6) 橙色 (7.5YR7/6)	ヨコナデ ヨコナデ、ミガキ、沈線文	
220	78	65	SP1012	弥生土器	壺	－	[3.2]	－	－	密	良	にぶい橙色 (7.5YR7/4) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	指オサエ、ナデ後ミガキ 指オサエ、ナデ後ミガキ。端部 4 条の凹線文	
221	78	65	SP848	弥生土器	壺	－	[2.4]	－	－	密	良	橙色 (5YR6/6) 橙色 (5YR6/6)	指オサエ、ナデ、ハケ目 ヨコナデ、ハケ目後斜格子状衝文	
222	78	65	SP987	弥生土器	壺	－	[2.6]	－	－	やや密	良	にぶい橙色 (7.5YR7/4) にぶい橙色 (7.5YR7/3)	ナデ後大ハケ目か 端部 5 条の凹線文、ナデ後 5 条一単位の斜格子文	
223	78	65	SP1196	弥生土器	甕	－	[4.3]	－	－	密	良	橙色 (7.5YR7/6) 浅黄橙色 (7.5YR8/4)	ハケ後ヨコナデ、一部指オサエ ヨコナデ、ハケ目後一部指オサエ	
224	78	65	SP256	弥生土器	甕	－	[7.6]	－	－	密	良	にぶい橙色 (7.5YR7/3) 橙色 (5YR7/6)	ハケ目、指オサエ、ヨコナデ 斜格子文突帯	内外面摩滅
225	78	65	SP1120	弥生土器	ミニチュア壺	(8.6)	[6.0]	－	(8.4)	密	良	橙色 (5YR6/6) にぶい橙色 (5YR6/4)	ヨコナデ、ナデ、指オサエ ヨコナデ、ナデ、指オサエ後ミガキか	内外面やや摩滅
226	78	65	SP1199	弥生土器	ミニチュア壺	－	[6.5]	－	(8.6)	やや密	良	橙色 (7.5YR7/6) 浅黄橙色 (7.5YR8/6)	口縁部ヨコナデ後ミガキ、胴部ヨコナデ後指オサエ 口縁部ヨコナデ、胴部ヨコナデ後指オサエ	内外面摩滅
227	78	65	SP93	弥生土器	甕	－	[17.0]	4.0	－	粗	やや良	にぶい黄橙色 (10YR7/3) にぶい橙色 (7.5YR6/3)	ヘラケズリか ハケ目か	全体的に摩滅

第８表　馬場遺跡出土土器観察一覧表（８）

No.	掲図	図版	出土場所	種別	器種	法量（cm） 口径（復元）	器高（残存）	底径（復元）	最大径（復元）	胎土	焼成	色調　（内）（外）	主な調整　（内）（外）	備考
228	78	65	SP808	弥生土器	鉢	－	[3.9]	－	－	やや粗	良	にぶい黄橙色（10YR7/2） にぶい黄橙色（10YR7/4）	不明瞭 刺突文	内外面とも摩滅が著しい
229	78	65	SP965	弥生土器	鉢	－	[3.7]	－	－	密	良	にぶい橙色（5YR7/4） にぶい黄橙色（10YR6/4）	ヨコナデ、ナデ ヨコナデ、三角格子文	
230	78	65	SP1255	弥生土器	鉢	－	[6.1]	－	－	やや密	良	にぶい橙色（7.5YR7/4） にぶい橙色（7.5YR7/4） ～灰褐色（7.5YR5/2）	口縁部ヨコナデ、他は指オサエ、ナデ、ハケ目、ミガキ 口縁部ヨコナデ、他は指オサエ、ナデ、ミガキ	
231	78	65	SP1174	弥生土器	甕	(13.8)	[3.8]	－	－	やや密	良	にぶい橙色（7.5YR6/4） にぶい橙色（7.5YR5/4）	ヨコナデ、ヨコナデ ヨコナデ、強いナデ	山陰系か
232	78	65	SP1255	弥生土器	甕	(11.8)	[6.1]	－	－	密	良	橙色（7.5YR6/6） 橙色（5YR6/6）	口縁部ヨコナデ、胴部ナデ後ハケ目 口縁端部刻み目、口縁部ヨコナデ、肩部斜行刺突文、胴部ナデ後ミガキ	
233	78	65	SP446	弥生土器	甕	－	[7.2]	－	－	やや密	良	にぶい黄橙色（10YR7/3） にぶい橙色（7.5YR7/3）	指オサエ、ナデ、ハケ目 指オサエ、ナデ、ハケ目	
234	79	66	SP314	弥生土器	甕	(26.4)	[12.2]	－	－	密	良	褐灰色（7.5YR4/1） にぶい橙色（7.5YR6/4）	ヨコナデ後ミガキ 口縁部ヨコナデ、胴部指オサエ、ミガキ	
235	79	66	SP1073	弥生土器	甕	(23.7)	[5.4]	－	－	密	良	灰褐色（7.5YR4/2） にぶい橙色（7.5YR6/4）	ミガキ 一部ハケ目	内外面とも摩滅が著しい
236	79	66	SP897	弥生土器	甕	(20.0)	[12.6]	－	－	やや密	良	にぶい橙色（7.5YR5/4） 灰褐色（7.5YR5/2）	口縁部ヨコナデ、ハケ目、他はナデ後ハケ目 口縁部ヨコナデ、ハケ目、他はナデ後ハケ目	
237	79	66	SP469	弥生土器	甕	(17.0)	[5.7]	－	－	やや密	良	浅黄橙色（10YR8/3）～黒色（10YR2/1） にぶい橙色（7.5YR7/3）	指オサエ、ナデ、ヘラミガキ 指オサエ、ナデ、ヘラミガキ	器壁が薄い
238	79	66	SP1255	弥生土器	甕	(14.8)	[5.5]	－	－	密	やや良	にぶい褐色（7.5YR6/3） 橙色（7.5YR7/6）	口縁部ヨコナデ、胴部指オサエ、ナデ、ハケ目 口縁端部に１条凹線文、ヨコナデ、胴部指オサエ、ナデ、ハケ目	摩滅が著しい
239	79	66	SP158	弥生土器	鉢か甕	－	[3.8]	(3.8)	－	やや密	良	橙色（5YR6/8） 橙色（5YR6/6）	ナデ、指オサエ 胴部指オサエ、底部ナデ	外面摩滅
240	79	66	SP1149	弥生土器	ミニチュア台付鉢	6.0	7.1	4.3	－	やや密	良	にぶい橙色（7.5YR7/4）～褐灰色（7.5YR6/1） にぶい橙色（7.5YR7/4）～褐灰色（7.5YR6/1）	指オサエ、ナデ 指オサエ、ナデ、ミガキ	
241	79	66	SP1183 SP1184	弥生土器	鉢	21.0	[11.0]	－	－	密	良	明赤褐色（2.5YR5/6） 明赤褐色（2.5YR5/6）～暗赤褐色（2.5YR3/2）	ミガキ ミガキ	内外面に丹塗り
242	80	66	SP679	弥生土器	鉢	13.2	7.7	2.3	－	やや粗	良	橙色（7.5YR6/6） 橙色（7.5YR6/6）	体部上半ハケ目 一部指オサエ	内外面摩滅・剥落が著しい
243	80	66	SP1002	弥生土器	鉢	(11.0)	9.2	3.5	－	密	良	にぶい褐色（7.5YR5/3） 灰褐色（7.5YR4/2） ～明赤褐色（5YR5/6）	指オサエ、ナデ、ミガキ、ハケ目 指オサエ、ナデ、ミガキ、ハケ目	
244	80	66	SP698	弥生土器	小型丸底壺	－	[9.2]	－	－	やや密	良	灰褐色（5YR6/2） 灰褐色（5YR5/2） ～橙色（5YR6/6）	ナデ後ハケ目 ナデ後ハケ目	
245	80	66	SP1211	弥生土器	鉢	(17.0)	[7.4]	－	－	密	良	黒褐色（10YR2/2） にぶい黄橙色（10YR5/3）	指オサエ、ケズリ、ミガキ 指オサエ、ナデ、ハケ目	
246	80	66	SP1174	弥生土器	壺	－	[1.6]	－	－	やや密	良	浅黄橙色（7.5YR8/4） 浅黄橙色（7.5YR8/4）	不明瞭 三角格子文	内外面摩滅
247	80	66	SP1080	弥生土器	支脚	(17.5)	[15.6]	－	－	やや密	良	にぶい橙色（7.5YR6/3） 浅黄色（2.5Y7/3） ～橙色（5YR6/6）～黒色（2.5Y2/1）	指オサエ、ナデ、ハケ目、ミガキ 指オサエ、ナデ、ハケ目、ミガキ	
248	80	66	SP191	弥生土器	高杯	－	[7.7]	－	－	密	良	橙色（5YR6/6） ～褐灰色（5YR4/1） 橙色（5YR6/6） ～褐灰色（5YR4/1）	杯底部ナデ、指オサエ、脚部しぼり痕 杯部ハケ目後ミガキ、脚部ケズリ後かミガキ	内外面摩滅
249	80	66	SP1267	弥生土器	高杯	－	[8.9]	(14.1)	－	やや密	良	浅黄橙色（7.5YR8/4） 浅黄橙色（7.5YR8/3～8/4）	ハケ目、ナデ、しぼり痕 ハケ目、指オサエ	
250	80	67	SP129	弥生土器	杯状容器	(16.6)	4.5	(14.6)	－	やや密	やや良	橙色（5YR6/6） 橙色（7.5YR7/6）	指オサエ、ナデ、ハケ目 ヨコナデ後ハケ目、底部指オサエ、ナデ、ハケ目	内外面とも摩滅が著しい

第９表　馬場遺跡出土土器観察一覧表（９）

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量（cm）口径（復元）	器高（残存）	底径（復元）	最大径（復元）	胎土	焼成	色調　（内）（外）	主な調整　（内）（外）	備考
251	80	67	SP670	須恵器	高杯		[4.5]	−	−	密	良	灰色（N6/　） 灰色（N5/　）	杯部不定方向のナデ，脚部ヨコナデ，しぼり痕 ヨコナデ	
252	80	67	SP503	須恵器	杯蓋	(9.0)	[3.4]	−	−	密	良	褐灰色（5YR4/1） 明褐灰色（5YR7/1）	回転ナデ 回転ナデ，ヘラケズリ	
253	80	67	SP323	土師質土器	鍋	−	[2.4]	−	−	密	良	にぶい褐色（7.5YR6/3） にぶい褐色（7.5YR5/3）	口縁部指オサエ ヨコナデ	内面特に摩滅が著しい
254	80	67	SP690	土師器	椀	(16.4)	6.6	6.8	−	やや密	良	浅黄色（2.5Y8/3） 浅黄色（2.5Y8/3）	回転ナデ後ミガキ 回転ナデ後ミガキ，底部回転糸切り後高台貼付け	
255	80	67	SP483	土師器	柱状高台杯	−	[3.1]	(8.6)	−	密	良	にぶい橙色（7.5YR7/4） にぶい橙色（7.5YR7/4）	杯部ヨコナデか 不明瞭	内外面とも摩滅が著しい，底部中央に穿孔（外→内）
256	80	67	SP1197	土師器	皿	(6.8)	[1.1]	(5.6)	−	密	良	灰褐色（7.5YR5/2） にぶい褐色（7.5YR6/3）	ナデ，ヨコナデ ヨコナデ，底部回転糸切り	
261	82	68	SD15	弥生土器	器台	(21.6)	[2.3]	−	−	密	良	橙色（5YR6/6） にぶい橙色（5YR7/4）	ヨコナデ，ハケ目 ヨコナデ，×字文	口縁下は摩滅
262	82	68	SD5 東端部	弥生土器	壺	−	[3.7]	−	−	密	良	橙色（5YR6/6） 橙色（5YR7/6）	胴部ケズリか 不明瞭	内外面摩滅
263	82	68	SD4	弥生土器	甕か	−	[10.6]	(3.0)	[14.2]	やや密	良	浅黄橙色（7.5YR8/4） にぶい橙色（7.5YR7/4）〜灰褐色（7.5YR5/2）	ハケ目か ハケ目	内外面が摩滅・剥落する
264	82	68	SD4	弥生土器	壺	−	[10.9]	(5.6)	(12.2)	やや密	良	浅黄橙色（7.5YR8/3） 橙色（7.5YR6/6）	ケズリか 不明瞭	内外面摩滅
265	82	68	SD23 西半	弥生土器	壺	−	[4.1]	7.8	−	やや粗	良	にぶい橙色（7.5YR7/4） 橙色（5YR7/6）	不明瞭 ナデか指オサエ．底部粘土紐巻き上げ痕	内外面とも摩滅が著しい
266	82	68	SD4	弥生土器	甕	(20.4)	[8.0]	−	−	やや密	良	にぶい橙色（7.5YR6/4） にぶい橙色（7.5YR6/4）	不明瞭	内外面とも摩滅が著しい
267	82	68	SD25	弥生土器	鉢	−	[5.4]	−	−	密	良	浅黄橙色（7.5YR8/4） 浅黄橙色（7.5YR8/4）〜橙色（5YR7/6）	不明瞭	内外面とも摩滅が著しい
268	82	68	SD4	弥生土器	鉢	(15.4)	[5.0]	−	−	密	良	橙色（5YR6/6） にぶい赤褐色（5YR5/4）	口〜胴一部ヨコナデ，胴部強いハケ目 口縁部ヨコナデ	外面摩滅が著しい
269	82	68	SD4	弥生土器	支脚	−	[14.3]	9.4	−	やや粗	良	にぶい橙色（7.5YR7/3） 橙色（5YR6/6）	ナデ，指オサエ ナデ，指オサエ	
270	82	68	SD5 東端部	弥生土器	支脚	13.5	19.5	12.9	−	密	良	橙色（5YR6/6） 明赤褐色（2.5YR5/6）〜暗赤灰色（2.5YR3/1）	口縁部付近ハケ目，中央部付近強いナデ，しぼり痕．他はナデ，指オサエ ナデ，一部指オサエ，ハケ目	
271	82	68	SD15	土師器	鍋	(23.2)	[8.6]	−	−	密	良	浅黄橙色（7.5YR8/3）〜黒色（7.5YR2/1） にぶい橙色（7.5YR7/4）	不明瞭 ヨコナデ，一部指オサエ	内面摩滅
272	82	68	SD13 − SP1	土師器	柱状高台杯	−	[4.6]	8.0	−	密	良	にぶい橙色（7.5YR7/3） にぶい橙色（7.5YR7/3）	不明瞭 回転ナデ，底部回転糸切り	内外面摩滅
274	83	69	東谷 Tr. 1 東平黒褐色土層（第２層）	弥生土器	鉢	9.3	14.2	2.0	12.4	密	やや良	浅黄橙色（7.5YR8/6） 橙色（7.5YR7/6）	ハケ目後ミガキ．底部ナデ ハケ目後ナデかミガキ．底部ナデ	口縁部付近に粘土接合痕あり
275	83	69	東谷 Tr. 2 灰褐色土層	弥生土器	壺	−	[8.5]	−	−	やや密	良	にぶい橙色（7.5YR7/3） にぶい褐色（7.5YR6/3）	胴部ハケ目後ナデ，指オサエ，ケズリ ヨコナデ，ミガキ，指オサエ，突帯部分は布による指オサエ	
276	83	69	東谷 Tr.1 灰褐色土層	弥生土器	壺	(13.1)	[6.3]	−	−	密	良	橙色（5YR7/6） 橙色（5YR7/6）	摩滅 口縁部ツマミナデ．他はハケ目	
277	83	69	東谷 Tr.1 灰褐色土層	弥生土器	甕	(16.4)	[8.8]	−	−	密	良	にぶい黄橙色（10YR7/3） にぶい橙色（7.5YR7/4）	胴部ハケ目 不明瞭	
278	83	69	東谷 Tr. 1 褐色土層（第２層）	弥生土器	甕	(15.6)	[16.8]	−	−	やや密	良	にぶい橙色（7.5YR7/4） 橙色（5YR7/6）〜にぶい黄橙色（10YR7/3）	ハケ目，指オサエ 不明瞭	
279	83	69	東谷 Tr. 1 灰褐色土層	弥生土器	器台	−	[11.9]	−	−	密	やや良	にぶい橙色（7.5YR7/4） にぶい橙色（7.5YR7/4）	ハケ目後ナデ ハケ目	３個×３段の透かし穴
280	83	69	東谷 Tr. 2	弥生土器	器台	−	[15.0]	−	−	やや粗	良	橙色（5YR6/6） 橙色（5YR6/6）	ハケ目後ナデ ハケ目	透かし穴の下に２条の平行線文

第 10 表　馬場遺跡出土土器観察一覧表（10）

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量（cm） 口径（復元）	器高（残存）	底径（復元）	最大径（復元）	焼土	焼成	色調　（内） （外）	主な調整　（内） （外）	備考
281	83	69	東谷 Tr. 2 黒褐色土（最上層）	弥生土器	支脚	－	[16.5]	－	－	やや密	良	橙色（5YR6/6） にぶい橙色（5YR7/4）	ケズリ、ナデ 指オサエ	支え部分と脚部は別作り後接合か
282	83	70	東谷 Tr. 2 黒褐色土（最上層）	弥生土器	壺	(35.0)	[5.1]	－	－	密	良	浅黄橙色（7.5YR8/4） 橙色（7.5YR7/6）	ハケ目、ヨコナデ、工具板を指オサエ 斜線文、櫛描き文、波状文	
283	83	70	東谷 Tr. 2 黒褐色土（最上層）	弥生土器	高杯か	－	[6.2]	(12.1)	－	やや粗	良	黒色（7.5YR2/1） 橙色（5YR6/6）	不明瞭 一部ハケ目、指オサエ	5 か所に外→内方向の穿孔
284	83	70	東谷 Tr. 2 黒褐色土（最上層）	弥生土器	把手	8.7	－	－	1.8～2.0	密	良	－ にぶい橙色（7.5YR7/4）～黒色（7.5YR2/1）	－ ナデオサエ	
287	84	71	調査区東端遺物包含層	弥生土器	壺	(25.6)	[6.1]	－	－	やや粗	良	橙色（5YR7/6） 橙色（5YR7/6）	ハケ目後ナデか 竹管文とその下に擬凹文、ハケ目後ナデか	
288	84	71	E5 グリッド遺構検出面	弥生土器	壺	－	[2.3]	－	－	やや粗	良	黄灰色（2.5Y5/1） 橙色（7.5YR7/6）	口縁端部に竹管文。他は不明瞭 口縁端部に竹管文、ハケ目後ナデか	内面の竹管文は、施文後半円に削ぎ落とされる
289	84	71	Tr.1 － Tr.2 間遺物包含層	弥生土器	壺	－	[7.4]	5.1	－	やや粗	良	橙色（5YR6/6） 橙色（7.5YR6/6）	ケズリ後ハケ目 タタキ	内外面の摩滅・剥落が著しい
290	84	71	E3 グリッド遺構検出面	弥生土器	甕	－	[18.8]	－	(21.0)	やや密	良	橙色（5YR6/6） 橙色（5YR6/6）～黒色（5YR2/1）	胴上部ハケ目後ナデ。底部付近ケズリか タタキ後ハケ目	内外面摩滅。外面一部煤吸着
291	84	71	E3 グリッド遺構検出面	弥生土器	甕	(18.0)	[11.6]	－	－	密	良	橙色（5YR6/6） にぶい橙色（5YR7/4）～褐灰色（5YR5/1）	口縁部ヨコナデ、ハケ目。胴部ケズリ後ハケ目、指オサエ 口縁部ヨコナデ、胴部の一部タタキ後ハケ目	
292	84	71	Tr.1 － Tr.2 間遺物包含層	弥生土器	甕	－	[5.1]	(8.0)	－	やや粗	良	にぶい橙色（7.5YR7/4） にぶい橙色（7.5YR7/4）～黒色（7.5YR2/1）	ナデ、指オサエ 胴部ハケ目、指オサエ。底部ヨコナデ、ナデ、指オサエ	
293	85	71	調査区東谷表土除去中	弥生土器	壺	－	[10.7]	(6.0)	－	やや粗	良	灰黄褐色（10YR6/2） にぶい橙色（7.5YR7/4）	ハケ目、ミガキ ハケ目後ミガキ	内面摩滅が著しい
294	85	71	E3 グリッド遺構検出面	弥生土器	鉢	13.0	17.2	6.3	18.5	やや粗	良	橙色（5YR6/6） 橙色（7.5YR7/6）	口縁部ナデ、他はハケ目後ナデかミガキ 口縁部下に斜め方向の刺突文、他はハケ目後ナデ	部分的に黒変
295	85	72	E3 グリッド遺構検出面	弥生土器	ミニチュア鉢	(6.7)	3.7	－	－	密	良	黒褐色（7.5YR3/1） 黒褐色（7.5YR3/1）	ミガキ ミガキ、指オサエ	
296	85	72	E3 グリッド遺構検出面	弥生土器	ミニチュア鉢	(6.8)	[3.0]	(3.8)	－	密	良	褐灰色（5YR4/1） にぶい赤褐色（5YR5/4）～褐灰色（5YR4/1）	ミガキ ミガキ、底部ナデ	
297	85	72	E3 グリッド遺構検出面	弥生土器	ミニチュア鉢	7.6	3.0	3.9	－	密	良	にぶい赤褐色（5YR5/4）～褐灰色（5YR4/1） 橙色（5YR6/6）～褐灰色（5YR4/1）	ミガキ ミガキ	
298	85	72	E3 グリッド遺構検出面	弥生土器	壺	(25.6)	[2.1]	－	－	密	良	にぶい橙色（7.5YR7/4） 橙色（7.5YR7/6）	ヨコナデ、ナデ、貼付け突帯 ヨコナデ、沈線文	
299	85	72	E4 グリッド遺物包含層	弥生土器	器台	(32.0)	[3.7]	－	－	やや粗	良	にぶい橙色（7.5YR7/4） にぶい橙色（7.5YR7/4）	櫛描き波状文 ハケ目後ナデ、櫛描き斜線文	外面に勾玉形貼付け装飾
300	85	72	E4 グリッド遺物包含層	弥生土器	器台	－	[3.65]	－	－	密	不良	にぶい黄橙色（10YR7/4） にぶい橙色（7.5YR6/4）	ハケ目後ナデ、櫛描き波状文 ハケ目後ナデ、櫛描き斜線文後波線文	
301	85	72	E3 グリッド遺構検出面	弥生土器	器台	－	[2.8]	－	－	密	良	にぶい橙色（7.5YR7/4） 浅黄橙色（7.5YR8/4）	ヨコナデ 口縁部三角集線文。他はヨコナデ	
302	85	72	E3 グリッド遺構検出面	弥生土器	器台	－	[14.0]	(16.0)	－	やや密	良	にぶい黄橙色（10YR7/4） 橙色（7.5YR6/6）	ケズリ ハケ目、ナデ、指オサエ	
303	85	72	E4 グリッド遺構検出面	弥生土器	器台	－	[12.2]	(14.4)	－	やや粗	良	橙色（5YR6/6） 橙色（5YR6/6）	ハケ目、ミガキ、強いナデ ハケ目後ミガキ、ナデ	内外面とも摩滅が著しい
304	85	72	調査区西側遺構検出面	土製品	支脚	[8.3]	5.8	[4.5]	－	－	良	にぶい黄橙色（10YR7/3） にぶい黄橙色（10YR7/3）	指オサエ、ナデ、ハケ目 指オサエ、ナデ、ハケ目	
305	85	72	G4 グリッド遺物包含層	弥生土器	高杯	(27.6)	[8.4]	－	－	密	良	褐灰色（7.5YR4/1） 褐灰色（7.5YR4/1）	ミガキ ミガキ	内外面底部付近が摩滅
306	85	72	E4 グリッド遺物包含層	弥生土器	支脚	3.9	5.2	7.2	－	密	良	－ にぶい黄橙色（10YR7/4）	－ 手づくね成形後ナデまたはミガキ	透かし穴が一対

第 11 表　馬場遺跡出土土器観察一覧表（11）

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	口径（復元）	法量（cm）器高（残存）	底径（復元）	最大径（復元）	胎土	焼成	色調　（内）（外）	主な調整　（内）（外）	備考
308	86	72	E5 グリッド遺構検出面	須恵器	長頸壺か	—	[8.2]	(6.0)	(14.7)	密	良	灰白色（N7/　） 灰白色（N7/　）	回転ナデ 脚上部回転ナデ後ナデ（工具）。脚下～底部回転ヘラケズリ	外面篦部に自然釉
309	86	72	調査区南東隅付近　表採	須恵器	器台		[10.1]	(27.0)	—	やや粗	やや良	灰白色（10YR7/1） 灰白色（10YR7/1）	回転ナデ、沈線、一単位 8～10 条の波状文 回転ナデ、回転ヘラケズリ	
310	86	72	F4 グリッド遺構検出面	須恵器	杯蓋	(10.8)	3.1	—	—	密	良	灰白色（N7/　） 灰白色（N7/　）	回転ナデ 天井部回転ヘラケズリ。他は回転ナデ	
311	86	73	E5 グリッド遺構検出面	須恵器	杯身	9.7	3.4	—	—	密	良	灰白色（N7/　） 灰白色（N7/　）	回転ナデ 回転ナデ、回転ヘラケズリ	
312	86	73	調査区北壁土層	須恵器	杯身	—	[3.4]	—	—	密	良	灰色（N6/　） 灰色（N6/　）	回転ナデ 回転ナデ	貼付高台
313	86	73	調査区東谷遺構検出面	土師器	杯	—	[3.3]	6.0	—	やや密	良	にぶい黄橙色（10YR7/3） にぶい黄橙色（10YR7/4）	回転ナデ 回転ナデ、底部ヘラ切り	
314	86	73	調査区北壁土層	土師器	杯	—	[3.6]	—	—	密	良	にぶい黄橙色（10YR6/4） にぶい黄橙色（10YR6/4）	不明瞭 回転ナデ	
315	86	73	調査区北壁土層	土師器	皿	7.4	1.4	6.0	—	密	良	橙色（5YR6/6） 橙色（5YR6/6）	回転ナデ 回転ナデ、底部ヘラ切り	
316	86	73	E3 グリッド遺構検出面	土師器	把手	[6.9]	[3.0]	2.2	—	密	良	橙色（7.5YR7/6） 橙色（7.5YR7/6）	ナデ ナデ	
317	86	73	排土置場	緑釉陶器	椀	—	[1.6]	(5.2)	—	密	良	露胎：灰色（5Y6/1） 釉：オリーブ黄色（7.5Y6/3）	施釉。足込み部分に 1 条の沈線 施釉。底部ナデか高台ツマミナデ	貼付高台
318	86	73	調査区西半遺構検出面	緑釉陶器	椀	—	[2.2]	—	—	密	やや良	露胎：灰白色（5Y7/1） 釉：オリーブ黄色（5Y6/3）	回転ナデ、施釉 回転ナデ、施釉	
319	86	73	F4 グリッド遺構検出面	白磁	椀	—	[2.2]	—	—	密	良	露胎：灰白色（2.5Y8/1） 釉：灰黄色（2.5Y7/2）	回転ナデ、施釉 回転ナデ、施釉	玉縁口縁
320	86	73	排土置場	白磁	椀	—	[3.9]	—	—	密	良	露胎：灰白色（N8/　） 釉：灰白色（7.5Y8/1）	回転ナデ後施釉 回転ナデ後施釉	玉縁口縁
321	86	73	C3・4 グリッド遺構検出面	白磁	椀	—	[2.4]	(6.1)	—	密	良	露胎：灰白色（5Y8/1） 釉：灰白色（5Y7/2）	施釉 回転ヘラケズリ、施釉	貼付高台
322	86	73	排土置場	白磁	椀	(15.8)	[3.0]	—	—	やや密	良	灰白色（5Y7/2） 灰白色（5Y7/2）	回転ナデ 回転ナデ後回転ヘラケズリ	
323	86	73	調査区東半遺構検出面	青磁	椀	—	[4.8]	—	—	粗	やや良	露胎：灰白色（2.5Y8/2） 釉：灰オリーブ色（7.5Y6/2）	回転ナデ、施釉 回転ナデ、施釉	内面に草花片彫文様
324	86	73	調査区東半遺構検出面	青磁	椀	—	[3.1]	—	—	密	良	露胎：灰白色（2.5Y7/1） 釉：オリーブ灰色（10Y5/2）	回転ナデ、施釉 回転ナデ、施釉	外面に鎬蓮弁文様
325	86	73	調査区西半清掃中	青磁	椀	—	[3.5]	(7.1)	—	密	良	露胎：灰白色（10YR8/1） 釉：灰白色（5Y7/2）	回転ナデ、施釉 回転ナデ、体部下位と底部右回転ヘラケズリ	玉縁口縁
326	86	73	調査区東半遺構検出面	青磁	椀	—	[2.8]	(5.2)	—	密	良	露胎：灰白色（10YR8/2） 釉：灰オリーブ色（5Y6/2）	回転ナデ、施釉 回転ナデ、施釉。底部ヘラケズリ、無釉	
327	86	74	排土置場	青磁	椀	—	[2.5]	4.0	—	密	良	露胎：灰白色（2.5Y7/1） 釉：灰黄色（2.5Y6/2）	回転ナデ後施釉 回転ナデ後施釉。底部回転ヘラケズリ	外面に鎬連弁文様
328	86	74	H2 グリッド遺構検出面	青磁	椀	—	[2.2]	—	—	密	良	露胎：灰白色（N8/　） 釉：灰オリーブ色（5Y5/2）	回転ナデ、施釉 回転ナデ、施釉	内面に刻花文
329	86	74	調査区西谷遺構検出面	青磁	皿	(9.6)	1.8	(5.0)	—	密	良	露胎：灰白色（2.5Y7/1） 釉：灰色（7.5Y6/1）	回転ナデ後施釉 回転ナデ後施釉。底部回転ヘラケズリ	

第 12 表　馬場遺跡出土土製品観察一覧表

No.	挿図	図版	出土場所	器種	法量（cm）					重さ（g）	胎土	焼成	色調	主な調整（内）（外）	備考
					長さ（残存）	幅（残存）	厚さ（残存）	最大径	孔径						
63	24	28	SI 8 北東部	土錘	−	−	2.6	2.8	0.3	18.5	密	良	− 橙色（7.5YR7/6）～灰褐色（7.5YR4/2）	ナデ後丁寧なミガキ	
78	29	29	SI 9 北東部	勾玉	2.9	1.1	1.4	−	0.1～0.2	6.1	密	不良	− 黒褐色（5YR2/1）～橙色（5YR6/6）	ナデ成形	
115	38	38	SI13 北西部上層	紡錘車	[4.8]	[4.7]	0.6	−	0.2	13.8	やや密	やや良	にぶい黄橙色（10YR7/3） 黒色（10YR2/1）	ハケ目 ハケ目	中央に上下に方向からの穿孔。土器転用品か。内外面とも摩滅が著しい
215	67	59	SK 1 北東部	紡錘車	[3.4]	[3.4]	0.7	−	−	9.8	密	良	− 橙色（5YR6/6） 橙色（5YR6/6）	ハケ目 ハケ目	弥生土器転用品
307	85	72	排土置場	土錘	4.6	1.5	1.35	−	0.5	8.9	密	良	− 橙色（5YR6/6）	ナデ	管状土錘

第 13 表　馬場遺跡出土石器・石製品等観察一覧表（1）

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量（cm）			重さ（g）	石材	備考
						長さ（残存）	幅（残存）	厚さ（残存）			
7	9	14	SI 1 西部 2 層	石器	磁石	12.3	6.9	[3.1]	214	凝灰岩	擦痕あり。3 面使用。内外面中央部赤黒く変色
8	9	14	SI 1 貼床	石器	台石	23.7	22.6	11.3	11.3kg	花崗岩	表面の中央は敲打面。周辺は磁面。一部に擦痕あり。底面付近の一部に擦痕
9	10	15	SI 1 東部 1 層	石器	石鏃	2.2	[1.9]	0.3	0.9	泥質片麻岩？	凹基無茎式
10	10	15	SI 1 北西部	石器	石鏃	1.9	[1.5]	0.3	0.6	安山岩	凹基無茎式。抉りが深い
11	10	15	SI 1 貼床	石器	石鏃	[1.3]	[1.4]	0.5	0.7	郡島産黒曜石	凹基無茎式。抉りは浅い
12	10	15	SI 1 南西部貼床	石器	剥片	3.4	1.0	0.4	1.2	安山岩	
29	13	16	SI 2 南西部　埋土	石器	紡錘車	−	直径 [4.0]	0.55	5.8	角閃石安山岩	関南市旧熊ヶ岳産か
30	13	16	SI 2 北西部	石器	磁石	[10.4]	9.2	3.5	550	珪質片麻岩	表面が使用面、裏面と両側面は自然面
31	13	16	SI 2 南西部	石器	剥片	[4.0]	[3.2]	8.0	8.0	郡島産黒曜石	
33	14	16	SI 3－SP 8	石器	石斧未製品	[13.4]	[6.9]	4.1	436	凝灰岩	未製品 擦痕と板状工具による使用痕
34	14	16	SI 3 南西部　埋土	ガラス製品	管玉	1.0	直径 0.5×0.6	孔径 0.2	0.3	−	浅葱色 #00a3af（H.P.「日本の伝統色　和色大辞典」より） 内外面は粗く、光沢なし。小円形の剥離が多数みられる
38	18	23	SI 6 周溝	石器	磁石	[11.6]	[7.3]	5.8	654	凝灰岩	全面使用、擦痕あり
44	22	24	SI12 中央土坑　底面	石器	磁石	17	10.3	1.6	407	凝灰岩	表面は中央部から外側に向かって潜らか。裏面は剥離し、自然面になる。
45	22	24	SI12 床面	石器	台石	32.1	28.6	16.1	24.5kg	花崗岩	表面は磁面で、擦痕あり。裏面に被熱痕あり
64	25	28	SI 8 南東部	石器	石鏃	1.4	1.3	0.3	0.3	石英	凹基無茎式
65	25	28	SI 8 北東部	石器	石鏃	2.9	2.05	0.3	1.5	泥質片麻岩？	凹基無茎式
66	25	28	SI 8 南東部	石器	石鏃	2.45	1.45	0.2	0.8	泥質片麻岩？	凹基無茎式
67	25	28	SI 8 北東部埋面	石器	石鏃	2.25	0.9	0.2	0.4	泥質片岩	凹基無茎式か
68	25	28	SI 8 北西部	石器	磁石	8.8	3.0	1.05	42	凝灰岩	青磁石 全面が細かく潜らかな磁面
69	25	28	SI 8 北東部	石器	磁石	[18.7]	9.4	9.3	2.0kg	砂質片岩	上面、両側面が使用面
79	29	29	SI 9 北西部	石製品	管玉	1.5	直径 0.35	孔径 0.15	0.3	碧玉	
80	29	29	SI 9 北東部　埋土	石器	凹石	[7.0]	[6.0]	5.0	320	凝灰岩	表面敲打痕、側面擦痕
100	36	33	SI11	ガラス製品	小玉	0.3	直径 0.5×0.4	孔径 0.2	0.1 以下	−	花緑青色 #5AB5B2（H.P.「日本の伝統色　和色大辞典」より） 内外面に光沢はあるが、やや気泡が多い

第 14 表　馬場遺跡出土石器・石製品等観察一覧表（2）

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量（cm） 長さ［現存］	幅［現存］	厚さ［現存］	重さ（g）	石材	備考
101	36	33	SI11 北東部	石器	叩石	8.2	5.5	3.5	235	石英斑岩	両端部に強い敲打痕
102	36	33	SI11 南東部	石器	凹石	8.9	8.0	4.5	485	花崗岩	表面中央に敲打痕、裏面強い敲打痕と擦痕。側面に調整痕
117	39	38	SI13 北西部　床面	石器	石槌か	4.2	1.6	0.6	3.2	安山岩	
118	39	38	SI13 北東部　下層	石器	石錘	［1.5］	［1.3］	0.3	0.3	安山岩	凹基無茎式
119	39	38	SI13 遺構検出面	石器	石逸か	2.1	1.8	0.2	0.7	黒曜石？	
120	39	38	SI13 北西部　上層	石器	石錐	3.9	［7.0］	0.7	20.1	泥質片岩	孔径 0.6cm。 両刃、結通しの穴が 2 つ
121	39	38	SI13 北東部　上層	石器	扁平片刃石斧	［4.2］	3.4	0.8	16.1	凝灰岩	加工痕
122	39	38	SI13 北西部　上層	石器	磨石	9.9	6.2	5.4	510	珪質片麻岩	
123	39	38	SI13 北部	石器	支脚か	19.9	9.3	6.7	2.3kg	凝灰岩？	上端は被熱により煤が付着、下端は V 字状に打ち欠きか
124	40	39	SI13 北西部　床面	石器	磁石	51.4	13.8	12.2	14.0kg	凝灰岩	3 面は研面、1 面は一部のみ研面
125	40	38	SI13 北東部　床面	石器	台石	327	25.1	16.0	19.0kg	片麻岩	表面に敲打痕と擦痕（機能面）、裏面に擦痕あり。側面の一部に加工痕（粗割時のものか）
133	41	39	SI14 － SP13	石製品	管玉	1.15	直径 0.25	孔径 0.1	0.1	碧玉	両面穿孔か。実 318 と同類
139	43	41	SI15 南西部　2 層	石器	紡錘車	－	直径 ［5.1］	0.6	7.2	角閃石安山岩	隅南市四熊ヶ岳産か。両面に擦痕
140	43	41	SI15 北西部　下層	石器	台石	［19.5］	16.8	7.3	4.2kg	花崗岩	両面とも中央付近に敲打痕と擦痕が所々にある。側面に調整痕あり
141	43	41	SI15　床面	石器	台石	33.0	22.2	11.0	10.3kg	花崗岩	表面中央にわずかな凹み、一部敲打痕。表面全体に擦痕あり
151	46	45	SI16 北西部	石器	凹石	12.9	11.1	7.3	1.5kg	（変質部）花崗岩	両面中央に敲打痕、その周辺に擦痕がある。研面とする。両側面は調整により中央面取りされる
152	46	45	SI16 北西部　床面	石器	台石	［20.2］	［13.3］	［5.6］	2623	石英斑岩	表面中央付近に敲打痕、裏面全体に擦痕あり
153	46	46	SI16 中央土坑	石器	磁石	［19.2］	10.8	4.6	18	珪質片麻岩	両面と両側面の四面を使用。水平に片理が発達
168	52	49	SI18 トレンチ	石器	磁石	［11.8］	［11.8］	4.1	911	珪質片麻岩	両面とも研面として使用
169	52	49	SI18 南東部	石器	台石	［20.4］	［21.6］	7.0	5250	安山岩	表面中央に敲打による凹み、周辺に擦痕。裏面は平坦に加工か
173	53	52	SX 2	石器	紡錘車	－	直径 （4.6）	0.6	10.0	角閃石安山岩	隅南市四熊ヶ岳産か。両面に擦痕
176	55	52	SP179	石器	凹石	11.4	5.2	4.4	860	花崗岩	中央に敲打痕、周囲に擦痕
191	60	57	SK38	石器	台石	22.6	19.6	8.3	5000	花崗岩	表面中央に敲打痕及び敲打による凹み。その周辺に擦痕。側面に調整痕あり
192	60	57	SK38 西半	石器	磁石	［8.1］	［9.3］	3.1	451	珪質片麻岩	両面とも使用。上面のほうが磨らかで下面は凹凸が著しい
216	67	59	SK41	石器	石錐	［3.2］	［3.2］	0.45	6.9	泥質片岩	両刃型
257	81	67	SP1013	石器	石錘	2.85	［1.7］	0.5	2.0	泥質片岩？	平基無茎式
258	81	67	SP995	石器	磁石	［6.3］	2.9	2.3	60	凝灰岩	
259	81	67	SP1013	石器	磨石	［7.2］	［6.3］	3.6	280	花崗岩	
260	81	67	SP1251	石器	台石	24.9	18.4	7.1	5500	花崗岩	表面中央に凹み、その周辺は研面としても利用。側面の一部に擦痕
273	82	68	SD18	石器	石錘	［1.3］	1.6］	0.25	0.4	安山岩	凹基無茎式。内外面の劣化著しい
285	84	70	東谷 Tr. 2 黒褐色土（最上層）	石器	紡錘車未製品	8.3	6.0	1.3	78.6	角閃石安山岩	隅南市四熊ヶ岳産。両面全体に擦痕。側面は細く枝をつくる
286	84	70	東谷 Tr. 1 黒褐色土層（最上層）	石器	磁石	［27.5］	11.4	5.4	2579	凝灰岩	両端部欠損。三面を研面として使用、他は自然面で去割痕あり
332	87	74	E3 グリッド 遺構検出面	石器	石錘	［2.6］	［2.1］	0.45	2.5	姫島産黒曜石	未製品
333	87	74	調査区東側 遺構検出面	石器	石錘	1.7	［1.1］	0.25	0.3	姫島産黒曜石	凹基無茎式

第 15 表　馬場遺跡出土石器・石製品観察一覧表（3）

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量（cm） 長さ（残存）	幅（残存）	厚さ（残存）	重さ（g）	石材	備考
334	87	74	調査区東側遺構検出面	石器	石鏃	1.5	1.85	0.3	0.4	安山岩	凹基無茎式
335	87	74	調査区東側遺構検出面	石器	石鏃	1.9	[1.4]	0.3	0.7	安山岩	凹基無茎式
336	87	74	調査区東側遺構検出面	石器	石鏃	[2.65]	[1.9]	0.5	2.4	泥質片岩	凹基無茎式
337	87	74	DS グリッド遺構検出面	石器	石鏃	2.75	1.85	0.35	1.3	泥質片岩か	凹基無茎式
338	87	74	F4 グリッド遺構検出面	石器	石鏃	2.0	1.5	0.35	0.8	泥質片岩	平基無茎式
339	87	74	F4 グリッド遺構検出面	石器	石鏃	1.8	1.5	0.45	0.9	安山岩	平基無茎式
340	87	74	調査区中央遺構検出面	石器	石鏃	1.85	1.95	0.4	1.2	安山岩	平基無茎式
341	87	74	調査区西側遺構検出面	石器	石鏃	1.65	1.25	0.3	0.4	安山岩	凹基無茎式
342	87	74	表採	石器	石鏃	2.0	1.5	0.35	0.6	安山岩	凹基無茎式。抉り が深い
343	87	74	調査区北寄り 表土除去中	石器	石鏃	1.85	1.6	0.55	0.9	安山岩	尖端部欠損
344	87	74	調査区東寄 表土除去中	石器	石鏃	[1.3]	0.8	0.25	0.4	泥質片岩	平基無茎式
345	87	74	調査区東側遺構検出面	石器	石鏃か	3.5	0.5	0.35	0.7	安山岩	押圧剥離痕
346	87	74	排土置場	石器	石鏃か	[3.4]	[1.1]	0.5	2.0	泥質片岩	
347	87	74	調査区西側遺構検出面	石器	石鏃	2.5	1.4	0.55	1.3	姫島産黒曜石	
348	87	75	調査区北側　壁面	石器	石斧か	[6.3]	[5.7]	2.1	95	泥質ホルンフェルスか	縦方向の擦痕
349	87	75	排土置場	石器	石斧か	[9.0]	[6.0]	3.3	300	珪質片岩	部分的に擦痕
350	87	75	E3 グリッド遺構検出面	石器	スクレイパーか	3.45	9.2	0.9	35.0	泥質片岩	両面を調整。実測器の転用か
351	87	75	E4 グリッド遺構検出面	石器	石錐 I 丁	[4.8]	[4.2]	0.55	16.7	泥質片岩	片刃
352	87	75	F4 グリッド遺構検出面	石器	敲石磨石	3.75	3.9	1.3	28.6	泥質片岩	未貫通の穿孔あり
353	87	75	E3 グリッド遺構検出面	石器	叩石	9.9	6.0	4.7	400	花崗岩	表面に擦痕か。片側端面に敲打痕
354	87	75	調査区西側遺構検出面	石器	磨石	12.7	11.2	4.5	890	花崗岩	中央に敲打痕が集中。全体に擦痕
355	87	75	排土置場	石材	－	[4.5]	[3.0]	2.6	47.4	姫島産黒曜石	転礫か

第 16 表　馬場遺跡出土鉄器・鉄製品観察一覧表

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量（cm） 長さ（残存値）	幅（残存値）	厚さ（残存値）	重さ（g）	備考
13	10	15	SI 1 南東部床面直上	鉄器	鉄鏃	[4.45]	1.5	0.3	4.0	
14	10	15	SI 1 南東部　壁溝	鉄製品	－	[4.2]	[2.55]	0.6	13.1	
116	39	38	SI13 北西部 1－1 層	鉄製品	－	[4.2]	[2.35]	[0.95]	9.2	
132	41	39	SI14－SP 5	鉄製品	鉄淳	4.3	4.3	2.3	69.0	
158	50	46	SI10 南東部	鉄器	鉄鏃	[5.2]	[3.0]	0.3	10.1	
330	86	74	調査区中央付近遺物包含層	銭貨	銅銭	直径 2.5	孔 0.7 四方	0.1	1.2	「景祐元寶」（初鋳 1034 年）
331	86	74	E 4 グリッド遺構検出面	銭貨	銅銭	直径 2.4	孔 0.5 四方	0.1	2.3	「□□（聖カ）元寶」

Ⅳ　自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1　はじめに

本分析調査では、馬場遺跡から出土した炭化物について、樹種同定と放射性炭素年代測定を行い、木材利用について資料を得るとともに、遺構等の年代に関わる情報を得る。

2　試料

樹種同定・年代測定用試料は、遺構より検出された炭化物それぞれ 13 点である。試料の詳細は結果とあわせて第 17 表に示す。樹種同定試料と年代測定試料は、試料 11 を除くと試料名が同一である。ただし、接合するかどうかは不明である。また、試料 11 は、同一遺構だが試料名が異なる。このように年代測定試料と樹種同定試料が同一ではない可能性があるため、樹種同定試料と年代測定試料ともに樹種同定を実施した。

3　分析方法

（1）樹種同定

剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面を作成する。電子顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

（2）放射性炭素年代測定

採取試料の周囲を削り落として 50mg 程度に調整する。削り落とした部分で樹種の確認を行う。試料は、塩酸（HCl）により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid）。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に 1 mol/L である。ただし、試料が脆弱な場合は、炭素の損耗を防ぐために、アルカリの濃度を薄くする（AaA と表記）。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）は Elementar 社の vario ISOTOPE cube と Ionplus 社の Age3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を NEC 社製のハンドプレス機を用いて内径 1 mm の孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NEC 社製）を用いて、^{14}C の計数、^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C 濃度（^{14}C/^{12}C）を測定する。AMS 測定時に、米国国立標準局（NIST）から提供される標準試料（HOX- Ⅱ）、国際原子力機関から提供される標準試料（IAEA-C6 等）、バックグラウンド試料（IAEA-C1）の測定も行う。δ^{13}C は試料炭素の ^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5568

第 17 表　分析試料一覧・樹種同定結果

番号	遺構名等	年代測定試料	樹種同定用試料	備　考
試料 1	SI 1	クリ－シイ属	クリ－シイ属	細片が癒着
試料 2	SI 8　中央土坑	マツ属複維管束亜属	マツ属複維管束亜属	
試料 3	SI10　中央土坑	サクラ属	サクラ属	
試料 4	SI11 － SP 8	広葉樹	クリ－シイ属	細片が癒着
試料 5	SI12	イネ科草本	イネ科草本	
試料 6	SI13　北東側床面	クリ－シイ属	アカガシ亜属	クリ－シイ属は 細片が癒着
試料 7	SI14　西側床面直上	クリ－シイ属	クリ－シイ属	クリ－シイ属は 細片が癒着
試料 8	SI15　床面	クリ－シイ属	シイ属	クリ－シイ属は 細片が癒着
試料 9	SI16　中央土坑	サクラ属 5 年	マツ属複維管束亜属	
試料 10	SI17 － SP 6	クリ－シイ属	クリ－シイ属	細片が癒着
試料 11	SI18　中央土坑	クリ－シイ属 マツ属複維管束亜属	－	年代測定はクリ－シイ属
	SI18　床面	－	クリ－シイ属	細片が癒着
試料 12	SI21　南東側床面	イネ科草本	イネ科草本	細片が癒着
試料 13	SK 2　床面	クリ－シイ属	クリ－シイ属	細片が癒着

年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う（Stuiver & Polach 1977）。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウエアは、OxCal4.4（Bronk,2009）、較正曲線は IntCal20（Reimer et al.,2020）である。

4　結果

（1）樹種同定

結果を第 17 表に示す。針葉樹 1 分類群（マツ属複維管束亜属）、広葉樹 4 分類群（コナラ属アカガシ亜属、シイ属、クリ - シイ属、サクラ属）、草本類 1 分類群（イネ科）に同定された。炭化材は全体的に保存状態が悪く、一つの炭化材に見えても、実際は細片が集まって塊状になっている試料も存在する。以下、解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属（*Pinus* subgen. *Diploxylon*）　マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや緩やかで、垂直樹脂道が晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道と、樹脂道を取り

囲むエピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1～15細胞高。

・コナラ属アカガシ亜属（*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*） ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有す。放射組織は同性、単列で1～15細胞高のものと、複合放射組織とがある。

・シイ属（*Castanopsis*） ブナ科

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に1～2個幅で放射方向に配列する。孔圏部は3～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高。なお、保存状態が悪く、状態の良い組織構造が広範囲にわたって観察できない場合、近縁のクリとの区別がつかないことから、そのような試料はクリ－シイ属（*Castanea crenata* – *Castanopsis*）とした。

・サクラ属（*Prunus*） バラ科

散孔材で、年輪のはじめにやや大型の道管が配列し、孔圏外でやや管径を減じた後、単独または複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～6細胞幅、10～50細胞高。

・イネ科草本類（*Grass*）

断面は直径3mm程度の円柱状で、中空。道管の左右に1対の大型の道管があり、その外側に師部細胞がある。これらを繊維細胞（維管束鞘）が囲んで維管束を形成する。繊維細胞が薄い。維管束は組織中に散在するが、茎の周辺は小型で密度が高く、中心に向かってやや大きい。茎の太さ、繊維細胞の発達状況から、ススキ類など陸上に生育する大型のイネ科草本類と考えられる。

（2）放射性炭素年代測定

結果を第18表・第88図～第90図に示す。いずれの試料も年代測定に必要な炭素量が回収できている。測定の結果、試料1が1850±20BP、試料2が1835±20BP、試料3が1885±20BP、試料4が1780±20BP、試料5が2100±20BP、試料6が2040±20BP、試料7が2100±20BP、試料8が1925±20BP、試料9が1830±20BP、試料10が1855±20BP、試料11が2165±20BP、試料12が1950±20BP、試料13が1290±20BPである。

暦年較正は、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、その後訂正された半減期（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正することによって、暦年代に近づける手法である。2σの値は、試料1がcalAD128～AD238、試料2がcalAD129～AD302、試料3がcalAD84～AD222、試料4がcalAD230～AD340、試料5がcalBC171～BC49、試料6がcalBC106～AD26、試料7がcalBC174～BC47、試料8がcalAD27～AD204、試料9がcalAD129～AD310、試料10がcalAD128～AD235、試料11がcalBC355～BC111、試料12がcalAD10～AD127、試料13がcalAD667～AD774である。

第 18 表　放射性炭素年代測定結果

試料	遺構	方法	補正年代（暦年較正用）BP	δ 13C (‰)	暦年較正年代			Code No.	
						年代値	確率 %		
試料 1	SI 1	AAA (1M)	1850 ± 20 (1852 ± 22)	-24.31 ± 0.20	σ	cal AD 133 - cal AD 140	1818 - 1810 calBP	5.8	IAAA-210250	pal-13460
					σ	cal AD 160 - cal AD 190	1791 - 1760 calBP	25.4		
					σ	cal AD 201 - cal AD 234	1750 - 1716 calBP	37.1		
					2 σ	cal AD 128 - cal AD 238	1822 - 1713 calBP	95.4		
試料 2	SI 8 中央土坑	AAA (1M)	1835 ± 20 (1834 ± 21)	-30.19 ± 0.20	σ	cal AD 173 - cal AD 181	1777 - 1769 calBP	4.1	IAAA-210251	pal-13461
					σ	cal AD 203 - cal AD 244	1747 - 1706 calBP	64.1		
					2 σ	cal AD 129 - cal AD 248	1821 - 1703 calBP	94.9		
					2 σ	cal AD 300 - cal AD 302	1651 - 1648 calBP	0.6		
試料 3	SI10 中央土坑	AAA (1M)	1885 ± 20 (1884 ± 21)	-26.33 ± 0.19	σ	cal AD 129 - cal AD 203	1822 - 1748 calBP	68.3	IAAA-210252	pal-13462
					2 σ	cal AD 84 - cal AD 95	1866 - 1855 calBP	2.8		
					2 σ	cal AD 116 - cal AD 222	1834 - 1728 calBP	92.6		
試料 4	SI11 － SP 8	AAA (0.05M)	1780 ± 20 (1780 ± 21)	-26.09 ± 0.19	σ	cal AD 241 - cal AD 255	1709 - 1695 calBP	17.1	IAAA-210253	pal-13463
					σ	cal AD 286 - cal AD 325	1665 - 1625 calBP	51.1		
					2 σ	cal AD 230 - cal AD 262	1720 - 1688 calBP	27.7		
					2 σ	cal AD 276 - cal AD 340	1674 - 1610 calBP	67.8		
試料 5	SI12	AAA (1M)	2100 ± 20 (2101 ± 20)	-10.87 ± 0.24	σ	cal BC 152 - cal BC 95	2101 - 2044 calBP	52.0	IAAA-210254	pal-13464
					σ	cal BC 73 - cal BC 56	2022 - 2005 calBP	16.3		
					2 σ	cal BC 171 - cal BC 49	2120 - 1998 calBP	95.4		
試料 6	SI13 北東隅床面	AAA (1M)	2040 ± 20 (2042 ± 21)	-25.87 ± 0.19	σ	cal BC 53 - cal BC 25	2002 - 1974 calBP	33.2	IAAA-210255	pal-13465
					σ	cal BC 20 - cal AD 8	1969 - 1942 calBP	35.0		
					2 σ	cal BC 106 - cal AD 26	2055 - 1924 calBP	95.4		
試料 7	SI14 西隅床面直上	AaA (0.1M)	2100 ± 20 (2099 ± 22)	-24.98 ± 0.18	σ	cal BC 152 - cal BC 93	2101 - 2042 calBP	49.6	IAAA-210256	pal-13466
					σ	cal BC 76 - cal BC 55	2025 - 2004 calBP	18.7		
					2 σ	cal BC 174 - cal BC 47	2123 - 1996 calBP	95.4		
試料 8	SI15 床面	AAA (1M)	1925 ± 20 (1926 ± 21)	-26.65 ± 0.20	σ	cal AD 63 - cal AD 129	1888 - 1821 calBP	68.3	IAAA-210257	pal-13467
					2 σ	cal AD 27 - cal AD 46	1923 - 1904 calBP	5.3		
					2 σ	cal AD 57 - cal AD 204	1893 - 1747 calBP	90.2		
試料 9	SI16 中央土坑	AAA (1M)	1830 ± 20 (1830 ± 21)	-31.25 ± 0.22	σ	cal AD 204 - cal AD 246	1746 - 1705 calBP	68.3	IAAA-210258	pal-13468
					2 σ	cal AD 129 - cal AD 250	1821 - 1700 calBP	91.3		
					2 σ	cal AD 295 - cal AD 310	1655 - 1640 calBP	4.1		
試料 10	SI17 － SP 6	AAA (1M)	1855 ± 20 (1855 ± 21)	-28.89 ± 0.22	σ	cal AD 133 - cal AD 140	1818 - 1810 calBP	6.3	IAAA-210259	pal-13469
					σ	cal AD 160 - cal AD 190	1791 - 1760 calBP	27.8		
					σ	cal AD 201 - cal AD 232	1750 - 1719 calBP	34.1		
					2 σ	cal AD 128 - cal AD 235	1822 - 1715 calBP	95.4		
試料 11	SI18 中央土坑	AAA (0.05M)	2165 ± 20 (2166 ± 21)	-29.41 ± 0.19	σ	cal BC 347 - cal BC 316	2296 - 2265 calBP	33.2	IAAA-210260	pal-13470
					σ	cal BC 204 - cal BC 171	2153 - 2120 calBP	35.1		
					2 σ	cal BC 355 - cal BC 281	2304 - 2230 calBP	45.4		
					2 σ	cal BC 231 - cal BC 147	2180 - 2096 calBP	47.1		
					2 σ	cal BC 137 - cal BC 111	2086 - 2060 calBP	2.9		
試料 12	SI21 南東隅床面	AaA (0.1M)	1950 ± 20 (1951 ± 21)	-16.93 ± 0.23	σ	cal AD 30 - cal AD 42	1921 - 1909 calBP	11.9	IAAA-210261	pal-13471
					σ	cal AD 60 - cal AD 85	1891 - 1866 calBP	29.9		
					σ	cal AD 94 - cal AD 117	1856 - 1834 calBP	26.4		
					2 σ	cal AD 10 - cal AD 127	1941 - 1824 calBP	95.4		
試料 13	SK 2 床面	AAA (1M)	1290 ± 20 (1289 ± 21)	-27.61 ± 0.22	σ	cal AD 675 - cal AD 704	1275 - 1246 calBP	31.4	IAAA-210262	pal-13472
					σ	cal AD 738 - cal AD 772	1212 - 1179 calBP	36.8		
					2 σ	cal AD 667 - cal AD 774	1283 - 1176 calBP	95.4		

1）年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。

2）BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。

3）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の 68.2% が入る範囲）を年代値に換算した値。

4）AAA は、酸・アルカリ・酸処理を示す。AaA は試料が脆弱なため、アルカリの濃度を薄くして処理したことを示す。

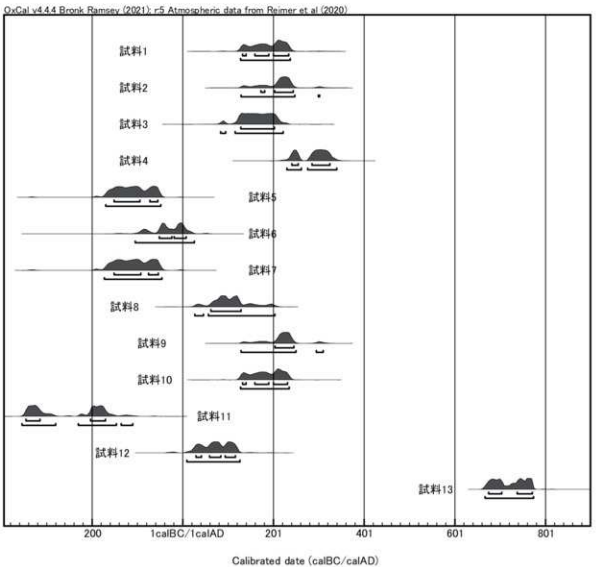
5）暦年の計算には、OxCal v4.4 を使用。

6）暦年の計算には 1 桁目まで示した年代値を使用。

7）較正データーセットは IntCal20 を使用。

8）桁目を丸めるのが慣例だが、較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1 桁目を丸めていない。

9）統計的に真の値が入る確率は、σ が 68.3%、2 σ が 95.4% である。



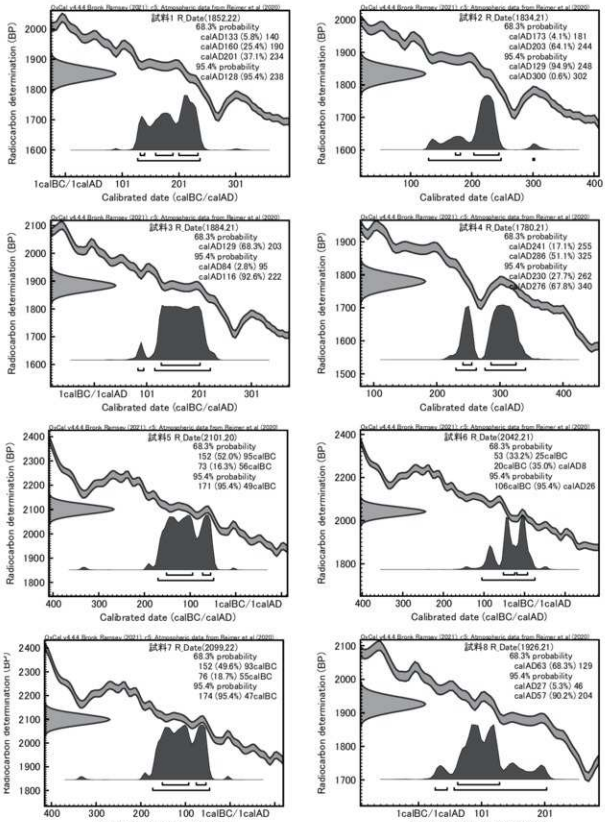
第 88 図　暦年較正結果（1）

5　考察

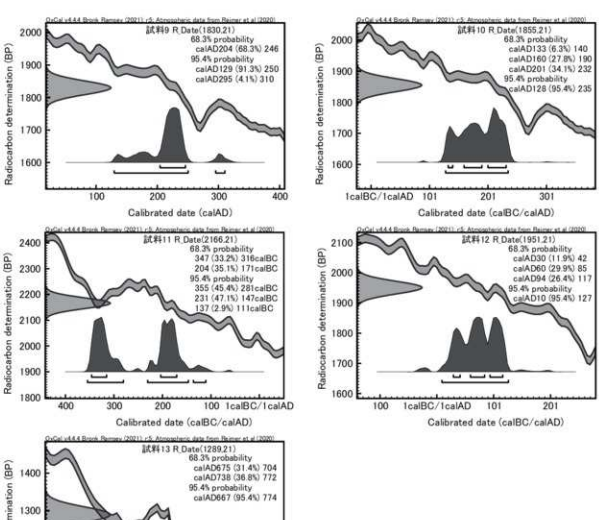
検出された樹種のうち、シイ属（クリ−シイ属を含む）、コナラ亜属アカガシ亜属は、現在でも遺跡周辺の自然度の高い場所に自生する。これらは常緑広葉樹林の主要な構成種であり、当時の山野にも普通に生育していたと考えられる。クリの可能性もあるクリ - シイ属、マツ属複維管束亜属、サクラ属は、人家近くや伐採地など、人為的に植生破壊された場所や、尾根沿い、河川近くなど安定した森林が形成されにくい場所に生育する分類群である。

分析を行った炭化材は、住居構築材や燃料材などに由来すると考えられる。アカガシ亜属やクリ、シイ属は重堅な木材で、建築材として用いられることが多い。また、マツ属複維管束亜属も油分が多く、水湿に強いことから、土木材や建築材など様々な用途がある。いずれも遺跡周辺に生育していたと考えられ、近くで入手可能であったと推測される。伊東・山田編（2012）の出土木製品用材データベースをみると、県内の縄文時代末〜弥生時代の出土材は、杭材、自然木など用途は様々であるが、アカガシ亜属、シイ属、クリ属などブナ科が多い傾向になり、今回の結果と調和的である。

その他、イネ科の草本類が検出されており、外壁や屋根材、床材等として用いられていたと考えら



第 89 図　暦年較正結果（2）



第 90 図　暦年較正結果（3）

れる。この炭化したイネ科草本は $\delta^{13}C$ の値が高く、C4 植物だとわかる。C4 植物は、温暖で乾燥した地域でも効率よく光合成を行うために進化した植物群で、イネ科やカヤツリグサ科等の一部にみられる。日本の草地でよくみられるイネ科としては、ススキやエノコログサ属、ヒエ属、キビ属がある。今回検出された炭化物は桿が太いことから、ススキなど大型になるイネ科 C4 植物であると考えられる。

年代測定の結果、ほとんどの試料が弥生時代の範疇に入っているものの、試料間でよりばらつきがみられる。今後は、試料ごとに異なる年代値について、出土遺物の年代観や遺構の切り合い関係などの関連性があるかどうかを検討していく必要がある。なお、今回暦年で AD200 年前後を示す試料が多いが、この時期の IntCal20 を使った較正値は、IntCal13 以前で較正した場合に比べ 100 年以上古い値を示すことがあり、注意が必要である。このため過去に分析した 1800 ～ 1900calBP を示す試

料に関しては、再度 IntCal20 を使って計算し直すなどの工夫が必要である。なお、この時期の暦年曲線は現在も検討中しており、将来発表されるものについては、さらに修正される可能性が指摘されている（Reimer et al.,2020）。

一方、試料 13（SK 2）については、他に比べて年代値が新しいため、遺構の年代観や後代からの落ち込みの可能性などを含めて検討していく必要がある。

引用文献

Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon,51,337-360.

林　昭三 ,1991, 日本産木材顕微鏡写真集 . 京都大学木質科学研究所 .

伊東隆夫 ,1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料 ,31, 京都大学木質科学研究所 ,81-181.

伊東隆夫 ,1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料 ,32, 京都大学木質科学研究所 ,66-176.

伊東隆夫 ,1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料 ,33, 京都大学木質科学研究所 ,83-201.

伊東隆夫 ,1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料 ,34, 京都大学木質科学研究所 ,30-166.

伊東隆夫 ,1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料 ,35, 京都大学木質科学研究所 ,47-216.

伊東隆夫・山田昌久（編）,2012, 木の考古学　出土木製品用材データベース , 海青社 ,449p.

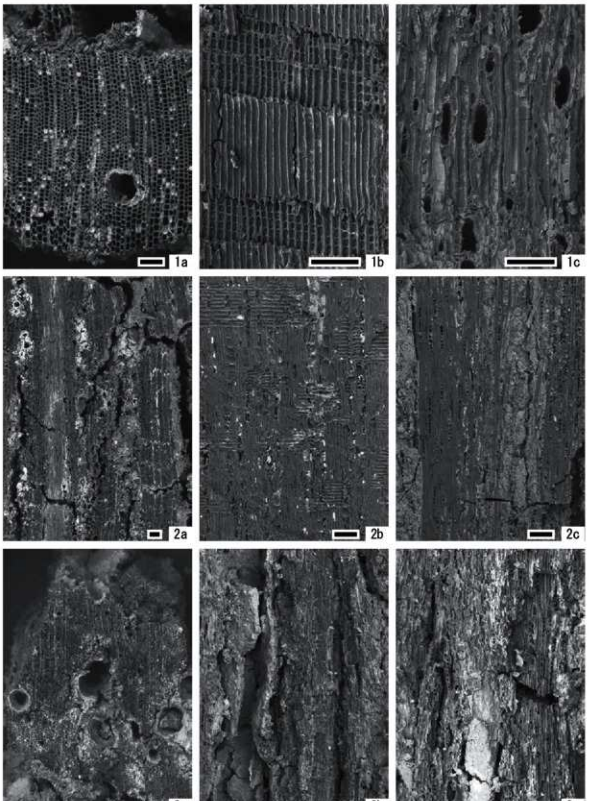
Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J. Turney, C. Wacker, L. Adolphi, F. Buentgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S.,2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0–55 cal kBP) . Radiocarbon, 62,1-33.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）,2006, 針葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘（日本語版監修）, 海青社 ,70p.［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（2004）IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］.

Stuiver M., & Polach AH., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.

島地　謙・伊東隆夫 ,1982, 図説木材組織 . 地球社 ,176p.

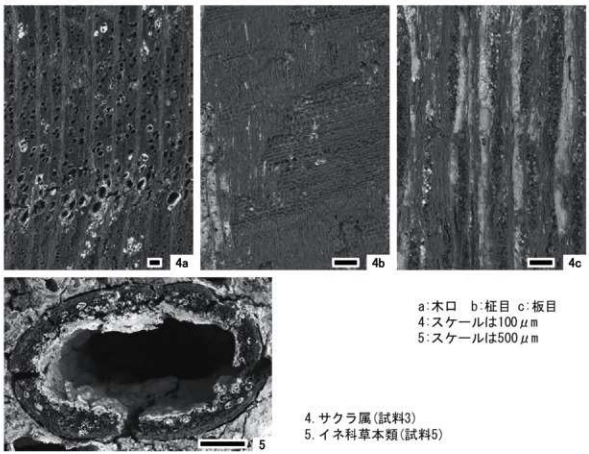
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998, 広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）, 海青社 ,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（1989）IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.



1. マツ属複維管束亜属(試料2)
2. アカガシ亜属(試料6)
3. シイ属(試料8)

a:木口　b:柾目 c:板目
スケールは100μm

第91図　炭化材（1）



a:木口　b:柾目 c:板目
4:スケールは100μm
5:スケールは500μm

4. サクラ属(試料3)
5. イネ科草本類(試料5)

第92図　炭化材（2）

Ⅴ 総 括

1 馬場遺跡出土の弥生土器・土師器について

（1）各時期の弥生土器・土師器の様相（第 93・94 図）

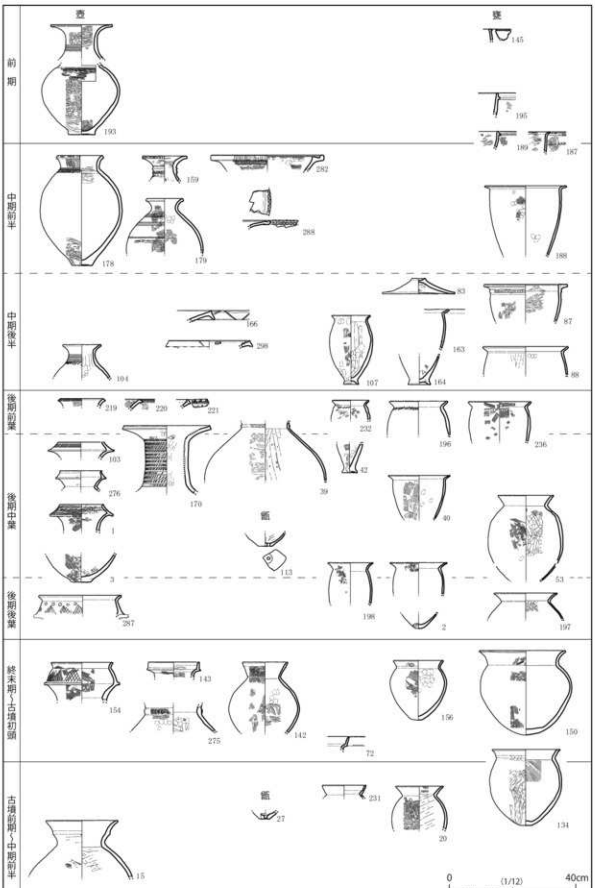
ここでは、馬場遺跡出土の弥生土器・土師器について、各時期の様相を整理する[註1)]。

弥生早期まで遡る土器として、刻み目突帯をもつ甕（145）があるが、混入である。遺構出土のものは、胴部に羽状文を施す「遠賀川式」の壺（193）や、直口縁で突帯を貼り付ける東九州系の「下城式」の甕（195）がある。いずれも前期後半と考える。また、いずれも如意状口縁で、刺突文を廻らす甕（187）と、口縁端部に刻み目とその下に突帯を廻らす甕（189）があり、前期末～中期初頭と考える。

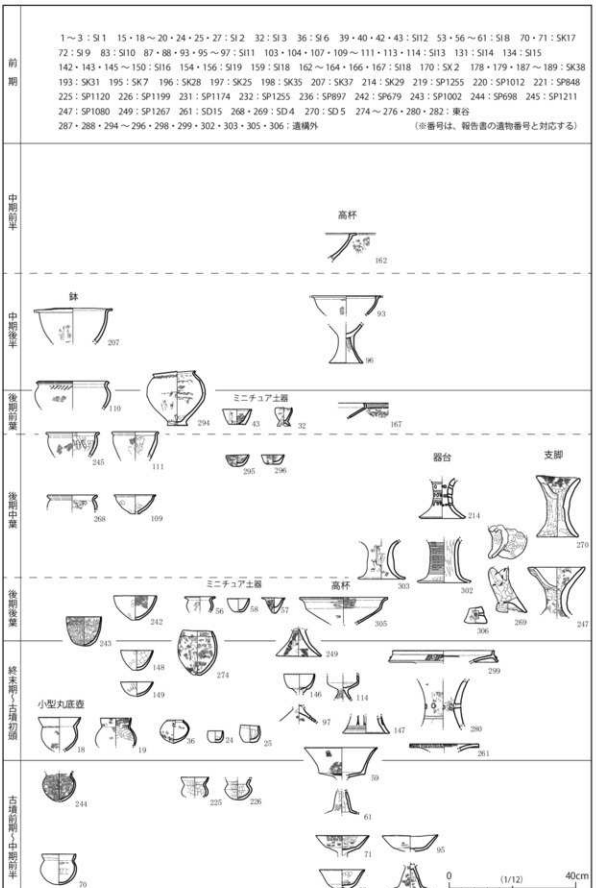
中期前半は、中央が張る胴部から頸部がすぼまり、口縁が開く壺（159・178・179）と、内折口縁の広口壺（282・288）があり、前期末に遡る可能性がある。甕や高杯は、口縁部が緩い逆Ｌ字状に発達する形状（162・188）である。中期後半は、前段階と同様の口頸部の形状をもつ壺で、斜行刺突文を施すもの（104）と、垂下口縁に鋸歯文を施す「柳井田式」の壺（166・298）がある。298 は内面に口内隆帯を貼り付ける。甕は、逆Ｌ字状で厚手の口縁下に、指頭押圧を施す突帯を廻らせる北部九州の須玖Ⅱ式併行のもの（87）と、く字状で跳ね上げ口縁のもの（88・163）があり、小型長胴の甕(107)もある。底部は凹レンズ状が主流である。高杯や鉢の口縁部も逆Ｌ字状を呈する。

後期は、前葉の口縁部に擬凹線を施す壺（219・220）から、中葉には複合口縁壺（１・103・276・287）への変化がみられる。複合口縁壺は、内傾する口縁部に波状文を施すもの（１・103）や無文のもの（276）から、後葉には内傾した口縁が端部で外に折れ、三角複線文等を施すもの（287）に変化する。頸部に沈線及び斜行刺突文を施す、吉備の「上東式」の影響を受けた広口長頸壺（170）もみられる。甕は、前葉には屈曲の弱いく字状口縁をもつが、中葉以降、口縁部が大きく外反する。底部は凸レンズ状、内面調整はヘラケズリが主流である。鉢は、く字状の短い口縁で球形の胴部のもの（110・294）から、次第に胴部が張らないもの（111・245・268）に変化する。中葉以降、ボウル状の胴部に凸レンズ状の底をもつもの（109・242）がみられる。高杯は、前葉には直線的に開く杯部で、直立した口縁部に沈線を廻らせるもの（167）から、後葉には大きく外反する口縁（305）に変化する。器台は、直線的な筒部から口縁部と脚部が開くものが主流で、穿孔（214）や沈線と斜行刺突文（302）による装飾がみられる。支脚は、筒部の両端が開き、上端の一部をU字状に抉るもの（247・270）、指状の受部が三方に伸びるもの（269）、小型の鳥嘴状支脚（306）がある。

終末期～古墳初頭は、複合口縁壺が残る（154）ほか、複合部から口縁が直立する備後系の壺（143）がある。甕は口縁が大きく外反し、胴部中央が張る球形を呈する（134・150・156）。134 は内面をハケ目で調整する。複合部から口縁が鋭く外傾する山陰系甕（72）もみられる。甕・鉢とも丸底が主流となる。小型丸底壺が出現し、口縁が内湾気味に開く（18）または直立するもの（19）がある。高杯は、平底で椀形のもの（114・146）と口縁が大きく外反するもの（59）があり、無貫通の三角形透かしをもつ伊予系の脚部（147）もみられる。器台は、口縁が垂下部と複合口縁部に分岐し、外面を装飾する大型のもの（299）がある。



第 93 図　馬場遺跡出土弥生土器・土師器の変遷（1）



第 94 図　馬場遺跡出土弥生土器・土師器の変遷（2）

第 19 表　馬場遺跡出土弥生土器・土師器の器種構成

時　期	器種／遺構	壺	複合口縁壺	甕	小型丸底壺	鉢	ミニチュア	甑	高杯	支脚	備考
中期前半	SI18	●△		●					●△		△垂下口縁壺（柳井田式）
	SK38	●		●							
中期後半	SI10	△		△							
	SI11	△		△					△		
	SI14	●		●					△		
後期前半	SI13	●	●	●		●		●	●		
	SI 9	●	●	●		●					△甕（山陰系）
	SI12	○		●			●			●	
後期後半	SI 1	●	●	●			○			●	
	SD 4	●		●		●				●	
	SI20			●							
	SI 6			●		●	●				
	SI 8	●	●	●		●	●		△	●	
終末期	SI19		●	●		●					
	SI16	●		●△		●	●		●		甕（備後系か）、高杯（伊予系）、△突帯文甕
	SI15	●		●							
古墳前期	SI 2	●		●	●		●	●	●		
	SI11								●		

△：遺構の時期と一致しないもの　●：遺構の時期と一致するもの
○：遺構の時期と一致し、かつ床面から出土したもの

古墳前期～中期前半は、複合部から口縁部にかけて大きく外反する壺（15）がある。甕は、長胴気味で口縁が大きく開くもの（20）がみられる。小型丸底壺は、口縁の立ち上がりが短い（70）。高杯は、浅底の口縁が広いもの（71・95）と、やや深底で口縁が小さいもの（60）がある。ハ字状の脚部は裾部付近で水平に折れる。

（2）主要遺構等の器種構成（第 19 表）

竪穴建物出土の土器は少ないが、竪穴建物ほか主要遺構の器種構成から、各時期をとおして、基本器種である壺・甕・高杯がみられる。器種が豊富になるのは後期～終末期であり、鉢・ミニチュア土器（鉢）・支脚が多くなる。器台も主流となるが、遺構外や東谷から出土するものが多い。この時期には、器台に加え複合口縁壺等、装飾性が高めた器種も増える。終末期には、小型丸底壺が現れるほか、他地域の影響を受けた土器もみられる。

註

1）本報告書における弥生土器・土師器の年代決定には、主に下記の文献を参照した。

石井龍彦 2004「山口県東部（周防）の弥生時代後期の土器について」『陶瑣』第 17 号

小林善也 2021「地域報告・山口県」『中期古墳研究の現状と課題Ⅴ～古墳時代中期の土師器・須恵器をめぐって～』中国四国前方後円墳研究会　第 24 回研究集会実行委員会

菅原康夫・梅木謙一編 2000『弥生土器の様式と編年　四国編』　木耳社

田畑直彦 2000「西日本における初期遠賀川式土器の展開」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会

田畑直彦 2012「周防西部・東部における弥生時代後期から古墳時代初頭の土器編年」『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成 20 年度－』

田畑直彦 2014「内折口縁土器について－長門西部における弥生時代前期末～中期初頭の様相－」『考古学研究』第 61 巻第 2 号

坪根伸也 2000「東部九州における弥生前期土器の諸相－「口縁下端凸状甕」と下城式甕－」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会

中村友博 1993「柳井田式の壺形土器」『古文化談叢』30（上）　九州古文化研究会

正岡睦夫・松本岩男編 1992『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』　木耳社

2　馬場遺跡出土石器の組成と石材について

馬場遺跡では、調査区内からの66点と表採した6点を合わせて計72点の石器のほか、剥片や石核が多く出土した。ここでは、馬場遺跡の調査区内出土の石器及び石材の組成について整理したい。

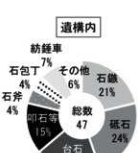
（1）石器組成について（第95図、第20表）

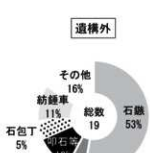
まず、石器組成では、遺構内及び遺構外（表採を除く）を合わせた総数66点のうち、石鏃が20点（30%）、叩石・磨石・凹石が9点（14%）、台石が9点（14%）、砥石が12点（18%）、石包丁が3点（5%）、石斧が2点（3%）、紡錘車が5点（8%）であり、用途不明を含むその他のものが各1点の計6点（9%）であった。このうち主体となるのが、狩猟具である石鏃、食品等の加工具である叩石・磨石・凹石と、それらとセットとなる台石、石材等の加工具である砥石といえる。台石は、おそらく持ち運びの点から、竪穴建物等の遺構内に残された状態であった。砥石は形状等の差から、時期差や用途の差があり、石器のほか、鉄製品や玉類等の加工に使われたと推定する。

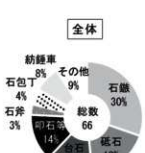
このように、石器組成からみて、本遺跡では狩猟・採集が主たる生業であったと考える。これは本遺跡が丘陵上に立地し、周辺に可耕地が少ないことと関係する。一方で、石包丁も少量ながら出土しており、稲作も一定程度行われたとみるべきであろう。また、砥石や紡錘車等の生活用具も出土することから、集落内で道具の加工・修繕や紡織が行われたと考える。

第20表　馬場遺跡出土石器の種類と使用石材

位置	遺構	石材／器種	黒曜石	安山岩	花崗岩	凝灰岩	石英	石英斑岩	片麻岩系			片岩系		泥質ホルンフェルス	合計	
									片麻岩	珪質片麻岩	泥質片麻岩	泥質片岩	砂質片岩			
遺構内	竪穴建物	石鏃	1	2			1				3	1			8	37
		叩石						1							1	
		凹石			2	1									3	
		磨石								1					1	
		台石		1	4			1	1						7	
		砥石				5				3			1		9	
		石斧				2									2	
		石包丁										1			1	
		紡錘車		2											2	
		支脚				1									1	
		石槍か		1											1	
		石匙か	1												1	
	その他の遺構	石鏃		1							1				2	10
		凹石			1										1	
		磨石			1										1	
		砥石				1				1					2	
		台石			2										2	
		石包丁									1				1	
		紡錘車		1											1	
遺構外	遺物包含層・遺構検出面	石鏃	2	5							1	2			10	19
		叩石			1										1	
		磨石			1										1	
		砥石				1									1	
		石包丁										1			1	
		紡錘車		1								1			2	
		石槍か		1											1	
		石錐か	1												1	
		石匙か										1			1	
	表採等	石鏃		2								1			3	6
		石斧								1				1	2	
		石錘											1		1	
合計			5	17	12	11	1	2	1	6	6	9	1	1	72	

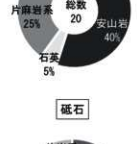






器種 / 出土位置	石鏃	砥石	台石	叩石等	石斧	石包丁	紡錘車	その他	総数
遺構内	10	11	9	7	2	2	3	3	47
遺構外	10	1	0	2	0	1	2	3	19
全体	20	12	9	9	2	3	5	6	66

石器の組成



石材 / 器種	黒曜石	安山岩	花崗岩	凝灰岩	石英	石英斑岩	片麻岩系	片岩系	総数
石鏃	3	8	0	0	1	0	5	3	20
叩石等	0	0	6	1	0	1	1	0	9
台石	0	1	6	0	0	1	1	0	9
砥石	0	0	0	7	0	0	4	1	12

石器別の石材割合

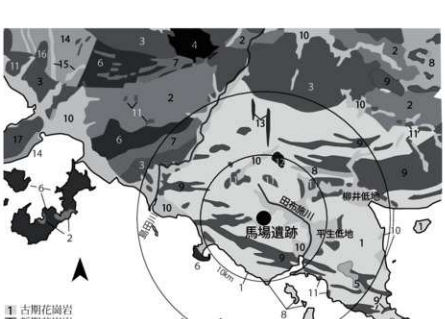
第 95 図　馬場遺跡出土石器の組成と石器別の石材割合

（2）石器別の石材割合について（第 95 図、第 20 表）

次に、本遺跡の主要な石器である、石鏃、叩石・磨石・凹石、台石、砥石について、石材割合をみてみる。なお、泥質及び砂質片岩は片岩系、珪質及び泥質等の片麻岩は片麻岩系として検討する。

石鏃は総数 20 点のうち、安山岩と片岩系及び片麻岩系が 8 割を占め、黒曜石の割合は低い。ただし、安山岩と片岩系及び片麻岩系は、顕微鏡観察でも識別がむずかしい。黒曜石はいずれも姫島産である。

叩石・磨石・凹石は総数 9 点のうち、花崗岩が 67％（6 点）を占め、他は凝灰岩、石英斑岩、片麻岩が各 1 点である。花崗岩や石英斑岩、片麻岩は、石材自体を加工するより、木の実等を叩いたり、すり潰すのに適した石といえる。同様に、台石も総数 9 点のうち、花崗岩が 67％（6 点）を占



第 96 図　馬場遺跡周辺の地質分布

め、他は石英斑岩、片麻岩、安山岩が各 1 点である。叩石等とセットで使用されることから、同種の石材を選んだと考える。

砥石は総数 12 点のうち、凝灰岩が 59％（7 点）を占め、他は片岩及び片麻岩系である。とくに凝灰岩は粒子が細かく、砥石に適した石材といえる。石材の違いから、荒砥や仕上げ砥等の工程ごとに、石材を使い分けた可能性もある。

その他、石包丁は泥質片岩または泥質片麻岩等、粒子の細かい石材が選択されている。また、石製紡錘車は周南市四熊ヶ岳産の角閃石安山岩が用いられている[註1)]。

（3）遺跡周辺の地質と石器・石材との関係（第 96 図）

馬場遺跡周辺の山地は花崗岩が主体であり、叩石・磨石・凹石や台石に使用する石材を容易に入手できる位置にある。遺跡の南方から西方にかけては、花崗岩山地の間を縫うようにして、領家変成帯の珪質縞状片麻岩帯が帯状に分布する。熊毛半島西側沿岸部にある光市室積半島の先端部は泥質雲母片岩からなる。熊毛半島先端の皇座山は火山岩質で、安山岩や凝灰岩等を産出する。

石材の産地については、自然科学分析も含めた検討が必要であるが、少なくとも本遺跡で出土する石器の石材は、そのほとんどが遺跡から半径 5～10km 圏内で入手可能なものばかりである。このように、多くの石材は地産地消した可能性がある。その一方で、石鏃に使用した姫島産黒曜石や、紡錘車に使用した周南市四熊ヶ岳産の角閃石安山岩は、日常的な行動圏を離れてやや遠方に産地があり、黒曜石の石核[註2)]や紡錘車の未製品が出土している。このことから、特定の石器については、交易や交流をとおして、選択的に石材を獲得し、集落内で製品に加工したと考える。

註

1）県東部の紡錘車の石材として、周南市四熊ヶ岳産の角閃石安山岩を選択的に使用することが指摘されている。
河村吉行 1994「周防と長門の弥生時代」『山口県史研究』第 2 号
豆谷和之「山口県内出土の紡錘車からみた弥生社会－角閃石安山岩製紡錘車の分布から－」『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅻ』
児玉　勉 2005「周防社会と角閃石安山岩－紡錘車や石棺への利用状況と石材の流通に関する一考察－」『陶耳』第 18 号

2）上関町田ノ浦遺跡では、姫島産黒曜石の原石と石核がまとまって出土している。
（財）山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター 2007『田ノ浦遺跡』山口県埋蔵文化財センター調査報告第 59 集

3　山口県内の弥生時代焼失竪穴建物について

（1）はじめに

今日までの発掘調査において、県内各地で弥生時代から古墳時代にかけての焼失竪穴建物が確認されている。馬場遺跡の調査でも、SI 1 と SI12 が焼失竪穴建物と判断でき、SI15 もその可能性がある。ここでは、山口県内の弥生時代における焼失竪穴建物の分布とその様相を整理し、近県の事例をみながら、本遺跡の焼失竪穴建物について評価を行う。

（2）山口県内の弥生時代焼失竪穴建物の分布と様相

①山口県内の焼失竪穴建物の分布（第 97 図）

県内の弥生時代の焼失竪穴建物は、現在 28 遺跡 43 棟が確認されている[註1)]。その分布は、調査件数等による偏りはあるが、県東部の瀬戸内海側を中心に、県中西部の沿岸地域から山間地域まで広くみられ、日本海側では確認できない。時期としては、県東部の田布施町見用遺跡 SI 1 が最も古い例で、弥生時代中期前半に比定される[註2)]。最も数が増えるのは後期から終末期にかけてである。中期から上述の各地に分布しており、時期による顕著な分布の違いは認められない。

②山口県内の焼失竪穴建物の焼土・炭化材分布（第 98 図、第 21・22 表）

まず、県内の焼失竪穴建物における焼土や炭化材の状況についてみてみよう。ここでは、石野博信氏による研究をもとにした、大川泰広氏による、以下のような焼失竪穴建物の焼土・炭化材分布に関する分類を参考にする[註3)]。

このうち、焼土分布のＡ～Ｃ類は、屋根組材として土を用いた土屋根であったとされる。これは、火災の際、土葺き屋根に覆われていると、構築材が不完全燃焼となりやすく、屋根と構築材が蒸し焼き状態となって残るためである[註4)]。一方、焼土の少ないＥ類は、火元が建物の縁辺部に散在した状況を示し、焼土のないＦ類は、焼土を除去したか、草葺きの可能性がある[註5)]。茅などの植物で葺かれた屋根の場合、短期間で完全燃焼し、床に炭化材が残る可能性が低いためである。また、炭化材分布については、建物焼失後、炭化材の除去作業を行ったかどうか、あるいは燃焼の度合を示すとされる[註6)]。なお、今回対象とする資料は、報告書の図面や図版等から焼土・炭化材の分布状況が確認できる例に限る。

焼土分布

Ａ類・・・焼土層が建物全体に分布するもの
Ｂ類・・・焼土層が建物中央に分布するもの
Ｃ類・・・焼土層が中央ピットの周辺をめぐるもの
Ｄ類・・・中央ピットの上部のみに焼土層が分布するもの
Ｅ類・・・部分的に焼土層が分布するもの
Ｆ類・・・焼土層が確認できないもの

炭化材（構造材）分布

Ａ類・・・建物の全体に炭化材が分布するもの
Ｂ類・・・建物の縁辺部に炭化材が分布するもの
Ｃ類・・・建物の中央部に炭化材が分布するもの
Ｄ類・・・部分的に炭化材が確認できるもの
Ｅ類・・・炭化材が確認できないもの

県内の焼失竪穴建物をみると、建物全体を検出できた例は少ないものの、焼土分布Ａ～Ｃ類が大半を占める。このうち焼土分布Ａ類は、炭化材が建物全体に分布するＡ類が多く、焼土が中央付近に

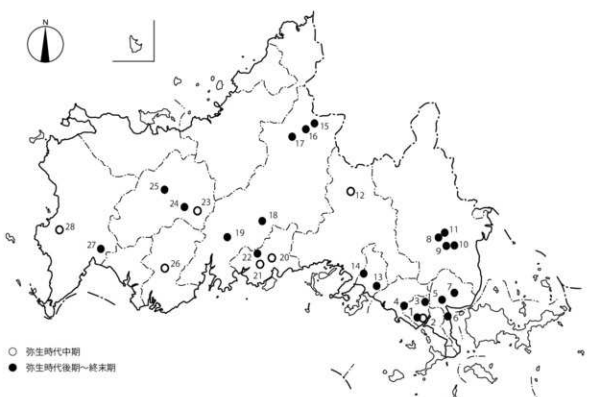
分布するB・C類は、炭化材の残存状況が良好な炭化材分布A～C類が多い。すなわち、県内の焼失竪穴建物の多くは土葺き屋根であった可能性が高い。

これに対して、部分的に焼土層が分布する焼土分布E類や、焼土層のないF類も確認できる。焼土分布E類の周南市小谷遺跡SB05は炭化材分布D類、同SB03とSB16は炭化材分布E類であり、炭化材の残存が少ない。焼土分布F類の見用遺跡SI 1と田布施町中屋B遺跡SI 3はいずれも炭化材分布B類、防府市下右田遺跡SI1702は炭化材分布D類であり、建物の縁辺部に炭化材が確認できるか、部分的にしか確認できない。とくに、焼土層のない焼土分布F類は、草葺き屋根の可能性がある。

以上の県内の焼土及び炭化材分類には、分布上の明瞭な差は認められない。時期的にみると、焼土分布F類の見用遺跡SI 1が弥生時代中期、中屋B遺跡SI 3が後期前半、柳井市上蔀遺跡が中期末～後期前半であり、焼失竪穴建物の中でもやや古い傾向がある。ただし、焼土分布F類の下右田遺跡SI1702が終末期であり、焼土分布A類の小谷遺跡SB19等が中期であるので、必ずしも明瞭ではないが、後期を境に、概ね草葺き屋根から土葺き屋根に変化した可能性もある。

（3）山口県内の焼失竪穴建物における遺物の出土状況（第21・22表）

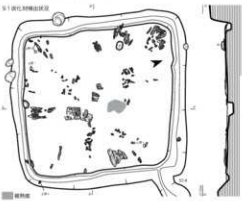
以上のように、弥生時代、とりわけ後期以降における県内の焼失竪穴建物の上屋構造の多くが土葺き屋根であった可能性が高いことが指摘できた。焼失竪穴建物の焼失原因については、従来、①物送りの儀礼としての意図的な放火、②戦乱による焼き討ち、③住居廃絶に伴う住まい整理のための廃屋



1. 馬場遺跡　2. 見用遺跡　3. 明地遺跡　4. 中屋B遺跡　5. 吉政遺跡　6. 上峠遺跡　7. 中院遺跡　8. 畑岡遺跡　9. 四割遺跡　10. 奥ケ原遺跡
11. 清水遺跡　12. 小谷遺跡　13. 御屋敷山遺跡　14. 宮原遺跡　15. 坂手沖尻遺跡　16. 羽波遺跡　17. 突抜遺跡　18. 釜山遺跡　19. 朝田墳墓群
20. 真尾猪の山遺跡　21. 大崎遺跡　22. 下右田遺跡　23. 神田遺跡　24. 堀の内遺跡　25. 国秀遺跡　26. 北迫遺跡　27. 柳瀬遺跡　28. 城山遺跡

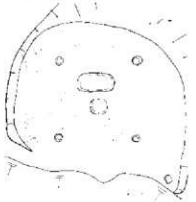
第97図　山口県内の弥生時代焼失竪穴建物の分布

焼土分布 A 類、炭化材分布 A 類



田布施町 馬場遺跡 SI 1

焼土分布 A 類、炭化材分布 A 類

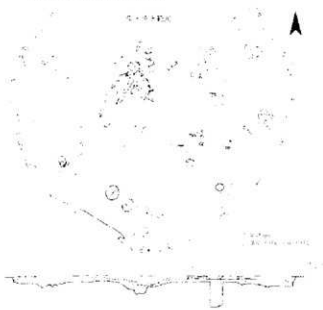


岩国市 畑岡遺跡 3 号住居（山口県教委：1990）

焼土分布 C 類、炭化材分布 A 類

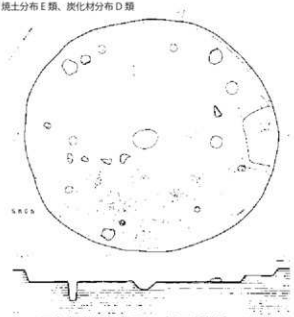
山口市 突抜遺跡 DW-11（山口県教委：1985）

焼土分布 C 類、炭化材分布 C 類



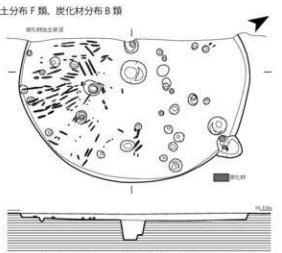
防府市 下右田遺跡 SI270（防府市教委：1999）

焼土分布 E 類、炭化材分布 D 類



周南市 小谷遺跡 SB05（山口県教委：1995）

焼土分布 F 類、炭化材分布 B 類



田布施町 見用遺跡 SI 1（県埋文：2020）

第 98 図　山口県内の弥生時代焼失竪穴建物の例

第 21 表　山口県内の焼失竪穴建物一覧（1）

No.	遺跡名	所在地	遺構名	平面形	残存度	主柱穴	焼土分布	炭化材分布	炭化材	出土遺物（主に床面付近）	時期	報告書
1	馬場遺跡	田布施町上田布施	SI 1	隅丸方形	完存	4 本	A	A	クリ～シイ属	〔壁溝〕甕・壺底部、不明鉄製品 〔床面〕ミニチュア鉢、鉄鏃、石鏃、剝片、台石	後期後葉～終末期	本報告書
			SI12	円形	2/3	6 本	A?	A?	イネ科草本類	〔床面〕壺ほか、台石 〔埋土〕甕・鉢、砥石	後期前葉	
			SI15	隅丸方形	完存	4 本	E	E	シイ属	〔床面〕壺・甕、台石 〔埋土〕紡錘車	終末期～古墳初	
2	見川遺跡	田布施町麻郷奥	SI 1	円形	2/3	5 本	F	B	クリ	〔床面〕壺・甕、石鏃、剝片、碧玉製？管玉 1	中期前半	県埋セン・田布施町教委 2020
3	明地遺跡	田布施町大波野	SB44	円形	完存	6 本	－	－	－	ミニチュア土器 2、石鏃 2	後期後半	県教育財団・県教委 1994
4	中屋 B 遺跡	田布施町波野	SI 3	円形	1/2	4 本か	F	B	クリ	鉢 2（口縁部打ち欠き）	後期前半	県埋セン 2014
5	吉政遺跡	柳井市新庄	SB03	隅丸方形	完存	4 本	A	D	－	土器小片、砥石	終末期	県教育財団 1996
			SB04	円形	完存	7 本	B	B	－	土器小片、砥石	終末期	
6	上畑遺跡	柳井市伊保庄	SB- 1	円形	3/4	9+14 本	F	A	－	土器小片、石鏃、凹石	中期末～後期前半	柳井市教委 2019
7	中筋遺跡	柳井市日積	SB1	隅丸方形	3/4	4 本	B	C	－	〔中央土坑〕砥石 〔埋土〕鉢・甕・ミニチュア土器	終末期	県埋セン 2003
8	畑岡遺跡	岩国市玖珂町	3 号住居跡	円形	3/4	—	A	A	－	〔床面〕土器小片 〔埋土〕砥石、鏃、多量の土器片	後期中葉	県教委 1990
	畑岡遺跡第 II 地区		SB 1	円形	3/4	8 本か	A	A	－	〔床面〕土器小片、土製勾玉 3 〔埋土〕石鏃、砥石、鏃等	後期	県教委 1991
9	四郎遺跡	岩国市周東町祖生	2 号竪穴住居	隅丸方形	完存	4 本	－	A	－	土器小片、石鏃	後期中葉	県教育財団・県教委 1991
10	奥ヶ原遺跡	岩国市周東町祖生	SB- 1	円形	ほぼ完存	4＋8 本	A	A	－	甕・高杯・鉢、石鏃、鉄鏃、鍛片等	後期後葉	県教育財団・県教委 1992
			SB- 9	円形	完存	4～12 本	F	D	－	ミニチュア土器、砥石、鏃	後期後葉	
11	清水遺跡	岩国市玖珂町	5 号住居跡	長円形	ほぼ完存	A	A	－	〔床面〕鉢、砥石 〔埋土〕土器小片、砥石、鏃 4	後期後葉	県教委 1989
12	小谷遺跡	周南市鹿野上	SB03	円形	完存	6 本	E	E	－	土器小片、石製紡錘車、石鏃、石鏃、砥石	中期後半	県教委 1995
			SB05	円形	完存	8 本	E	D	－	土器小片、石製紡錘車、石鏃、砥石、碧玉製管玉 1	中期後半	
			SB15	円形	ほぼ完存	11 本	A	A	－	土器小片、石製紡錘車、石鏃、石鏃、不明鉄製品、土製勾玉 1	中期後半	
			SB16	円形	完存	9 本	E	E	－	土器小片、石製紡錘車、石鏃、石鏃	中期後半	
			SB19	円形	完存	8 本	A	B	－	土器小片、石製紡錘車、石鏃、石製丁、砥石、鉄鏃等	中期後半	
13	御屋敷山遺跡	下松市河内	竪穴住居址	方形	1/2	6 本	E	D	－	〔壁溝内〕鉢・ミニチュア土器 〔床面〕鉄鏃	終末期	県教委 1973
14	宮原遺跡	下松市末武上	4 号住居址	円形	3/4	4 本か	－	－	－	〔床面〕甕・高杯 〔埋土〕石鏃	後期後葉	県教委 1973
			5 号住居址	円形	3/4	8 本か	C	－	－	鉢	終末期	
15	坂手神沢遺跡	山口市阿東徳佐中	6 号住居跡	円形	2/3	－	－	－	－	遺物なし？	不明	県教委 1978
16	羽抜遺跡	山口市阿東徳佐下	SB-10	円形	ほぼ完存	4 本	—	C	－	土器小片	後期	県教育財団・県教委 1989
17	突抜遺跡	山口市阿東地福上	DW- 3	円形	1/4	4 本	—	D	－	甕、刀子？、紡錘	後期後半～終末期	県教委 1985
			DW-11	円形ゥ方形	ほぼ完存	4 本	C	A	－	甕・高杯、多量の土器片	後期後半～終末期	
18	釜山遺跡	山口市仁保下郷	SB 3	円形	完存	7 本	A	A	－	甕・低脚杯、石鏃	後期～終末期	県教育財団・県教委 1993
19	朝田墳墓群	山口市朝田	第 1 号竪穴住居	隅丸長方形	2/3	2 本	C	C	－	〔床面〕壺・鉢・小型壺、鉄鏃	後期～終末期	県教委 1982
20	真尾望の山遺跡	防府市真尾	SB 1	隅丸方形	1/2	2 本	－	C	－	〔床面〕土器小片	中期	県埋セン 2008
			SB 4	円形	3/4	4 本	－	A	－	遺物なし	中期	
21	大崎遺跡	防府市大崎	SB 2	隅丸方形	2/3	8 本か	A	A	－	土器小片、土錘、砥石、台石	中期	県教委 1985
22	下右田遺跡	防府市下右田	SI270（註開）	円形	3/4	6 本	C	C	－	甕・壺・鉢・ミニチュア土器、石鏃	後期	防府市教委他 1999

第 22 表　山口県内の焼失竪穴建物一覧（2）

No.	遺跡名	所在地	遺構名	平面形	残存度	主柱穴	焼土分布	炭化材分布	炭化材	出土遺物（主に床面付近）	時期	報告書
22	下右田遺跡	防府市下右田	SI1049	長円形	2/3	4本	A	A	−	土器小片、石製紡錘車（未成品）、土錘	後期	防府市教委他 1999
			SI1693（1期）	円形	2/3	4本	−	−	−	〔床面〕土器小片 ※据えられた状態の壺（2期）	後期後葉	防府市教委他 2003
			SI1702	円形	1/2	5本か	F	D	−	土器小片、石製紡錘車（未成品）、砥石	終末期	
23	神田遺跡	美祢市美東町長田	SB- 3	円形	2/3	6本か	A	A	−	土器小片、鉄鏃	中期	県教育財団・県教委 1990
24	堀ノ内遺跡	美祢市秋芳町岩永本郷	SI01	円形	1/4	−	−	−	スダジイ、サカキ	〔床面〕土器小片	後期後半	県埋セン 2021
25	国秀遺跡	美祢市秋芳町嘉万	DW- 1	円形	完存	7～8本	E	A	−	〔床面〕甕・壺・高杯、叩石、砥石	後期後半～終末期	県教委 1988
26	北迫遺跡	宇部市川上	第1号住居址	不整形	完存	−	−	−	−	土器小片　ガラス製小玉1	中期か	宇部市教委他 1968
27	柳瀬遺跡	下関市吉田地方	LS002	方形	2/3	4本	−	−	−	土器小片	終末期	下関市教委 1997
28	城山遺跡	下関市豊浦町川棚	住居跡	円形	ほぼ完存	10本	−	−	−	〔床面〕土器小片、石斧、砥石	中期前半？	豊浦町教委 1986

※表中の No. は、第 97 図の番号と対応する。

の焼却、という大きく三つの見解がある。このうち、②については、本報告の馬場遺跡のように、焼失するのが集落内の一部の建物に限られること、集落内のそれぞれの焼失竪穴建物に時期的な隔たりがあることからみて、除外できよう。①の儀礼的側面によるのか、③の日常的側面によるのかが問題となる。前者は、床面出土遺物が少なく、日常遺物を運び出した後に意図的に放火されたもので、後者は、床面出土遺物が多く、不意の出火で日常用具を運び出すゆとりがなかったものと理解される[註7]。

県内の焼失竪穴建物における遺物の出土状況をみると、床面及びその付近に限れば、全体的に遺物の出土点数が少なく、防府市真尾猪の山遺跡 SB 4 のように、遺物が全く出土しない事例もある。土器では、甕や壺等の中大型器種の完形品がほとんど出土せず、小片が多い傾向にある。

残存する遺物をみると、ミニチュア土器が 6 例、紡錘車（未成品を含む）が 8 例、石鏃が 15 例、砥石が 15 例、鉄鏃・鉇が 12 例と目立つ。小谷遺跡では、すべての焼失竪穴建物から石製紡錘車が出土している。その他、見用遺跡 SI 1 で碧玉製管玉 1 点、宇部市北迫遺跡第 1 号住居址でガラス小玉 1 点、小谷遺跡 SB15 で土製勾玉 1 点、岩国市畑岡遺跡第Ⅱ地区 SB 1 で大型を含む土製勾玉 3 点、同市奥ヶ原遺跡 SB － 1 で鏡片 1 点等の装飾品等がそれぞれ出土している。これらが置き忘れたものなのか、あるいは意図的に残されたものなのか、後者だとして、捨て去ったのか、または祭祀的な意味合いがあるのか、容易には判断できない。ただし、日常的に使用する中大型器種の完形品が残らない点からみて、建物が焼却されるに当たって、必需品については意図的に持ち出された可能性が高い。

また、畑岡遺跡 3 号住居跡では、西壁際の 3 層からなる埋土の各層から多量の土器が出土しており、床面に完形に近い土器を残す一方で、これらが意図的に投棄されたことが指摘されている[註8]。中屋Ｂ遺跡 SI 3 では、意図的に打ち欠いた痕跡がある鉢形土器が出土したほか、下右田遺跡 SI1693（2 期）では、胴部下半～底部のない複合口縁壺が据えられた状態で出土した[註9]。

このように、焼失竪穴建物における建物の焼却行為は、埋め戻しによる廃絶儀礼や土器の意図的な打ち欠き等とともに、建物廃絶に伴う様々な儀礼または祭祀行為の一つと考えられる[註10]。たとえば、調査事例の多い鳥取県をみると、弥生時代から古墳時代にかけての焼失竪穴建物 228 例のうち、ほ

とんど（70％）が、床面出土遺物の少ない、故意に放火されたと推定されるもので、調査例の多い弥生時代後期後半の建物に集中しており、忌避的要因が指摘されている[註11]。山口県内の焼失竪穴建物の事例は、鳥取県に比べると大幅に少ないが、建物内から出土した遺物が少ない点は同様であり、両地域で共通する儀礼または祭祀行為が行われていたと考える。

（4）馬場遺跡の焼失竪穴建物の評価

以上から、馬場遺跡の焼失竪穴建物をみると、SI12が後期前葉、SI 1が後期後葉～終末期であり、とくに後者は、山口・鳥取両県で焼失竪穴建物が多数確認される時期に当たる。いずれの建物も焼土分布A類・炭化材分布A類であり、土葺き屋根であったと推定できる。また、いずれも住居内から出土する遺物の量は少なく、完形品もわずかである。SI 1では、埋土中からも多くの土器片が出土することから、焼却後にも住居廃絶に伴う祭祀が行われた可能性がある。

このように、本遺跡で確認した焼失竪穴建物は、弥生時代後期～終末期において、県内を含む広範な地域の集落で盛行した、住居廃絶に伴う焼却行為の影響を受けたものと考える。一方で、他の弥生時代集落の事例と同様、馬場遺跡でも、同時期の集落内で焼却を行う建物は限定される。これは建物を焼却する行為が、集落内の複数の建物を代表する、ある特定の建物でのみ行われた行為であったと考える。本遺跡の事例は、県内の焼失竪穴建物の問題を考えるうえで、一つの良好な事例を提示したといえよう。

註

1）1999年時点での重根弘和氏による弥生時代の焼失竪穴建物の集計では、11遺跡19棟であったが、今回改めて集計したところ、資料の増加も含め、この結果となった。
重根弘和 1999「弥生時代から古墳時代はじめにかけての火災住居について」『高野遺跡（南地区）』豊浦町の文化財第15集

2）下関市豊浦町域山遺跡の焼失竪穴建物も中期前半まで遡る可能性がある。

3）石野博信 1990『日本原始・古代住居の研究』 吉川弘文館
大川泰広 2002「弥生時代焼失住居の諸問題－鳥取県内の焼失住居の比較－」『古市遺跡群3　古市宮ノ谷山遺跡　古市古墳群』鳥取県教育文化財団調査報告書78
なお、大川分類中の「住居」の表現は、「建物」に置き換えた。

4）浅川滋男編 2001『竪穴住居の空間と構造』
牧本哲雄 2008「鳥取県内の弥生時代から古墳時代の焼失住居」『調査研究紀要』2　鳥取県埋蔵文化財センター

5）前掲註4）牧本 2008 文献

6）炭化材の遺存状況は、上屋構造の違い、燃焼状況の違い、鎮火後のかたづけの有無などによっても異なるため、一概にパターン化が難しいことも指摘される。前掲註4）牧本 2008 文献

7）前掲註3）石野 1990 文献

8）山口県教育委員会 1990『畑岡遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第125集

9）下右田遺跡SI1693は、建物の建て替えがあり、1期建物から2期建物へ縮小すると報告される。しかし、一般的には建て替えに当たって、建物を拡張させたとみるのが穏当と考える。すなわち、2期建物（先行するか？）に据えられた壺は、1期建物の廃絶に伴う可能性が高い。
防府市教育委員会・周防国府跡調査会 2003『下右田遺跡　第21・22次発掘調査報告書』防府市埋蔵文化財調査報告0302

10）竪穴建物が短期間に埋め戻されること、遺物の埋置や据置の事例等から、それらが竪穴建物の廃絶に伴う様々な儀礼行為に起因することが指摘されている。
宮内克己　2004「竪穴住居跡の廃絶」『九州考古学』第79号　九州考古学会

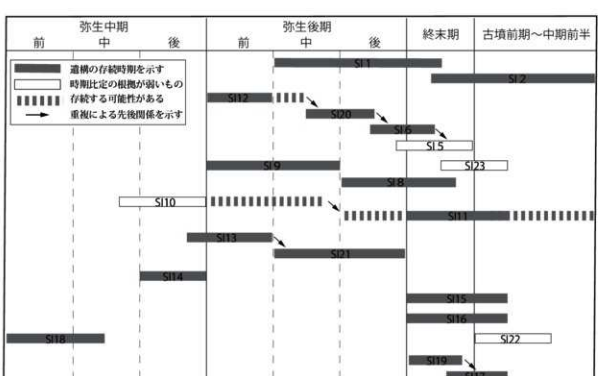
11）前掲註4）牧本 2008 文献

4　馬場遺跡の集落変遷について

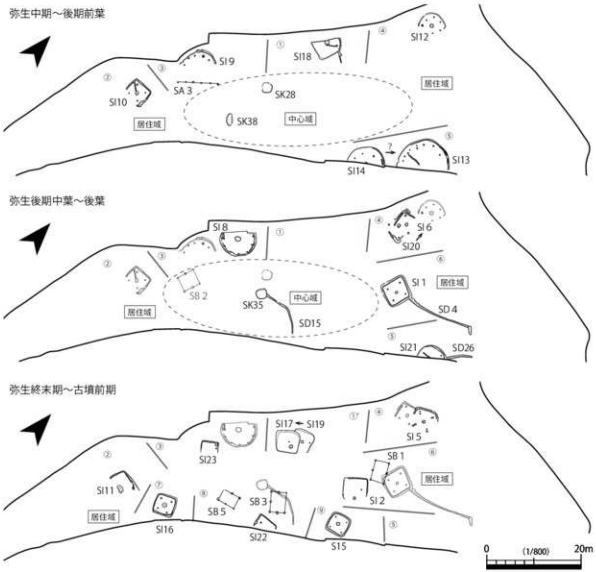
馬場遺跡では弥生時代中期～古墳時代中期前半までの竪穴建物21棟を確認した。遺物や遺構の形状、自然科学分析の結果等から、各建物の変遷を検討したところ（第99図）、時期比定のむずかしいものもあるが、その増減から大きく2つの画期がみられる。すなわち、弥生後期前葉と中葉の間、弥生後期と終末期の間である。以下、この画期により、遺跡を3つの段階に分け、各段階の遺構分布をみてみよう（第100図）。

弥生中期～後期前葉は、中期前半と中期後半以降に分けられる。中期前半は①群でSI18が営まれるのみだが、前期後半の土坑SK 7や前期後半～中期前半の土器廃棄土坑SK38等の存在から、SI18と同時期またはそれより遡る竪穴建物が調査区外にも存在した可能性が高い。中期後半～後期前半には、②：SI10、③：SI 9、④：SI12、⑤：SI14→SI13の4群の竪穴建物が営まれる。③～⑤群の竪穴建物はいずれも平面形が円形で、②群のSI10のみ方形である。ただしSI10は、平面プランや自然科学分析の結果等からみて、次の段階に下る可能性がある。竪穴建物の分布は、SK28やSK38の存在する中央部分には確認できないことから、この部分が集落の中心域で、広場的な空間であり、この空間を囲むように居住域が形成されたと考える。

弥生後期中葉～後期後葉の竪穴建物は、②:SI10、③:SI 9→SI 8、④:SI12→（SI20→SI 6）、⑤:SI13→SI21の4群で、前段階から継続して営まれる。とくに④群と⑤群では、建物の重複関係がみられ、同じ場所で建替えが行われたと考える。また、①群では竪穴建物が存在せず、新たに⑥群で排水溝をもつSI 1が営まれる。この時期の竪穴建物の平面形の多くは隅丸方形または方形に変化する。集落の中心域は、引き続き広場的な空間として使用され、排水溝をもつ土坑SK35等が存在するほか、



第99図　馬場遺跡における竪穴建物の変遷



第 100 図　馬場遺跡における各段階の遺構分布

掘立柱建物 SB 2が営まれたと推定する。SK35 やこの付近の遺物包含層等からは器台片が出土しており、中心域で祭祀等の行為が行われた可能性がある。

弥生終末期～古墳前期には、②:SI11、③:SI23、④:SI 6 → SI 5、⑥:SI 1 → SI 2 の 4 群が継続し、⑤群は継続しない。中期前半に SI18 が存在した①群では、新たに①' : SI19 → SI17 が営まれるが、SI18 から継続するものかどうかは不明である。また、新たに⑦: SI16、⑧ : SI22、⑨ : SI15 の 3 群が加わる。これらは、従来の群を構成する家族集団から新たに分節した家族の住居と推定する。居住域の拡張とともに中心域が狭まったことに加え、SB 3 や SB 5 といった掘立柱建物等が営まれることから、中心域の広場的な空間としての機能が薄らいできたと考える。

以上から、本遺跡では、集落開始当初の群構成が弥生後期までほぼ踏襲され、中心域も集団祭祀を執り行う等の広場的空間として機能していたと考える。しかし、弥生終末期～古墳前期には、家族集団の分節化にともない、居住域が拡張するとともに、中心域も手狭となる。古墳中期前半をさいごに、集落としての利用が途絶えるのは、土地利用の制限とも関わる可能性がある。一方で、集落内祭祀に代わり、古墳祭祀による新たな集団統合の仕組みの登場も何らかの影響を与えたと考える。

5　まとめ

本遺跡では、弥生時代中期から古墳時代中期前半にかけての竪穴建物を主体とする集落を確認したほか、縄文時代や古墳時代後期、古代～中世の遺構や遺物も確認しており、この地での継続的な土地の利用と、人々の活動の痕跡を明らかにできた。

縄文時代では、底面中央に杭穴をもつ円形土坑 SK30 を確認しており、落とし穴と考える。竪穴建物 SI17 内の円形土坑 SK42 もその可能性がある。縄文土器は出土していないが、遺構外から出土したスクレイパー（350）や石槍（345）等の石器が、この時期の遺物である可能性が高い。当時は、居住する場としてではなく、狩猟や採集を行う場として利用したと考える。

弥生時代は、竪穴建物を確認する以前の遺物として、竪穴建物 SI16 に混入した突帯文をもつ甕片（145）や土坑 SK31 出土の弥生土器の壺（193）があり、前者が弥生早期または前期、後者が弥生前期後半の遺物と考える。前期に比定できる遺構や遺物の存在から、周辺にこの時期の居住域が存在した可能性もある。

弥生時代中期から古墳時代中期前半にかけてが、本遺跡の主体となる時期である。竪穴建物は 21 棟あり、この期間をとおして、建物の平面形が円形から方形のプランに変わることが確認できた。竪穴建物は集落の中心域を囲むように営まれ、4 群程度のまとまりから構成されていた。時期が下っても、概ねこの群内で建物の建替えが行われるが、弥生終末期から古墳前期にかけて群の増加が認められた。これは、家族集団の分節化に伴う単位集団の増加と関係する可能性がある。

また、竪穴建物の中には、排水溝が付属するものや焼失竪穴建物が認められた。前者は、地形を利用して竪穴建物内の排水を行ったもので、とくに SI 1 や SI21 では、東谷へ流す設計となっていた。同種の施設は、県東部の弥生集落の中にも事例が認められる。後者は、県内で弥生後期から終末期にかけて盛行した住居廃絶に伴う儀礼と考える。良好な焼失状況からは、本遺跡の竪穴建物の上屋構造が土屋根であった可能性が指摘できる。

この時期を特徴づけるのは、土器や石器をはじめとする豊富な遺物である。土器は、壺・甕・高杯・支脚等の日常容器に加え、器台やミニチュア土器等の祭祀の用途を兼ねるもの、複合口縁壺等の装飾性の高いものもみられる。その他、碧玉製管玉やガラス小玉、土製勾玉等の装身具、土製・石製の紡錘車も出土している。このことから、集落で暮らす人々が、日常生活に加え、集落の中心域での祭祀や住居廃絶儀礼等、非日常の様々な場面での祭祀や儀礼のほか、装飾等が重視されたことを物語るものであり、集落内の中心域の利用とも関わるものである。

一方、石器は、石鏃等の狩猟具や、叩石・磨石・凹石や台石等、食品等の加工具の出土が目立つ。また少量ながら、石包丁が出土している。すなわち、本遺跡では、近辺で水稲耕作を行いながらも、狩猟・採集による食料獲得が主体であったと考える。石材については、遺跡周辺で日常的に獲得できたが、姫島産黒曜石や、石製紡錘車の材料である角閃石安山岩、管玉の材料である碧玉等、日常的な活動領域を超えた産地から入手したものもある。同様に、土器についても、伊予系や東九州系、山陰系等、他地域の影響を受けたものが存在する。このように、集落に住む人々が、他地域との活発な交流・交易を行っていたことがわかる。

※遺跡名の（　）数字は第２図の遺跡番号と対応する

第 101 図　田布施川下流域の主な弥生集落の消長

さて、田布施川下流域の弥生時代から古墳時代前期までの主要な集落遺跡をみると（第 101 図）、確実に弥生時代前期まで遡ると考えられる集落は確認できない。集落が形成されはじめるのは中期以降で、とくに後期に増加する。調査範囲とも関わるが、古墳時代まで継続的に集落が形成される状況を確認できたのは、馬場遺跡、開明遺跡、明地遺跡である。立地をみると、見用遺跡や明地遺跡が、比較的標高の低い台地上や微高地上にあるのを除けば、いずれも標高 20 mを超える丘陵裾部や丘陵上に位置し、低地部の遺跡は確認できない。これは、現在の田布施川流域の低地部分に、当時は柳井水道が通っていたためと考える。明地遺跡で土錘が多く出土するのは、海にほど近いこととも関係する。一方で、馬場遺跡や開明遺跡等の山沿いの集落は、漁労と関わる遺物は出土しておらず、狩猟・採集と関わる遺物が主体である。しかし、他地域との交流・交易を示す遺物から、山間部の集落によくある閉鎖的な性格ではなかったと考える。

本遺跡では、古墳時代中期後半から奈良・平安時代にかけて、遺構の分布は希薄となり、遺物の量も少なくなる。古墳時代後期には、須恵器の埋甕遺構である SK10 を確認した。また、調査区内から須恵器の器台片（309）を表面採集したほか、古墳時代後期から奈良時代にかけての須恵器や緑釉陶器等も少量ながら出土している。とくに器台は古墳の副葬品として使用され、緑釉陶器は官衙や寺院を中心に使用されたと考えられている。さらに、土坑 SK ２は７世紀後半～８世紀後半の木炭焼成坑と考える。このように、弥生時代以来の集落廃絶後、居住域として利用された痕跡は確認できないが、古墳時代には、古墳造営と関わる活動痕跡が認められ、古代には、周辺に何らかの施設が存在した可能性がある。

平安時代後期から室町時代前期にかけての遺構や遺物も断片的ながら確認できた。遺構では、複数の柱穴を検出したが、掘立柱建物は復元できなかった。しかし、青磁や白磁、土師器のほか、渡来銭等が出土することから、周辺に、これらの遺物を所有しうる人々の居住域が存在したと考える。この時期以降、圃場として利用される現代に至るまで、本遺跡での生活痕跡はほとんど認められない。

以上のように、本遺跡で人々の居住の痕跡が認められるのは、主に弥生時代中期から古墳時代中期前半にかけてであり、その前後の時代にも土地利用の痕跡が認められる。しかし、中世後期以降、現代に至るまで利用の痕跡が認められないのは、居住域の低地部への移行と都市化、水稲耕作を中心とする生業への変化等、様々な要因が考えられよう。

写 真 図 版

遺跡上空から上関方面を望む

図版１

１　遺跡遠景（西から）

２　遺跡遠景（南から）

1　遺跡遠景（東から）

2　遺跡遠景（北西から）

図版 3

1　遺跡全景（真上から、上が北西）

2　遺跡全景（南から）

1　遺跡全景（南東から）

2　遺跡全景（北東から）

図版 5

1　遺跡全景（北から）

2　遺跡全景（西から）

1　遺跡近景（中央付近、真上から）

2　遺跡近景（東付近、真上から）

図版 7

1　調査区北壁（A－A'）
土層（南東から）

2　調査区南壁（B－B'）
土層（北西から）

3　調査区南壁（C－C'）
土層（北西から）

1　SI 1 焼土検出状況（北東から）

2　SI 1 焼土検出状況（南西から）

3　SI 1 北側焼土検出状況（北東から）

4　SI 1 北側壁面被熱状況（南東から）

5　SI 1 焼土検出状況（ベルト除去後、北東から）

図版 9

1　SI 1 炭化材検出状況（北東から）

2　SI 1 土層断面（北東－南西方向、北西から）

3　SI 1 土層断面（北東－南西方向、南東から）

4　SI 1 土層断面（北西－南東方向、北東から）

5　SI 1 土層断面（北西－南東方向、南西から）

1　SI 1貼床検出状況（南東から）

2　SI 1主柱穴2土層断面（南東から）

3　SI 1主柱穴4土層断面（南東から）

4　SI 1南東壁付近土器出土状況（北西から）

5　SI 1北東壁溝内土器出土状況（南西から）

図版 11

1　SI 1 完掘状況（南東から）

2　SI 2 完掘状況（南東から）

1　SI 2土層（b－b ′）断面（南西から）

2　SI 2土層（b－b ′）断面（北東から）

3　SI 2内土器 15 出土状況（南西から）

4　SI 2内土器群A出土状況（北東から）

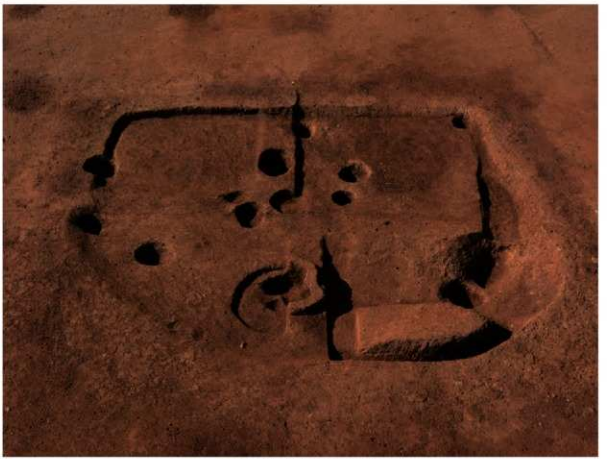
5　SI 2内土器 19 出土状況（東から）

6　SI 2内 SP 6土器出土状況（南から）

7　SK21 土層断面（南西から）

8　SK21 完掘状況（南西から）

図版 13



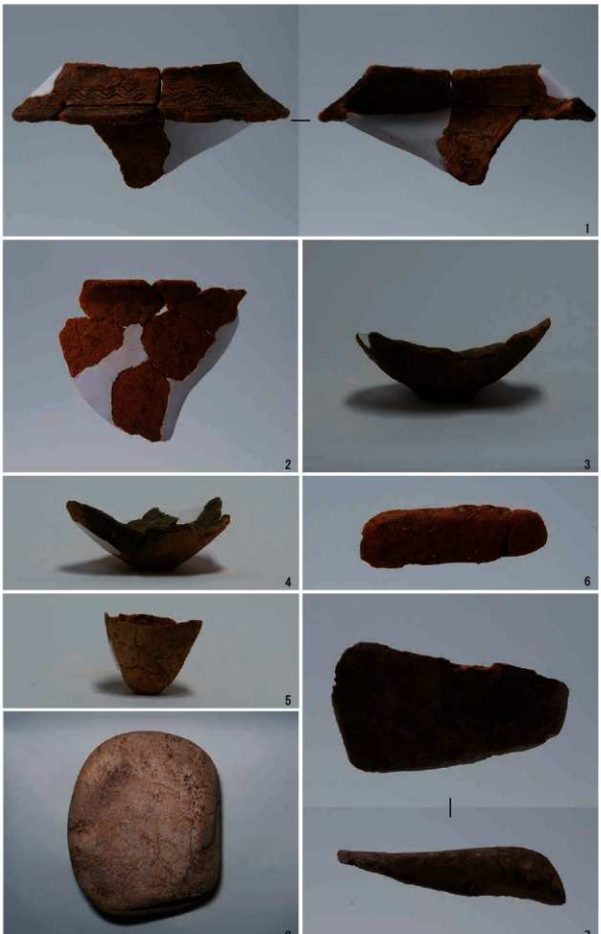
1　SI 3完掘状況（南東から）

2　SI 3完掘状況（北東から）

3　SI 3土層（a－a′）断面（北西から）

4　SI 3土層（b－b′）断面（北東から）

5　SI 3内 SP 8遺物出土状況（南から）



SI 1 出土遺物

図版 15

SI 1・2出土遺物

SI 2・3出土遺物

図版 17

1　SI 3・5・6・12・20 完掘状況（北東から）

2　SI 5・6・12・20 完掘状況（南から）

1　SI 5・12 完掘状況（南から）

2　SI 5 土層断面（北東から）

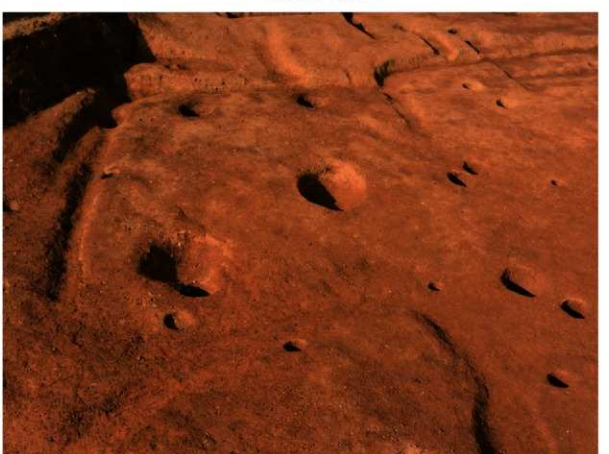
3　SI 5 中央土坑土層断面（南西から）

4　SI 6 土器群 A 出土状況（南から）

5　SI 6 中央土坑土層断面（西から）

図版 19

1　SI 5完掘状況（南から）



2　SI 6完掘状況（南から）

1　SI 6・20 完掘状況（東から）

2　SI20・6 完掘状況（南から）

図版 21

1　SI12 木炭・焼土出土状況（南東から）

2　SI12 木炭・焼土出土状況（北東から）

1　SI12 完掘状況（南東から）

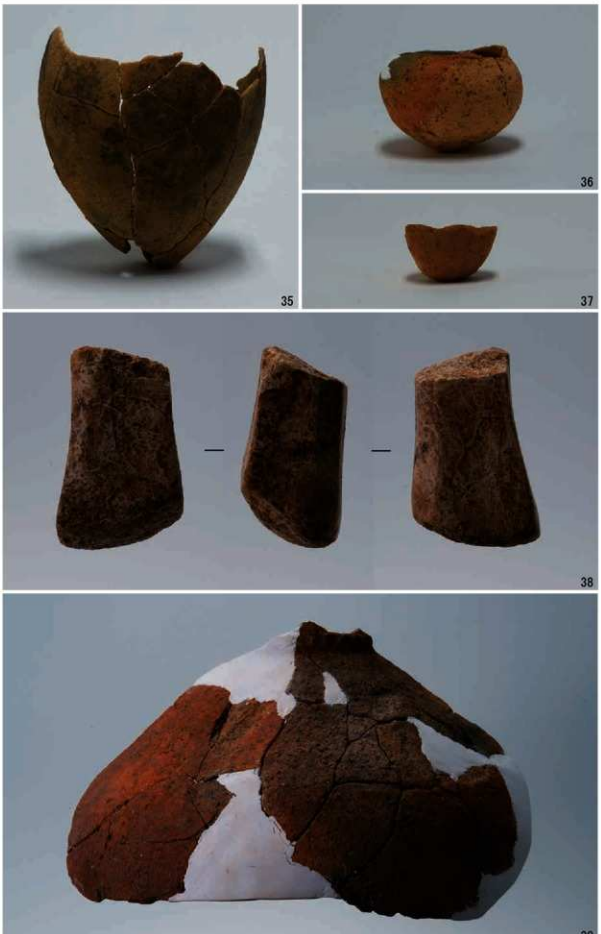
2　SI12（a－a′）土層断面（南から）

3　SI12（c－c′）土層断面（北西から）

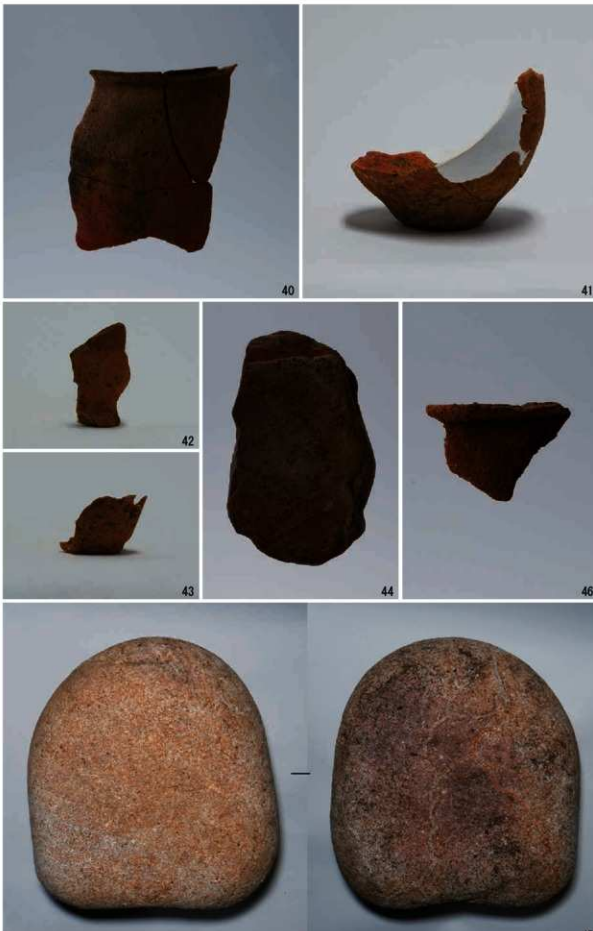
4　SI12 中央土坑土層断面（北西から）

5　SI20 中央土坑土層断面（南西から）

図版 23



SI 6・12 出土遺物



SI12・20 出土遺物

図版 25

1　SI 8 完掘状況（南東から）

2　SI 8（a－a′）土層断面（南東から）

3　SI 8 土器群出土状況（南東から）

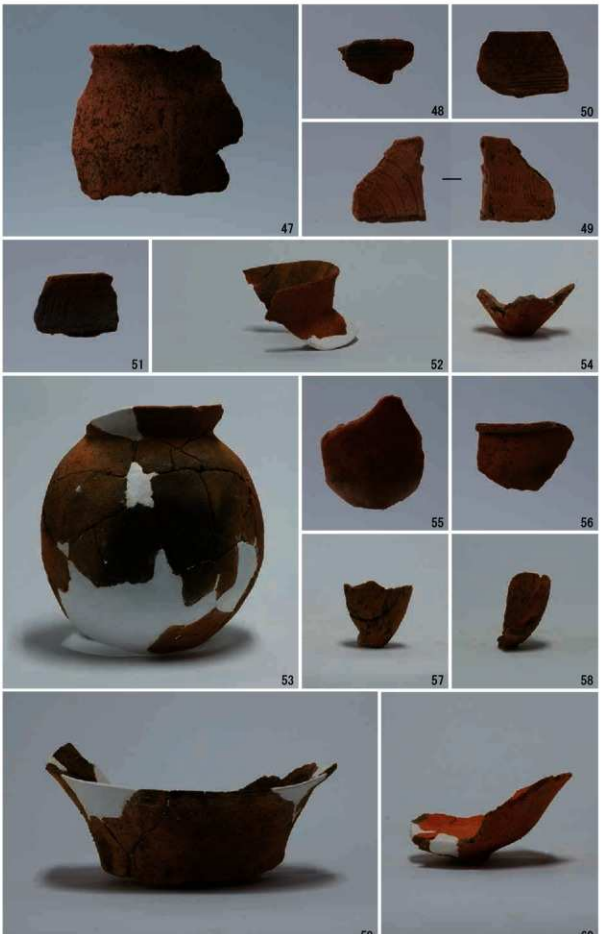
4　SI 8 中央土坑木炭出土状況（南から）

5　SK17 土器出土状況（南東から）

1　SI 9・23 完掘状況（南東から）

2　SI 9・23 完掘状況（南西から）

図版 27



SI 8 出土遺物（1）

SI 8出土遺物（2）

図版 29

SK17・SI 9 出土遺物

1　SI10 完掘状況（北から）

2　SI10（a－a′）土層断面（南から）

3　SI10 中央土坑土層断面（西から）

4　SI10 中央土坑木炭出土状況（南から）

5　SI10 土器 83 出土状況（北から）

図版 31

1　SI11・10 完掘状況（南から）

2　SI11（a－a′）土層断面（北から）

3　SI11（b－b′）土層断面（東から）

4　SI11（b－b′）土層断面（西から）

5　SI11 土器 1 出土状況（北から）

SI10・11 出土遺物

図版 33

SI11 出土遺物

1　SI13・21 完掘状況（西から）

2　SI13・21 完掘状況（北西から）

図版 35

1　SI21 完掘状況（南東から）

2　SI13・21 土層断面（北西から）

3　SI13・21 土層断面（北東から）

4　SI21 完掘状況（南西から）

1　SI14 完掘状況（南東から）

2　SI14（a－a'）土層断面（北西から）

3　SI14（b－b'）土層断面（北西から）

4　SI14 完掘状況（南西から）

図版 37

SI13 出土遺物（1）

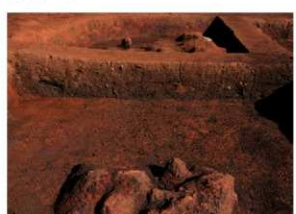
SI13 出土遺物（2）

図版 39

SI13・21・14 出土遺物

1　SI15 完掘状況（西から）

2　SI15（a－a′）土層断面（南から）



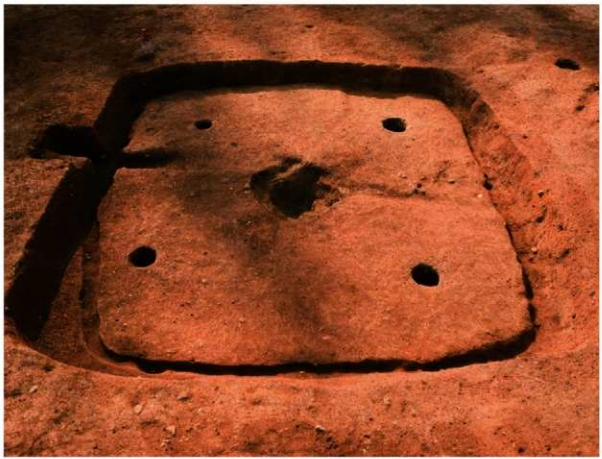
3　SI15（b－b′）土層断面（西から）

4　SI15 焼土検出状況（南東から）

5　SI15 中央土坑土層断面（南から）

図版 41

SI15 出土遺物



1　SI16 完掘状況（東から）

2　SI16（a－a′）土層断面（南から）

3　SI16（b－b′）土層断面（西から）

4　SI16 北東隅壁溝内土器出土状況（南東から）

5　SI16 中央土坑土器出土状況（北東から）

図版 43

1　SI17・19 完掘状況（南西から）

2　SI17 完掘状況（北西から）

1　SI19・17 完掘状況（東から）

2　SI17 土層断面（北東から）

3　SI19 土層断面（東から）

4　SI19 中央土坑土層断面（西から）

5　SI19 中央土坑完掘状況（南東から）

図版 45

SI16 出土遺物

SI16・19 出土遺物

図版 47

1　SI18 完掘状況（西から）

2　SI18 集石検出状況（南東から）

3　SI18 床面被熱痕検出状況（南東から）

4　SI18 中央土坑遺物出土状況（南西から）

5　SI18 完掘状況（南東から）

SI18 出土遺物

図版 49

1　SX 2遺物出土状況（南から）

2　SI22 完掘状況（北から）

1　SB 1 完掘状況（真上から、上が北）

2　SB 2・SA 3 完掘状況（真上から、上が北）

3　SB 3 完掘状況（真上から、上が北西）

図版 51

1　SB 1 ー SP679 土器出土状況（西から）

2　SB 1 ー SP679 完掘状況（西から）

3　SB 1 ー SP1265 遺物出土状況（北東から）

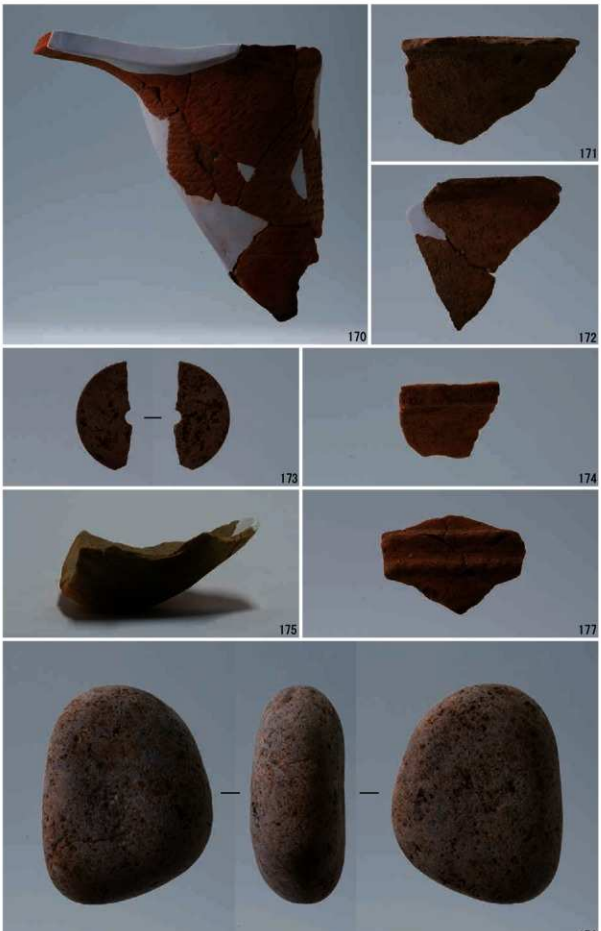
4　SP93 土器出土状況（北東から）

5　SP129 土器出土状況（北西から）

6　SP191 土器出土状況（西から）

7　SP808 土器出土状況（南から）

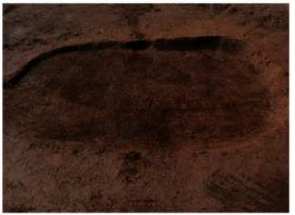
8　SP1002 土器出土状況（東から）



SX 2・SB 1・SA 3出土遺物

図版 53

1　SK38 完掘状況（真上から、上が北東）



2　SK 7 完掘状況（東から）

3　SK29 土器出土状況（東から）

4　SK30 完掘状況（南東から）

5　SK34 土器出土状況（西から）

6　SK34 完掘状況（東から）

7　SK31 土層断面（東から）

8　SK31 遺物出土状況（南から）

1　SK31 完掘状況（南東から）

2　SK35 南北土層断面（南東から）

3　SK37 土器出土状況（南西から）

4　SK37 土器出土状況（南から）

5　SD 4 完掘状況（真上から、上が南西）

6　SD15 完掘状況（真上から、上が北西）

図版 55

1　SD17・19 完掘状況（南東から）

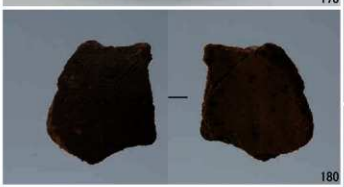
2　SD26 完掘状況（北東から）

3　SD 5 遺物出土状況（北西から）

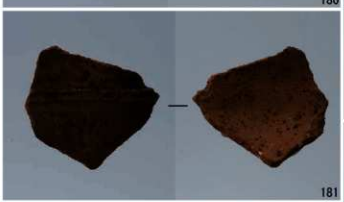
4　SD 5 遺物出土状況（北東から）

178

179


180

183


181

184

182

185

SK38 出土遺物（1）

図版 57

SK38 出土遺物（2）

土坑等出土遺物（1）

図版 59

土坑等出土遺物（2）

1　SB 4完掘状況（真上から、上が北東）

2　SA 1完掘状況（真上から、上が北西）

3　SB 5・SA 2完掘状況（真上から、上が北）

図版 61

1　SK10 須恵器出土状況（南から）

2　SK10 須恵器下部出土状況（南東から）

3　SK10 須恵器下部出土状況（南西から）

4　SK10 完掘状況（南西から）

5　SK10 完掘状況（東から）

1　SK10 須恵器出土状況（北西から）

2　SK10 出土遺物

図版 63

1　SK 2土層断面（南西から）

2　SK 2木炭検出状況（北西から）

3　SK11 土層断面（西から）

4　SK27 土器出土状況（西から）

5　SP690 土器出土状況（北東から）

6　SD13 内 SP 土器出土状況（西から）

7　SD12・13 完掘状況（真上から、上が北）

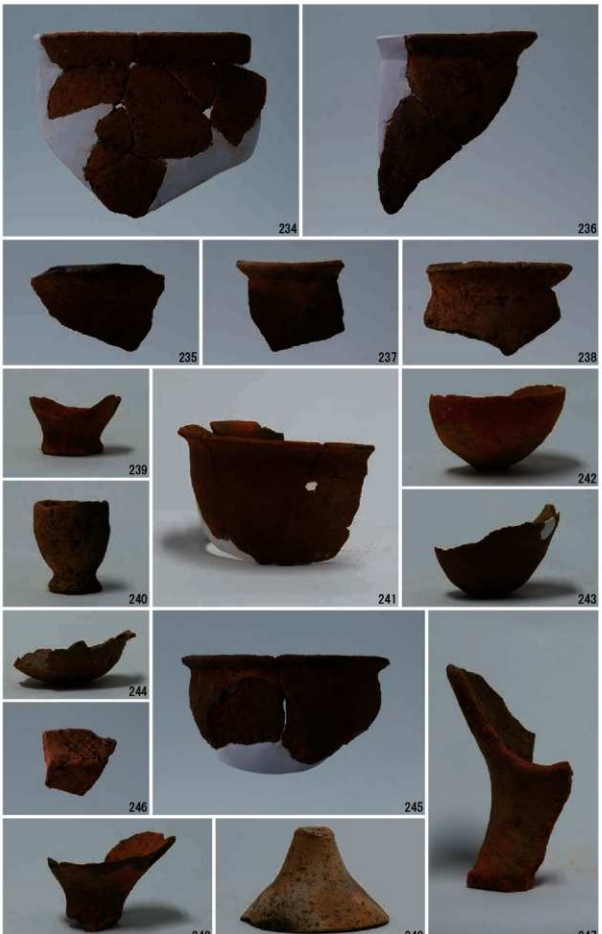
1　SD14・16 完掘状況（真上から、上が北）

2　SD20・21 完掘状況（真上から、上が北西）

3　SD27 完掘状況（真上から、上が北西）

図版 65

柱穴出土遺物（1）



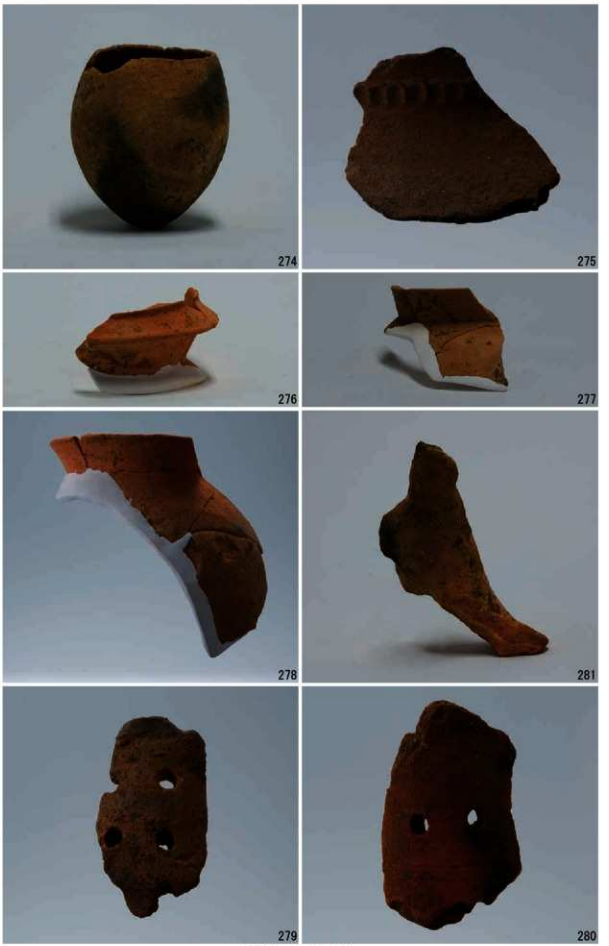
柱穴出土遺物（2）

図版 67

柱穴出土遺物（3）

溝出土遺物

図版 69



東谷出土遺物（1）

東谷出土遺物（2）

図版 71

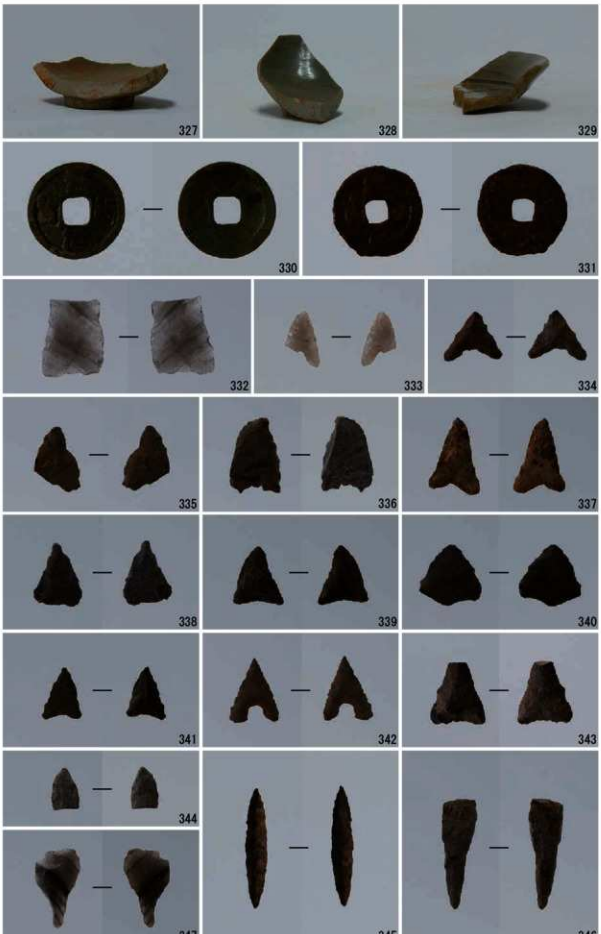
遺構外遺物（1）

遺構外遺物（2）

図版 73

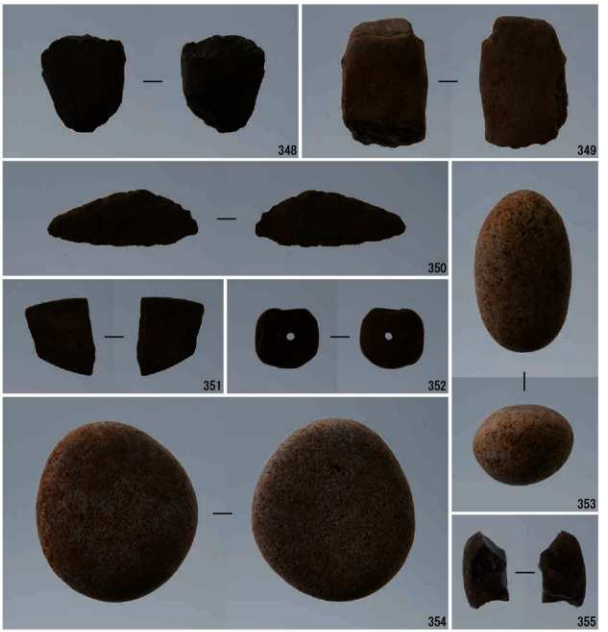
311
312
313
314
315
316
317
356
318
319
320
321
322
323
324
325
326

遺構外遺物（3）


327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347

遺構外遺物（4）

図版 75



遺構外遺物（5）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ばばいせき
書　　名	馬場遺跡
副 書 名	
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第 110 集
編 集 著 者 名	岡田裕之　岩崎麻衣子　石井龍彦　塚本史晃
編 集 機 関	山口県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒 753−0073 山口県山口市春日町 3 番 22 号 TEL 083−923−1060
発 行 年 月 日	西暦 2022 年 3 月 18 日（令和 4 年 3 月 18 日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査 原因
馬場遺跡	山口県 熊毛郡 田布施町 上田布施	35343		33° 56′ 56″	132° 01′ 18″	20200615 ～ 20210318	2,802㎡	ほ場整備

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
馬場遺跡	集　落	弥生時代 古墳時代 古代 中世	竪穴建物　21 棟 掘立柱建物　5 棟 柱列　3 条 溝　20 条 土坑　35 基 性格不明遺構　1 基 柱穴　約 1,200 個	弥生土器、須恵器、土師器、瓦質土器、緑釉、輸入陶磁器、陶器、土製品、石器、石製品、鉄器、鉄製品	馬場遺跡では、弥生時代中期～古墳時代中期前半の竪穴建物や掘立柱建物、土器廃棄土坑、古墳時代後期の埋甕や木炭焼成抗等を確認した。

要　約	馬場遺跡は、標高 25.0 ～ 27.5m の丘陵裾部に位置する、弥生時代中期から古墳時代中期前半を中心とした集落跡である。調査区からは、竪穴建物 21 棟をはじめ、掘立柱建物、土坑、溝等を検出した。竪穴建物の平面形は、方形が 15 棟、円形が 6 棟であり、円形のうち 1 棟は、直径が約 11m と県内最大級の規模をもつ。また、壁や床面に被熱痕があり、多量の炭化材や焼土を検出した建物も複数みられる。他にも、土器廃棄土坑や木炭焼成坑、須恵器甕を丸ごと 1 個体分埋めた土坑等を検出した。遺物は弥生土器が多数を占め、壺・甕・鉢・器台・支脚等バラエティに富み、他地域との交流が窺える土器も含む。その他、石鏃や鉄鏃といった狩猟具、紡錘車・砥石・台石等の日常用具、ガラス小玉・管玉等の装身具も出土した。さらに、縄文時代の削器や、古墳時代～中世の須恵器、土師器、輸入陶磁器等も出土した。 以上のことから、本遺跡では、中心時期である弥生時代中期から古墳時代中期前半だけでなく、その前後の時代を通じて、人々が活動していたことが明らかとなった。

山口県埋蔵文化財センター調査報告　第 110 集

馬場遺跡

2022 年 3 月 18 日

編集・発行　公益財団法人山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター
〒 753-0073　山口県山口市春日町 3 番 22 号

印　　刷　アロー印刷株式会社
〒 751-0818　山口県下関市卸新町 10 番 3 号